

戦女神×魔導巧殻 ～  
転生せし黄昏の魔神～

Hermes\_0724

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※第一期終了（第二期は2016年4月1日スタート）

百万年に一度という「神の誤謬」により突然死をした主人公は、デイル||リフィーナという「剣と魔法」の世界に「魔神の肉体を持つ人間」として転生をした。しかし科学文明の中で生きていた主人公にとって、その世界は驚きの世界だった・・・

戦女神で御馴染みのゲームメーカー「株式会社エウクレイア」の世界観「デイル||リフィーナ」に基づいて、オリジナル展開と原作の流れを融合させながら描いていきます。

「神という存在はどこから来たのか」

「信仰心とは人間の心のどこから生まれるのか」

「魔法と科学とは何が違うのか」

「人が集まり、国家が形成されていく過程とは」

ファンタジー世界には当たり前前の「絶対的な善」「絶対的な悪」が存在しない世界。それぞれ立場で白黒が変わり、それぞれの主張がぶつかり合う世界・・・

ゲームの世界に「現実性」という独自解釈を加え、世界観の解説と主人公の思索を交えながら、ストーリーが進みます。

一日一話ペース（毎日22時）で更新をしたいと思いますが、仕事の都合で出来ない場合もあります。気長に、お付き合い下さいませ！

※皆様のご指摘を頂き、少しずつ修正をしております。今後も応援、宜しくお願い申し上げます。

※誤字脱字などもあるかもしれません。宜しくお願い申し上げます。

※エロ描写はR-15ではギリギリかもしれません。R-18はご要望を頂きましたので、別途、描いております。18歳以上の方でご関心のある方は、お楽しみください。

※というか、元々「エロ」を書きたかったんだよなあ！

# 目次

作者からのお断り、および作品年表

1

主要登場人物

6

第一章：黄昏の魔神

第一話：転生

11

第二話：龍人族の村

20

第三話：日々是修行

28

第四話：旅立ち

34

第五話：セトの村

40

第六話：敗者復活

46

第七話：レンストの街

56

第八話：剣士レイナ

62

第九話：ルーノース村での初夜

69

第十話：レイナの過去

75

第十一話：フノーロの街

82

第十二話：リプリール山脈

89

第十三話：はぐれ魔神との邂逅

98

第十四話：死闘

105

第十五話：ハイシエラとの闘い

112

第十六話：レイナの選択

118

第十七話：レミの街

126

	第十八話：魔神劍	132
	第十九話：使徒	139
	第二章：中原東方域	
	第二十話：アヴァタール地方東方域	
147	第二十一話：行商人リタ	153
	第二十二話：出発	159
165	第二十三話：グループ村の悲劇	
	第二十四話：ドウラハの村	173
	第二十五話：水の巫女	179
	第二十六話：友人	187
	第二十七話：水の巫女の物語	193
	第二十八話：運命を切り開く力	200
	第二十九話：繋ぎ留める者	207
	第三十話：リタの店	216
	第三十一話：バーニエの街	223
	第三十二話：バーニエの黒豹	230
	第三十三話：仕合前夜	240
247	第三十四話：グラティナとの死合	
	第三十五話：極虚の劍	257
	第三十六話：新しい仲間	265
	第三十七話：政治	274
	第三十八話：言葉の力	283

	第三十九話：インヴェイディアの街	
297	第四十話：一つの旅の終わり	303
	第四十一話：第一使徒	309
	第三章：魔導巧殻	
	第四十二話：科学と魔法	314
	第四十三話：魔神の貌	320
329	第四十四話：白と黒、正と邪、善と悪	
	第四十五話：古の宮	338
346	第四十六話：大魔術師の研究室	
	第四十七話：その男、天才につき……	
	第四十八話：魔導技術の可能性	352
	第四十九話：四姉妹との邂逅	361
	第五十話：魔導巧殻の秘密	375
	第五十一話：ドワーフの国	382
	第五十二話：美女二人	390
	第五十三話：使徒への誘い	397
	第五十四話：プレイアの危機	406
	第五十五話：バリハルト神官との問答	415
	第五十六話：惨劇	423
	第五十七話：出会いと別れ	432

第四章：新たなる旅へ

第五十八話：國産み	438	第六十八話：部族長会議	524
第五十九話：易姓革命と万世一系		第六十九話：光と闇	534
447		第七十話：ケレース地方へ	548
第六十話：思想と信仰	455	第七十一話：ガンナシア王国	555
第六十一話：別れ	467	第七十二話：半魔人の王	565
第六十二話：ララノアの弓	474	第七十三話：各々が望む世界	574
第六十三話：プラダ家の接待	483	第七十四話：冥き途	582
第六十四話：大陸公路	494	第七十五話：トライスメイル	591
第六十五話：ラウマカールの剣士		第七十六話：華鏡の畔	599
501		第七十七話：魔神の留まり木	609
第六十六話：獣人族の集落	508		
第六十七話：ハレンラーマ	517		





# 作者からのお断り、および作品年表

## 〔年表〕

### ■BC2, 1000以前：先史文明期

高度に科学技術が発展した世界「イアスステリナ」では、人類がついに「並行世界」への扉を開こうとしていた。最も距離が近かった並行世界「ネイステリナ」の観察を行うようになる。

ネイステリナには、アークリオンをはじめとする神々が存在していた。イアスステリナにも神々はいしたが、科学の発展と共に信仰心は薄れ、イアスステリナの神は力を失っていた。そこで人類は、自分の手で神を生み出そうと考えた。「科学が生み出した人造の神」機工女神」の誕生である。

機工女神は人類に恩寵をもたらしたが、その行き過ぎた愛情が「より豊かな世界の創出」という暴走を生み出す。機工女神は「イアスステリナ」と「ネイステリナ」の並行世界を繋げることで、より豊かな「新たな世界：デイルリフィーナ」を生み出させてしまった。

デイルリフィーナは、これまでの科学的前提を破壊するものであった。人類は科学

を失った。呆然とする人類に、新しい神々が恩寵を与えようとする。科学に替わる技術：魔術であつた・・・

■BC2, 100頃：三神戦争

新たに誕生した世界「デイル||リフィーナ」には、それまで人類が信仰していた神「古神」と、ネイル||ステリナの神「現神」、人類が科学で生み出した人造の神「機工女神」の三種の神が存在していた。

この世界を誰が導くか・・・

神々は新世界の覇権を賭けて、壮絶な大戦争「三神戦争」を引き起こす。後世において神話として語られるこの戦争は、現神の勝利によつて、終結をした。古神の多くが「封印」をされ、あるいは「魔人」とレッテルを貼られて追放された。機工女神は現神勢力に加担をしたが、現在は眠りにについている・・・

■BC2, 000~BC1, 100：世界融合期間

異なる二つの異世界が融合するには、それなりの期間が必要であつた。神々が起こした戦争の爪痕も深く、世界的な気候変動や地殻変動、物理的法則の調整などが行われた。デイル||リフィーナの「理論的前提」が形成される期間である。

■BC1, 000頃：七魔神戦争

現神より「魔人」とレットルを貼られた「七柱の古神およびその末裔」が、現神に戦いを挑んだ「神対神」の戦争。巨大な力の衝突により、ブレニア内海が形成された。巨大内海の誕生は、気候に影響を与え、この戦いにより絶滅をした種もいるらしい・・・

■BC1, 000～BC010：生物繁栄期

七魔神戦争による気候変動は、生物に影響を与えたが、その環境に適応した生物たちは、平穏の中で繁栄と繁殖を進めた。

エルフやドワーフ、竜族など「寿命は長いが繁殖力が弱い」生物は、その地に留まり、文化と歴史を醸成する。

「寿命は短いが繁殖力が強い」生物⇨人間は、より広い世界を求め、未踏の地へと踏み出していく。

デイル⇨リフィーナの「生物的分布」などはこの時代でほぼ、形成された。

■BC010：フェミリス戦争

闇の現神を信仰する「闇夜の眷属」であった大魔術師「ブレアード・カッサレ」が、神

の力を欲して引き起こした戦争。ブレアード・カツサレは、レスペレント地方の地下に大迷宮を構築し、十柱の魔神を召喚、「深凌の楔魔」として旗下に加る。姫神フェミリンズと壮絶な戦争を繰り広げ、ついには姫神を屈服させるが、人間の身に神の力が収まるわけもなく、激高したブレアードは姫神に対して「殺戮の魔女」の呪いを掛ける。

フェミリンズ戦争によって、エルフ、ドワーフ、獣人族はその住処を変えざるを得ず、特に獣人族は散り散りとなってしまう・・・

#### ■BC030：国家形成期

フェミリンズ戦争は、レスペレント地方に大きな災厄をもたらしたが、アヴァタール地方をはじめとする各地では、人々がそれぞれに都市を拓き、都市国家形成が始まりつつあった。生産能力の高い都市では、通貨が発行されるようになり、近隣集落を共通経済圏に組み込むことで、より大きな国家へとなりつつある。

・ルドルフ・フィズメルキアーナがメルキア国を建国

#### ■AD00：黄昏の魔神「ディアン・ケヒト」降臨

神の過ちにより転生をした魔神が、ディアン・ケヒトと名乗り、各地の放浪を始める。彼の登場が、その後の歴史にどのような影響を与えるのか。この時点では誰も知らない・・・

■ AD 250 頃：戦女神誕生

バリハルト神殿の戦士セリカ・シルフィルが、女神アストライアを斬殺、その肉体を乗っ取る。人間の魂と女神の肉体を持つ存在「戦女神」が誕生する。

■ AD 550 頃：メルキア帝国最盛期

皇帝の庶子ヴァイスハイト・ツェリンダーが、メルキア帝国の内乱を鎮圧、ヴァイスハイト・フィズメルキアーナとして皇帝に即位する。メルキア帝国最盛期を迎える。

## 主要登場人物

■ディアーン・ケヒト (D i a n C ・ c h t)

### 【略歴】

「金持ちになってオンナを侍らせる」ために、大学時代に起業し、成功の軌道に乗りそうだった頃に、百万年に一度の「神の不手際」によって突然死を迎えた。

死を司る大天使「サリエル」によって、科学と魔法が融合した異世界「ディル||リフイーナ」に、自我を保ったまま魔神として転生をする。

魔神としては最強の「素質」を持つているが、全く知識の無い状態で転生をしたため、剣と魔法の「使い方」から覚えなければならず、現在も成長中である。

### 【外見】

黒髪、黒目、中肉中背の普通の男性。見た目は「悪くはない」程度。

### 【性格】

オンナ好きではあるが、誰かれ構わずというわけではなく、自分が気に入った「最高のオンナ」を抱きたいと思っっている。現在は、レイナー一人が相手だが、それは「最高のオンナ」が少ないからであり、徐々に増やしたいと思っっている。

オンナ好きという性格を除けば、極めて真面目で誠実。また哲学的な側面も多分に持っている。魔神でありながら、人間の仕事をしてカネ稼ぎをし、他者に対する筋を重んじる。そのため誠意のない人や信義に欠ける人は軽蔑し、殺すことも辞さない。

前世が企業経営者であったことから、商売についての興味もあり、前近代的なデイル||リファイナにおいては、隔絶した経営知識を持っている。

強者の一方的な暴力には否定的で、無駄な殺生を嫌っている。魔物ですら殺さずに追いつ返すことが多い。ただ相手によっては、平然と殺戮をする場合もある。「殺せないのではなく、殺さない」がポリシーのようだ。

普段は、魔神の気配を消し、必要な時だけ、魔神化する。

デイル||リファイナの世界そのものに興味を持っており、特に現神の在り方については、疑問を感じている。

### 【性癖】

基本的にはノーマル。ただ、前世ではそれなりに遊んでいたため、様々な体位やプレイを知っている。自分だけ一方的に快感を得るのではなく、オンナにも同等に快感を得て欲しいと思っている。ほぼ無限の体力を持つ魔神の肉体を持っている為、大抵の場合オンナのほうが何度もイクことになる。

気の強いオンナのツンとした表情を快感で蕩かすことには、特に喜びを感じるらし

い・・・

■レイナ・グルップ (Reina Group)

【略歴】

アヴァタール地方東域出身、劍聖と呼ばれた父を持つが、十一年前の事件により、母と共に西に流れる。父の仇を討つために劍の腕を磨く。修行の一環で「行商隊の護衛」に加わり、そこでダイアンと出会う。

【外見】

金髪碧眼、引き締まった躰と豊かな胸を持つ「絶世の美女」

※イメージとしてはPCゲーム「WORDS WORTH (Elf)」のシャロン

参考イメージURL (Takata様のHPより)

<http://www.zerochan.net/353098#full>

【性格】

男勝りで勝気だが、育ちは良いので素直な面もある。当初はダイアンに対しても勝気な言葉遣いだったが、徐々に解れ、いまでは女性らしい言葉遣いになりつつある。

【性癖】

ダイアンが初体験の相手。以来、徐々にダイアンの手によって開発されている。今で



は積極的に求めることもあるが、抱かれる前はいつも「羞恥の表情を浮かべる」ため、それがディアンをかえって刺激している。

■グラティナ・ワッケンバイン (Gratina Wackebain)

### 【略歴】

アヴァタール地方東域出身、剣豪「ワルター・ワッケンバイン」を父に持ち、幼いころから「虚実の剣」の指南を受ける。父の跡を継ぎ、バーニエの街の警備隊長を勤める中で、ディアンに出会う。

なお、母親はヴァリール Elf であるため、グラティナはヴァリール Elf のハーフとなる。

### 【外見】

ヴァリール Elf 特有の褐色の肌と銀色の髪、身長と胸の大きさは、レイナとほぼ同じだが、腹筋はレイナより割れている。

※名前・性格・口調のモデルはPCゲーム「巨乳ファンタジー (Waffle)」のグラティス・フォン・ワッケンハイム

※外見イメージは、PCゲーム「巨乳ファンタジー2 (Waffle)」のゼビア

※参考イメージURL (Waffle 様HPより)

<http://www.waffle1999.com/game/45kyonyu2/character00.html>

【性格】

レイナ同様、勝気で男勝りだが、レイナと異なり、母親が健在である為、ディアンに對する「ある種の依存心」は無い。

【性癖】

現在、絶賛開発中！

## 第一章：黄昏の魔神

### 第一話：転生

突然のことだが、オレは死んだ・・・らしい。

大学時代に会社を興し、これからカネ儲けだ！と息巻いていた時に、いきなり死んだ。理由？知らん。夜寝てたらいきなり死んだ。つまり突然死ってやつだ。

ガキの頃から、とにかく女好きだったオレは、オンナの生態をとにかく研究した。といつても、本やドラマを通じてだが・・・

「顔が良くて、カネ持ち」

これが彼女たちを惹きつける要素らしい。灯りに群がる蛾のように、オンナたちはそういう条件のオトコに群がってくる。勿論、そうでは無い女もいるようだが、その数は限りなく少ない。まあ、どんな生物にも「突然変異」はあるからな・・・

だからオレは、カネ持ちになることを目標とした。オンナを最も惹きつけるものがそれだからだ。

「人に使われている限り、カネ持ちにはなれない」

そう考えたオレは、大学時代に起業をした。スマホのゲーム・アプリを開発する会社

だ。最初は鳴かず飛ばずだったが、3年目にそこそこのヒット作を出すことが出来た。それで得たカネで人を雇い、開発力を高めた結果、5年目には大ヒットと呼べるアプリアを出すことができ、大手の仲間入りをした。

カネが入ってくれば、当然、当初の目的を達成するために使う。連日のように夜に繰り出して遊び歩いたのが祟ったのか、オレは突然死を迎えたわけだ。

漆黒の闇の中で意識を取り戻したオレは、最初は夢かと思った。しかし妙に意識がハッキリしている。六本木のキャバクラからお持ち帰りしたオンナと寝ていたはずだが、ベッドに横たわっている感じではない。まるで宙に浮いているような感覚だ。

恐怖心が湧き上がってきたときに、目の前にいきなり、ソイツが現れた。背中に翼を生やし、月明かりのような青白い光を放っている。顔は……まあ厨二くらいの可愛らしい女の子だ。ああ、やっぱりこれは夢だな、とオレは思った。

『御晩でやんす。私、死を司る大天使サリエルと申します』

『……サリエル？』

『ハイハイ、創造主の御前に出ることを許された12の大天使（アークエンジェル）の一人です』

『つまり、まあ、偉いやツつてことだな。それにしても砕けた口調だな』

厨二……ではなく大天使サリエルは、目の前でクルッと回転すると、申し訳なさそ

うな表情で、オレに話しかけた。

『え〜 本来は、ワタシ自身がこうして出てくることは無いんでやんすが、今回はちよつと事情がありまして…』

まあそうだろう。死を司るといっても、地球だけでも毎日膨大な“死”がある。いちいち大天使が出ていたら交通渋滞を起こすに違いない。それにしても・・・オレは死んだのか？オレの疑問に気づいたのが、サリエルは明るい口調で言った。

『ハイ、あなたは確かに、死んだでやんす。コロツと♪』

『・・・そう言われても、別に交通事故にあつたわけでも、誰かに刺されたわけでもないが・・・』

『ん〜 実は〜 それが問題でやんシて…』

サリエルの話によると、どうやら手違いでオレは死んだらしい。百万年に一度あるかないか、という確率だそう。オレは怒る気にもなれなかった。どうせ夢だ。

『神つてのは完璧なんじゃないのか？なんだソレ？シックス・シグマみたいな確率だな…』

『え〜・・・何と言われても…申し訳ないとしか言えないでやんす(汗)』

大天使の申し訳なきような表情で、オレの自尊心は満たされた。もう十分だ。

『なかなか楽しい夢だったよ。さて、そろそろ目覚めようか。オンナを抱きたいんでね』

オレは夢から覚めようと意識を集中させた。しかし、何の変化も無い。オイオイ……サリエルは首を傾げながら、こちらを興味深そうに見ている。

『えっ……と、あの、さっき言ったように、あなたは死んだでやんす。これは夢じゃないでやんす』

『……冗談だよな？これは夢なんだろう？』

『夢じゃないでやんす。こちらの手違いで、あなたは確かに、死んだでやんす』

『……おい……ふざけるなっ!!』

『ひっ……』

オレはようやく、事情を理解した。この理不尽な死に対して、怒りをぶつけた。サリエルはビックリしたように、両手で頭を抱えた。オレはひとしきり、サリエルに向けて文句をぶつけたが、やがて怒りも収まり、冷静になつてきた。

『はあ……死んだのか。それも手違いで……で、オレはどうなるんだ？』

『あ、ハイッ！そこで、アツシの一番なんでやんす!』

サリエルはホツとした表情を浮かべると、説明を始めた。

『えっ、今回はこちら側の手違いですので、貴方様には選択肢が与えられるでやんす。一つ目、このまま死を受け入れて、魂の安らかなる平穏を……』

『話にならない!』

『さ、最後まで聴くでやんす！二つ目の選択肢は、速やかに命の転生をすることです。』

これまでの記憶などは全て無くなりますが、人間として再び、生まれ変わることができ……』

『アホらしい。却下だ！自我が無いのでは、死んだのと同じだ！』

『で、では三つ目の選択肢……現在の記憶や自我を持ったまま、転生をする。ただし、この世界ではなく、並行世界での転生となるでやんす』

『……興味深いな……詳しく聞かせてもらおうか』

サリエルの話によると、創造主は幾つもの並行世界を設計し、互いに影響を与え合うようにしているらしい。そのルールは“我思う、故に我在り”、つまり人間が想像する世界が、新たな世界を生み出し、その世界が更に別の並行世界を生み出していく……という仕組みだそうだ。何とも壮大な話である。

『なるほど、要するに、量子力学か……』

『主は人間に対してのみ、その力を与えたでやんす。“可能性の結晶”“運命を切り開く力”とアツシらは呼んでいるでやんす♪』

『いいだろう。三つ目の選択肢で進めよう。どの世界に転生するのか、選ぶことは出来るのか？』

『この中から選ぶでやんスッ♪』

目の前にタイトルが並ぶ。何か電子的だが、サリエルが気を利かせて、人間に合わせたのだろう。オレも知っている世界もある。グリム童話のような御伽噺の世界などだ。その中で、あるタイトルに目が留まった。

『デイル||リフィーナ…』

『この世界は、ちよつと面白いでやんス。可能性の結晶を持つ人間が、ついには並行世界への扉を開き、二つの並行世界が一つに併さってしまった世界でやんス。その結果、科学と魔法とが混在する世界になってしまったでやんス。ヒトの可能性は驚きでやんス』  
『もう少し、詳しく話してくれ…』

サリエルの話によると、どうやら「ファンタジー・ゲーム」の世界らしい。人間の他、エルフやドワーフ、天使や悪魔、魔神なんかもいるそうだ。どこから取り出したのか、画像付きで解説してくれた。科学文明世界で生きてきたオレにとつて、楽しめそうな世界に見えた。そして…

巨乳のエルフは、どんな“味”がするのかな…

そう思うだけで、オレは少し、興奮した。

『よしっ！このデイル||リフィーナに転生しよう』

『転生にあたっては、アツシに出来る範囲で、希望を聞くでやんスよ♪さすがに“不死”



などは無理でやんすが、性別や年齢、種族、あとは才能や資質、転生する時代なども希望を聞くことが出来るでやんす♪』

方向が決まったため、サリエルは上機嫌になったようだ。こちらとしても、有り難い。『では、その言葉に甘えて、幾つか希望を出す。出来ない場合は、ハッキリそう言ってもらって構わない』

『ハイハイ♪』

『二つ目は、魔神として転生したい。ヒトの寿命はせいぜい百年だが、魔神なら半永久的に生きられるんだろ?』

『フムフム、魔神・・・と・・・え? 良いでやんすか? ヒトとして生きること出来るでやんすよ?』

『希望は魔神だ。で、二つ目はその能力について・・・』

『ううっ!』『可能性の結晶』の力を知らないのは、ヒトだけでやんす:』

『聴いてるのか? 能力は、このデイル||リフイーナ世界の主神・・・アークなんたらは百倍くらいは欲しいな:』

『無理でやんす。アツシの力を超えているでやんす。せいぜい十倍くらいが限界でやんす』

『・・・DBの神龍みたいだな(笑)わかった。十倍で構わない。ただ、保有スキルは、

全魔法および全剣技を身につけられるようにしてくれ』

『全魔法、全剣技を・・・身につけられるように?』

『ああ、最初から持つている必要は無い。オレが自分で努力して身につける』

『はあ・・・変わった趣味でやんスねえ〜ひよつとして、Mでやんスカ?』

『・・・新しい生を愉しみただけだ。で、三つ目は外見だが・・・』

こうして、オレはサリエルに希望を述べていった。外見も頭脳も厨二くらいにしか見えないサリエルには、事細かく注文をし、確認をしておく必要がある。かなりの長時間となったが、サリエルは忍耐強く、注文を聴いてくれた。それに対しては素直に感謝をした。

『さて、これが最後だ。転生する時代と場所だ』

『重要なことでやんス』

『サリエルの話によると、この世界はまだ「集落社会」だそうだな。これから国家が誕生してくるだろうから、その辺の時代にしておいてくれ。それで場所は・・・いきなり街中で転生したら周りも驚くだろうから、人目のつかないところ・・・このラウルバーシュ大陸の森林地帯、デージェネール地方とやらにしてもらおうか・・・』

『了解したでやんス♪以上、すべてそろったでやんスカ?』

『最後に聞いておきたい。もう、サリエルと会うことは無いのか?』

『……貴方が死んだときに、会うかもしれないでやんす。それまで精一杯、命を燃やすでやんすよ!』

『最初は怒ったが、今ではお前に会えて良かったと思っっているよ。ありがとう』

サリエルは少し微笑んで、両腕を天に掲げた。

『さあ!新たな世界への転生でやんす!ディール||リフィーナへ!!』

サリエルを中心に、強い光が広がる。オレは輝く光に包まれ、思わず目を閉じた。

## 第二話：龍人族の村

ラウルバーシユ大陸オウスト内海の北部にあるレスペレント地方で、神と人間との壮大な戦いがあつた。世に云う「フェミリンス戦争」である。

神の力を欲した魔術師ブレアードが、女神フェミリンスと戦い、勝利をおさめた戦争である。ブレアードは結果的に、「神の力」を得ることは出来ず、フェミリンスを封印、人間属に呪いを掛けて姿を消した。目標未達である以上、勝利とは言えない戦争である。

『ブレアードか・・・まあコイツも、運命を切り開く力を発揮したつてことか・・・』  
フェミリンス戦争から10年後のラウルバーシユ大陸に転生したオレは、デイジエネール地方の深い森の中にいた。

デイジエネール地方は、ブレニア内海南部に広がる亜人が治める広大な森林地帯だ。治めるといつても、国家が存在しているわけでは無く、蜥蜴人や竜人、エルフ族の村が点々としている「無統治地帯」である。南西に行けば、人間族が住むセテトリ地方がある。

フェミリンス戦争は、人間族の中では相当な噂になっているが、亜人の中ではそれほど

どでもない。戦争から100年が経過をしているが、オレはその話を龍人族の村で聞いた。

転生したオレは、まずはこの世界を確認することから始めた。魔法や剣技の素質は十分で、魔力に至っては主神を遥かに超えた「超魔神」だが、知識は皆無である。転生したての赤ん坊のようなものだ。低知能の獣などを狩りながら、ひたすら森を彷徨う日々が続いた。武器一つ持たずに転生をしたため、棍棒や石などで獣を狩る。魔法は何とか火を起こせる程度に使えるようになったが、回復魔法すら使えない。

『しまったな……人間族が治める地方に転生すべきだったか……』

その夜も、襲ってきたサーベルタイガーを棍棒で打ち倒し、河辺に火を起こした。都会生活だったオレがいきなりのサバイバルだ。いまは魔神とはいえ、感覚は人間のままで。こうしたサバイバルを続けると、人恋しさで自然と鬱になる。

ズリツ……ズリツ……

何かが近づいてくる音が聞こえた。オレは瞬時に飛び起き、棍棒を片手に周囲を警戒する。やがて、ガサガサツと草が揺れると、秀麗な顔立ちをした美女が現れた。

『これは驚きました。こんなところに、人間が独りでいるなんて……』

久々に言葉を聞いたオレは、思わず涙ぐんだ。魔神が涙ぐむなどお笑いだ、オレの外見は人間そのままなのだ。その様子を見た美女は、オレに近づいてきた。よく見る

と、脚が蛇のようになってる。上人下蛇の巫人、龍人だ。

『余程、怖い思いをしていたんですね。もう大丈夫ですよ。私の村に来なさい。ここよりもずっと、安全だから……』

オレは小奇麗な部屋の中で目を覚ました。オレを助けてくれた龍人「リ・フィナ」の家である。部屋から出ると、ちょうどリ・フィナが食事を作っていた。

『おはよう。良く眠れたようね。疲れていたんでしょう』

『なんと、お礼を申し上げたら良いか……』

オレは素直に頭を下げた。リ・フィナは笑いながら頷くと、テーブルに食事を並べた。人間であるあなたの口に合うかどうか、わからないけど……』

野菜が大量に入ったスープである。この数日間、肉しか食っていないかったオレにとっては、何よりのご馳走であった。夢中で食べるオレの様子を見ながら、リ・フィナが話しかけてくる。

『ねえ……記憶が無いそうだけど、あなたの名前も覚えていないの?』

オレは頷いた。嘘ではない。この世界の“記憶は殆ど無い。目が覚めたら森だったのは事実だ。ただ、名前が無いのは不便だ。昨夜、村まで案内される途中で、オレは自分の名前を決めた。

『ディアン・ケヒト』

『え？』

『オレの名前、ディアン・ケヒト…だと思う』

古代ケルト神話に登場する「技術の神」の名前であった。古神と被る可能性があったが、どうやらリ・フィナは知らないようだ。

『そう、じゃあ、ディアンで良いわね？よろしくね、ディアン』

食事の後、リ・フィナに村を案内された。村は現在、二百人ほどの龍人が暮らしているらしい。ディジュネール地方では中規模の村だ。リ・フィナは村の警備役として、周囲の見回りなどを担当している。人間が余程珍しいのか、龍人たちがジロジロとオレを見る。

『ディアン、これから村の長老に挨拶しましょう。いずれ人間族の街に戻るとしても、

もうしばらくは、この村で過ごすのですから・・・』

村の中で最も大きな家に、オレは案内をされた。

『フム、この気配はリ・フィナじゃな？それともう一つ、面白い気配がする…』

目の前の龍人は、長老と言う呼称に相応しく、白髪で長い髭を生やした老年であった。寿命の長い龍人族で、これほどに老いているのであれば、千年近く生きているのであろう。

その傍らには、口ひげを生やした中年の龍人がいる。龍人といえど女しか知らなかつ

だが、考えてみれば男もいて当たり前だ。

『リ・フィナよ。昨夜、お前が保護をした人間とは、其の者か？』

『はい、グリーン様。ディアン・ケヒトという人間です。自分の名前以外は、記憶が無いとのことです』

中年の龍人、グリーンデはオレに一瞥を向けると、すぐにリ・フィナとの話しを続けた。

『して、お前は此の者をどうするつもりだ？』

『人間族ということから、恐らくはセテトリ地方の出身者かと思われます。折を見て、セテトリ地方の人間の村まで案内をし、彼らに委ねるべきかと思ひます』

『ふむ、まあ妥当なところだな…』

リ・フィナとグリーンデの話は、オレにとつても助かる話であった。人間族の村まで行けば、より多くの情報が集まるだろう。

そう考えていると、長老が口を開いた。

『ディアン・ケヒトよ。こちらに来なさい…』

長老の傍まで行くと、不意に両肩を掴まれた。力はそれほど強くないが、何か別種の力が働いているように感じる。

長老の眼は白い眉毛に隠れて見えないが、どうやら失明をしているらしく、こちらに一切、目を向けない。



『ふむ…力は驚くほどじゃが…何も知らずに生まれたのか…』

ブツブツと独り言を呟く姿に、オレは少しばかり、恐怖を持った。魔神であることを見抜かれたかもしれないからだ。

もしバレたら、その場で殺される可能性もある。戦いの技術をまるで知らないオレでは、生きてこの村を出るのは難しいだろう。

『フオツフオツフオツ…まあそう、固くなるでない』

長老は笑いながら、オレを掴んでいた両手を離れた。何を考えているのか、まるで読めない。

長老はオレを下がらせると、リ・フィナに問いかけた。

『リ・フィナよ。お主、剣術が使えるのう?』

『え?はい、まだまだ未熟ではありますが…』

『うむうむ、重畳じゃ。ディアンよ、そなたが望むなら、リ・フィナの下で剣術を学ばぬか?』

『ちよ、長老?それは…』

『お待ちください。つまりディアンをこの村に留め置く、ということですか?』

ただでさえ排他的な龍人族が、他者を受け入れ、さらには知識を預けるなど異例中の異例である。

オレとしては望ましいことだが、意味は分かってても、意図が解らない。恐らく、いや間違いないく、長老はオレが魔神であることを見抜いた。その上で、オレを鍛えようとしているのだ。

『記憶を無くしている以上、人間族の村に戻っても、世知辛い世界で生きるだけじゃ。

本人にとつても過酷であろうに・・・それならむしろ、この村で暮らし、人間族との交渉などで役に立つてもらった方が良いのではないか？それに、本人も望んでいるようじゃしの？』

(やはり・・・)

オレは額にうつつすらと汗を浮かべた。しかしここは、好意に甘えておくべきだろう。

『お言葉、有り難く・・・出来れば剣術のほか、魔法なども学ばせて頂ければと思います』  
『農らで教えられることがあれば、教えてやるわい。まあ少しづつ学びなさい・・・』

長老の家を後にしたオレは、改めてリ・フィナに願ひ出た。

『リ・フィナ・・・貴女にとつては迷惑かもしれないが、出来ればオレに、剣術を教えてください。あの森でも生きられるくらいの強さを身につけたい・・・』

『・・・仕方がありませんね。どこまで教えられるか判りませんが、今日から始めましょう』

長老は独り、部屋の中で考え事をしていた。齢のせいか、自然と独り言が出てしまう。

『まさか、生きている間に“無垢なる魔神”に出会うとはのう……』

『あの者の力は、計り知れぬ。現神をも超えるやも知れぬ……』

『しかし……だからこそ、儂らの手によって導きたい。邪を為す魔神ではなく、邪を討つ魔神に……』

長老の独り言は、ひとしきり続いた。

### 第三話：日々是修行

『やはり、ヒトの成長というものは、目覚ましいものですね．．．』

龍人族の村に留まり、リ・フィナに剣術を学ぶことを許されてから1年（14ヶ月）が過ぎようとしていた。その間はほぼ、修行の日々であった。朝からリ・フィナを相手に剣術の稽古をし、夜は長老からこの世界の話を聴かされた。長老は七魔神戦争以前に生まれたそうで、この世界の歴史に精通していた。魔法に関しては、リ・フィナが見回りの仕事で稽古が出来ない時間に、長老補佐であるグリーデが教えてくれた。

『よいですか？私の剣技は、龍人族のための剣技、虚を捨て実を極める“一撃必殺”の剣です』

剣術の修行を始める際に、リ・フィナからそのように説明をされた。上人下蛇の龍人族は、人間と比べて機動力が低い。動き回って相手を翻弄し、隙をつくって打ち込む、という虚実の剣術ではない。むしろ、相手の動きに惑わされることなく、重い一撃で相手の虚を打ち砕く“極実の剣”と言えた。

『真に実を極めれば、相手の虚も防御も関係ありません。唯一撃を打ち込む、これだけで

如何なる敵にも勝てます』

『あなたは人間です。虚実の剣術も使えるようになりたいでしょう。しかし、虚とは所詮は見せかけ、真なる一撃には勝てません。私の師は言いました。“千掌を知らんと欲するより、一掌を極めんと欲せよ”……多くの技を識るのではなく、一つの技を極めるのです』

使い古しの剣を振るオレに対し、リ・フィナは語りかけた。普通の人間では耐えられない程に過酷な修行だが、魔神の肉体を持つオレにとつては、それほどキツイ内容ではない。むしろ、秀麗な顔立ちと発達した胸を持つリ・フィナと寝食を共にする方が、オレにはキツかった。もし龍人族でなかったら、とつくに襲いかかっていただろう。下半身が蛇である龍人族は、性的な意味ではオレの好みでは無かった。

『魔法とは、六つの魔素を操って発生する現象のことである。六つの魔素とは火・水・土・空気・光・闇、これらの魔素を組み合わせ、自分の望む現象を発生させるのが魔法なのだ……』

中年オヤジのグリーデは、龍人族の中でも上位の魔法使いであった。長老補佐として村内の調整役であるグリーデは、話し方が上手だった。オレの知る科学知識の世界とは、全く構造が異なるデイル||リフィーナ世界の基本を解り易く説明してくれた。

『魔素は、体内に宿る魔法力によって操ることが出来る。この魔法力は、魂の活動によって生み出される力のことで、極端な話、犬や猫でも魔法力を持っている。魂とは、生命の根源のことで、これが無ければ肉体はただの物質と化してしまう・・・』

オレが最も理解できなかったのは、この“魂”という奴だ。オレがいた科学文明世界では、この概念は空想とされていたが、この世界では現実のものなのだ。実際に目に見えるものではないそうだが、確実にそれは存在し、魂の活動が魔力へと変換されるらしい。たとえば、人間の構成要素である炭素やリン、アンモニアやナトリウムといった物質をかき集めても、人間を創ることは出来ない。なぜなら魂が無いからだ。人間の肉体は作れても、魂が無ければただの物体である。そう考えると、オレのいた世界にも、魂と言ふのはあるのかもしれない。科学で観測できないから、否定をしていたに過ぎなかったのではないか？

『今日は、ドワーフの話をしてやろうか・・・』

剣術や魔法の修行の後は、長老の家でこの世界についての勉強であった。予め多少の知識はあったが、やはり現実世界で聞く話はより深く、より広がった。たとえば神に付いての話などは、オレの興味を惹きつけた。長老は語った。神と言つてもそれは強さと長寿を持っているというだけの存在であり、超常的なものではない。己の力によって相

手を駆逐し、自己の思想を他者に押し付けようという点では、古神も現神も変わらず、所詮はヒトの延長線に過ぎない。なまじ力を持っているだけに、ヒトよりもタチが悪い……などと笑いながら語るのである。

『とても儂の想像の及ばないことじゃが……恐らくは古神も現神も、所詮はただの“生き物”なのじゃよ。神核を失えば死ぬ。つまり死からは逃れられない。本当に神なのならば、死ぬはずが無かるうて……フォッフフォッフフォッフ こんなことを言っていたら、そのうち天罰が下ってしまうかもしれないのう?』

長老の話は、古神や現神、そのほかの種族についても、それぞれの立場に立つて語られたものであった。物事は決して善悪で区別できるものではなく、灰色の濃淡によって分けられる。ドワーフにはドワーフの生き方、エルフにはエルフの生き方がある。何人にも、それを侵す権利は無いが、その権利があると思うこともまた、自由なのだ。達観した年寄りらしい話ではあるが、オレはこうした話は嫌いではない。

『もう、貴方に教えることは何もありませんね。この一年で、よくここまで成長しました……』

リ・フィナは感慨深そうにオレに語りかけた。オレの剣術は既にリ・フィナを超えてしまっている。魔法に至っては、上位魔法「双角蛇の轟炎」まで使えるようになった。グ

リーデの使える魔法は全て修得し、その一つ一つの威力は、グリーデを遥かに凌いだ。基礎魔力が絶対的に違うので当然である。この数か月は、独自魔法を編み出すことに集中していた。魔法を覚える過程で、自分の魔気をコントロールする術も獲得した。魔神の気配を抑えるためには、全身を魔力で被膜のように覆う必要がある。結構な集中力が必要で、そのため魔気を抑えると、戦闘力も低下をしてしまうのである。村にいる限りは、魔気を抑えても問題が無い。オレは魔神としてではなく人間として、この村に迎え入れられたのだ。そう思って、魔気を抑えていた。

『ディアン、長老が呼びよ？』

オレはリ・フィナと共に、長老の下へと向かった。既に用件は察していた。

『ディアンよ。そなた、この村に来てどの程度になる？』

『ほぼ、一年でしようか・・・』

『うむうむ、儂ら龍人族にとっては瞬き程度の時間じゃが、ヒトが成長するには十分じゃのう・・・』

長老はあえて、オレをヒトとして扱っている。

『リ・フィナよ、少し席を外してくれぬか？』

『長老がそう仰るなら・・・』

リ・フィナはオレの様子を気にしながら、部屋から出た。



『さて・・・魔神ディアンよ・・・』

長老はオレに顔を向けると、少し声を落として話し始めた。

## 第四話：旅立ち

『さて・・・魔神ディアンよ・・・』

長老からそう語りかけられたとき、オレは表情を変えないための努力が必要だった。だが、一瞬の揺らぎは年長の龍人にとつて簡単に見抜けるものであったらしい。長老は笑いながら、片手を上げてオレを宥めた。

『そう慌てなさんな。お前さんが魔神であることは、最初に会った時から気づいていた。じゃが、魔神にしては妙に邪気が無かった。恐らく生まれたての魔神なのじやろうと思いい、この一年、お前さんの様子を観ていたのじやよ・・・』

『世話になったことについては、心から感謝をしています。しかし、何のために・・・』  
『前にも話したの？古神も現神も、変わりはないと・・・魔神とは、要するに古神のことじやよ。現神側から見れば魔神じゃが、古神側から見れば同胞じや・・・そして、儂ら龍人族は、古神の眷属・・・魔神を“邪悪”と決めつけるようなことはせぬ・・・』  
現神のルリエンを信仰するエルフ族にとっては、魔神とは討つべき存在だが、古神の眷属である龍人族は、魔神に対しても同情的な立場であった。無論、いたずらに破壊を繰り返す魔神に対しては、龍人族も容赦をしないが、そうした魔神は低級の「魔人」に

過ぎず、古神のクラスになれば、せいぜいが「はぐれ魔神」程度なのだ。

『恐らく、三神戦争の折に、エルフ族と儂ら龍人族とで、立場が割れたのであろう・・・今となつては、記憶も記録も残されていない、遠い昔のことじやて・・・』

長老の話に、オレは納得した。1年前のあの夜に、もしり・フィナではなくエルフ族に助けられていたら、オレは恐らく、生きていかなかっただろう。今さらながら、自分の幸運に感謝をした。

『さて・・・お主がこの村に来て1年、ほぼ学び終えたかの?』

『はい、御三方のみならず、多くの方々に教えて頂きました。本当に、ありがとうございます。ありがとうございました』

『フォッフオッフオッフ！魔神とは思えぬ礼儀正しきじゃの?』

素直に頭を下げるオレに対して、長老は眉を上げて笑った。オレは、肉体は魔神だが、精神は人間のままである。立派な人格者だとは思わないが、受けた施しに対しては、素直に感謝を示すべきだろう。特に、弱者から受けた施しに対しては・・・

『して、これからお主はどうしたい?この村に留まるか、それとも旅立つか・・・』

『出来れば、近日中に旅立ちたいと思います。より広い世界を観てみたい・・・恩返しをすることも出来ず、心苦しいのですが・・・』

『そのようなことは気にせずともよい・・・それより、これからお主が、どう生きるかが

大事じゃ……』

長老は真面目な顔つきをして、話を続けた。

『よいか、ディアンよ……お主は魔神じゃ。この村を離れば、多くの者から狙われる。闘わねばならぬ時もあるであろう……お主の力は強い。これから更に強くなるであろう。それこそ、現神が恐れるほどに……じゃが、強き者が振るう力は、弱き者にとつては一方的な暴力になってしまふものじゃ。より強い力には、より大きな責任が求められる。その力を己の欲望のためではなく、より多くの幸福のために使つて欲しい……』

『長老、私は……』

自分の出生について明かそうとしたオレを長老は止めた。

『謂わずともよい。何者であつたかではなく、何者になるかが大切なのじゃ。よいなディアンよ……』他人の為に生きよ”などと言うつもりはない。お主はお主の望むように生きればよい。じゃが、弱き者の存在を忘れないでいて欲しい。現神も古神も魔神も……龍人もエルフもドワーフも……生きとし生けるモノ全てが「かけがえの無い存在」なのじゃ。そう思う心を“慈悲”と言う。慈悲の心さえ、忘れないでいてくれればそれでよい……』

オレは黙つて頭を下げた。オレの望みは「欲望の赴くままにオンナを抱くこと」だが、

そんな欲望は小さなモノのように感じた。確かに、オレがその気になれば、世界を破壊することも出来るようになるだろう。そしてそれは、オレの望む生き方では無かった。

『さて、旅立ちをするとなれば、別れを言わねばならんわ。う。』』

長老は、グリーデとリ・フィナを呼び、二人に対してオレがこの村を離れることを告げた。グリーデは黙って頷いたが、リ・フィナは取り乱した。

『何故ですつ！この村では生きられないというのですか？』

『よさぬか、リ・フィナよ。ディアンは人間、我らは龍人。いつかは別れの時が来るのだ。ディアン、いつ旅立つつもりなのだ？』

『。．．明日、発ちたいと思います』

グリーデの問いかけにオレはそう応えた。この村は居心地が良い。居れば居るほどに、別れ難くなるだろう。そういう場合は、すぐに旅立ったほうが良いのだ。

その夜、リ・フィナの家での最後の一夜となった。食事のときも、リ・フィナは終始無言であったが、深夜遅く、オレの寝ている部屋を訪ねてきた。

『もう、止めることはしません。ですが、せめて一夜の想い出を下さい。』』

オレは黙って、リ・フィナを招き入れた。蒼い月明かりのせいで青白かったリ・フィナの肌が桜色に変わる頃、彼女の声も泣き声から嬌き声へと変わった。．．

翌朝、長老の家の前には大勢の龍人が集まっていた。オレの旅立ちを見送るため

あった。オレは一人ひとりと握手をし、感謝の言葉を述べた。リ・フィナは俯いたままである。

『ディアンよ、これを持っていきなさい』

グリーデは、掌に乗る程度の小袋をオレに差し出した。中を取り出すと、黄色や青色の宝石であった。

『そんな・・・受け取れませんか！』

『いいから持っていきなさい。この村では無用のものだが、お前がこれから行く世界では、役に立つだろう・・・』

宝石の入った小袋をオレは固く握りしめた。転生前のオレは、こうした「善意」に鈍感だった。この世界に来て、いかにそれが尊いものか、身に染みて感じていた。長老に別れを告げ、最後にリ・フィナの前に立った。顔を上げた彼女の瞳には、涙が浮かんでいた。オレは彼女を抱きしめた。

『あなたには、どれほど感謝をしても、し尽せるものではない。この一年、本当に世話になった。改めて言いたい。ありがとう。本当に、有難う・・・』

『どれほど歳月が流れても、あなたのことは決して忘れない。いつと約束は出来ないが、必ずこの村に、また戻ってくるよ・・・』

オレの胸の中で、彼女は啜り泣きながら頷いた。

龍人たちに見送られ、オレは村を後にした。リ・フィナも笑顔で手を振ってくれた。『さて．．．南に行けばセテトリ地方だが、北の方が栄えているって言うていたな．．．とりあえず、北に行つてみるか！』

オレの旅立ちを祝福するように、空は雲一つない、青空だった．．．

## 第五話：セトの村

龍人族の村を出て二週間、オレはひたすら北を目指していた。ラウルバーシユ大陸は、この惑星で2番目に大きな大陸だ。地図ではすぐ北にブレニア内海があるはずであったが、実際に歩いてみると、この大陸の大きさが実感できる。

『これは、本格的に飛行魔法を研究しないと、とても旅なんか出来ないな・・・』

グリーデは様々な魔法を教えてくれたが、飛行魔法は含まれていなかった。と言うより、飛行魔法というものが存在していないようである。オレも幾つかの仮説を立てて実験してみたが、上手くいかなかった。火と空気の魔素を操って上昇気流を発生させ、垂直方向に僅かに、体を浮かせることに成功しただけである。おそらく「重力制御」の魔法体系を確立させない限り、飛行魔法は誕生しないだろう。

潮の匂いが近づいてきている。広大な森や広い草原を踏破し、15日目ようやく、ブレニア内海に辿りついた。眼前に広大な海が広がっている。内海といっても、海と同じく塩分が含まれているようだ。ブレニア内海に沿うように東に向かうと、田畑が見え始めた。どうやら人間の村があるようである。久々の文明社会に、オレは胸を弾ませた。



『止まれ！何者だっ!!』

村の入り口に若い男が二人立っていた。手に槍を持っているが、兵士のように鎧などは着ていない。どうやら、村の自警団のようだ。

『オレの名はディアン・ケヒト、旅人だ。一泊の世話を受けたく、訪ねてきた』

『旅人だと？怪しい奴め！どこから来たというのだっ!』

『南から・・・としか言えないな・・・』

オレは肩をすくめてそう応えた。二人の男は更に警戒し、オレに槍を向けてくる。

『この付近には盗賊が出る。お前が盗賊ではない、という証拠があるのか?』

『・・・無いな』

『ならば捕える!』

男たちはオレを捕まえようと槍を構えた。瞬間、リ・フィナから貰ったイリウス剣を抜き放った。音も無く、槍の穂先が落ちる。男たちは仰天したようだ。

『村に入れないというのなら構わない。ここを立ち去ろう・・・だが、オレの邪魔をするなら、次は頸を落とすぞ?』

剣を納め、立ち去ろうとすると・・・

『待てっ!待てっ!待てっ!!』

男がオレを呼び止めた。

『あ、あんた、本当に盗賊じゃないんだな?』

『ああ、さつきもそう言っただろう。オレはただ旅をしているだけだ』

男たちは顔を見合わせると、オレに謝罪した。

『すまなかつた。このご時世、旅行者なんてほとんど見かけないから、疑っちゃまつた。許してほしい』

オレは黙って頷いた。呼び止めたのは他に事情があると察したからだ。

『あんたに、頼みがあるんだ。とにかく、村に入ってくれ・・・』

オレが訪れたのは、“セトの村”という村だった。ブレニア内海に面する人間の村は幾つかあるようだが、セトの村は2千人程度が住む、それなりに大きな村だった。農畜産業の他、塩業もやっているらしく、なかなかの活気だ。村の中ほどにある石造りの家に、オレは案内をされた。部屋の中には男たちが数人いて、壁には槍が立てかけられている。どうやら自警団の詰所のようなのだ。先ほど、オレを引き留めた男が、体格の良い男を連れてきた。

『旅人よ、ようこそ、セトの村へ・・・私の名はダロス、自警団の団長を務めている』

『ディアン・ケヒト、旅人だ』

ダロスは頷くと、オレに席を勧めた。

『先ほどは団員が失礼をしたようだ。私からも詫びよう。ここのところ、盗賊が頻繁に

姿を現して、警戒を強めているのだ』

『別に気にしていない。村にも入れてもらえたしな。で、オレに頼みとは？』

『フム、その件だが、君は中々に、剣を使うそうだな？』

『それ程でもない。一人旅が出来る程度に、だ・・・それがどうかしたか？』

『君のその腕を見込んで、頼みがある。盗賊を退治してもらえないだろうか？』

ダロスの話によると、半年ほど前から盗賊が出現し、村を荒らしているそうだ。隣の村々も被害を受けているそうで、それなりの規模の盗賊団らしい。東西の通路の要衝にアジトを構え、往来する商団なども襲っているようだ。

『アンタがやったらどうだ？他の団員はともかく、アンタはそれなりに、剣を使えると思  
たが・・・？』

ダロスの話し方から、どこかの騎士団出身者だと推測した。

『そうしたいのは山々だが、私では無理なのだ・・・コレだからな・・・』

ダロスは両手をオレに向けた。左右両方とも、小指が無くなっている。小指は握力の源だ。小指が無いだけで、握る力は半減してしまう。ダロスは自嘲気味に、自分のことを語った。オレを説得するためだろう。

『私は元々は、この内海の北部にあるバリハルト神殿の騎士だった。“開拓の神”の名のもと、セアール地方を開拓する尖兵として、剣を振るっていた。しかし、どこかで疑

問も持っていたのだ。神の名のもと、先住民であるステインルーラ人たちを追い遣り、自分たちの街をつくる・・・それは正義なのだろうか？ 追い遣られた先住民にも、家族があり、生活がある。住み慣れた土地から、一方的に追い出された彼らの姿を見て、私は信仰に疑問を持ってしまったのだ』

『なるほど・・・バリハルト神は、苛烈な神だ。騎士団を辞めるにあたって、ケジメを求められたのか・・・』

科学文明社会の中で生きていたオレにとつては、現神とその信徒たちは、ただの“狂信者”にしか見えなかった。ダロスはその中では、比較的マトモな人間だったのだろう。信仰と人間としての良心の狭間で苦悩し、人間であることを選んだのだ。オレの中のダロスの評価は“信頼に値する男”となった。

『事情は理解した。その依頼、引き受けよう・・・』

『おお、有り難い！』

『ただ、条件が二つある。一つ、盗賊たちには盗賊たちの事情があるだろう。例えば、戦火で家を焼かれて追い出されたとか・・・彼らが、真面目に働きたいと望むようであれば、この村で働かせてやって欲しい。いたずらに血を流すより、その方が良いと思う』

ダロスは少し考えたが、すぐに頷いた。

『了解した。村には仕事が無くてもある。彼らがこの村で真面目に働きたいと望むので

あれば、村長とも相談して、手配をしよう』

『二つ、自警団から二人ばかりを付けてくれ。別に一緒に戦ってもらうためじゃない。オレが依頼を完遂したと見届けるための“見届け役”だ』

二つ目の条件も、ダロスは簡単に了解をした。オレに対する報酬は、この村での宿泊と食事、これからの旅に必要な物資一式で話がついた。その後、村長と対面をした。ダロスに出した条件を吞ませるためだ。村長は隙の無い目つきをした小男で、最初は条件を渋っていたが、ダロスが強く説得し、承諾をした。

『明日、盗賊のアジトに向かう』

ダロスにそう告げて、オレは用意された宿へと向かった。

## 第六話：敗者復活

『ディアン殿・・・ほ、本当に大丈夫なんでしようか？』

オレの後ろを歩く男が、不安そうにあたりを見回す。セトの村から半日ほど西に歩くと、山岳地帯になる。ダロスの情報では、盗賊団の根城は、その山岳地帯の中にあるとのことだ。詳細な場所までは判っていない。オレは手っ取り早い方法を選択した。すなわち「盗賊に襲われて案内をさせる」という方法だ。

セトの村を出てから2日目の夜、焚火を囲んでいると急に鳥の鳴き声が止んだ。木刀を掴んだ瞬間、周囲から一斉に黒い影が襲いかかってきた。

『ひっ、ひいひいっ！』

二人の男は頭を抱えて身を縮こませる。オレは二人の周囲を回りながら、次々と影に木刀を打ち込んでいく。襲撃者は全部で5人、黒いマントで身を隠して、襲ってきたのだ。木刀であるため、死ぬことは無いが痛みは相当のはずだ。襲撃者は肩や腹などを押え、膝をついた。

『ひ、退けっ！』

合図と共に、影が一斉に引き始める。オレは一体に二撃目を加えた。他の4人は振り

返ったが、そのまま逃走した。オレは捕まえた襲撃者を縛ると、マントをはぎ取った。  
『うん？　これは・・・』

『何やってんだい！仲間を見捨ててきただつてえ？』

洞窟内に怒号が響く。4人の男が首を竦ませて、俯いている。その前に、腰に手を当てて睨み付けている女がいた。褐色の肌と青色の髪をしている。胸と腰を覆う以外は素肌を晒している。殆ど半裸の状態だ。男たちも同じ肌色、髪色をしている。

『で、ですが姐さん、もの凄え強え奴だつたんですよ。ホンの一瞬で・・・』

『フンツ！言い訳は聞きたくないね。明日の朝、もう一度ソイツらを襲うよ！今度はアタイも行く！』

『・・・いや、その必要はないな・・・』

襲撃者に根城まで案内をさせたオレは、洞窟の入り口に立っていた見張り役を木刀で気絶させた。見届け役の二人は入口に残し、オレは洞窟の奥へと進んだ。女の怒号が聞こえてくる。どうやら盗賊の頭領は女のようなのだ。

『・・・いや、その必要はないな・・・』

姿を現したオレに向けて、盗賊たちが襲ってきた。全部で20名強といったところか……。それぞれがナイフや斧なのを持っていたが、狭い洞窟の中ではそんなものを振り回せば、同士討ちになる。オレは間隙を縫いながら、木刀を振るっていった。数瞬後には、半分以下の人数になっていた。

『お待ちっ！お前たちの勝てる相手じゃないよ！下がってなっ！』

男たちの壁の中から、女が出てきた。青い髪、褐色の肌から想像していたとおり、頭領は女だった。

『はやり、ステインルーラ人か。こんな南部にまで来ているとはな……。』  
『だったら何だって言うんだい？』

女は横目で床に転がっている男たちの様子を観る。打ち身などはあるが、死んではない。女はオレに顔を向けた。

『アタイらの仲間が世話になったようだね？無事なのかい？』

『ああ、抵抗されないように縛っているが、無事だ。入口に転がっているよ』  
『そうかい……。』

女は安堵のため息をつくとき、オレを睨みつけた。

『わざわざ木刀を使ってくれたことには、感謝するよ。でもね。仲間がここまで伸されたんじゃ、黙って帰すわけにはいかないね。覚悟してもらおうよ！』



女は腰から曲刀を抜いて身構えた。オレも木刀を構える。剣ではなく木刀を使用することは、かえって女の自尊心を傷つけたらしい。こめかみに青筋を立てながら、女が直進してきた。しかし、オレの間合いに入る直前で急に横に飛びのいた。壁を利用し、オレの周囲を次々に飛び回る。オレは木刀を下げ、眼を閉じた。女の息遣いと壁を蹴る音が聞こえる。そして……

『ぐううっ!』

女の口から、苦悶のうめきが漏れた。曲刀を突き出してきた瞬間を捉え、オレは木刀の柄の部分で女の鳩尾を打つたのだ。曲刀を落とし、鳩尾を抑えながら女は膝をついた。

『あ、姐さんっ!!』

『野郎っ!よくもっ……』

『止めなっ!!』

激昂してオレに襲いかかろうとした男たちを女が一喝した。女はオレを見上げると、舌打ちして横を向いた。

『……アタイらの敗けだよ。好きにしな……』

『……一つ聞きたい。お前たちは何故、盗賊なんかしていたのだ?』

オレは女を見下ろしながら問い質した。

『オレを襲ってきた者たちは、みな顔を隠していた。自分のやっつていることが悪であることを自覚している証拠だ。羞恥心と罪悪感の無い者は、顔を隠したりはしない・・・』  
『・・・アタイらだって、真面目に生きようとしたさ・・・でもね・・・』

バリハルト神殿によつて、ステインルーラ人が迫害をされていることは、この南部にまで伝わつてきている。彼らを受け入れるということは、バリハルト神殿と敵対をするということになる。故郷を追われ、ここまで逃げてきた彼らを受け入れる村はどこにも無かつたのだ。生きるために、やむを得ず盗賊に身を貶したのである。

『・・・なるほど、つまりは“負け犬”か・・・』  
『なにつー!』

睨み返す女に、オレは告げた。

『バリハルト神殿に故郷を追われたこと自体は、お前たちの責任ではないだろう。だが、周囲が悪い、環境が悪いと言つて盗賊にまで身を落としたのは、お前たち自身の弱さのためだ。現状が嫌なら、なぜ戦おうとしない。ステインルーラ人たちの拠点をつくり、もう一度、バリハルト神殿と戦えばよいではないか。敗北とは、受け入れた時が本当の敗北なのだ! お前たちはまだ、本当に敗けたわけではない!』

『あ、アンタに何がわかる!』

『ああ、確かにわからない。お前たちがこれまで、どれほど苦勞をし、どれほど迫害をさ

れたのか、オレにはわからない。だが、このままではお前たちは、ステインルーラ人としての誇りまで失ってしまふということはわかる。そして、今この時が、お前たちの将来を決める分岐点だということもな．．．』

オレは女に手を差し伸べた。

『一緒に来い。セトの村は、盗賊たちが真面目に働こうという意志があるのなら受け入れると、オレに約束をした。お前たちは今ここで、盗賊をやめ、故郷奪還を目指すステインルーラ族として立ち上がるのだ!』

女の瞳に生気が宿った。力強くオレの手を握り返してきた。

翌日の午後、オレはステインルーラ族を連れてセトの村に戻った。オレの姿をみた門番が慌てて村内に駆け込んでいく。村に入ると、村民たちが遠巻きにオレたちに視線を送った。ヒソヒソと話しをする村民もいる。

村の大広場で、村長と自警団長のダロスがオレを迎えてくれた。

『彼らは、盗賊稼業から足を洗い、真面目に働くそうだ。約束通り、この村で受け入れてもらいたい』

ダロスは頷いて、口を開こうとしたが、その前に村長が口を挟んできた。

『ああ、確かにそう約束をしたが、この者たちを受け入れることは出来ん』

『なっ！』

ダロスが顔色を変えて、村長に詰め寄る。

『村長、なぜですっ！ディアン殿との約束を破るおつもりですか！信義に悖りますぞっ！』

『彼らはステインルーラ人だ。受け入れれば、バリハルト神殿を敵に回すことになる。村を危険には晒せん・・・』

『バリハルト神殿があるのは、内海の反対側ではありませんか！こんなところまで、彼らが来るはずがありません！』

村長とダロスが揉め合っている。村民たちもオレの後ろに立つステインルーラ人たちも、不安そうな表情で、二人を見ている。族長である女からは、明らかな殺気が立ち上っていて、オレの背中を刺激してくる。まあ、オレとしては村長の顔を見た段階で、この展開は半分、予想をしていた。その時の対処方法も考えていた。

『とにかく、彼らは受け入れんっ！これは村長の決定だ!!』

『納得できません！』

『黙れっ!!そもそも、あんな男に頼ったのが間違いなのだ！お前がちやんとしていれば・・・』

『おいつ・・・』

オレの問いかけに、二人は同時に顔を向けた。

『オレとの約束を破るつもりか？言っておくが、オレは信義を守らんヤツには容赦しないぞ。』

『ヨソ者が口出しするなっ！これは、この村の問題だ!!』

村長は唾を飛ばしながら、オレを怒鳴りつけた。オレは目を細くした。ダロスが村長から離れる。オレの殺気を感じ取ったのだ。

『もう一度だけ警告する。オレとの約束を守れ。命が惜しかったらな。』

『ハッ！脅迫するか？皆の者、この者は盗賊と結託して、この村を襲いに来たに違いないっ！此奴をひっ捕らえ。』

村長が話し終わる前に、オレの姿はかき消えた。瞬き程の間で村長の背後に移動した。パチンツと剣を納める音と共に、村長の頸が落ちる。立ったままの胴体からは、噴水のように血が噴き出した。村民たちは仰天し、尻餅をつく者もいる。このことを予想していたダロスでさえ、顔を青白くしていた。

その後、村の名士たちが集まり、話し合いが行われた。ダロスが上手く彼らを説得したようで、ステインルーラ人たちは無事、セトの村に受け入れられることになった。騎士道精神を持つダロスは、村長以上に村人からの人望が篤かったようだ。ダロスの説得によって、村人も安心した様子であった。

ダロスが新しい村長となることが決まった日、オレはセトの村を離れることを彼に告げた。

『ディアン殿には、自警団長をやって欲しかったのだが……』

ダロスは苦笑したが、オレを引き留めることは諦めたようだ。翌朝、村の出入り口まで、ダロスとステインルーラの女族長が見送りに来てくれた。ダロスは約束通り、旅の物資を用意してくれた。水や食料、衣類、そして地図である。一纏めにした袋を背負うと、ダロスと握手を交わした。女族長とも笑顔で握手をしたが、その時にふと思いついた。

『そういえば、貴女の名前を聞いていなかったな？良かったら、教えてくれないか？』  
『……そういうときは、まず自分から、名乗るものだよ？』

オレは笑った。オレ自身、彼女に名乗っていなかったのだ。

『これは失礼した。オレの名はディアン。ディアン・ケヒトだ』

『そう。ディアン、アンタの説教は堪えたよ…… アンタが言う通り、ステインルーラ族を率いて、バリハルトと戦うよ。散り散りになった仲間たちも呼び集めて……』

『ああ…… いつの日か、ステインルーラ族の国が出来ると良いな。で、貴女の名は？』  
女はニツコリと笑うと、自分の名を告げた。

『エルザ、エルザ・テレパティス…… 誇り高きステインルーラ族の族長だ！』

オレは頷くと、二人に礼の述べて、セトの村を後にした。  
ブレニア内海に沿うように、東へと歩みを進めた。

## 第七話：レンストの街

ラウルバーシユ大陸の中ほどにあるブレニア内海沿岸は、一般的には「中原」と呼ばれている。複数の河川によって形成された平野部が広がり、比較的温暖な気候と内海の豊かな恵みから、古来より人が集まる地域であった。その中でも特に、交通の要衝として栄えたのが、内海東部の“アヴァタール地方”である。三神戦争からおよそ二千年、それまでの限られた集落社会から、国家形成期へと移り始めていた。人々は未開の土地を開拓し、新たな航路を切り開き、集落同士を繋ぐことで人・モノ・情報の交換が活発になり、そして国家が誕生していく……

セトの村を離れたオレは、ブレニア内海沿岸を沿うように東へと歩いた。デイジエネール地方は未統治地帯ではあったが、この地方で取れる香辛料や果物、宝石類などを求め、行商人たちが行き来をしている。当然、それを目当てとした宿場街が形成される。街を護る為の自警団は、やがて行商人を護衛する傭兵へと変わる。こうして人々の営みは回っていくのである。

『さすがに、栄えているな……』

アヴァタール地方に入ってから、人々の服装や店の品揃えが格段に違っていることに



気づいた。酒も充実している。これまでワインしか口にしていなかったが、麦酒もあるようだ。もつとも、オレのいた世界のビールとは違い、黒麦酒だったが……

『この辺でもつとも大きな街といえ、東にある“レンスト”だと思えますよ。そこから東は魔族が多くて、行商人たちは必ず、レンストで護衛を雇うんです。だから、レンストでは腕っぷしの強い人達が集まっていて、酒場や娼館もあるみたいですよ』

宿の店主から情報を仕入れたオレは、レンストを指すことを決めた。運よく、行商人一行の護衛が病で倒れたようで、店主の紹介で、オレは後釜として、レンストまで雇われた。それほど長い距離ではないので、あまりカネにはならないが、行商人から、レンストの顔役を紹介してもらえるとという条件が気に入ったのだ。

『おう、お前さんが途中で雇われたっていう護衛役かい？』

レンストの街で行商人に紹介をされた男、ドルカ・ルビースは、品定めをするように上から下まで、オレを眺めた。目つきは鋭いが、どこか愛嬌のある顔である。左頬の傷は、おそらく戦闘でついたものだろう。オレは簡単に自己紹介をした。

『ディアン・ケヒト、ディージェネール地方出身だ』

『なるほど……お前さん、相当デキるな……』

顎の髭をさすりながら、ドルカは呟くと、ニカツと笑ってオレの肩を叩いた。人を惹

きつける笑顔だ。

『腕の立つヤツは、大歓迎だ！さあ、ついて来てくれ！』

レンストの街はオレが想像していた以上に大きく、活気があった。アヴァタール地方東方部からディージェネール地方にかけてを結ぶ、交通の要衝である。ヒト・モノ・情報が行き交う場所には、必然的に商売が栄える。それが更に人を集め、街は大きくなっていく。

『この街では、行商人の護衛を派遣する商売が盛んだ。だが実際は、信頼できる護衛役つてのはそう多くねえんだ。中には盗賊と結託して行商人を襲ってトンズラする奴までいる。商売は信用第一だからな。使えそうな護衛役は、引つ張りだこなんだ』

『なるほど、ルビース殿もそうした商売をしているのか？』

『ドルカでいい。俺はこう見えても、人を観る眼は確かなんだ。おかげで俺んところには、そうした不屈きなヤツはいねえ。評判も上々で、派遣しきれねえくらいなんだ』

『なるほど・・・護衛役が、ドルカの商品つてわけだな』

『そういうこと・・・着いたぜ。ここが俺の城だ』

ドルカの事務所は、大通りに面した一等地にあった。商売が繁盛しているというのは本当らしい。事務所では書類をまとめている女性の姿が見える。オレはドルカの執務室に通された。古びた机と金庫、応接用の椅子が置かれている。オレを惹きつけたの

は、壁一面の地図だ。東西南北の主要路の他、脇道まで精密に書かれている。

『・・・それに眼を点けるとは、お前さん、タダモノじゃねえぜ？普通の奴は金庫に注目するんだ』

ドルカがオレと並んで、壁に向き合う。

『・・・伝説では、大昔は“天空の眼”というのがあって、世界全体を観ることも出来たらしい。だが、今ではこうして、行商人や護衛が持ち帰った情報をもとに、少しずつ地図を作るしかない。俺の店が繁盛している理由は、粒揃いの護衛の他に、こうした情報があるからなんだ・・・』

『・・・凄いな・・・』

食い入るように地図を見るオレの様子を見て、ドルカは笑いながらワインのボトルを用意した。ドルカに勧められるまま、オレはワインを飲んだ。オレはドルカに護衛として雇われるとは、一言も口にしていない。にもかかわらず、こうして情報を隠すことなぐ話す姿勢に好感を持った。こうした面倒見の良さが、ドルカの元に人が集まる理由なのだろう。ドルカに対してなら、ある程度は身の上を話しても良いと思った。

『・・・オレは、デイズエネール地方出身といっても、人間の村で生活をしていたわけはないんだ・・・』

オレの話に、ドルカは黙って、耳を傾けた。記憶を失って龍人に保護されたこと、そ

ここで様々な知識を学んだこと、長老の許可を得て、世界を観るために放浪の旅に出たこと、などを話した。言っていないことはあるが、嘘はついていない。ドルカは領きながら聞いてくれたが、龍人族と暮らしていたことには驚いたようだ。オレの話を聞き終わった後、しばらく黙っていたドルカが意を決したように口を開いた。

『なあどうだ？俺んところ、しばらく護衛として雇われてみないか？護衛は行商人と一緒に、各地を回っていく。お前さんの“世界を観たい”っていう希望にも叶うはずだ。お前さんは腕が立つ、教養もある、何より人を信用させるものを持っている。護衛の仕事はピッタリだと思うんだ』

『ああ、オレも護衛の仕事をやりたいと思っていた。ドルカ、オレを雇ってくれないか？』

ドルカは破顔して、オレのカップにワインを注いだ。

その夜は、ドルカが用意してくれた宿に泊まった。詳しい仕事の話は翌日ということになった。ドルカからは「この街で生活をするなら、カネを持ったほうが良い」と言われた。これまでの村では主に物々交換の取引だったが、レンストの街では通貨が発行されているらしい。金貨・銀貨・銅貨の三種だが、レンストの街でしか使えない。発行量が多すぎれば、通貨の価値が下がり、モノの値段が上がってしまう。レンストの街は、商人たちが話し合って通貨発行量を決めているそうだ。オレは感心した。こうした人

の営みの知恵から、やがて国家が形成されていくのだろう。はじめに国家があるのではなく、まず人の営みがあるのだ。

宿に荷を置いたオレは、その日のうちに、グリーデから貰った宝石を売ることにした。商売が盛んになれば、貧富の差が生まれる。富める者は、身を着飾る為にこうした宝石を欲しがる。そう踏んだオレは、街中央の行商人街に向かった。価格判断が出来なかったので、複数の行商人に声を掛け、一番高く値を付けた行商人に宝石を売った。そしてそのカネで、新しい武器を仕入れることにした。

翌朝、新しい武器「ミスリル剣」を腰に下げ、オレはドルカの事務所に向かった。

## 第八話：劍士レイナ

レンストの街から南東には“闇の眷属”が住む混沌とした地域が広がる。闇の眷属といつても、人間に危害を加えるような存在ではない。闇の現神を信仰し、アークリオンをはじめとする光の現神から迫害をされた人間族・亜人族・魔族の総称である。そのため種族としては混沌としているが、秩序と調和は保たれている。

行商人プルノーは、ニース地方出身者で、闇の眷属たちとも距離が近い。東西南北の行商人が行き交うレンストだが、ニース地方に行く行商は少なく、プルノーの取り扱う商品は高値で取引をされていた。

『今回は、ルーノースの他、最近出来たというフローノの街を通って、リブリール山脈麓の街、レミまで行きたいと考えています。レンストまで往復で4ヶ月を見込んでいます。皆さん、宜しくお願いします』

プルノーは雇った護衛たちに挨拶をした。オレを含めて5人の護衛である。珍しいことに、女の護衛役もいた。ドルカ幹旋所からは、オレ一人の参加で、他の4人は別の幹旋所から呼ばれたらしい。ドルカ幹旋所は優秀な護衛を派遣するが、その分、値段が高い。必然的に雇われた護衛の手取りも増えるわけで、ドルカの下で働きたいという希

望者は多いそうだ。大抵の場合、他幹旋所で何回か護衛の仕事をごなし、信用を蓄積してからドルカに雇われる。オレのように最初からドルカに雇われる人間は珍しく、他の護衛役からの妬みもあるかもしれない。もともと、オレはそんなことは気にしないが……

レンストの街を離れて三日目の夜、護衛として雇われていた女がオレに声を掛けてきた。金髪碧眼の美人だが、胸の大きさは鎧に隠されてわからない。一見すると、護衛というよりはどこかの騎士に見える。“凜とした”という表情だろうか？美人だが気が強そうだ。

『確か、デイアン・ケヒトという名であつたな？お主、護衛役の経験もないのに、ドルカに雇われたと聞いたが……』

『ああ……』

オレは獣欲を抑えながら応じた。話し方も騎士のようだと思つた。

『どのような伝手を使ったのだ？ドルカは未経験者は雇わないと聞いていた。そのドルカが、未経験者を一目で雇つたと噂が立っている。相当な手練れだというが、それ程に強いのか？』

『さあな、身を護れる程度、と応えておくよ……』

オレは肩をすくめて応えた。実際、はぐれ魔神などと戦つたら、勝てる自信はない。基

礎能力があつても、剣や魔法の技術は並みなのだ。

『フンツ　ならば試してやろう・・・』

女はいきなり、剣を抜き放った。

『オイオイ・・・オレたちは同じ旅をする仲間だろう？死合なんてしたくねえよ』

『勘違いするな。これはただの訓練だ。いつ襲われても良いように、護衛役はこうして

戦いの感覚を磨いておくものだ』

『その割には、殺気を感じるが気のせいかな？』

オレは苦笑しながら立ち上がると、剣ではなく木刀を手に取った。野営から少し離れた場所に向かう。数歩離れた距離で、オレとレイナは向き合った。

『えっ・・・と・・・お前の名前、何だったっけ？』

『・・・無礼なヤツめ。私の名はレイナ・グルップだ。それより、貴様、まさか木刀で相手をする気ではあるまいな？』

『ん？素手の方が良かったか？怖いなら素手で相手してやるぞ？』

レイナは怒りに顔を赤くした。オレの思った通り、こうした侮辱には慣れていないのだろう。

『貴様・・・許さんっ！』

レイナは剣を構えるとオレに斬りかかってきた。オレは足元の石を蹴り上げた。拳



大の石がレイナの顔を襲う。思わず目を閉じて顔を背けたレイナは、自分が決定的な隙をつくったことに気づいた。木刀が、レイナの頸元に充てられていた。

『・・・勝負ありだな?』

『卑怯な・・・』

『ヒキョウ? 魔物が騎士道精神を持って正々堂々と襲ってくれなくても思っているのか?』

レイナが剣を下すと、オレも木刀を納めた。オレが立ち去ろうとすると、小声でレイナが呟いた。

『待て、もう一勝負しろ・・・』

『ん?』

『もう一度、勝負をしろ。剣士の勝負をすれば、私が敗けるはずが無いっ!』

オレはレイナに一瞥を向けるとため息をついた。

『はあ・・・面倒くさいな・・・やったところで、オレに利益があるとは思えんが・・・』

『お前が勝つたら、何でも言うことを聞いてやる!』

『やめておけ。出来もしない約束はするな』

『返す返すも無礼な奴め、私は約束は守るっ!』

『・・・そうか。なら、オレが勝つたらお前を抱かせろ』

『・・・え?・・・』

キョトンとした表情の後に、顔を朱で染める。良い反応だ。男に抱かれた経験が無いのだろう。気の強い女を組み敷いてモノにするのは、男の優悦というものだ。

『オレが勝つたら、次の街で一晩中、お前を抱きたい。気は強いが、お前はイイ女だから・・・』

『げ・・・下品なヤツめっ・・・いいだろう。お前が勝つたら、私を一晩、好きなようにするがいい。ただし、私が勝つたら・・・』

『そんな可能性は皆無だが、その時はオレの頸を刎ねるなり、好きなようにしろ』

オレはミスリル剣を抜いた。顔を朱くしていたレイナも、剣を抜くと冷静になったようだ。激高していた先ほどとは違い、闘気が充実している。オレはミスリル剣を構えた。単純に殺すのであれば簡単だが、傷つけないように敗北感を与えなければならぬ。オレはレイナが斬りかかって来るのを待った。

『・・・いざっ!』

レイナが剣を構えて突進してくる。直進して相手を斬じる実の剣だ。互いの間合いに入った瞬間、オレは動いた。互いの体と剣が交錯する。オレの頬をレイナの剣がかすめた。立っていた場所を入れ替えるかたちで、再び向き合う。左頬から一筋の血が流れる。レイナは口元に笑みを浮かべた。

『フンッ 流石にやるな。頸を落とそうとしたが、上手く躲された』

『・・・気づかなかったのか?』

オレがそう言うのと、レイナが身に付けていた鎧がバラバラに外れた。鎧ズレが起きないよう、肩当てや胸当てをした服が露わになる。オレの予想以上に、レイナは豊かな胸を持つていた。レイナは歯ぎしりをしたが、まだ闘気は収まっていない。

『ここで降参すれば、これ以上恥ずかしい思いをしないで済むぞ? 次はその服を切り裂く・・・』

『ぬかせっ! 今度こそ、お前を叩き斬ってやるっ!』

レイナが構えを変えた。先ほどより更に更に闘気が充実している。どうやら奥義を出すようだ。闘気が剣まで伝わっていく。

『必殺・剛破虎爪斬ッ!』

大地をも切り裂く勢いで、レイナが剣を振り下ろしてくる。技の速度も力も大したものであった。まさに実の一撃と言えた。だが、オレも簡単に切られてやるわけにはいかない。

『闘技・虎口一閃・・・』

レイナの一撃を交わしつつ、オレは目にも留まらぬ速度で複数の斬撃を放った。肌を傷つけないようにギリギリで剣を止める。レイナが剣を振り終えた時は、既に服は切り

裂かれ、半裸の状態となっていた。

『……ッ……』

レイナの肩が震えている。オレに手加減をされていたことを理解し、屈辱で震えているのだ。

『……いい一撃だった。だが、お前の腕ではオレには勝てん……』

剣を納めたオレは、羽織っていたコートをレイナに掛けてやった。レイナは黙ってコートで身を隠した。テントに戻るまで、レイナは無言であったが、女用テントに潜る前に、俯きながらつぶやいた。

『……私の敗けだ……』

オレは黙って、レイナからコートを返してもらった。

## 第九話：ルーノース村での初夜

レイナと死合をしたその夜、オレは自分の為に用意をしていた“鉄の胸当て”をレイナのテントに放り込んでおいた。レンストの街で買ったものだが、装着するとなると意外に面倒なことや、なによりその重さが鬱陶しかった。魔神であるオレに鎧など必要だろうかと思ひ直し、少し厚手のコートや衣類の方にカネを掛けたのである。

死合で鎧を失ったレイナは、鉄の胸当てをして現れた。鎧が変わっていることは当然、周囲の男たちも気づいていたが、レイナが「南方に行けば暑くなる」と嘘の理由を話したため、それで納得をしたようだ。実際、レンストの街よりも気温は高くなるらしい。オレと目を合わせたレイナは何かを言いたげだったが、オレは黙って頷いた。

『さ、昨夜は、その・・・世話になった・・・』

ルーノースに向かう道で、レイナがオレに馬を寄せ、小声で礼を言ってきた。鉄の胸当てのことを言っているのだ。

『気にするな。お前のカラダは、男どもにとつては目の毒だ。オレも含めてな・・・』  
『そ、そうか？私は、別に普通の身体だと思っっているのだがな・・・』

どうやらレイナは、オレの言葉を真に受けたいらしい。オレは笑いながら言葉を付け加

えた。

『そういう意味じゃない。オスを刺激するって意味だ。押し倒したくなるぞ?』

『なっ……』

レイナは顔を朱くして、カラダを隠すように腕を組んだ。こういう反応は実に可愛らしい。

レンストの街を出てから四日目、プルノー行商隊はルーノースの村に着いた。ルーノースは闇夜の眷属の勢力圏ではあるが、アヴァタール地方に最も近い村でもあることから、治安も安定し、物資も豊からしい。プルノーがこの街に寄った理由は、商売というよりは情報の仕入れや依頼されていた手紙を渡すといった理由らしい。オレのいた科学文明世界では、手紙などは郵便制度があつたし、なにより電話が存在していたが、デイルリフリーナの世界ではそうした制度も技術も無い。何より、活版印刷技術も無いため書籍そのものが貴重で、文字を読めない者もかなりの割合でいる。

『それでは皆さん、出発は明日になります。その前に、お約束通り報酬をお渡しします』

プルノーは、レンストで使われている通貨を用意していた。護衛役の仕事は、斡旋所と折半が相場だ。護衛役は往路と復路で、それぞれ自分の報酬を受け取る。誰が幾らの報酬であつたか分からないように、同じ大きさの袋を渡された。この辺の気遣いは当然だろう。報酬を受け取ったオレは、宿に部屋を取った。プルノーが用意をした部屋は相

部屋なのだ。「二番良い部屋を用意して欲しい」と店主に相談すると、角の広い部屋を用意してくれた。宿泊代は通常の2倍だが、オレは一目で気に入った。部屋に荷物を入れると、オレはその足で、情報の仕入れに出かけた。

『フローノは、最近見つかった迷宮を利用してはいる街なんですよ。もちろん地上にも街はあるんですが、地下で暮らしている人も大勢いますね』

酒場の店主から、次の目的地であるフローノについての話を聞いた。護衛役の仕事とは、道中の警護だけではない。各街で情報を収集し、次の街までの道程の危険を事前に予想したり、万一の場合に備えて、協道や獣道を調べておくことも仕事である。他にも、客との揉め事から雇い主を守ることも仕事に含まれる。オレは仕入れた情報を紙に書き留めた。ドルカに伝えるためである。

宿に戻ると、ちょうどレイラと鉢合わせた。レイナはオレを見ると顔を朱くして、そっぽを向きながら呟くように言った。

『あ、後で、お前の部屋に行く・・・』

オレは頷くと、角部屋で待っていることを伝えた。レイナは頷くと、急ぐように自分の部屋に入った。部屋に戻ったオレは、濡らした布で身体全体を拭いた。本当は風呂に入りたいところだが、この世界では風呂は贅沢品らしい。服を着替えたオレは、仕入れた情報を整理したり、剣の手入れなどをしたりして時間を過ごした。月が天頂に差し掛

かったころ、扉がノックされた。

『お、遅くなった・・・スマン・・・』

顔を真っ赤にしたレイナが立っていた。恐らく何度も迷いながら、意を決してノックをしてきたのだろう。誰かに見られていないかを確認した後、オレは黙ってレイナを部屋に入れた。ベッドに腰かけたレイナは、気の毒な程に緊張している。早く抱いてしまった方が良くないと判断したオレは、すぐにレイナを押し倒そうとした。

『待てッ・・・待ってくれ・・・その・・・』

『ん？どうした？やっぱり約束は守れないか？』

『そ、そうではない。約束は守る。ただ・・・は、初めてなんだ。男に抱かれるのは・・・だから・・・』

レイナは今にも泣きそうな顔をしている。この顔を快感で染め上げると考えると、オレの獣欲は燃え上がった。

『安心しろ・・・オレは初めてじゃない』

レイナを押し倒したオレは、唇を奪った。呆けた表情のレイナが、呟く。

『せめて、明かりを消してくれないか？』

『お前は景勝地に行くのに、目を閉じて行くのか？』

オレはそう言ったが、ランプの光度を下げてやった。薄明りの中、レイナの服に手を



掛けた。

目を覚ましたレイナは、窓から差し込む朝日の角度から、時間を測った。二刻ほど眠ったようだ。男の腕を枕代わりにしている。自分を抱いた男は、何事も無かったようにスヤスヤと寝息を立てている。レイナは男の胸板に顔を寄せ、目を閉じた。これまでも言い寄ってくる男は何人もいたが、一切相手にしてこなかった。強くなるためには男は不要と断じ、女であることを捨てたはずであった。だが昨夜は、自分が女であることを思い知らされた。貫かれた瞬間は痛みが走ったが、その後は未知の快感で、身体が震えた。自分を貪る男の頸に腕を回し、快感に酔いしれてしまった。

男との初夜を思い出しているうちに、再び焰が灯りそうになり、レイナは慌てて起きた。

『……うツ……』

男が放った精が太腿をつたってくる。レイナは水桶で布を濡らすと、全身を拭いた。冷たい水が、灯りかけた焰を鎮めていくような気がした。

『おいっ！起きろっ！時間だっ』

オレは頭を叩かれて、目を覚ました。レイナがオレを睨んでいる。既に服を着てい

る。

『やあ、レイナ……まだ足りないのか?』

『何を寝呆けているっ! もうすぐ出発だっ! 早く支度をしろっ!!』

起き上がったオレは洗面をするために水桶へと向かう。無論、全裸だ。レイナは壁の方に顔を背けている。

『別に見ても構わんぞ? 今さら隠し合う仲でもないだろ?』

『うるさいっ! 黙って支度をしろっ! さもないと、その粗末なモノを切り落とすぞ!』

レイナに促されるように、オレは顔を洗い服を着た。昨夜のうちに支度は整えていたので、袋を背負って部屋を出た。幸い、他の連中は既に外に出ているらしい。レイナは微妙に距離を空けながら、オレの後ろからついてきた。

『皆さん、おはようございます。今度はフローノの街に行きたいと思えます。フローノでは二週間ほど、店を開く予定です。それでは出発しましょう』

オレたちは、ルーノースからほぼ真南にある新興の街“フローノ”を目指した。

## 第十話：レイナの過去

ルーノースの村からフノーロの街までは、三日の道程を予定してた。今のところ、夜盗や魔物に襲撃されることもなく、気楽な旅となっていた。オレは少々、拍子抜けをしたが、他の連中の話によると、この辺は人通りも多く、魔物に襲われることは滅多に無いそうだ。むしろフノーロを出た後が危険らしい。

レイナは、オレとの一夜など無かったかのように振る舞っている。まあ死合の約束で一夜を共にしたのであって、半ば強引に抱いたようなものだから、その後にならぬというものでもない。オンナは大好きだが、しつこく付きまとうのはオレの趣味ではないから、レイナに合わせて、何事も無かったようにオレも振る舞った。

馬上で心気の統一を図っていたレイナは、自分の身体の変化に気づいていた。これまで澱のように溜まっていた何か、綺麗に消えている。今までよりも楽に、気を統一することが出来た。男を知ったからだろうか・・・ これまでも、得体の知れない衝動のようなものに駆られることがあったが、その都度、剣を振って汗を流すことで抑えてきた。だが、衝動に襲われた翌日は、何かの気の統一を妨げていた。その正体が、“男を

求める欲情”だということ。今では認めるしかなかった。ディアンの方に目を向ける。自分を抱いたことで気安く声を掛けて来ようものなら、殴りつけるつもりでいたが、ディアンはレイナを避けるように、他の護衛たちと話をしている。

(私には、魅力が無かったのだろうか・・・)

ふと、そんなことを考えてしまう。しかし、あれだけ夢中になって自分を求めたのだ。私に気を遣っているのではないか？ いや、あの男はそんな性格だろうか・・・ 男女関係の機微に疎いレイナは、馬上でグルグルと思考を巡らせた。

ルーノースの村を出て二日目の夜、オレは野営から少し離れた森の中にいた。中腰になり、両腕を前に上げ、何かを掴むように手を構える。魔法珠を持っていると想像しながら、両手から魔力を送り込む。魔法訓練の基礎だ。これを極めれば、純粋魔術を操ることが出来るようになる。風が吹き、木の葉が両手の間に落ちてくる。少し光を発し、木の葉は一瞬で、粉々になった。木の枝が折れる音がしたので、オレは構えを解いて音のしたほうに顔を向けた。レイナが立っていた。

『スマンツ、鍛錬の邪魔をしてしまった・・・』

『いや、ちょうど切り上げようと思っていたところだ』

レイナが布を持って歩み寄ってきた。受け取ると額に浮き出た汗を拭いた。ある程

度の純粹魔術なら使えるが、天体衝突級の破壊力を持つ“極大純粹魔術”までは使えない。まして、オレが目指している「神を滅ぼす一撃」は、遙か彼方であった。

『何の鍛錬をしていたのだ？』

オレは木の葉を摘みあげて、レイナに見せた。首を傾げたレイナの前で、木の葉は炎に包まれ一瞬で灰になった。

『お主、魔法が使えるのかっ！』

『使えないと言った覚えはないが……』

この時代、まだ魔法体系は一般的な知識では無かった。魔法を学ぶためには、魔術師に弟子入りをし、長い年月をかけて魔法を修得していくしかなかった。魔術学校などが出来るのは、国家形成期以降の話である。まして、剣術と魔術の両方を操ることが出来る人間など、限りなく皆無と言えた。まあ、オレは魔神だから、出来て当然なのだが……汗を拭き終えたオレが野営地に帰ろうとすると、レイナが声を掛けてきた。

『な、なあディアン。その……頼みがあるんだ……』

『ん？カネなら貸さんぞ？』

『違うっ！その……私に、剣と魔法を教えてくださいませんか？』

レイナは真剣な表情で、オレに頼み込んできた。オレが見返りに何を要求するかも予想しているはずである。それにも関わらず、オレに指南を求める理由に興味があった。

『お前は十分に強いだろ。それ以上、強くなったら嫁の貰い手がなくなるぞ?』

『よ、余計なお世話だつ! 私は・・・もつと強くならなければならぬんだ!』

『・・・前から気になっていたのだが、なぜそこまで強さを求める。お前の過去に、何があつたんだ?』

レイナは言い渋っていたが、理由を話さなければ教えないとオレが言うと、レイナは話し始めた。オレはレイナの横に腰かけ、話を聴いた。

『私は、中原東方部の出身なんだ・・・あそこは、小さな部族が集まって、国が出来始めている。それに伴って、争いが絶えない状態だ』

『群雄割拠って奴だな。独立している部落を吸収するために、血を流すこともあると聞いたことがある・・・』

『そうだ。そして私の父は、そうした中立部落の長だった。父は元々は戦士で、剣では右に出る者がいない程に強かった。その父から剣を学ぶために、大勢の若者が弟子入りをしてきた』

『なるほど、さしずめ“剣士養成の村”ってわけだな』

レイナは頷くと、話しを続けた。

『父は言った。剣は、身を護る為にあるのであって、侵略するためにはない。“護身の剣”が父の思想だった。だが、父の下で学ぶ者が多くなり、それを警戒する奴ら

が現れた』

『……人間は、他人も自分と同じだと考えるものだ。侵略者からすれば、お前の父は“剣士を集める危険な輩”に見えたんだろうな……』

『……突然だった。大勢の兵士が村を襲ってきた。父は、母と私を護る為に、先頭に立ち込んで来た。だが、奴らは斬り込んで来た。村を包囲し、大量の火矢を打ち込んで来た。父も、父が可愛がっていた大勢の弟子も、火矢で焼き殺された。母は私を連れて、何とか逃げることに成功した。だが、こんな時代に女手一つで子供を育てるのは難しい。母は、身を売ってまで私を育ててくれた……』

レイナは肩を震わせた。目を指でこすると、話を続けた。

『私は誓った。父を殺した侵略者に、必ず報いを与えてやる。そのためには、もっと強く、誰よりも強くならなければならないんだ』

『……仇の名は判っているのか?』

レイナは頷いた。

『父を勢力に取り込もうとしていた連中だ。長の名は、ルドルフ・フィズメルキアーナ……』

オレたちは暫く黙って腰かけていた。オレはため息をつくとき、レイナに告げた。

『解った。剣と魔法を教えてやる。ただし、条件が二つある……』

『有り難いついで、なんだ？条件とは？』

レイナの顔に笑顔が浮かんだ。オレは立ち上がって、レイナを見下ろしながら条件を言った。

『一つ、復讐なんて忘れろ。少なくとも、忘れる道を考えてみる。お前は若く、強く、美しい。一度しかない生を復讐で使うつもりか？そんな暗い道を歩くのではなく、日の当たる明るい道を歩いたらどうだ？』

『忘れろだと？私の話を聴いていなかったのか？絶対に忘れるものかっ！奴を殺すことが、私の生きる理由だっ！』

『……まあ、おいおい、だな……で、二つ目の条件だが……』

あまり深く突っ込むと、レイナが機嫌を悪くするだろう。オレにとっては、二つ目の条件の方が重要だった。

『剣と魔法を教えてやる代わりに、お前を抱かせろ。毎晩な……』

『……や、やはりそう来たか……しかも、よりによつて毎晩……』

『まあ、野営では見張りの交代などもあるから控えるが、その分、フローノの街では毎晩、朝までお前を抱きたい』

レイナにとっては、この条件の方が厳しかったのかもしれない。先ほどの怒りは完全に消え、レイナの表情には羞恥が浮かんでいた。



『くっ．．．男というのはどうしてこう．．．わ、解った。そのかわり、手抜きは許さんぞ！剣と魔法、しっかり教えてもらおうからなっ！』

『任せろ。教える以上、半端はしない．．．』

オレはレイナに手を差し出した。白い指先が、オレの手を握り返した。

## 第十一話：フノーロの街

フノーロの街は、地上と地下とで構成されている。田畑や家畜業などは地上で行われているが、闇夜の眷属の多くは、その名にふさわしく地下に住んでいるようだ。地下は迷宮のように入り組んでいて、その規模は未だにわかっていない。地下都市の中心部は住民が集まる広場のようになっていて、プルノーもそこで店を開いた。

『この迷宮は、我らが眷属の大魔術師、カツサレが造ったと言われてまさあ。こんな巨大な代物、一体全体どうやって造ったのか、見当もつきませんが、とにかく、カツサレは俺たちの誇りなんださあ』

街の一角にある古物店に入ったオレは、店主に迷宮についての質問をした。カツサレとはおそらく、先のフェミリンス戦争を引き起こした大魔術師、ブレアード・カツサレのことだろう。彼の魔術師は、女神フェミリンスを捉えるために、地下に巨大な迷宮「ブレアード迷宮」を構築したが、この迷宮はそのための試験だったに違いない。店内には、闇夜の眷属らしく見たことのない道具や素材が並んでいる。この街では未だ、物々交換が中心でレンストの通貨はあまり歓迎されない。オレは龍人族から貰った宝石を交換材料にしようと考えていた。店内を見て回るうちに、店の一角に雑多に積み上げられた

書籍を見つけた。

『ああ、それは特売品でさあ。お安くしておきますぜえ』

店主は揉み手をしながらオレに話しかけてきた。この時代、書籍は極めて貴重だが、それは読める人間にとつてであり、文字を知らない者にとつては書籍など何の価値も無い。両耳が尖つた、半獣半人の店主は、どうやら文字を読めないらしく、本の価値がわからないようだ。

『……これは……』

オレは一冊の書籍を手にとつた。暗号化されているようで、他の者には読めないだろうが、オレには読める。転生するにあたって、大天使サリエルに「全ての文字・言葉を理解、使用することが出来る」という能力を希望したからだ。古代エルフ語から暗号文まで、オレに読めない文字は無い。

それは、ブレアード・カツサレの研究記録だつた。中を開いてみると、闇魔術や純粹魔術についての研究が詳細に記録されている。第一級の研究資料だ。オレは他の書籍も漁つてみた。殆どが異国の物語や商売の取引記録などだが、古代エルフ語で書かれた博物書を発見した。精密なスケッチと共に、素材の性質や使用方法が書かれている。その他、飛行魔法の研究記録なども見つけた。オレにとつては、望外の発見だつた。

三冊の書籍と引き換えに、オレは青い宝石を一粒差し出した。店主は目の色を変えて

宝石を掴み取ると、他にも何点か、持っていった構わないと上機嫌に応えてた。その言葉に甘え、オレは体力と魔法力を回復させる薬を仕入れた。レイナの修行に使うためだ。

仕入れが終わると、オレは地上の宿に戻った。プルノーとの連絡には地下の方が便利だが、オレにとっては少し息苦しいと感じていた。オレ個人で宿を取っている為、プルノーも文句は言わない。宿に荷物を預けると、オレは地下の中心部に向かった。プルノーの店で護衛をするためだ。

『それではディアン殿、護衛を宜しくお願いします』

街中で店を出すため、護衛は一人で十分であった。およそ二週間の護衛は、持ち回りで行われる。五人がちょうど三回ずつ護衛をする計算だ。護衛役の仕事が無い日は、休日のようなもので、他の護衛たちは思い思いに過ごしている。レイナに声を掛けた男もいたが、剣の修行で忙しいとニベもなく断られていた。オレに対して声を掛けてくる奴はいない。オレ自身、他の男たちとは距離を取っているためだ。プルノーは恐らく、オレとレイナとの関係に気づいているだろう。しかしこうして仕事をする限り、何も言うつもりは無いらしい。

『……魔法の修行は、まずは魔力の存在を認識するところから始まる。今日はそこから

始めよう……』

オレとレイナは、お互いに仕事が無い日を合わせて、剣と魔法の修行をしていた。フノー口近郊の森の中に、少し開けた場所を見つけ、そこを修行の場所にした。剣士に往々にして見受けられるのが、目に見える物理的な力に囚われていることだ。精神活動が生み出す魔力を使いこなすには、そうした思い込みを捨てる必要がある。オレはレイナに、純粹魔法の基礎訓練から始めた。

『……魔力とは、いわば精神の力だ。両手で冷たい水の珠を持っていると想像してみろ……』

『……掌が、冷たくなっていく……』

『……次は、熱い炎を持っていると想像するんだ……』

『……今度は、熱くなってきた……』

『実際には何も持っていないのに、お前はそうのように感じている。これは錯覚ではない。お前の精神活動によって、お前の掌に魔力が集中し、水と火の魔素に働きかけている。これが魔法の基礎だ。今は意識を集中しなければ出来ないだろうが、やがて呼吸をするように、当たり前前に魔素を操ることが出来るようになる……』

元々、素質があつたのかレイナの飲み込みは早かった。魔法の修行を始めたその日のうちに、魔力の存在を認識することが出来たようだ。次の日も、互いに仕事が無いため、

その夜はオレの部屋で、レイナは過ごした。

『……明日は、剣術の修行をするのか？どうして、剣と魔法を同時にやらないんだ？』  
オレの胸の上で、レイナが上気した顔を上げて聞いてきた。最初は固かった果実は、次第に甘美な反応を示すようになってきている。オレは絹のような金髪を撫でながら応えた。

『剣と魔法では、力の源泉が違う。剣は腕や足の力だが、魔法は精神の力だ。最初のうちは、分けて修行したほうがいい。それに、毎日同じ修行したら、かえって疲弊してしまうものだ。休む時は休んだほうが良い……』  
『……私を抱くのは、休まないのか？』

オレはその問に応えるように、レイナとの体位を変えた。レイナは声を上げながら、豊かな胸を吸うオレの頭を抱きかかえた。

レイナが店の護衛をする日は修業が出来ないため、オレは購入したブレアードの研究書を読み耽った。大魔術師ブレアード・カッサレは、神の力を欲した身の程知らずと思っていたが、この研究書を読むうちに、彼に対するオレの認識は改まっていった。

……闇夜の眷属は、ただ信仰する神が異なるといっただけで、忌避されている。この

状況は、誰が創つたのだろうか？現神はなぜ、自分が正しいと言い切れるのだろうか：：研究書の端に書かれたブレアードの言葉は、オレ自身も疑問に思うことだ。自分に危害を加えたわけでもなく、考え方が異なるというだけで、一方的に弾圧をする。現神のその姿勢は、オレの中では“悪”としか映らなかつた。ブレアードもそう考え、考え抜いた挙句、現状を打破するために力を欲したのでらう。読み耽るうちに、ページを捲るオレ手が止まつた。純粹魔術について書かれている箇所だ。

・・・先日召還した悪魔によると、純粹魔術の最上位は烈輝陣ではなく、さらに上級の威力を持つ魔術があるらしい。“アウエラの裁き”“エルⅡアウエラ”という魔術だそうだ・・・

オレは自分が求めていた知識を見つけ、細かく読み耽つた。研究書のため、ところどころに走り書きなどがある。それらも丁寧に解析した。

・・・純粹魔術の系統ということから、“アウエラの裁き”とは、魔法力の爆発であることは間違いないだろう。しかしどれほど魔力を増幅させても、烈輝陣程度にしかない・・・

・・・どうやら私の仮説が間違っていたようだ。“アウエラの裁き”に重要なことは、魔力の量ではなく、魔力の圧縮にあるようだ。増幅ではなく、集密にこそ鍵があるのだ・・・

オレは早速、宿を抜け出し森へと向かった。「魔力の圧縮」という言葉を実感するためだった……

その夜、輝く閃光と共に、大爆発が森で起きた。翌朝、街の住人が森を探索したところ、森一面が鍋底のように抉れているを見つけた。それからしばらくの間は、星が落ちてきた、神の怒りだ、といった話が真しやかに語られたのであった。



## 第十二話：リプリーール山脈

フノーロの街での二週間の商売を終えたプルノー行商隊は、リプリーール山脈麓の街“レミ”を目指して出発をした。この二週間、オレはレイナのカラダに溺れる以外は、読書に明け暮れていたが、レイナ自身は魔力に目覚めたことを実感したようで、それに満足をしていた。他の三人の男たちは知らん。おそらく右手で慰めていたんだろ  
う……

『これから先の道は、魔物のほか、夜盗なども出ると聞いています。護衛の程、どうかよろしくお願いします……』

プルノーは、レミの街までの予定日数を言わなかった。その点がオレには引つかかったが、魔物の襲撃など予想が出来ないため、予定日数を立てても意味が無いのだろうと考えた。この周辺の魔物や盗賊の情報は、フノーロの街で仕入れてある。大した警戒が必要とは思えないが、雇い主がそう言う以上は、一応の警戒はしておいた。

レイナは、荷車を挟んで反対側にいるディアンに目を向け、ため息をついた。昨夜のことを思い出したのだ。

『これからしばらくは、野営が続くから……』

彼はそう言うのと、明け方近くまで自分を求めてきた。そのせいではほとんど眠れていない。それ以上に悔しいのは、自分がそれを受け入れてしまったことだ。この二週間、彼と肌を重ねるたびに、自分が少しずつ変化してきているのを感じていた。胸や尻は丸みを帯び、鋭かった目つきには柔らかさが生まれていた。何より、彼に抱かれることに悦びを感じていた。唇を重ね、胸を吸われ、激しく貫かれるたびに、喜悦で全身が震えた。昨夜など、彼の腰に脚を回し、自分から積極的に求めていた……

『耐えられるだろうか……』

少なくとも見積もっても二十日以上は野営が続く。自分が怖いのは、その間に、自分の肉体に焔が灯ってしまった場合である。剣を振るだけで鎮められる自信が無かった。

それは三日目の夜であった。交代で見張りをしていた護衛が、いきなり大声を出した。

『魔物だつ!!』

魔神であるオレは、本来は睡眠を必要としない。そのためフローノの街を出てからは、寝たふりをして常に警戒をしていた。オレはすぐに剣を取り、テントから飛び出した。ヴェアヴォルフの集団であった。半獣半人だが理性を失った人狼である。レイナ

や他の護衛たちも起き出し、迎撃態勢を取っている。オレは剣を抜いて集団に向かつて駆けだした。

『フツ!!・・・』

オレは次々とヴェアヴォルフを切りつけた。重傷だが致命傷ではない。殺すのではなく撤退させることが目的であつた。他の護衛たちは、積荷やプルノーたちを守っている。レイナがオレを支援しようとしていたが、オレは目で合図を送つてそれを止めた。オレ一人で充分であつたこともあるが、守りが手薄になり別方向から襲撃される可能性もあるためだ。

『ウオオオオオオンツ』

ヴェアヴォルフたちが鳴き声を上げて撤退していく。オレはミスリル剣を一振りし、剣についた血と脂を切つた。

『警戒しろっ！また別方向から来るかもしれない・・・』

返り血で顔を紅く染めたオレが指示を出す。護衛たちは言われるまでも無く、周囲に目を光らせていた。プルノーたちはテントに下がっている。寝れるはずもないだろうが、起きていても邪魔なだけだ。明け方まで警戒をしたが、それ以上の襲撃は無かつた・・・

明け方、水を浴びて返り血を洗い流しているオレに、レイナが声を掛けてきた。

『アナタが戦っているところ、初めて見たけど……凄かった。どうやったら、あんなに速く動けるの?』

『致命傷を与えるつもりは無かったからな。奴らを退けるための動きだ。一体ずつ殺していたら、あんなに速くは動けない……』

大判の布を受け取りながら、オレは返答した。レイナの視線がオレの胸板から離れないが、あえて無視をした。

『……どうして、殺さなかったの?』

『必要が無かったからだ。魔物にとつては、オレたちのほうが侵入者なんだ。それに、仮に殺したとして、死体をどうする?人狼を喰う趣味はオレには無いな…… により、殺さなければ、また奴らは襲ってくる。だがオレがいれば襲ってこない。匂いで学習しているからな。つまり“オレが護衛をする商隊は襲われない”ということになる。解るか?』

『なるほどね……プルノーはあなたを指名せざるを得ない。多少値が高くても……上手いやり方ね』

オレはニヤリと笑うと、新しい服を着た。野営に戻ろうとすると、レイナがついてこない。振り返ると、レイナが股をすり合わせていた。そのしぐさで、オレは察した。

『……あまり時間が無い。すぐに終わらせよう』

オレはレイナの手を取って、森の奥に進んだ。野營が完全に見えなくなったところで、レイナの両手を木の幹に掴ませる。レイナは口に布を咥えた。

『フンツ……』

後ろから貫いた瞬間、レイナの口からくぐもった声が漏れる。レイナの肉は、既に蕩けきっていた。

『やあ、ディアン殿……昨夜はお疲れ様でした。どこか、お怪我はありませんでしたか？』

プルノーが明るい表情でオレに声を掛けてきた。レイナは顔を洗って上気を沈めたはずだが、おそらくプルノーは気づいたのだろう。

『自分でも気づかぬうちに、手傷を追っていたようです。大した傷ではないのですが、レイナ殿に手当してもらっていました。遅くなり、申し訳ありません……』

『そうでしたか。いや、軽いお怪我で良かった。ディアン殿にはこれからも活躍して頂かなくては……』

プルノーはオレに対してというよりは、他の護衛たちに対して言っているようであった。そしてオレの傍に來ると小声で囁いた。

『……森へは誰も行っていません。ただ今後、野営ではご自重ください……』  
『……かたじけない……』

オレは小声で礼を述べた。

フノー口の街を出て六日目である。レイナが話しかけてきた。

『ディアン殿……我々は、レミの街を目指しているはずだが……』

『ああ、そのはずだが?』

レイナは、オレと二人きりの時とは、口調を変えている。彼女なりの分別なのだろう。レイナはその口調のまま、気づいた疑問を口にした。

『レミの街は、リプリール山脈の反対側にある。街にいく為には、南に大きく迂回をするのが通常だ。だが、日の位置を見てみる。我々は真東に進んでいる……』

レイナの指摘で、オレも気づいた。このまま東に進めば、リプリール山脈西側にぶつかる。

『……まさか、山越えをするつもりなのか?』

リプリール山脈は竜族の縄張りであり、山に入る者は必ず警告を受け、それを無視すれば竜族の戦士によって殺される。フノーの街の人間に聞いても、山に入る者は地元の人程度で、竜族の縄張りを侵さないように慎重に進むそうだ。一行商隊がリプリール山脈に入るなど、無謀というものであった。

その日の夜、プルノーはオレたち護衛に対して、リプリール山脈越えを目指していると伝えてきた。レイナを含め、四人の護衛たちはこぞって反対をした。単身で超えるならともかく、荷車を引いた状態で山越えをするなど無謀極まりない。さらに、リプリール山脈は竜族の縄張りであり、それを侵せば全員が殺される。仮に、縄張りを上手く迂回したとしても、その迂回路には強力な魔物の存在が予想された。

『フローノの街で得た情報によれば、竜族の縄張りを侵すことなく、かつ荷車でも通れる道が確かにあるそうです。詳細な場所も教えてもらいました。こうして五人もの護衛をお願いしたのは、この山越えの為でもあるのです。山越えが成功すれば、レミの街との距離は格段に短くなる。それはつまり、利益に直結するわけです。』

他の四人が反対をする中、オレは一人、納得をしていた。これまでの行程を考えると、五人の護衛が必要だとは思えなかった。せいぜい三人いれば足りるはずだ。利に聡い商人が、そんな計算を間違えるはずが無い。ドルカから教えてもらった道情報でも、リプリール山脈を越える道は無かった。つまり新情報であり、ドルカ斡旋所の利益、ひいてはオレの利益にも繋がる。．．．

『ディアン殿は、いかがお考えですか？先ほどから黙っていらつしやいますが．．．』

プルノーはオレに話を振ってきた。先日の魔物撃退によって、オレの腕が証明され、護衛たちの中でも一定の発言力があると思つたからだろう。

『一つ聞きたい。その山越えの道については、確かな情報なのだろうか?』

『確かな情報です。何度もその道を通っているという地元の狩人数人から聞いた話です』

『なるほど・・・であるなら、雇い主が行くと言う以上、オレたちはそれに従うまでだ』  
『ディアンツ!!』

レイナが信じられないという表情で、オレに顔を向けた。オレはレイナを含め、他の護衛たちに対して言った。

『反対する理由が無い。これまで知られていない道だからといって、誰も通らなければ、今後もレミの街まで遠回りをすることになる』

『だが、魔物はどうする?リプリール山脈の魔物の情報は、我々にはない!』

『それを撃退するのが、護衛の仕事だろ?それに、情報にない魔物なんて、これまでも出てきただろう・・・』

四人の護衛たちはうなだれた。オレの話は理屈としては正しいが、護衛たちの直感というものがある。実際、オレ自身も嫌な予感を感じていた。

『流石はディアン殿・・・勇敢なだけではなく、モノの道理というものを良くご理解されている』

プルノーがオレを褒め称える。コイツ・・・このためにオレとレイナを黙認していた



のか・・・ そう考えると、少し腹も立った。

『リプリーール山脈に行こう。ただ、他の護衛たちの為にも、頼みがある。麓にはおそらく、狩人たちが生活をしているはずだ。その道を知る狩人を雇って、道案内をさせてくれ』

『無論です。最初からそうするつもりでした』

『それともう一つ。山越えは出来るだけ短時間で終わらせてしまつたほうが良い。そのため、昼夜兼行で進んでもらいたい』

プルノーは顎をさすつて暫く考えていたが、頷いた。

『三日だ』

オレはレイナたちにそう告げた。

『三日で、リプリーール山脈を超える』

## 第十三話：はぐれ魔神との邂逅

フノーロの街を出てから八日後、オレたちはリプリール山脈の西側麓まで辿りついた。麓といっても、山脈の遙か手前である。リプリール山脈の大きさは、オレのいた世界で例えるなら、アルプス山脈級だろう。踏破は不可能ではないだろうが、相当の覚悟が必要だ。麓には、狩人たちが生活をする集落が存在していた。プルノーはそこで二人の狩人を雇った。両名とも道には詳しいらしいが、荷車を曳きながら踏破したことは無いらしい。

『・・・魔物の情報を聞いたが、ミノタウロスやレブルドルのほか、更に強力なヤツまで出るらしい。やつかいだな、これは・・・』

他の護衛たちはため息をついた。レイナはあからさまにオレを睨んでいる。昨日から一言も口を利いてくれないのだ。まあ、この山を見れば、遠慮したくなる気持ちも理解できる。オレも自分が魔神でなければ、絶対に拒否をしただろう・・・

『では皆さんー出発をしましょうかー！』

九日目の早朝、プルノーは朗らかな声で出発を宣言した。オレですら“気楽だね”と思わずツツコミたくなった。狩人たちが案内をした山道は、リプリール山脈の岩肌に

沿って、南を回りつつ踏破をする道程である。三日で踏破となれば、昼夜兼行でギリギリの距離だ。しかも人が行き交う街道ではなく山道である。瓦礫などを退けながらとなれば、通常速度は期待できない。オレは、三日で抜けると言った自分の言葉に後悔を感じていた。五日は必要かもしれない・・・

レイナは腹を立てていた。リプリール山脈越えに、ディアンが賛成をしたからではない。理屈を言われれば、確かにこの山越えには賭けるべき価値があるし、成功の見込みも大きいだろう。自分が腹を立てていたのは、ディアンがそれを自分に言わなかったことだ。ディアンは、あの場でいきなり賛成を表明した。昼の時点でリプリール山脈越えは予想していたし、その時にはプルノーの考えていることも読めていたはずである。であれば、自分にそれを教えてくれても良いではないか・・・

『まったく・・・あの男は・・・』

レイナ自身、その考えは身勝手であると気づいていた。ディアンとレイナが男女の仲であることは非公式だ。褥を共にしている時間であればともかく、街道を移動している時に、自分にだけそんなことを言うはずが無い。そうした理屈をレイナは押しやっつて感情的になっていた。つまりレイナは、ディアンに「特別扱い」をして欲しかったのだ。なぜなら、自分にとって、彼は特別な存在だから・・・

リプリール山脈踏破に挑んだオレたちは、最初のうちは魔物を警戒して慎重に進んだが、初日の夜は何事も無く、二日目の昼も魔物の気配は一切無かった。護衛たちもプルノーも拍子抜けをしたようだ。街道は確かに瓦礫などが多いが、それらは護衛たちが先行調査をする中で、取り除いて行けばいい。二日目の夕方には、リプリール山脈の半ばまで達しようとしていた。

『これは、思いのほか早く着きそうですね．．．いやあ、これなら今夜は、ここで一泊しても良いではありませんかな？』

プルノーは早くも油断し始めたようで、ここでの野営を提案してきた。馬に乗っていると、夜通しの山歩きで、肉体が悲鳴を上げているのだろう。だが、オレはその提案に反対した。

『越えられそう』と越えた』とでは、天と地ほどの違いがある。野営をして朝になったら魔物に囲まれていた、ということにもなりかねません。ここは当初の予定通り、山を下りましょう。眠るのであれば、レミの街で幾らでも眠れます』

簡単な食事を済ませたオレたちは、そのまま出発をし、夜半にはリプリール山脈の尾根を越えた。あとは下り道である。荷車が転げ落ちないように注意をする必要があるが、馬も人も、かなり楽をできるはずだ。この時点でも、魔物の気配は一切ない。警

戒は怠らなかつたが、オレ自身、踏破成功を殆ど確信していた。

今となつては、この時に気づくべきだったのだ。魔物の巣を横切りながら、なぜ襲つて来ないのかということ。．．．

東側から朝日が昇り、リプリール山脈の尾根を照らしていく。眩しい光がオレたちの目を癒してくれる。日の光で、岩肌が赤く染まり、草花が命を吹き返す。リプリール山脈東側は、荒涼とした瓦礫地帯だが、道は単調な下り道だ。荷車を曳いている以上、駆け下りることは出来ないが、そろそろ麓が見え始めても良い頃である。

行商隊の後ろを護るレイナに、オレは馬を近づけた。レイナは相変わらずツンとしているが、途中で集めた花をレイナに差し出すと、彼女は表情を崩した。花なんてこれまでも贈られたことは何度もあるのだろうが、男を知ったことでようやく、女性らしい反応も出来るようになったようだ。花の匂いをかぐレイナにオレも笑顔を浮かべたが、次の瞬間に、得体の知れない気配を察知し、オレは馬を止めた。

『な．．．なんだ？この気配は．．．』

『どうしたの？ディア．．．』

レイナも気配を察知したらしい。おぞましい程の邪の気配が周囲を漂う。オレは馬

から降り、剣を抜いた。

『来るぞっ！』

目の前の空間が歪み、暗黒の口が開く。馬が悲鳴を上げて駆け逃げていく。レイナも、逃げようとする馬を何とか抑えている。手のひらに汗が滲むのを感じた。やはり物事は、そんなに簡単には進まないものだ・・・

《我ハソロモン七十二柱が一柱、四十の軍団ヲ率いし魔の公爵”アスタロト”・・・》  
『ひっ・・・ひいひいひいっ!!』

後ろで男が悲鳴を上げている。プルノーなのか護衛どもなのかは知らない。暗黒の空間から、巨大な大蛇に乗った褐色の女が出てくる。イイオンナかどうかなど、判断をしている余裕はない。凄まじい魔力と邪気で周囲が陽炎のように歪んでいる。

《三神戦争ヨリ悠々の時を生きし我が、強キモノの気配を感じて来てみれば、何ぞニングンの集団でハないか・・・》

『に、逃げましょうっ！ディアンツ!!』

レイナがオレに声を掛ける。だがオレは覚悟を決めた。とても逃げられる相手ではないからだ。

『レイナッ！みんなを連れて早く山を下りろ！決して振り返るなっ!!』

『あ、あなたは どうするの・・・こんな相手、とても勝てっこない!!』

『コイツは“はぐれ魔神”だ。簡単にオレたちを逃がしてくれるようなヤツじゃない。オレはここで、コイツを食い止める!』

オレは剣を構えると魔神アスタロトの前に立った。褐色の女が蛇のような黄色い瞳でオレを見下ろす。

『早く行け!!』

『わ、解った、ディアンツ!死ぬなよっ!!』

レイナは馬を翻して、行商隊を先導し始めた。いつ魔神が動き出すかと身構えていたが、オレを見つめたまま動かない。やがて、行商隊の気配が消えた頃、アスタロトが口を開いた。

《さて、強キモノ・・・準備はヨいか?》

『待っていてくれたのか・・・随分と気前が良いな・・・』

《私の希みハ血沸キ肉躍ル闘いの喜悦、さあ、刹那の悦びヲ我に与えヨツ》

アスタロトの両手が魔力を充実させる。性質から見て、雷系の魔法だ。オレは口元に笑みを浮かべた。余裕からではない。現在の自分の強さを測る絶好の機会だからだ。魔神であるオレの力を測る為には、魔神と戦うのが一番手っ取り早い。

『アスタロト・・・お前は二つ、間違いを犯した。一つ、オレを人間だと思い込んだこと。二つ、オレの仲間を見逃すことで、オレに余裕を与えてしまったことだ。全力を出す余

裕をなッ!!』

オレは全身を覆っていた魔力を解放した。オレの身体から、魔神の気配が溢れ出した……



## 第十四話：死闘

ズズツンツン……

上の方から地響きが聞こえ、パラパラと小石が落ちてくる。プルノー行商隊は、レイナ先導のもと、リプリーール山脈を全速で降りていた。荷車が軋みを上げる。馬も人も、限界に近かった。レイナは他の三人の護衛を見た。全員が蒼白で、一人は恐怖のためか、髪の毛が真っ白になっている。レイナは思わず、自分の髪を見てホツとした。

麓にあるレミの街が近づてくる。ここまで来れば、一安心だ。普通とは逆方向から来たプルノー行商隊に、街の人々は驚いた様子だった。行商隊が無事に街に入ったことを見届けたレイナは、馬を替えると再び、リプリーール山脈を指さうとした。他の男たちが止める。

『よせっ！いま行けば、死に行くようなものだっ！』

『ディアンはまだ戦っているっ！私たちを助けるために！彼を見殺しにする気か！』

レイナは男たちの静止も聞かず、山に向けて馬を奔らせた。

《雄オオオオオオオ》

『霸アアアアアアッ』

巨大な魔力の衝突により、岩が一瞬で蒸発していく。はぐれ魔神アスタロトと、力を解放した魔神ディアンは、互いの魔技を尽くして死闘を演じていた。アスタロトの方がより上位の魔法を使えるが、基礎魔力はディアンの方が上である。互いに繰り出す魔法は相殺し合い、破壊の嵐を周囲に撒き散らしていた。

『喰らえッ 一撃・玄武の地走りッ』

大地に刺さった剣が凄まじい勢いで引き抜かれる。アスタロトめがけて破壊の衝撃波が走る。

《磔剣バルトロマイ》

衝撃波に対抗する形で、アスタロトも剣を振るう。暗黒の衝撃波が玄武の地走りを打ち消し、逆にディアンに襲いかかる。

『チイッ・・・竜殺しの剛剣ッ』

ディアンの剣が暗黒の衝撃波を打ち消した。ミスリル剣は既に限界に達している。あと数振りしたら、剣はその命を終えるだろう。地力はディアンの方が上だが、アスタロトには二千年に渡る闘いの経験がある。ディアンの剣がもう保たないことをアスタロトは喝破していた。

《嵐の轟雷》

アスタロトの両手が電撃を発する。ディアンの周囲一帯を凄まじい落雷が襲う。

『贖罪の雷ッ』

同じ電撃系魔術を放ち、アスタロトの魔術と相殺し合う。二つの電撃魔術はぶつかり合い、結果として真横に向けて、遙か彼方まで届く巨大な放電を放った。どれほど時が経ったのだろうか。互いに決定的な一撃を加えられないまま、既に日は傾き始めていた。

《此れ程に愉シめるとは、思わなんだゾ、魔神ディアンよ……サア、決着の関ゾ……  
汝の持つ最大の技を持つテ、挑んでクルが良イ》

アスタロトの言葉に、ディアンが剣を構える。既に刀身には亀裂が走っている。あと一撃が限界だろう。肩で息をしていたディアンは、大きく息を吸い、心気を統一した。ただ一振りの“極実の一撃”に賭けるつもりだった。

『いざいっ！』

アスタロトに向けて奔る。間合いの直前で飛び上がり、アスタロトめがけて剣を振り下ろす。アスタロトも剣を持って迎撃を試みる。

《磔剣バルトロマイ》

『極実剣技・崩翼竜牙衝ッ!!』

二つの剣が交錯し、凄まじい衝撃波が山全体に響いた。

レイナは、これまでにない地震を感じた。まるで山全体が動いているようだ。

『アイツ・・・まだ生きているッ!!』

山の中腹部に向け、馬を急がせた。

ミスリル剣が柄までボロボロに崩れていく。完全に死んだのだ。デイアンは額から血を流していた。アスタロトの剣撃が額を割ったためである。だが・・・

《ミ・・・見事ッ・・・》

アスタロトは左肩から右脇腹にかけて、完全に切り裂かれていた。デイアンの放った極実の一撃の勝利であった。デイアンは片膝をついて、大きく息を吐いた。魔神の肉体は疲労とは縁が無いはずであったが、さすがにこの死闘には疲れた。早く街に行つて、レイナを抱こう・・・そう思つて立ち上がったデイアンは、アスタロトの様子にギョツとした。既に傷がふさがり始めているのだ。

《汝が放つた一撃、確か二至高のモノであったゾ・・・だが、私の神核を砕くには能わズ・・・》

『・・・クツ・・・』

デイアンが再び構えたのをアスタロトが止めた。

《汝トの闘いは、此の上なく甘美だガ・・・邪魔が入つタようダ・・・》

その言葉でディアンも気づいた。いつの間にか、このあたりに別の魔力が存在している。それは更に巨大になり、やがてディアンとアスタロトの前に姿を現した。

《巨大な力同士のぶつかり合い・・・我を魅了するに充分であつたわ・・・お蔭で、カラダの疼きが収まらぬ・・・さて、どうしてくれようぞ？》

蒼い髪と見事な肢体を持った美女が現れた・・・

リプリール山脈山脈の中腹部にたどり着いたレイナは、景色の変容に絶句した。岩という岩は砕かれ、まるで砂漠のようである。

『な、なんなのだ？これは・・・』

馬を進めると、ディアンとアスタロトが向かい合っている姿が見えた。アスタロトは相変わらず禍々しい気配を発しているが、ディアンも同じような気配を発している。これまでのような、女好きだが頼もしい男の気配ではない。まるで魔神そのものであった。そして、彼らの中心に、更に巨大な気配が出現しようとしていた。レイナは思わず、山の起伏部に姿を隠した。

女の気配からして、魔神であることは間違いない。だがオレは、その美しさと肢

体に目を奪われた。女はオレとアスタロトの双方を見ると、まずアスタロトに話しかけた。

《久しいのう、アスタロト．．．汝と会ったのは、七魔神戦争以前か．．．もう千年以上も前になるな．．．》

《ハイシエラか．．．我ノ邪魔をシに来たカ？》

《そのような無粋なマネはせぬ．．．ただ、我の知らぬ気配に、興味を持っただけじゃ．．．》

ハイシエラと呼ばれたその女は、オレの方に顔を向けた。

《我が名はハイシエラ、三神戦争をも生き残った地の魔神じゃ．．．そなた、我の知らぬ魔神じゃが、名を何と申す？》

先のアスタロトといい、このハイシエラといい、魔神というものは独特の自己紹介方法があるらしい。二柱の魔神を前に、オレは即興で口上を考えた。

『オレの名はディアン・ケヒト、白と黒・正と邪・光と闇・人と魔物の狭間に生きし、黄昏の魔神だ』

『．．．ツ．．．』

レイナは思わず口を押えた。確かに聞こえた。ディアン・ケヒト、黄昏の魔神だと。

だがレイナは、その場から動くことが出来なかった。三柱の魔神たちの会話に、耳を傾けた。

## 第十五話：ハイシエラとの闘い

《黄昏の魔神とな．．．なるほど、確かに汝からは面白い気配を感じるのだ．．．》

魔神ハイシエラは、オレの周囲を歩き回りながら、値踏みするようにオレを観察する。

《．．．発しておる気配は確かに魔神じゃ。膂力も魔力も魔神のものだの．．．じゃが、汝からは何故か、魔神特有の禍々しさを感じぬ．．．それどころか、むしろニンゲンのような雰囲気を感じてならぬ．．．はて、面妖だの？》

ハイシエラはオレを観察した感想を述べていった。さすがに二千年以上を生きる魔神である。その知性も観察眼も大したものだ。ハイシエラは足を止めて、オレに顔を向けた。

《そこで、我は想う．．．汝は元々はニンゲンであつたのではないか？ヒトの分際でいかに魔神の肉体を得たのか、大いに興味があるとこるじゃが．．．》

オレは動揺を隠すために歯を食いしばった。目の前にいる魔神は、間違いなく、いまのオレより強い。下手に刺激したら、本当に死にかねない。ハイシエラはオレに目を向けて沈黙をしたが、やがて顔を背けた。

《．．．まあ、それは良い．．．それよりもじゃ．．．》



ハイシエラの表情が一変した。その表情はまるで、牡を求めて発情する雌猫のような表情であった。貌は上気し、瞳は欲情の色を浮かべ、口元から涎が垂れている。

《ここに、三柱もの魔神が集まりながら、何をこのように井戸端会議をしておるのじゃ？先ほどからこの躰が疼いて止まぬっ！早う始めようではないかあ・・・破壊と、殺戮の饗宴をつ！》

“いや、そもそも話し始めたのはオマエだろ”と口にするほど、オレは命知らずではなかった。その代わりにアスタロトがため息交じりに断りを入れた。

《悪いガ、我は汝には付き合えヌ・・・先ほドまでの至福の祭りで、我は満足してオレからノ・・・》

《相変わらず、付き合いの悪いヤツだの・・・デイアンよ？汝は我に付きおうてくれような？剣を失ったようじゃが、まだ魔力は尽きておらぬようじゃしの？》

オレの頬から汗が滴る。ここで断れば、ハイシエラがどのように反応するか解らない。気晴らしに麓のレミの街を破壊することも十分に考え得るのだ。

『いいぜ、ただし条件がある。オレが勝つても負けても、次に会った時はお前を抱かせろ。オレが満足するまでな・・・』

《ほう、我を抱きたいか・・・我もつくづく、罪な躰を持ったものよ・・・》

《変わつタ魔神とは思っていたガ、その趣味はさずガに我の理解を超えル・・・》

ハイシエラが笑いながら、アスタロトに裏拳を繰り出したが、アスタロトは既に異界へと消えかかっていた。空を切った裏拳の衝撃は、そのまま遠方の山に巨大な穴を穿った。

《ハイシエラ、ダイアン．．．いずれ会おうゾ．．．》

《フンツ、また千年後かも知れぬの？》

『．．．．．』

アスタロトが消え去り、荒野にはオレとハイシエラのみが残された．．．

レイナは頭が混乱していた。自分を抱いたダイアンが魔神で、その魔神が他の魔神と会話をし、あろうことか抱きたいなどと言っている．．．

レイナはその場を離れようとしたが、足が震えて動けなかった。声の届く範囲に、人域をはるかに超えた存在が2つもあるのだ。

《さて、では始めようぞツ》

ハイシエラは宙に浮かんだ。オレは唾然とした。オレが求めていた飛行魔法が目の前で行われているのである。だがそのようなことを知らないハイシエラは、呆けたオレにいきなり痛撃を加えてきた。

《何を呆けておるっ！ホラホラホラホラアツ!!》

純粹魔術レイルーンである。人間業ではない速度で、ハイシエラは破壊の魔球を放ち続けた。オレは右へ左へと動き、直撃を避ける。

『チツ・・・調子に乗るなあっ!!』

オレは練り上げた火焰魔術をハイシエラに放った。“メルカーナの轟炎”である。ハイシエラは笑みを浮かべてそれを迎え撃つ。

《アウエラの裁き》

純粹魔術の爆発によつて、メルカーナの轟炎を打ち消した。やはり戦闘能力も魔術もオレを遥かに超えている。ましてアスタロトと一戦をした後に、こんな化け物を相手にするのは無理であつた。ハイシエラはため息をつきながら、地に降りてきた。

《フム、さすがに疲れておるようだの？私の求める一時は得られそうにない・・・仕方がない、せめて我が糧となるが良い・・・》

ハイシエラが純粹魔術を打ち出そうとしていた。オレの魔力も底を尽きかけている。まだ未完成だが仕方がない。オレは最後の賭けに出た。

《消えるが良い。エルリアウエラツ!》

巨大純粹魔術がオレに向けられて放たれる。オレは持てる全ての魔力を込めて、術式を形成した。

『極大純粹魔術・ルンⅡアウエラツ!!』

《何ツ!!》

巨大な純粹魔術同士が衝突をする。まだ未完成の為、発動速度は遅いが、破壊力はエ  
ルⅡアウエラを凌ぐ純粹魔術の最上位である。ハイシエラの放ったエルⅡアウエラは、  
一気に押し戻された。

《お・・・オオオオオオ・・・》

ルンⅡアウエラに押される形で、ハイシエラの姿は消え去った。オレの放った魔術は  
そのまま遙か遠方を通過し、宇宙空間まで届いた。

『カハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・』

オレは膝をついてそのまま倒れた。僅かな魔力も残されていない。顔を横に向けた  
オレの視界に、レイナの姿が映った。オレは持てる力を振り絞って手を差し伸べたが、  
レイナは後ずさりをする。首を横に振って、そのまま逃げだしていった。オレは力尽  
き、意識を失っていった。

『・・・どうして・・・』

レイナは走りながら呟いた。双瞳からは涙が溢れている。

『どうして、言ってくれなかったのだっ!!』

レイナは悲しかった。ディアンが魔神であったことも衝撃であったが、彼がその事実を自分に打ち明けてくれなかったことが、悲しかったのだ。自分は、あの男にとつて何なのだ？ただ、肉欲を処理するためだけの存在なのか。自分の手を取り、魔法を教えてくれた時のあの笑顔、剣の打ち込みが鋭くなったことを褒めてくれたあの微笑み、夜毎、肌を重ね、私の耳元で囁いたあの言葉は何だったのだ！全ては嘘だったというのか！

怒りと悲しみで闇雲に駆けるレイナの前に、闇の異空間が出現した。

《危ういところであつたわ・・・》

『ひいっ・・・』

目の前に出現した魔神ハイシエラに恐怖し、レイナは尻餅をついた。

## 第十六話：レイナの選択

《危ういところであつたわ・・・》

そう言いながら、青髪の魔神が突然姿を現した。レイナは尻餅をついて震えあがつた。目の前の魔神の存在感に押しつぶされそうであつた。一目見ただけで、レイナにも確信が持てた。地を這う地虫と天空を飛ぶ大鷲とは、その存在が全く違う。自分と目の前の魔神とは、それほどまでに隔絶した違いがあつた。

(ディアンは・・・こんな奴らを相手に戦つていたのか・・・)

レイナは全身を震わせながらも、何とか剣を抜こうとした。しかし、カチャカチャと音をさせるだけで抜くことが出来ない。目の前の魔神は、そんなレイナに一瞥を向けた。

《ほう・・・私の姿を見ながらも、未だ闘志を失つておらぬ・・・羽虫にしては、上等だの?》

魔神がレイナに近づく。レイナの足がブルブルと震えた。

《そなた・・・先ほどまで我らの会話を盗み聞きしておつたの?我が気づかぬと思つておつたか?》

『ひっ……ひいつ……』

レイナが目目を閉じて顔を背けた。魔神はため息をつくど遠方を見ながら呟いた。

《これは……余計なお世話かもしれぬがの？あのデイアンという魔神……あれはニンゲンの……》

『……えっ……』

魔神の言葉を聞いて、レイナの震えが止まった。魔神はまるで独り言のように、話を続けた。

《彼の者は、自分は“人と魔物の狭間に生きし黄昏の魔神”と言うておつたの……恐らく、ニンゲンの魂を持ちながら、魔神として生まれたのであろう……実に興味深い……》

レイナが魔神を見つめる。なぜだ、何故この魔神は、私に対してそのようなことを告げるのだ？

《いずれにせよ、彼の者の魔力は尽きておる……誰かが助けなければ、遠からず息絶えよう……もつとも、我は助けるつもりなど、毛頭無いがの……》

魔神はそう言うど、レイナの前から飛び去って行つた。禍々しい気配が消え去る。尾根の西側に日が沈み、辺り一帯は暗くなり始めている。レイナは独り、座つたままであつたが、意を決したように立ち上がった。

『……助けなければ……』

レイナは、先ほどまで人外の闘いが行われていた場所に足を向けた。

荒涼とした戦場跡で、オレは独り倒れていた。魔神ハイシエラとの闘いで全ての魔力を使い切ったオレは、指一本動かす力も残されていなかった。魔力とは、魂の活動が生み出す力であり、魔神の肉体は、魔力を循環させることで維持される。つまり魔力とは、魔神にとつていわば血液のようなもので、それが尽きれば肉体は死んでいくしかない。薄れゆく意識の中で、オレはハイシエラの声を聴いた。どうやら死んでいなかったらしい……

《少し、世話を焼かせてもらった……運が良ければ、生き延びるかも知れぬの？その時は、我を訪ねて来るがいい。約束通り、我を抱かせてやろうぞ……》

オレの意識は完全に途絶えた……

ディアンを背負ったまま、レイナは山を一步ずつ降りた。既に日が沈みかかっている。

『頑張れっ！もう少しだ……』

ディアンの身体は、自分が思っていた以上に重かった。何より、ディアンの身体に触



れているだけで、力を吸いとられていくような感覚を持った。レイナは歯を食いしばりながら、麓の街を目指した。日が完全に沈み、魔物の気配が当たりに漂い始める。レイナは急ごうとしたが、力が入らない。ここまでか・・・そう思った時、複数の灯りが見えた。プルノー行商隊の護衛たちである。街からも何人か、助っ人が出ているようだ。レイナは笑いながら、声を上げて知らせた。

最初は点のような光であった。やがてそれが大きくなり、そしてぼやけたような景色となる。それもやがて輪郭を帯び、しっかりとした光景が目映る。意識を失ったオレは、どこかの部屋の天井を眺めていた。死んだはずであった。大天使サリエルが迎えに来ると思っていたのだが、この世界では違うようだ。やはり、三神戦争の結果なのだろうか・・・

ぼんやりとそんなことを考えていたオレは、ようやく覚醒した。生き残ったのだ。柔らかな感触が、身体に当たるのを感じる。全裸のレイナが、カラダをオレに密着させて寝ている。なぜレイナが寝ているのかは解らないが、とにかく彼女に救われたのは事実だ。気怠く腕を持ち上げ、頭を撫でると、レイナが目を覚ました。

『・・・気づいたか？』

『ああ・・・救われた・・・有難う・・・』

『・・・その様子なら、もう大丈夫そうだな・・・』

レイナは起き上がるとオレの上に跨った。白い豊かな胸に目を奪われる。少し痩せたようだ。浮かんだ笑みが消えると、いきなりオレの頬を叩いた。

『・・・いきなりだな・・・』

『これは、魔神だということを私に隠していた罰だっ！そしてこれは・・・』

レイナが片手を上げる。瞳には涙が浮かんでいた。

『私を・・・こんなに心配させたことへの罰だっ！』

二発目はそれほど強くなかった。レイナが、オレの胸の上に顔を伏せて泣いている。オレは泣き止むのを黙って待つしかなかった。

その夜、オレはレイナに自分の正体を明かした。異世界で死に、大天使サリエルによつて転生をしたこと、自らの意志で魔神になったことなどを明かした。レイナは黙って聞いてくれた。全てを語り終わつた後、レイナは魔神ハイシエラのことを話してくれた。

『・・・人間の魂を持った魔神か・・・』

『あの魔神はそう言っていたわ。あなたは人間だつて・・・』

レイナの金髪を撫でながら、オレは大天使サリエルの言葉を思い返していた。

(二つ目、このまま死を受け入れて、魂の安らかなる平穩を・・・)

（現在の記憶や自我を持ったまま、転生をする。ただし、この世界ではなく、並行世界での転生となるでやんス）

（……え？良いでやんスカ？ヒトとして生きること出来るでやんスよ？）

『……そういうことか……』

オレは納得した。大天使サリエルは、“転生”とは何かについて説明をしなかった。オレは未だに“魂”というものについて理解しきれていなかったが、おそらくは生命の“本質”のようなものなのだろう。転生とは“魂（＝生命の本質）が変化することなく、新しい肉体に宿ること”なのだろう。そう考えれば、オレの魔力が尽きたことも説明でききる。現神の最高位の十倍の魔力を持つているはずなのに、魔神二人を相手にしただけで、魔力が尽きた。魔力とは魂の活動によって生まれる。人間の魂を持つているオレは、人間並みの魔力しか生み出すことが出来ないのだ。現神の十倍の魔力を“蓄えられる”魔神の肉体は、“魂を入れる箱”にしか過ぎないということだろう。

『……サリエルの奴め、一番肝心なことを説明しなかったな……』

独り言を言うオレをレイナは不思議そうに見つめた。レイナの視線に気づいたオレは、話題を変えた。

『……ところで、さつきから思っていたんだが……どうして裸で寝ているんだ？』

『えっ……いやっ……これは……』

レイナは、顔を朱くしながら説明をした。レイナの話では、オレを運んでいる時に力を吸いとられる感覚があったそうだ。

『あ、あなたは魔神だから・・・きつと私の知らない力の回復方法があるんじゃないかって・・・そう思つて、協力しようとしただけで・・・』

魔力を回復させる方法には、魂の活動による自然回復の他に、外部からの吸収という方法がある。魔力を回復させる物品（アイテム）は幾つかあるが、たとえば“鋭気の水”などは自然回復の促進、“魔力石”などは石からの直接吸収という方法だ。それ以外にも、魔物を狩ることによる精気の吸収や、オンナを抱くことによる回復方法などもある。魔神であるオレは、無意識のうちに外部吸収を行っていたのだろう。

オレがそう説明すると、レイナは顔を朱くしたまま聞いてきた。

『つ、つまり・・・私を抱くと、あなたの魔力は回復するってこと？もしそうなら・・・』  
『いや、オレには性魔術の知識は無い。回復しないことは無いだろうが、こうしていく  
れるだけでも、だいぶ楽になった・・・』

『そ、そう・・・なら、いい・・・』

実際、魔力が急速に回復してきているのを感じる。肉体の活動が戻れば、精神活動が戻り、魂の活動が回復する。「魂魄」という言葉があるが「魂と肉体（魄）」は不可分の存在なのだ。オレの場合は、本来の魂に合わせて肉体（魄）が形成されたので、上手く

適合している。だが、不可分であるはずの両者が分かれてしまったらどうなるのだろうか・・・例えば、人間でありながら、自分の魂に合わない神の肉体を乗っ取ったりしてしまった場合は・・・

考え事をしているオレを見ながら、レイナは少しだけ残念そうな表情を浮かべた。

## 第十七話：レミの街

レミの街は、リプリーール山脈の東側麓にあり、ニース地方の北西の端に位置する。ここからアヴァタール地方に行く路は二つある。一つは、一度南方を目指し、山脈を回り込む形でディージェネル地方を抜け、闇夜の眷属の支配域を北上する路である。もう一つは、リプリーール山脈に入り、アヴァタール地方に一気に抜けてしまふ路だ。しかしこの路は、竜族の支配領域を通る必要があること、また強力な魔物を相手にする必要があることから、実現不可能と言われていた。

今回、オレたちは竜族の支配領域の南端ギリギリを掠めるかたちで、リプリーール山脈を超えたが、本当に竜族の支配域に入っていないかかったかは確認のしようが無い。レミの街で合流した狩人たちも「竜族が黙認しているのかもしれない」と言っていた。「そういうことはもっと早く言え」と思ったが、いずれにしても帰り道は、南回りで帰るべきだろう。

『ディアン殿は命の恩人です。心から感謝を申し上げます』

意識を取り戻したオレをプルノーは満面の笑みで迎えてくれた。この笑顔の下に、強かな計算が働いているのだろうが、それは商人ならば当然である。オレは捜索隊を出し

てくれたことに素直に感謝を示した。男護衛三人衆も回復しているらしい。もつとも一人は、白髪になっている。下半身まで機能していなかったら哀れだ。

『この街では、アヴァタール地方には無い希少な素材が安く手に入ります。一方、海から遠いため塩が高値で売れます。レンストレミの行商路は、利益の大きい路なのです。なんとか、その路を短縮したく、リプリール山脈超えを考えたのですが・・・』

『やはり、復路は南回りでいきますか？』

プルノーはため息をついて頷いた。当然の判断だろう。魔神が出ることは恐らくは無いだろうが、あの山への恐怖心は、レイナを含め護衛たち全員に植え付けられている。復路まで山越えを企図していようものなら、オレも強硬に反対するつもりだった。

『しかし往路だけでも、予定より一週間以上早く到着をしました。しかも、魔神を退けたという噂は、近隣の村まで届いているそうで、運んできた塩や他の商品まで飛ぶように売れています。これも全て、ディアン殿のお蔭です』

頭を下げるプルノーに対し、他の護衛たちにも感謝を示してやって欲しいと伝えた。実際、レイナや、レイナを捜索した護衛たちがいなければ、オレは死んでいただろう。もちろんです、とプルノーは言いながら、復路の前に残りの報酬を渡してくれた。本来の金額より上乗せされている。他の護衛たちにもそうしているようだ。

『この街には一月ほど滞在をする予定です。その後は南回りで、およそ一月を掛けてレ

ンストの街に戻ります。店の護衛は他の四人がやってくれるそうですので、ディアン殿は一月間、ゆつくりご静養下さい。この街の郊外には、温泉などもあるそうですよ』

湯につかりながらレイナを抱くのも悪くない・・・

オレはプルノーの好意を受け取ることにした。

『くううつ・・・』

下から貫かれ、背中が震える。彼の両手が私の胸を掴む。明日から三日間は、店の護衛役は無い。彼は私を温泉に誘った。彼の回復には必要だと思い、同意したのだが・・・

「ひよつとして、もう回復しているのではないか？」 そう思うほど、彼は遅しかった。そんな疑問もすぐに愉悦の中に消えていく。私は髪を振り乱し、身体を上下させた・・・

レミの街を歩きながら、オレは人々の生活を観察した。取引は全て、物々交換である。貨幣を知らないわけではないだろうが、国家統治による通貨発行が無ければ、取引を媒介する“共通信用”が無く、物々交換とならざるを得ないのだ。龍人族から貰った宝石は、あと三粒しかないが、オレはこの村で全てを使い切るつもりでいた。ミスリル剣に代わる新しい剣を買うためだ。

『ねえディアン、あそこに鍛冶屋があるわ。剣が手に入るかもしれない』



レイナは少し、はしゃいでいるように見えた。温泉場所は、街から馬で半日近く掛かるらしい。街を離れるわけで、オレ一人の判断は許されない。一泊で温泉に行きたいとプルノーに相談したら、笑って同意をしてくれた。レイナを連れていくことも暗黙の了解になっていた。すぐに出発しようと思っていたが、レイナが反対をした。街を出る以上、万一を考えて剣を用意しておくべきだと言うのだ。魔力も回復しているし、剣が無くても問題は無いのだが、拒否する理由も特にならない。オレとレイナは街に出た。

レイナはイラついていた。かれこれ一刻以上、男はデイアンの掌を見ている。

デイアンとレイナが入った鍛冶屋は、剣も取り扱っているようだった。出てきた男は背が低く、顔半分が髭に隠れている。剣を注文したいと言うと、男はデイアンをしげしげと観察し、腕や腰、太腿などを触った。

『……大仕事になる……』

ざらついた小声でそう呟いた男は、いきなり店を閉め、それからずっとデイアンの掌を見ていた。椅子に座ったデイアンは黙って掌を見させている。その表情は、どことなく楽しんでいようだった。

『……魔神の剣を鍛つなんて、初めてだぜ……』

男の呟きにレイナはギョツとしたが、デイアンは表情を変えない。目の前の男の眼力

はそれ程だと、確信していたのだ。男はようやく、掌を離すと、今度はじつとディアンの顔を見た。やがて、眩くような小声で話し始めた。

『……俺が鍛つ以上、半端な剣にはしたくねえ。最高の素材を使った名剣、いや……魔剣を鍛つてやる……』

『……有り難いお言葉ですが、オレはこの街に一月しかいません。また、お支払いはこれしか渡せないのですが……』

ディアンは宝石三粒を示した。男は頷いた。

『……十分だ。あとは、お前がその剣を持つている姿を見せてくれればそれでいい。二十日後に来てくれ……』

男はそういうと、宝石を取って店の奥に引き込んでいった。

『変わった人だったわね。ディアンの掌をジッと見て……』

『レイナ、あれは人ではない。ドワーフだ……』

ドワーフ族は、龍人族やエルフ族と同じように排他的で、人付き合いをする種族ではない。鍛造の技術に優れ、ドワーフ族の中でしか伝わらない技術や知識も多い。見た目は中年だが、おそらく数百年は生きているはずだ。オレに触れた時に、魔神だと気づいたに違いない。

『．．．二十日後と言っていたな。楽しみだ．．．』

オレは馬を奔らせた。レイナが慌てて、オレの後を追った。

洞窟内に声が響く。湯気の中に白い肌が踊る。女は喜悅の表情を浮かべて喘ぐ。坐った状態で繋がっている男は、女の細い腰を引き寄せた。胸の谷間でうめく男を女が優しく撫でる。いつまでも続く二人の愉悅を蒼い月だけが覗いていた．．．

## 第十八話：魔神劍

この数日、オレは毎日のようにリプリール山脈に分け入っている。鍛冶屋から依頼をされた素材を手に入れるためだ。

『……この石を探してくれ。なかなか手に入らないんだ……』

ところどころが白く輝く灰色の石だ。“金剛石”と呼ばれるものらしい。山肌の表面ではまず見つからないらしいので、オレは貫通力のある魔術を使って山を穿ち、採石をした。最初はなかなか目当ての石を持ち帰ることが出来ず、鍛冶屋が腹を立てていたが、四日目に目当ての石が眠る鉱床を見つけた。オレはひたすら、そこから石を運んだ。『まったく……休むのかと思っていたら、いきなり穴掘りなんかして……私の修行はどうするの?』

レイナは文句を言っていたが、理解はしてくれているようだ。オレが石を集めている間、襲ってくる魔物をレイナが撃退してくれる。オレを真似たのか、致命傷を与えずに撃退するやり方をしているが、殺意を持って襲ってくる相手を殺さずに退けるのは、殺す以上に難しいものだ。殺してしまった魔物は、皮や牙などの素材を回収し、残りは炭で炭にする。素材は、街の酒屋で酒と交換し、その酒を持って鍛冶屋に行く。そんな生

活が十日近く続いた。

『……その昔、劍と使い手は一体のものだった。使い手が劍を選ぶように、劍も使い手を選んだ。特に、名劍と呼ばれる一振りには、使い手が少なく、なかなか売れないモノだった……』

まるで水のように酒を飲みながら、男はドワーフ族や鍛冶について語る。酒が入ると饒舌になるというのは本当らしい。もっとも飲む量も速さも並みでは無いため、用意した酒はすぐになくなってしまいが……

『……ドワーフ族は各地にいるが、大抵は山中や山の麓で生活をしている。北の方に行けば、かなりまとまった数で村をつくっているらしい……』

『機会があれば、一度、訪ねてみたいと思います』

男は頷くと仕事に戻っていった。用意した二つの壺は、綺麗に空になっていた。

この数日間は、劍の修行に集中している。襲ってくる魔物を撃退するには劍のほうが良い。だがそれ以上の理由として、“ツキノモノ”がきたからだ。彼が言うには、ツキノモノが来ると、精神活動が変化をする。魔力が安定しない間は、劍の修行に集中した方が良さそうだ。フローノの街でもそうだったが、あれだけ精を受けながら、子が出来

ることは無かった。ホツとしながらも、不思議にも思った。悩んだ挙句、彼に相談をしたら、彼は笑いながら言った。

『オレは魔神に転生をするときに、子が出来ないようにしてもらったのだ……』  
なぜそんなことをしたのかと問うと、彼は言った。

『魔人は半永久的に生きる。子に、先立たれたくはないだろう?』

胸の奥が痛む。そう、彼は魔神、私は人間……彼は悠久の時を生き続け、私は老い、そして死ぬ……

依頼をしてから二十二日後、剣が仕上がった。レイナは護衛の役目があるため、オレは独りで、鍛冶屋を訪れた。オレの目の前に、鞘に納められた一振りが置かれる。想像以上に大きかった。中剣と大剣の間ぐらいの大きさだ。柄には白黒二色の糸が交互に巻き付けられている。

『……金剛石とリエン石を使った。より高温を得るために、焔は全て神木枝を燃やして創った。石が硬いため、通常より倍の焼入れが必要だった。柄の部分には、白黒の魔術糸を使っている。相反する二つの属性を融合させる縫い方をした。ドワーフ族に伝わる業だ。どれほど激しく振っても、糸が切れることは無いだろう……鞘は、竜族の木を彫りあげ、雅地龍の血液に浸して乾燥させることを三度繰り返した。仕上げに、雅

地龍の皮革を巻き付けてある・・・』

瘦せて一回り小さくなった男が饒舌に語る。どうやら興奮しているようだ。柄を掴み、鞘から抜く。フィインという心地よい音が聞こえる。刀身は白銀に輝いている。劍格（柄と刀身の間）の部分には、黒い珠が埋め込まれている。

『・・・その黒い珠は“魔神の神珠”を加工したものだ。あらゆる属性を劍に与える。本来、劍には属性があるが、その劍は、お前の魔力を受けて自在に属性を変えることが出来る。相手に応じて、その珠に魔力を注入しろ・・・』

大抵の魔物には、弱点となる属性がある。物理的攻撃を受けつけない霊体であっても、神聖属性の攻撃であれば効くのだ。この劍であれば、どんな魔物でも切ることが出来るだろう。“真に万能”の劍と言えた。

『素晴らしい出来です。早速、試しても宜しいでしょうか？』

『・・・その前に、劍に名を与えてやってくれ。それでその劍は、お前のモノになる・・・』  
暫く考え、オレは劍の名を決めた。

『クラウ・ソラス・・・ 魔神劍クラウ・ソラスと名付けたいと思います』

オレは鍛冶屋の前で、背中に負ったクラウ・ソラスを抜き、天を見上げた。空は今にも振り出しそうな濃灰の雲で覆われている。扉の前では男が腕を組んでオレを見ている。オレは劍に魔力を込めた。暗黒属性の魔力である。その美しさを変えることなく、

劍は暗黒の気配を放った。

『オオオオツ!!』

飛び上がったオレは、天空に向けて斬撃を放った。暗黒の劍撃が昇竜のように駆け上り、分厚い雲を真つ二つに断ち割る。劍撃は更に上り、おそらくは宇宙まで届いただろう。凄まじい破壊力であった。この劍であれば、神をも一撃で屠れるに違いない。

『・・・・・・・・』

男が眉を上げて天を眺める。オレは魔神劍を背に収めた。その姿を見た男が、満足そうに頷く。

『・・・・・・・・その劍はお前のモノだ。オレはしばらく、劍を鍛つつもりは無い・・・・・・・・』

店内に姿を消した男に向けて、オレは頭を下げた。いつの間にか、雨が降り始めている。

今夜も、彼は劍に語りかけている。自分が転生をしたこと、龍人族の村での修行、魔神との邂逅、そして私との日々・・・・隠すことなく全てを劍に語っている。光の反射の為だろうか？時折、劍が光る。彼は劍に語り、そして劍に尋ねる。お前はどうか使われない？オレにどんな力を求める？劍が応えるはずもないのに、彼は嬉々として劍と会話をしている。私の知らなかった彼の一面だ・・・・



デイアンが手に入れた劍は、誰が見ても名劍、あるいは魔劍と思わせる存在感を放っていた。

「使い手を選ぶ」

それは、レイナも一目見て理解できた。デイアンは誰にも触れさせるつもりは無いようだが、レイナも触れたいとは思わなかった。美しい劍だが、およそ人に扱える劍とは思えない。神々しいわけでも禍々しいわけでもない。しいて言うなら“畏ろしい”という存在感だろうか。見ただけで触れてはならない存在だと、相手を畏怖させる力を放っていた。

夜、目を覚ました私は、気怠さの中で身を起こした。男の寝顔を見る。この旅が始まる前までは、女であることを捨てていた。まして男に抱かれるなど、あり得ないことだと思っていた。だが、この男に出会って私は変わってしまった。貫かれるたびに、私の躰はこの男に染められていった。いまでは、積極的に抱かれている。それで良いと私自身も思ってしまった。

あと数日で、レミの街を離れ、アヴァタール地方に戻る。レンストの街に戻ったら、この男との関係はどうなるのだろうか？これまでの男の言動を考えても、旅の間だけの使い

捨てにするような男ではない。レンストの街でも、男は私を求めてくるだろう。そして私は、喜んで躰を開くだろう。背を護る頼もしい相棒として、激しく求めあう恋人として、共に生きられるならどれだけ幸福だろうか・・・

しかしこの男は魔神なのだ。生きる時が違い過ぎる。いつか私たちは離れ離れになる日が来る。

『・・・どうして、あなたは魔神なの・・・』

男の寝顔を見ながら、私はすすり泣いた。

## 第十九話：使徒

レミの街を離れる二日前、レイナがオレを散策に誘ってきた。近くの森を散策し、弁当を共にしようと言っている。オレは笑って応じたが、何か疑問を感じた。レイナの性格上、そうしたことはあまり興味が無いように思っていたのだ。森の中の開けた場所を見つけ、オレたちは食事をした。レイナはオレが思っていた以上に料理上手のようで、美味かった。いささか、肉が多い気がしたが・・・

食事後、レイナが立ち上がってオレを見る。言い淀んでいるようだが、表情は真剣だ。やがて口を開いた。

『今日は、あなたに別れを告げようと思っているの・・・』

その言葉に、オレの頭は混乱した。

彼は私の言葉に混乱しているようだ。好機だった。私は剣を抜くと、一気に彼に襲いかかった。目は滲んで、何も見えなかったが、ザクツという手応えが確かにあった。

レイナは剣を抜くといきなり襲いかかってきた。速い。座ったままのオレは身を

振った。剣尖がオレの左脇を掠める。ザクツと地面に突き刺さった。オレは体術を使つてレイナの足を掬い、組み敷いた。

『どういふつもりだっ！』

『・・・殺せっ・・・』

レイナの双瞳から涙があふれていた。余程、思い詰めているようであつた。剣を取り上げたオレは、レイナを起き上がらせ、事情を聴いた。レイナは顔を背けたまま何も言わない。ただ涙を流しているだけだ。やがて一言、呟いた。

『あなたを殺せば・・・あなたはずっと、私のモノになる・・・』

オレは察した。レイナは魔神と人間の違いに苦悩してたのだ。自分の間抜けぶりに舌打ちをした。魔神であることを明かした時に、こうなることは予想できたではないか・・・

しばらく沈黙をしたオレは、レイナに告げた。もつと早く、告げるべきだつた・・・  
『・・・使徒』というのを知っているか？・・・』

彼は私に教えてくれた。神に認められた人間は、その力の一部を与えられ、神格者となる。人越の力を持ち、不老のまま生き続ける。私も聞いたことがあつた。バリハルト神殿やマーズテリア神殿には、そうした神格者がいて、何百年も生きていそうだ。与

太話だと思っていたが、本当のことらしい。

『オレたち魔神も、同じようなことが出来る。自分の力を分け与える代わりに、自分の命令を聞く。絶対の臣下』にする・・・魔神の神格者、それが使徒だ・・・』

それは悠久を生きる魔神に認められた存在。魔神の傍らに侍り、魔神を援け、魔神の加護を受け、魔神と共に生き続ける存在・・・

彼の使徒になれば、何百年も、何千年も、彼と共に生き続けることが出来る。彼の腕の中で咽び泣きながら、あの喜びを永遠に味わい続けることが出来る。何と蠱惑的なのだろう。それに抗うことなど、私には出来ない。彼の使徒になることを決意しようとしたとき、彼は無情にも言い放った。

『・・・だがお前は、オレの使徒にはなれん・・・』

『なぜっ！なぜ私は駄目なのっ!!』

血相を変えて、ほとんど掴みかからんばかりに、レイナがオレに問い質してきた。レイナが考えていることは、大方予想が出来た。使徒になればオレと共に生き続けることができ、夜毎オレに抱かれて悦ぶ・・・いわば「永遠の夫婦」のように考えているのだろう。残念ながら、使徒とはそんなものではない。

『使徒になるということは、オレの命令を絶対に聞くということだ。オレが“復讐を諦

めろ」と命じたら、お前は聞くことが出来るのか?』

『・・・・・・・・』

『使徒は、主が最優先だ。オレが他のオンナも使徒にすると言ったら、お前はそれに従えるのか? オレが何をしようと、誰を抱こうと、ただひたすらにオレを想い、オレの為だけに生き続ける・・・お前に、その覚悟があるのか?』

『・・・・・・・・』

レイナが再び肩を震わせ始めた。オンナが泣くときというのは、その姿を男に見せて翻意させようとするときか、自分自身を納得させるときである。そしてオレは、使徒の条件について妥協するつもりは一切、無かった・・・

彼の言葉は、私の胸に突き刺さった。「復讐なんて止めろ」、その言葉は以前にも言われた。だが私はこれまで、あの男を殺すためだけに生きてきたのだ。剣を磨いたのも、彼に弟子入りをしたのも、すべてはあの男を殺すため・・・肉欲のために復讐を止めるなんて、私には出来なかった。だが、彼と共に生き続けたいという想いも確かにあった。彼が誰を抱こうが構わない。彼が喜ぶのなら、私はそれで満足だった。でもそのために、私をこれまで支えていた憎しみの感情を捨てなければならぬ。私の胸は二つに裂けそうだった・・・

(父上……母上……お許しくださいッ……)

人の気持ちとは、何と弱いものなのだろうか。過去を清算するための復讐と、彼との未来永劫の日々を幾度も考え、そして私の天秤は、彼に傾きつつあった。

レイナの肩の震えは、一刻以上も続いた。オレは黙って耐えた。泣いているオンナを黙って見守るといふのは想像以上にツライ。特にそれが、美人で馴染みのオンナであればなおさらだ。オレはだんだん、腹が立つてきた。レイナに対してではない。彼女をここまで苦しめる、復讐の相手に対してである。やがてレイナが顔を上げた。気持の整理がついたようである。その瞳を見ただけで、オレは満足だった。妥協するつもりは無いが、歩み寄ってやる必要がある。

『……解った。私は……』

『その前に、一つ聞いておきたい。お前の言う“仇討ち”とは、どういう状態のことを言うんだ?』

彼は私に、「仇討ちとは何か?」と聞いてきた。そんなことは決まっていた。ルドルフを殺すことだ。だが、もうそれも諦めた。仇討ちよりも、彼との未来の方が、私にとつ

ては大切なものだから……

『なるほど、ルドルフを殺すことだな？つまり、ルドルフ“以外”は殺さなくてもいいんだな？』

彼は念を押すように私に尋ねた。私は頷いた。父の仇は、ルドルフ・フィズメルキアーナだ。あの男さえ、この手で殺せればそれでいい。私がそう言うのと、彼は納得したように頷いて言ってくれた。

『わかった。ならば、そのルドルフという男を殺しに行こう。一緒にな……』  
彼は何故か、怒っているように見えた。

『……なぜ？復讐なんて止めろと言っていたのに……』

『ああ、その意見は今でも変わっていない。ただ、オレにソイツを殺す理由が出来ただけだ』

レイナは首を傾げた。解らないだろうな。オンナに泣き続けられて、それをひたすら耐え続ける男の辛さなど、オンナに解るわけがない。オレはレイナに向けて言った。

『オレのオンナをここまで苦しめたんだ。殺す理由としては十分だろ？』

レイナを見ながら、オレはニヤリと嗤った。



私は茫然とした。泣き続け、気持の整理をつけ、復讐を諦めたとき、彼は仇の相手を殺すと言った。彼は言葉をつづける。

『お前の仇討ちを手伝うんじゃない。オレをムカつかせた奴だから殺すんだ。お前のためじゃない。オレのためだ』

あくまでも自分のためだというが、それが彼の優しさだということ私は知っている。そしてそれ以上に、私の気持ちを揺り動かす言葉を彼は言ってくれた。

『オレのオンナ・・・』

これまで、私は彼の何なのか、彼は私をどう思っているのか、ずっと不安だった。でもようやく、ハッキリした。そう、私は彼のオンナなのだ。彼は私を“自分のモノ”だと言ってくれた。嬉しかった。彼の一言だけで、私の躰は熱くなった。

レイナの顔に笑みが浮かび始めた。オレは言葉をつづけた。

『ただ殺すわけではない。相手にも相応の正義を問い質すつもりだ。その上で、殺すかどうかはオレが判断をする。それでいいな？』

涙を拭いながら、レイナは頷いた。

明日、レミの街を離れる。一月の復路は、あまり街にも立ち寄らない。だから今夜は精一杯、彼に喜悦を与えてもらおうと思った。レンストの街に戻ったら、すぐに二人で旅立つ。あの男を斬る旅に。そして私は、永遠に彼のモノになるのだ。悩みが消えた私は、これまで以上に奔放に、彼を求めた・・・

## 第二章：中原東方域

## 第二十話：アヴァタール地方東方域

ラウルバーシユ大陸中原、アヴァタール地方東域は、南にリプリール山脈の北端、北には魔神が跋扈するケレース地方とに挟まれている。古来より、東域諸国と西方諸国とを繋ぐ貿易路として、商人たちの行き来も盛んであり、人間のみならずエルフやドワーフ、更には獣人族までもが部落をつくり、生活をしてきた。しかし、より多くを求めるのがヒトというものである。部落同士の衝突は絶えず、数百年間に渡って戦乱の地域となっていた。その殆どが、人間同士の争いであり、他の種族たちは人間の愚かさ、あるいは性をジツと眺めていた……

昨日までの激しい闘いにより、無数の死体が野を埋めている。鳥や獣が死体を貪り、辺りには血と腐臭が漂う……

リプリール山脈北端の麓にある「彩狼の砦」を万を超える軍が取り囲んでいる。メルクシア国万騎将アウグスト・クレーマーは従者を連れて、馬を進めた。砦が開かれ、旗を掲げた男が出てくる。クレーマーが口を開く。

『彩狼の砦が主、イザール殿とお見受けした。我が名はメルキア国万騎将アウグスト・クレーマー！一騎討ちの申し出に応じて下さったこと、まずは感謝を申し上げるっ！』

『イザールである。高名なるクレーマー殿がお相手とは光栄だっ！この一騎討ちに我が勝てば、メルキアは軍を退く。二言は無いなっ!!』

『メルキアの旗と我が誇りに賭けて誓うっ！そちらも、一騎討ちに負けし時は砦を開く。それに相違ないか?』

『相違ない。配下の者たちにも、そう言い含めてある』

双方が領き、馬を進める。ちょうど二十歩のところまで止まり、剣を抜く。互いの剣気が研ぎ澄まされる。双方の陣営が固唾を飲んで見守る。

『いざっ……!!』

馬を駆けさせる。二十歩の距離があつという間に埋まる。双方の剣が交錯する。ただ一合の交錯。それで決着がついた。クレーマーの背後で、イザールが馬から落ちた。メルキア軍から喝采が上がる。砦は白旗を掲げ、門を開いた。

『我が君、クレーマー殿が勝利をしましたぞ。ご指示を……』

参謀のベルジニオ・プラダが主君に指示を求める。白いマントを羽織った男が領き、指示を出す。

『これより、彩狼の砦に入城する。全軍に徹底させよ。略奪、暴行の類は一切、禁じる。』

それを破る者は、如何なる地位の者であろうと極刑に処すとな』

メルキア国当主、ルドルフ・フィズIIメルキアーナは、勝利に沸くことなく、彩狼の砦に入った……

レミの街からレンストの街まで、ちょうど一月で到着をした。途中で二度ほど魔物に襲われたが、難なく退けた。今回の行商は、かなりの利益になったらしく、プルノーは上機嫌だった。あの行程で死者が一人もいなかったというのは、幸運だったのかもしれない。まあ、約一名は不能になったが……

任務完了の書類にサインをしたプルノーが、手を差し出してきた。

『あなた様がいなければ、私はとうに骸になっていたでしょう。ぜひまた、護衛をお願いします』

オレは握手をし、書類を受け取った。レイナと一時別れ、ドルカの事務所に向かう。

『ディアンツ！よく戻ってきたっ！聞いてるぞ、大活躍だったそうじゃないかっ！』

ドルカは両手を広げてオレを迎え入れてくれた。ドルカ斡旋所にとつても、今回の仕

事は利益になったのだろう。執務室に通されたオレを酒が待っていた。

『凄腕と思つてはいたが、まさか魔神を退けてしまうとはな．．． お前さんは噂になつてゐるぞ』

『オレ独りの力じゃない。レイナという仲間に助けられたしな．．．』

ドルカはレイナに興味を持ったようだ。人材こそ商品である斡旋業者にとつて、レイナは垂涎だろう。「ぜひ今度、会わせてくれ」と懇願された。次の旅を考えると、同じ斡旋所から派遣された方がよい。二、三日以内に連れてくると返答した。

酒が程よく回ったところで、オレは今回の行程の報告をした。ドルカが関心を示したのは、やはりリプリール山脈を抜ける道についてである。オレたちはカップを持ったまま、壁に貼られた地図の前に立った。

『．．．なるほど、確かにこの路なら、一週間から十日は早く、レミの街に着くな．．．』

その路は、今後も使えそうなのか？』

オレは首を横に振った。

『無理だな。魔物だけなら、腕の立つ護衛を数人つければ問題無い。問題はこの路が、竜族の支配域である可能性があることだ。狩人たちも、単身だから黙認されているのかもしれない、と言つていた。もしそうなら、行商隊が往来するようになれば、彼らが黙つていないだろう．．．』

『うーん……』

ドルカは唸った。あまりにも惜しい路である。商人はあの手この手で、不可能を可能にするものだ。ドルカ斡旋所がこの路を開けば、莫大な利益になる。

『この路が、使えるようになるには、どんな条件が必要だ？』

『そうだな……』

オレは少し考えて回答した。

『竜族との交渉が不可欠だ。彼らに、この路の通行を認めてもらう必要がある。だが、竜族が一行商と直接交渉などするはずがない。となれば……』

オレはリプリール山脈西側を示した。

『この地域に、統一国家が誕生する必要がある。国の代表者が、竜族と正式に交渉し、境界線を明確に決める。その上で、道を整備し宿場などを設ける……』

『……俺が生きている間は無理そうだな……』

ドルカは頭に手を当て、ため息をついた。オレも頷いた。少なくとも見積もつても、あと百年は掛かるだろう……

余談ではあるが、リプリール山脈を抜ける道の情報は、行商人たちにも広がり、何隊かが実際に踏破を挑んだ。だが、どの隊も戻ることは無かったという。この路が安全に通行できるようになるには、四百年の歳月が必要であった。その頃には、かつてこの

路に挑み、唯一、踏破に成功した行商隊が存在したことなど、忘れ去られていた。

ドルカは気を取り直して、カップにワインを注いだ。次の仕事の話である。

『お前さんを指名した依頼が、何件か来ている。暫く休んでもらってもいいんだが……』  
『その依頼の中に、アヴァタール東方域に行く依頼は無いのか?』

ドルカはニヤリと笑みを浮かべ、オレに書類を示した。

レミの街からの三十日間は、ある意味で往路よりも苦痛だった。街に立ち寄ることなく、殆どを野営で過ごす。毎夜、剣を振るったが、躰の火照りは収まらない。狂おしい一月だった。でもそれも、ようやく今夜で終わる。彼に後ろから貫かれ、躰の奥を突かれるたびに、私は歓喜の嬌き声を上げるだろう……



## 第二十一話：行商人リタ

リプリーール山脈北端の麓にある「彩狼の砦」から、南に行くと、開けた土地がある。前には広い湖があり、後ろには未踏の山がそびえる。メルキア国の首都「インヴィティア」は、天然の要害でありながら、資源に恵まれた土地に立地していた。その首都では、戦勝の報に沸き返っていた。長年、自分たちの土地を荒らしていた北の勢力「彩狼の砦」を制圧したからである。メルキアが誇る精兵が、胸を張って大通りを行進する。人々が喝采を送る。当主ルドルフ・フィズルメルキアーナが姿を現すと、その声は最高潮を迎えた。馬上のルドルフが、民衆に手を振る。その時、いきなり子供が進み出てきた。手には木刀のようなものを持っている。両親が気づいたときは既に遅く、ルドルフは馬を止めた。慌てる近衛をルドルフが手を挙げて静止する。

『少年よ、私に何か用か?』

『お殿さま、ボク、大きくなったらお殿さまにお仕えします。だから、強くなるために一生けんめい、剣を振っていますっ!』

子供が木刀を差し出す。ルドルフは声を上げて笑った。

『少年よ、名は何と申す?』

『ハイッ！フェリックスです！』

『フェリックスか・・・良い名だ。フェリックスよ、ただ強いだけでは、私に仕えることは出来んぞ。剣を振るのと同じように、勉強もせねばならぬ。父母の言うことを良く聞き、懸命に学ぶが良い・・・』

瞳を輝かせる少年を抑えながら、両親が頭を下げる。ルドルフは頷いて、馬を進めた。その様子を覗いていた民衆が、さらに大きな喝采を送る。主君を護衛する近衛長が、馬を近づけてくる。

『殿・・・申し訳ございません』

『良い、子は国の宝だ・・・あの子が大きくなる頃には、戦の無い世にしたいものだ・・・』  
『御意ッ』

近衛長は心からの敬意をもって、主君に敬礼をした。

戦勝を祝う宴が終わり、万騎将アウグスト・クレーマーは自室へと戻った。勲一等等と主君から褒美を受けても、心のわだかまりは消えない。クレーマーは壁に掛けられた一振りの剣に向かい合う。師より与えられた一振りだ。彼の師は「護身の剣」を思想としていた。それを象徴するように、剣は歯引きがされている。今の自分は、師の教えに背いている。そのことに後悔はない。誰かが、この地を統一し、平和を築かなければならない。そしてそれが出来るのは、自分の主君だけだと確信していた。ただ、師の忘れ形

見が見つからないことが、クレーマーの心を曇らせていた。金髪の可愛らしい少女は、どこで生きているのだろうか・・・

『嬢よ、あなたはどこにいらつしやるのですか？』

剣は、何も応えてはくれなかった・・・

護衛の仕事は、一回ごとの契約が基本だ。次回の契約は別の斡旋所を通じて、ということとは良くあることらしい。オレはレイナを伴って、ドルカの事務所を訪れた。ドルカはレイナを一目見て、契約を決めた。女性の護衛役を希望する行商もいるらしい。レイナほどの美人になれば、立っているだけで看板娘になってしまうだろう。だが今回は、店の護衛は避けたいと考えていた。特に、インヴェティアの都市では、出来るだけ人目につかないほうが良い。もしことが露見すれば、行商人やドルカにも迷惑が掛かるかもしれないからだ。オレは交渉のため、今回の雇い主である行商人を訪れた。

『初めましてえ！行商人のリタでございます。ニッシッシッ！まさか高名な魔神殺し、ディアン様が私の護衛役になって下さるとわっ！一騎当千、いや一騎当万を得た思いですっ！』

驚いたことに、オレを雇いたいという行商は女であつた。二十代後半くらいだろう

か。この若さで、しかも女が行商をしているとは、どのような事情があるのだろうか。オレは思わず、レイナと顔を見合わせてしまった。それにしても、オレはいつから「魔神殺し」になったのだろうか？ 噂というのは尾ひれがつくものである。

『今回の行程は、このレンストヤシーランス、プレイアで武器や塩を仕入れ、トラナ街道からバーニエの街を通り、インヴィティアで販売をします』

『それで終わりか？』

『いえいえっ！ 本番はここからです。インヴィティアで酒を仕入れ、それをケレース地方との境界にある古の宮（エンシエント・キャピタル）まで運びます。あそこは昔から、高級な鉱石が取れることで有名ですからね。お酒が大好きなドワーフ族に、金銀宝石と交換してもらおうと思っっていますっ。ニヒヒツッ！』

いわゆる「三角貿易」である。インヴィティアは内陸にあるため、塩が取れない。また戦争中であるから武器が不足している。一方、水資源が豊富で、酒造りが盛んだ。武器や塩を売って、出た利益で酒を仕入れ、それをドワーフ族が暮らす古の宮で売る。ドワーフにとっては金銀宝石など大して価値のあるものではないので、酒と宝石が交換できるといふことらしい。聞いているだけで、多くの利益が出るであろうことは予想が出来る。オレは素直に感心した。

『口で言うのは簡単ですが、実際は結構、危険な道なのです。そこで、ディアン様とレイ

ナ様には、特に古の宮近郊で活躍を頂きたいと思えます』

『なるほど・・・ところで、様付けは止めてもらえないだろうか？ 私たちは雇われる側だ。〃殿〃で十分だ』

『いえいえっ！いつ、お客さまになって頂くかわかりませんし』

『・・・・・・・・』

『ぐぬぬぬっ・・・・・・・・わかりました。ディアン殿、レイナ殿と呼ばせて頂きます』

「軽い・・・」オレはそう印象を持った。かなり切れる商人であることは間違いないのだろうが、このあつけらかなとした軽さは何なのだろうか？だが少なくとも、正直ではあるらしい。表情が実に読みやすい。

『ところで、一つ相談がある。インヴェティアでの滞在についてだが・・・』

オレはリタに対して、要望を出した。リタは悩んでいたが（少なくとも本人は、そう見せているつもりだろう）、オレとレイナに渡す料金は、併せて一人分で良いと言ったらアツサリと折れた。顔の笑みから、何を考えているのかわかる。

（ニツシツシツ！まさかドルカ幹旋所の護衛二人を一人分の料手で雇えるとはっ！それに、インヴェティアの売り先は全て奉行所だから、実際は仕入れるだけだし・・・ニヒヒッ！これは出発前から、幸先が良いですよお〜）

わかり易い・・・

オレとレイナは肩をすくめて、苦笑いをした。

彼との愉悦の後、至福の気怠さの中で、私たちは計画を話し合う。出発まであと一週間。行商隊の中に入れば、疑われることなくインヴェイアに潜入できる。あの男を斬った後の、脱出の計画も考えてある。様々な角度から、幾度も計画を見直す。隙があるとは思えない。でも実際は、行かなければ解らない。彼が、あの男を斬るかどうかも含めて。でもそれでも構わない。この旅が終われば、私は彼と、永遠に生きるのだ……

## 第二十二話：出発

七魔神戦争からおよそ一千年後、ラウルバーシユ大陸中原は、国家形成期となつていた。これはある意味、必然的なことであつた。七魔神戦争は、人間を含め多くの種族に災厄をもたらしたが、塩が採れる内海「ブレニア内海」という副産物を生み出した。塩は、人間が生きていく上で欠かせないものである。ブレニア内海の出現によつて、アヴァタール地方では塩業が行われるようになる。それに眼をつけたのが、第三級現神の商神セーナルである。セーナルは各地の街道をおさえ、自らを信奉する商人たちに物流を活発化させた。その結果、アヴァタール地方からラウルバーシユ大陸内陸までの流通網が完成した。やがて大商人が誕生し、人口の多い都市に店を構えるようになる。

ヒト・モノの移動を活活性化させるには、物々交換では限界がある。そこで「通貨」が生まれた。取引の共通信用が通貨だが、その信用は誰が保証するのか。都市が通貨発行者となり、信用を保証するようになる。人口が多く、モノの供給力のある都市の通貨が、高い価値を持つようになり、やがて近隣の村々でも、その通貨を使用するようになる。そうして「共通経済圏」が生まれる。共通経済圏の中では、商取引の取り決めなども統一化されるようになる。また、文字や言葉なども融合し、共通言語が形成されていく。

共通経済圏は共通文化圏となり、国家が誕生する。

メルキア国の首都「インヴィティア」は、人口八万五千人、この地域では最大の都市である。その大都市を治めるのが、一代でメルキア国を誕生させた建国父、ルドルフ・フィズルメルキアーナである。後世の歴史家たちは、ラウルバーシユ大陸名君列伝の中に、必ずルドルフの名を挙げる。メルキアの永い歴史上、彼に匹敵する名君は、篡奪王・賢王と呼ばれた、ヴァイスハイト・フィズルメルキアーナだけである。ルドルフの優れていたところは、国家運営の意思決定、つまり政治の中に、神殿勢力を組み込まなかったことである。彼は布教などは自由に認めたが、あくまでも民間でのこととし、自らは特定の現神を信奉することはしなかった。政治と宗教を分離した「政教分離」を初めて実現したのが、メルキア国である。

首都インヴィティアの中心にある館が、ルドルフの住む主殿である。後に豪壮な王宮が建設されるが、ルドルフの代では、行政府としての機能が重視された造りになっている。多くの名君に見受けられるように、ルドルフも、華美よりも機能を好んだ。現在は、占領した彩狼の砦周辺の調査、新しく国民となった村人たちの戸籍作成などで、文官たちが多忙を極めていた。

『南への出兵でございませうか・・・』



主殿内の大会議室では、ルドルフを中心に重臣たちの会議が開かれていた。メルキア国の宰相（文官長）にして、参謀を兼ねるベルジニオ・プラダが腕を組む。

『しかし我が君、先の戦いにて、万を超える兵を集めました。民衆の負担も大きなものでございました。年が改まってからのほうが、宜しいのではないでしょうか。』

文官たちが異を唱える。帝政となった後代ならともかく、ルドルフの代では、必要だと思えば主君の考えに異を唱えることが出来た。皆、建国前から苦楽を共にしてきた仲である。百出する議論の中で決めるのが、ルドルフの意思決定方法であった。この方法でルドルフが誤ったのは、ただ一度だけである。万騎将クレマーが発言をする。

『彩狼の砦は、その堅牢さから万の軍が必要でした。ですが、南は集落が点在するだけです。万の軍が必要とは思えません。三千、いや二千で十分かと思われます。また、先の戦いで降伏をした者たちの中には、手柄を立てたいと考えている者もいるでしょう。我らの軍に馴染ませる意味でも、彼らに働きの場を与えては如何でしょうか？』

クレマーの意見に、他の将たちも賛意を示す。武将というものはそもそも好戦的である。戦場こそが、彼らの仕事場だからだ。ルドルフが頷いて、プラダに顔を向ける。

『万騎将はそう言っているが、プラダの意見はどうだ？』

『国庫の現状を考えれば、二千の軍であれば動かすことは可能です。先の戦で加わった新兵たちを中心とするなら、民衆の負担も少なくて済むでしょう。ただ・・・』

プラダが片眉を上げて、肩をすくめる。

『やれやれ、我ら文官の仕事が、また増えそうですな』

座が笑いに満ちる。方針が決まり、ルドルフが立ち上がった。

『クレーマーの意見を是とする。南方への出陣は一月後、新兵を中心に二千の軍を向ける。ただし、無理に攻める必要はない。我らの力を見せ、戦わずに降伏させることが最上だ。くれぐれも……』

ルドルフは言葉を切つて、重臣たちを見回す。

『十一年前の、“グルツプ村の悲劇”を繰り返してはならない』

クレーマーは顔を引き締めた。

『これは……随分と多くの武器を運ぶのだな……』

ディアンは荷車に積まれた大量の武器に目を丸くした。武器は重く、かさばるものだ。シーランスで仕入れるものと思っていたので、出発地であるレンストから運ぶことに驚いたのだ。

『いやあ……それなんですけどね』

行商人のリタが、少し困った表情で事情を話した。

『行商人仲間から聞いたのですが、シーランスではいま、武器が売り切れているそうなんですよ。どうやら、誰かが大量に買い付けているらしくて・・・そこで急遽、レンストで武器を集めました。いやあ、急に集めることになったので、仕入れ値交渉が大変でした』

『大量に買い付けている？誰が？』

『いや、そこまでは流石にわかりませんよ。売り先の秘密を守るのは、商売の基本ですから・・・』

『ディアンは領きながらも気になった。大量の武器が必要な理由など、一つしかないからである。』

『武器の仕入れ値が上がった分、塩は少しでも安く仕入れて、利益確保をしたいと思います。少し回り道になりますが、ドウラハに寄って、塩業者から直接買い付けます。さあ、商売しますよお』

リタは元氣よく、出発を告げた。

今回の行商路は、チスパ山にある「古の宮」が最終目的地だ。往復で、およそ半年の道程である。魔物が多いケレース地方付近まで行くとなると、護衛もそれなりに必要だ

が、オレとレイナを含め四名しかいない。どうやらリタは、そういうところは吝いらしい。まあ、オレとレイナがいれば、魔物の襲撃は十分対処が出来る。他の二人は奇遇なことに、前回のプルノー行商隊で一緒だった男護衛たちだ。白髪不能になった哀れな男は、今回は同行しないらしい。オレは自然と、護衛隊の責任者のような立場になつてた。

『ディアン、さつきから考え事をしてるみたいだけど、どうかしたの?』

レイナが馬を近づけてオレに尋ねてきた。オレは気になつたことを端的に伝えた。

『シーランスで武器の買い付けが入つてるといふ話だ。大量の武器が必要ということ、戦の準備をしているということだ。一体、どこが買い付けたのかな?』

『これから行く、メルキアじゃないの?あそこは戦ばかりしてるから?』

『そうかもしれないが、であるなら、リタが知つていないのはおかしい。国が武器を買い付ける場合は、リタのような行商たちに、量を割り当てて依頼をするはずだ?』

『たしかにそうね?』

この時、オレの頭の隅に引つかかつた些細なことが、後にアヴァタール地方の歴史を左右することになるのだが、それは後の話である。

## 第二十三話：グルツプ村の悲劇

主君ルドルフを前にしての大会議で方針が決まると、各将たちは軍の編成に取り掛かる。特に今回は新兵を中心とした編成だ。新兵の中には、メルキア軍の規律を甘く見る者もいるだろう。メルキア軍の強さは、その統制にある。軍規は厳しく、特に略奪と婦女への暴行は、極刑と決まっていた。この一月で、新兵たちにメルキア軍の規律を叩きこまなければならぬ。万騎将クレーマーは、副官たちと打合せを重ねた。自室に戻ったのは夜半である。

『くれぐれも、十一年前の“グルツプ村の悲劇”を繰り返してはならない』  
壁に掛けられた剣を見ながら、主君の言葉を思い出す。クレーマー自身、生涯忘れることのない出来事である。

『・・・殿も未だに、ご自分を責めておられるのか・・・』  
クレーマーは十一年前の出来事を思い出していた・・・

『師よっ！せめて、我が主君に会うことだけでも、御同意ください！』

十一年前、当時二十四歳だったアウグスト・クレーマーは、既に剣においては皆伝の域に達していた。彼の師父「ドミニク・グルップ」は、剣聖と呼ばれる達人で、多くの弟子を持っていた。グルップの教えは、剣術だけではなく、礼儀作法や人としての生き方にまで及んでいる。「護身の剣」を思想とし、我が身と愛する者を護る為にこそ剣があるのだと教えていた。グルップの居る村は、弟子たちが共同生活をし、グルップ村と呼ばれていた。

『アウグストよ、私はお前に教えたはずだ。剣を持つ者は、心が強くなければならぬ。心弱き者が剣を持てば、いたずらに他者を傷つけるだけだと。そのために、自らを主として、剣を捧げる主君を持つてはならないと……』

『……はい、確かにそう教わりました。ですが我が主君、ルドルフ・フィズメルキアーナ様は、剣を捧げるに足るお方です。メルキアーナ様は、弱き者が安心して暮らせる世の中を創る為に、戦無き世を創る為に戦っておられる方です。護身の剣の道から、外れているとは思えません』

『それは「戦無き世」という自分の考えを他者に押し付けているだけではないのか?』

師父は頑固であったが、クレーマーの懸命の説得により、ルドルフ・フィズメルキアーナとの会談には同意をした。師父の家を出たクレーマーのもとに、可愛らしい少女が駆け寄ってくる。

『ねえアーグ、お父さまと、どんなお話をしていたの？』

『・・・私の将来についての相談をしていたのですよ、レイナ嬢・・・』

『ふーん・・・じゃあ、私にも関係あるわね。だって、アーグのお嫁さんになるんだから・・・』

自分より、十六歳も歳の離れた幼女の言葉である。この金髪の幼女が美しく成長する頃には、自分など目を向けなくなっているだろう。クレーマーは微笑みを浮かべて、幼女の前に片膝をついた。

『そうですね。とても大切なお話だから、先生にご相談をしていたのですよ。さあ、もう夕暮れです。お家に入りましょう・・・』

師父の一人娘が家に入るのを見ながら、クレーマーはホッとため息をついた。

『お初にお目にかかる。ルドルフ・フィズメルキアーナです』

『ドミニク・グルップです。このような田舎の村に、ようこそ越し下さいました』

二人の対談は、形式的な挨拶から始まった。クレーマーは主君の後ろで畏まっている。師父の妻は、娘を連れて外に出ているようだ。

『あなたの高弟には、いつも助けられています。彼ほどの男が父と慕うあなたに、一度お

会いたしたいと思っていました』

『弟子がお世話になっております。先日、アウグストから、どうしてもあなたに会って欲しいと懇願されました』

しばし互いを見つめ合った後、師父はいきなり質問をした。

『お尋ねしたい。あなたはなぜ、戦をされるのですか？』

クレーマーは固唾をのんで、二人の対談を見守った。

二人の対談は、長時間にわたったが、どこかで噛み合わない。その理由がクレーマーにも見えてきた。見ている世界が違うのだ。主君は広い世界と歴史を見ている。師父は自らの生き方と愛する人々を見ている。良し悪しの問題ではない。在り方が違うのだ。

『「護身の剣」というあなたの思想は崇高なものだと思うが、理想と現実が違う。実際、彩狼の岩の者たちが、我々を脅かしている・・・』

『その原因はどちらにあるのでしょうか？他者から従えと言われれば、人は誰しも抵抗するものです。「戦無き世」という貴殿の理想は理解をしますが、そのために戦をするというのは、矛盾をしているではありませんか？』



並行線の続く話し合いの末、ルドルフはため息をついた。

『・・・どうやら、これ以上話し合いをしても、纏まりそうにありませんな・・・残念ではありませんが・・・』

『この村は、攻められない限り、敵対することはしません。貴殿は貴殿の思う通りに、理想を求められれば宜しい。ですが同じように、私にも変えられない生き方というものがあるのですよ・・・』

『言葉というものは、無力なものです・・・』

『いいえ、言葉こそ、最も強い力を持つています・・・』

ルドルフは頷いて立ち上がった。クレーマーは師父を見る。師父は頷いた。

『行きなさい、アウグスト。お前にはお前の生き方がある。主君の下で、お前の信じる剣を貫きなさい・・・』

クレーマーは師父に頭を下げ、主君の後に続いた。それが、クレーマーが聞いた、師父の最後の言葉であった。

『・・・バカなっ！』

報告を受けたクレーマーは、血相を変えて営舎を飛び出した。師父のいるグルップ村

に、メルキア軍が攻め込んだのだ。火矢を使い、焼滅ぼしたらしい。主殿に駆け込んだクレーマーを文官長のプラダが止めた。

『プラダ殿、どういふことですかっ！』

『私も、先ほど報告を聞いたばかりなのだが……』

先日の会議で、インヴェイティア近郊の完全制圧が決定された。と言つても、戦をするというわけではない。二千ほどの軍で近隣集落を回り、それぞれにメルキア法の遵守と統治を誓わせる、いわば示威行動である。万一の軍事的衝突の為に完全武装ではあるが、こちらから仕掛けることは無いはずであつた。

『どうやら、新参の将が出過ぎたらしい……』

舌打ちをしながらプラダが顔を歪めた。最近加わつた、傭兵上がりの新参者である。何かにつけ、クレーマーを敵対視していたが、新参者ゆえの焦りと緊張からだろうと、クレーマーは受け流していた。だが、その焦りと緊張が今回の悲劇を生み出した。

『グルツプ村に使者を出し、メルキアに従わないなら攻撃すると脅いたらしい。グルツプ殿は、いかなる相手であろうと我々は従わないと応えたそうだ。我が君の名前をそこで出してくれていれば、攻めるようなことは無かつたと思うのだが……』

あの剛毅で高潔な師父が、他者の名前など出すはずが無かつた。恐らく胸を張つて堂々と拒否をしたのだろう。

『……それで、村は?』

『全滅だそうだ。遠巻きに火矢を打ち込んで攻めたらしい。辛うじて、若い劍士二人が生き残つたらしい……』

『……』

クレーマーは血が滲むほど、拳を握りしめ、瞑目した。激情を何とか抑える。

『……殿は何と?』

『決まっておろう。激怒されておられる。当然だ。城攻めでもあるまいし、村一つを焼くなど、メルキア軍の戦い方ではないっ!』

沈着冷静なプラダが、珍しく感情的になつてゐる。クレーマーの気持ち察しているからだ。クレーマーの肩を叩いて、プラダが立ち去る。クレーマーは暫くの間、その場から動くことが出来なかつた。

事情聴取を受けた新参の将は、即座に斬首が決定した。また戦に加わつた二千人は、兵士失格の烙印を押され、軍から追放された。新興のメルキア国にとっては大きな痛手であつたが、それ以上にこの悲劇は、メルキア国の方針を決める重要な出来事となつた。ルドルフは重臣たちを集め、今回の悲劇を総括した。

『この悲劇は、私の誤つた決定に原因がある。今後、兵を動かすに当たつては、私自らが陣頭に立つ。たとえそれが、村々を説いて回る威嚇であつたとしてもだつ!』

悲劇の衝撃が落ち着いたころ、クレーマーはルドルフの自室に呼ばれた。テラスで夕日を眺めるルドルフに敬礼する。ルドルフは暫く黙った後、呟くように言った。

『惜しい漢を亡くしたな．．．』

クレーマーは、肩の震えを抑えることが出来なかった。

その後、生き残った弟子から、師父の妻と娘が村を脱出したことを聞かされた。クレーマーは手を尽くして行方を追った。西に逃げたということだけが、辛うじて判明した。

## 第二十四話：ドウラハの村

ブレニア内海は東西に長い内海である。東の港街エリユアから、西の港町ミルフエまで、高速の帆船でも一週間から十日は掛かる。千年前、七魔神戦争によって形成されたこの巨大な内海は、アヴァタール地方のみならず惑星全体の環境に影響を与えた。季節風が変化し、降るべきところに雨が降らず、本来降らないところに雨が降るようになる。多くの種族たちが、その気候変動の影響を受けた。神々の戦争とは正に、星全体を巻き込むものだったのである。

しかし、その大戦争から千年の平穏が過ぎれば、新しい環境に適應した生き物たちが、それぞれの生を謳歌するようになる。特に、ヒトの力は逞しい。寿命が短い代りに繁殖力と好奇心が強く、何より不屈の精神力を持っている。未踏の土地を冒険する者、未開の土地を切り開く者……千年の時を経て、ヒトはラウルバーシユ大陸全域に進出していった。

レンストの街を出て三日目、リタ行商隊はブレニア内海南東の沿岸部にある「塩業村ドウラハの村」に到着をした。村人の多くが塩業に携わっている。塩は通常、仲買人が各村と交渉して塩を買い集め、行商人は仲買人から買う。これは塩業の性質からだ。塩

業は天候に左右される産業である。一方、行商人は安定した仕入れを希望する。そこで仲買人が塩を集め、常に一定量を確保するようになった。一括購入をする仲買人は、個別で交渉をする必要が無いという利点を塩業者にも与える。塩業者、行商人の双方に利益をもたらすのが仲買人の存在だ。

今回、リタはあえて、仲買人を飛ばして塩業者から直接仕入れようとしていた。この数日間は天候に恵まれ、塩が大量に生産をされている。一行商人が希望する量程度なら、確保できると踏んでいたのである。その予想は的中した。

『ニツシツシツ！ 思った通り、塩が大量に余っているそうです。通常仕入れ値の八掛け、いや七掛けはいけるかもしれません。クヒヒツ！』

口元に手を当てて笑う様子は、悪徳業者にさえ見える。黙っていればそれなりに可愛らしいことと、邪気が無いところが救いだ。個々の塩業者と指を折りながら価格交渉をするリタをおいて、オレは海岸線からブレニア内海を眺めた。

『こうして観ると、やっぱり広い海ね．．．』

レイナがオレの横に立つ。海風に吹かれ、金色の髪が靡く。オレは再び海を見つめ、思索の中に入る。この海を生み出した、千年前の七魔神戦争を考える。七魔神戦争は、七柱の古神を封印するために現神がこの地に降り立った、神々の戦いである。

オレは思う。その時の神々の視界の中に、その下で生きる数多の生き物たちは、入っ

ていたのだろうか？こんな内海を生み出すような戦争である。多くの生き物が死んだはずだ。その後の気候変動によって、絶滅した種もあるかもしれない。曲がりなりにも「神」でありながら、彼らはそのことを思い遣っていたのだろうか？現神は、いまも神骨の大陸で暮らしている。彼らは責任を感じないのだろうか？全ては古神が悪く、自分たちに責任は無いとも思っているのだろうか？我々は神だ、だから許されると思っているのなら、傲慢極まりない・・・

レイナがオレを見つめる。いつの間にか、考えが口に出ていたらしい。

『すまない。もの想いに耽っていた・・・』

『ううん・・・ そんなことを考える人つて、たぶんあなただけよ？現神の教えの中で暮らす人間は、そんなことは考えない。でも面白いわ。あなたはやっぱり、人間なのね。本当に魔神なら、戦いの犠牲になる生き物のことなんて、考えもしないだろうから・・・』

オレは笑って話題を変えた。

『そういえば、この街にも浴場があるらしいぞ。個室もあるだろうから、明日、行ってみるか？』

レイナは嬉しそうに頷いた。

『交渉は今日中に終わらせてしまいますが、荷車に積むには、甕に入れて油紙で蓋をする必要がありますので、出発は明後日になります。宿を確保しましたので、そちらにお泊り下さい』

リタに希望していた通り、オレは一人部屋を貰った。ムサイ男たちと相部屋など我慢できない。部屋に入ったオレは早速、八か所の角に印を描いた布を張る。ブレアード・カッサレの研究書の中に見つけた「歪魔の結界」という術式だ。歪魔の結界は、立方体八か所の隅に術式を貼ることにより、異空間の結界を構成することが出来る。といつても、魔物の侵入を防ぐというような代物ではない。私的空間の保護の為の術式だ。結界を作動させれば、外部からは内部の様子を見ることも、音を聞くことも出来ない。この術式を発見したのは、レミの街からレンストの街に戻る途中だ。

テントに貼れば、外を気にすることなくレイナを抱くことが出来る・・・

そう考えたのだが、この術式には欠点があった。中の音が外に漏れることがない代わりに、外の様子を知りことも出来ない。つまりレイナを抱いている時に魔物に襲われたとしても、オレたちは気づくことが出来ないという欠点だ。ブレアードはそのことについて、こう書いている。

・・・これは良い利点だ。外の雑音を気にせずに、研究に没頭できる・・・

ああ、そうだろうよ・・・



前回の行商では、女性は私一人だったので宿は常に一人部屋だった。だが今回は、リタと相部屋である。一人部屋だと思っていた私に、リタは当たり前のように言った。

『一人部屋を二つ取るより、相部屋のほうが安いから・・・』

私はため息を何とか堪えた。彼は一人部屋だ。きつと結界を張って、私を待つている。結界によって、私は隣部屋を気にすることなく、好きだけ声を上げることが出来るようになった。そのためか、自分でも驚くくらいに、奔放になった。彼と一緒に声を上げ、愉悦を求め合う。でもリタと相部屋であれば、そんなことは出来なくなる。彼の部屋に行くから、とは言えない・・・

『ニヒヒツ　これは思った以上に利益が出そうですよお〜』

彼女は上機嫌で算盤を弾いている。彼との愉悦は明日までお預けだ。でも彼に伝えなくて大丈夫だろうか、待つてはいないだろうか・・・

多分待つている、大抵は読書か剣と話しをしている、彼は魔神だから寝なくても大丈夫・・・

うん、このまま寝よう。そう考えると、私の気持ちはスッキリした。服を脱ぎ、布で身体を拭う。リタの視線に気づいた。自分の胸元と私を交互に見ている。不機嫌そう

な表情だ。

『ぐぬぬぬっ…… 現神は不公平です。私にはこの程度で、他人にはあんな破廉恥な身体を与えるなんて……』

私は首を傾げた。

結局、彼は一晩中起きていたらしい。飛行魔法の研究書を読んでいたから気にしていないと言っているが、本当は私を抱きたかったに違いない。幾度も肌を重ねることで、彼の思っていることが何となく解るようになった。この街では仕入れだけだから、今日は完全な休日だ。浴場の個室を取り、レンストの通貨を支払う。それなりの値段だが、ほとんどお金は使っていないので、手持ちはある程度ある。何より、彼との一時のためなら、惜しくはない。

結界を張った個室は、どんなに声を上げても安心だ。外から覗かれる心配もない。夕暮れまでずっと、この中で二人きり…… まずは口と胸で彼を悦ばせてあげよう。その後は、私が悦ばせてもらう番だ。浴槽に腰かける彼の前に、私は跪いた……

## 第二十五話：水の巫女

メルキア国が急速に勃興した背景としては、無論、当主であるルドルフの指導力があつたことは言うまでもないが、もう一つの大きな要因として、文官長であり参謀長の「ベルジニオ・プラダ」の卓絶した行政処理能力があつたことを忘れてはならない。プラダ家は、後代においてはドワーフを血が流れる魔導技術の大家として知られるが、そのプラダ家の始祖であるベルジニオ・プラダは、もともとは行商人の出身であつた。商取引という現実社会を知るプラダは、人間は理想だけでは動かないことを熟知しており、メルキア国の統治機構を設計する上で多大な力を発揮した。

まずプラダは、商人であつた経験から支出と収入を記録することの重要性を知っており、その考えを国家運営に適用した。中規模の豪族に過ぎなかつたメルキアでは、井勘定の運営が行われていたが、そこに、商人で広がりはじめた「簿記」を導入し、歳入・歳出を管理したのである。これが、ラウルバーシユ大陸で確認されている最古の「財政」とされている。さらに彼は、商取引と納税を円滑化させるために通貨制度を整備した。「パール鋼、アルプネア鋼、ミスリル鋼」と、素材の希少性で価値付けをし、通貨を発行した。また通貨偽造を防ぐため、鉱山は全て国营とした。当初は物納との併用であつた

が、やがて通貨が流通すると、それに伴って商業が発展する。やがて近隣集落でもメルキアの通貨が使用されるようになる。こうしてメルキア国の経済基盤が完成したのであった。

通貨が流通するようになれば、臣下への報奨も通貨に切り替わる。それまで働きのあつた臣下には、馬や土地が与えられていたが、馬はともかく土地を与えるなど、自分の体を切り売りするようなものである。プラダは行政府と軍の機構を整備し、役職に応じた報酬を決め、働きによつてそれが増減するようにした。人事制度の誕生である。これによりメルキアは、將軍から一兵士に至るまで、通貨による報酬を与えられるようになり、土地は全て、国家の下で管理されるようになった。ベルジニオ・プラダの名言が残されている。

はじめにカネがあつた。カネは、神であつた……

『うーん……やはり、南を抑えるだけでは無理か……』

プラダは執務室で報告書を読み、両目を押さえた。かつて出会つた、中規模豪族の跡取り息子は、偉大な名君として成長した。商売に飽いていた自分は、彼の理想を実現するために生きることを決めた。主君に仕えて二十年以上、自分ももう、若くはないと自覚していた。自分が生きていけるうちに、メルキア国を確固とした大国にしたかつた。

『やはり、人の流入に比して食料生産が間に合っておらん。塩などは仕方がないが、肉やムギなどは、国内で必要分を確保する必要がある。だが・・・』

メルキアの国土面積自体はそれほど広いものではない。アバトル地方東域全体から見れば、猫の額のような狭さだと言える。プラダは地図を見る。自分の代でどこまで国土を広げれば、安心して後代に任せられるだろうか。プラダの指は、首都インヴィティアから西に延びる。ブレニア内海に続く交通の要衝「バーニエの街」で止まった。

ドウラハを出発したオレたちは、ブレニア内海東側海岸を沿うように北上した。次に目指す都市は、近年、人口増加が著しい新興都市プレイアである。ブレニア内海北東にあるエリユア港から、さらに内陸に入った巨大な三角州に出来た都市だ。馬に乗りながら、リタが次の街の話をしてくれた。

『プレイアの街は、私も何度か行ったことがあります、行くたびに人が増えていますね。商売の匂いがプンプンするような街です。今回はここで、五日間滞在したいと思っています』

『ほう、何か仕入れるのか？』

『いや、そういうわけでは無いのですが・・・』

リタは言い難そうにしている。若い女が、これから行く街で滞在する「言い難い理由」など一つしか考えられない。オレは笑った。

『まあ、先はまだ長いから、甘えられる時はしっかり甘えておいた方がいい。オレたちのことは気にせず、ゆつくりすればいい……』

『……ハイ?』

『いや、だからオトコだろ? 付き合いは長いのか?』

ポカンとしていたリタは、顔を朱くして激しく否定した。

『ち、ち、違いますよっ! 何を言っているんですかっ!』

『照れるな……』

『照れてませんっ! まったく……ゴホンッ……いいですか? 次の街での滞在理由は、物件探しです!』

リタの話によると、今回の行商が終わったらプレイヤーに店を構えるつもりだそう。どこに店を出すかを下見するために、五日日間の滞在をしたいらしい。

『今回の商売で、古の宮から希少鉱物を持ち帰ることが出来れば、それを元手に店を出そうと思っていたんです。ただこういうことは、実現するまでは言うものではないと思っていたので、黙っていたんです。「採らぬキツネの皮算用」と言いますからね』

『……なるほど』

「タヌキだろ」と心の中で思いながら、オレは頷いた。

北方の山脈から流れてくるビヤール川と、南方の山から流れてくるクルト川は、プレイアの東で合流し、一本の大河になる。その大河がまた二本に分かれ、それぞれがプレイア内海に流れ込む。プレイアの街は、川が分かれる地点「三角州」にある。栄養分の多い肥沃な土地と、山からの綺麗な水に恵まれた街で、海にも近い。発展することが約束されているような街だ。

オレたちは、ドウラハを出発して五日後に、プレイアの街に入った。プレイアの街は、東西の大街道に面し、南のレンストにも一本道で行ける。正に交通の要衝とも言える場所である。当然、行商人の往来も多い。門をくぐると「預り所」がある。街の責任で、荷車や積荷を安全に保管してくれるそうだ。街では至る所で建設が進んでいる。通貨も発行されているようだ。これだけの都市を短期間で創り上げるとは、余程優れた行政者がいるのだろう。オレは興味を持った。

『水の巫女？』

宿に荷を置いたオレは、レイナを連れて街の酒場に入り、情報を集める。レンストからの商人も多いためか、レンストの通貨も使える。交通の要衝らしく、各地の酒が集

まっていた。レイナはワイン、オレは黒麦酒を注文した。オレは魔神剣を背負っているが、レイナは剣と胸当てを外している。服の上からでも、豊かな胸がわかる。店に入ったときから、何人もの男たちがレイナをチラチラと見ている。オレは店員に話を促した。

『ハイ、私たちは水の巫女様を敬っています。水の巫女様は、河の氾濫を沈め、この土地を拓き、この街を御創りになられた、私たちの神様なのです……』

『……それは、古神なのか？』

『さあ、詳しいことはわかりません。興味がありません。神殿に行かれては如何ですか？ 神殿には、巫女様にお仕えする神官もいますし、巫女様自身もお住まいです』

『……神が、ここに住んでいるのか……』

オレは興味を持った。もし神に会うことが出来るのなら、面白い問答が出来るかもしれない。神とは何かについて……

夕暮れ時ではあったが、神殿の神官はオレたちを快く迎え入れてくれた。水の巫女に会いたいと伝えたら、簡単に通してくれた。

『こちらが、水の巫女様です』



『えっ……これが?』

レイナが首を傾げた。中庭の池の中に、女神像が立てられている。両耳には魚のヒレのようなものがついている。ハッキリ言おう。

『……ただの巫人ではないか……』

『コラッ』

レイナがオレの足を踏んだ。神官は笑いながら説明をしてくれた。

『水の巫女様は、普段はこの神殿の奥、河の流れを引き込んだ大きな泉の中にいらつしやいます。この池は、その泉と繋がっているのです。巫女様は時折、この像に乗り移られて、私たちに様々なことをお伝えくださいます』

『例えば、どのような?』

『街内の規則や警備のあり方、建設すべき建物、この街で発行している通貨についてなどなど、その他にも天候や作物の育ちなど、未来についてのことを御神託下さることもあります……』

『……一つ問いたい。水の巫女とは、古神なのか?それとも現神なのか?』

『その問いには、簡単にはお応えしかねます。しいて申し上げるなら、どちらでもない、となるでしょうか……』

オレは首を傾げた。解らない。オレは池に近づいて、しげしげと像を眺める。本当に

存在するのだろうか？神殿の池に手を浸す。思ったよりも冷たい水だ。聖なる池にオレが手を入れたことに、レイナは慌てたが、神官は止めなかった。それ以上は質問をしても無駄だと判断し、オレたちは神官に礼を言つて、その場を去つた。「いつでもお越しください」と神官は笑つて見送つてくれた。

ダイアンとレイナが神殿から去つた後、神官は中庭の池に立つた。

『さて巫女様、これで宜しかったのでしょうか？』

『ええ、ご苦労様でした。あの者がどのような存在か、解りました・・・』

石像が立っていた場所に、本物の巫女が佇んでいた・・・

## 第二十六話：友人

プレイアの街での滞在初日、予想通りリタとの相部屋だ。野営でも同じテントで過ごしたため、自然にリタとは親しくなった。物心ついたときに家を失い、流れ歩いたため、歳の近い友人は一人もいない。でもリタとは自然に話をする事が出来た。私より八歳年上なのに、まるで同い年のように笑い合う。こうした楽しさは初めてだった。でも……

彼の腕の中で目覚めたい……

その想いは募った。この街にも浴場はある。だからそこで彼と過ごすことは出来る。でも躰は満足しても、心は満足しなかった。彼と燃え上がり、燃え尽き、至福の中で眠り、目覚めて彼の寝顔を見る。口づけをして、起こしてあげる…… そんな一晩を過ごしたい。

『ねえ、レイナ』

二つ並んだベッド。腰かけている私に対して、自分のベッドでゴロゴロと転がるリタが話しかけてくる。私の顔を見ながら、真顔で聞いてくる。

『ディアンとは、どこまで進んでいるの？もう一線超えちゃった？』  
『えっ……』

私は一瞬で、顔が朱くなつた。リタはニンマリ笑つた。起き上がつて、私の傍に来る。  
『おや？おやおやおや？一線どころか、これはかな〜り進んでいると見ましたよ？』

リタは私の後ろの回り込んで、いきなり両手で私の胸を掴んだ。

『この！この破廉恥なオツパイで、彼のアレを挟んでいるのか！』  
『ちよっ……リタ、止めてっ……どうして……』

どうして解つたのか。リタは笑いながら私の横に座つた。

『へっへーんっ！このリタ姉さまをバカにしてもらっっちゃ困りますねえ〜 こう見えても、それなりに男は経験してるんですよ〜 オンナが自分のオトコを見る時の眼なんて、すぐに分かるっての！』

『ううっ……不覚……』

リタはケラケラと笑い、言ってくれた。

『二ヒヒッ！早く彼の部屋に行きなよ。私のことは、気にしないでイイよ』

レイナはリタと同じ部屋で過ごしている。今夜も恐らくは来ないだろう。結界を張っておくのもバカバカしいので、オレは普通に本を読んで過ごしていた。飛行魔法の

研究が行き詰っている。重力制御の術式が、どうしても解らない。六大魔素とは違う魔力の使い方のはずだ。仮に、重力の大きさや方向を改変できたとしても、今度は慣性の法則が影響する。無重力状態となって、単に「浮いているだけ」では、オレの求める飛行魔法には程遠い。

いっそ、魔神ハイシエラを探して聞こうか・・・

首を振って、すぐにその案を取り消す。あまりに危険すぎる・・・

キャツキャと女たちの声がある。レイナとリタが話をして盛り上がっているのだろう。オレ以外の人と、付き合いが無かったのがレイナだ。リタという友人が出来たことは、彼女にとつても幸福だろう。オレが思索に耽ろうと思っていた時に、扉が叩かれた。開くとレイナが立っていた。急いで、結界を張らなくては・・・

彼との寝物語、私の至福の一時だ。自然と、リタの話になる。

『・・・姉がいたら、あんな感じなのかしら・・・』

『・・・ヒトとして生きる道もあるぞ?』

彼の問いかけに、私は首を横に振る。リタは、私の初めての友人だ。とても大切な友人だ。だから・・・

彼の使徒になったら、一番最初にリタに告げよう。きっと、解ってくれる・・・

メルキア国首都インヴェイティアの郊外では、新兵二千人が訓練に明け暮れていた。クレーマーは腕を組んで、その訓練を見守る。たとえ示威行動であっても、主君と自分が陣頭に立つ。十一年前のようなことがあるとは思えないが、ただの一矢が、悲劇に繋がる可能性もあるのだ。あれだけ手こずった「彩狼の砦」の精兵たちである。肉体はそれなりに出来上がっていたが、規律と指示に従うという面ではまだまだであった。クレーマーは二千人の部隊を半分に分け、それぞれに指揮官を配した。自分が鍛えた、若く優秀な指揮官である。

『良いかつ！今回の出兵は、殿自らが陣頭に立たれる。殿の御前で、無様な行進など見せるわけにはいかぬぞっ！』

指揮官たちの檄が飛ぶ。起立・気をつけ・礼、あるいは右・左・右・左、行進訓練というものは、一見するとバカバカしい訓練に思えてしまう。だが軍隊というものは、上官と規律に対しての絶対服従が基本である。そうでなければ、万単位の軍事行動など不可能だからだ。そのための基礎として、全体一致行動の訓練があるのだ。

『あと三週間、何とかなりそうですね・・・』

副官の言葉に、クレーマーが頷いた。

久々に、レイナの口づけで目覚めた朝、宿泊している宿に、神殿からの使いが来た。水の巫女からの呼び出しである。武器を持たず、オレ独りで来いという。レイナは顔色を青ざめさせ、リタは口をパクパクとさせた。口の端からパンのカスが零れている。オレは同意し、使者の後に続いた。レイナに魔神剣を預ける。

『大丈夫だ。話をしてくるだけさ・・・』

恐る恐るオレの愛刀を受け取った彼女を背に、オレは笑いながら手を振った。

もうすぐ、あの男が来る。彼が水に手を浸した時に、彼の記憶が見えた。

ヒトの魂と魔神の肉体を持つ存在・・・

魔神という存在自体が危険だが、それ以上に危険なのは、あの男の考え方だ。あの男の考え方は、現神にとつても古神にとつても、危険極まりないものだ。デイル||リフィーナの世界そのものを破壊しかねない。だから私は、あの男を呼び出した。話をし、意見を聴き、あの男の方向を定める。その結果次第では・・・

殺さなければならぬかもしれない・・・

魔神との会談に向けて、私は覚悟を決めた・・・



## 第二十七話：水の巫女の物語

ラウルバーシユ大陸中原アヴァタール地方は、後に大きく五つの国によつて形成されることになる。その中でも随一と呼ばれるのが、水の巫女を絶対君主とする「レウイニア神権国」である。レウイニア神権国では、国民の大多数がレウイニア国教を崇め、王都プレリアの地政学的位置と、実在する神による統治によつて、永く繁栄をする。しかしこの時点では、国家形成期中であり、レウイニア神権国として正式に国家が樹立したわけではない。神殿が主導しつつも、水の巫女が開いたプレリアという新興都市を豊かにする、という目標に向けて、住民たちが力を併せ、都市形成を進めている段階であった。

神殿についたオレは、中庭に連れていかれるものと考えていたが、神官は更に奥に案内をしてくれた。それなりに立派な神殿だが、まだ建設中の部分もある。この街の成長と共に、この神殿も大きくなっていくのだろう。神官というものは、えてして腐敗をするものだが、神の前でも腐敗するのだろうか、オレはそんなことを考えながら、神官の後に続いた。

『こちらが、水の巫女様がいらつしやる「奥の泉」です』

開かれた扉の先には、澄み切った青空を反射し、薄青く輝く広大な泉があつた。泉の中央に向けて、欄干が掛けられている。中央には一体の像が置かれているようだ。

『中央に行かれましたら、泉に手を浸して下さい。それで、水の巫女様がお姿を現されま  
す』

神官はオレにそう告げると、こちら側に入ることなく、扉を閉じた。左右を見ながら、欄干を渡る。美しい泉が波打っている。「神気」とも言える気配で満ちている。

(なるほど、本物か・・・)

中央には、中庭で見た像と同じ像が置かれている。オレは泉に手を浸した。やはり、少し冷たかった。オレの背後で、ひととき強い神気を感じた。立ち上がったオレは、振り返る。台座の上に立っていた石像が、神気溢れる神の姿に変わっていた。

『ようこそ来てくれました。旅人・・・いえ、黄昏の魔神ディアン・ケヒト殿・・・』

オレは特に驚かなかつた。神であれば当然であろう。オレは胸に手を当てて応答した。

『ディアン、とお呼びください。「巫女殿」とお呼びしても、宜しいでしょうか?』

『ええ、結構です・・・』

台座の上から、水の巫女がオレを見下ろす。少し硬質な雰囲気だ。きつと、泉の水が

硬水なのだろう・・・

『昨日、あなたが中庭の池に手を入れた時に、あなたの記憶と意識を感じました。興味を持ち、お呼びしたのです・・・』

オレは首を横に振りながら、水の巫女の言葉を否定した。

『違うでしょう。夕暮れ時に現れ、いきなり「神に合わせる」などと言う帯剣した男を、神託を受ける中庭まで通す神官などいません。巫女殿は事前にオレの来訪を察知していた。だから、神官に指示し、オレを中庭に通し、池に手を入れさせた・・・ 違いますか?』

水の巫女は黙っている。その沈黙が、オレの読みを肯定していた。オレは言葉を続けた。

『おそらく、今日あたり呼び出しが来るだろうと思っていました。ただ・・・出来れば朝食後が良かったですね・・・』

貌はオレ好みだが、どうも硬い。オレは冗談で場を解そうとしたが、水の巫女は硬いまま、いきなりオレに質問をしてきた。

『あなたにお尋ねします。あなたは、人間なのですか?それとも、魔神なのですか?』

私は彼の部屋に入った。彼の愛剣「魔神剣クラウ・ソラス」を机の上に置く。相変わ

らず、畏ろしい気を放っている。彼は私にさえも、この剣には手を触れさせなかった。それなのに、今朝は私に、この剣を預けた。

『大丈夫だ。話をしてくるだけさ……』

手を振る彼の後姿を思い出す。嫌な予感がした。彼は魔神だ。神殿に神がいるのなら、彼に何をするか解らない。下手をしたら、神と魔神の戦いになるかもしれない。その時は……

(私も、ディアンと共に、神と戦う)

私は剣と胸当てを用意した……

『あなたにお尋ねします。あなたは、人間なのですか？それとも、魔神なのですか？』

水の巫女の問いに対して、オレは頭を掻くしかなかった。オレは一体、どっちなんだろう？

『正直、即答しかねますね。オレは、人の記憶と感情を持っているし、人の魂を持っているようなのですが、オレの肉体自体は魔神ですからね。オレの口上、「人と魔物の狭間に生きる」というのはそういうことなんですよ。人間でもあり、魔神でもある、というのが正解かも知れませぬ……』

水の巫女は黙ったままだ。どうも話し難い。「あなたは処女ですか？」と聞いたたら和

むだらうか？いや、止めておこう。オレは別の質問をした。

『私からもお尋ねしたい。「神」とは、生死を超えた超常的存在なのでしょうか？それとも、不老で力は強いが、ただの生物なのでしょうか？』

オレの問いに対して、少し黙った水の巫女は、予想だにしない話をしはじめた。

『少し、私についてお話ししましょう・・・』

こうして、水の巫女の物語が始まった・・・

七魔神戦争からおよそ六百年後、ブレニア内海誕生による地球規模の気候変動も落ち着きを見せ、人々は新しい環境に適応し始めていた。だが、内海東岸のアヴァタール地方は、東側に急斜面の山を抱え、洪水が絶えない危険地帯であった。そして、そんな危険地帯にも、人々は住んでいた。

『クソツ！また洪水だ！今年で二度目だぞ！』

『せっかく、畑を拓いたのに、これで全滅だ・・・』

男たちは頭を抱えていた。ブレニア内海北東部は、新しくできた二つの河川が合流し、大きな流れとなって内海に流れ込んでいた。水量が豊富のため、他地方からの移民者が、田畑を拓き、村をつくり始めていた。だが、二つの河川共に、急斜面の山岳から流れ込んでくる。山に雨が降るたびに、下流は洪水に見舞われていた。耕した畑が、洪

水により一瞬で消え去ってしまう。農民たちは苦しんでいた。

『あの河だ！あの河を何とかしなければ、オレたちはずっと、苦しむことになる！』

若き移民者、アレックスは、村の会議で提案をした。この土地に住み続けるためには、ブレニア内海に流れ込む河を整備する必要があるのだ。アレックスは壁に絵を描き始めた。

『海に流れ込む河が一本だから、洪水が起きるんだ。この河を二本にすれば、水量が調整される！』

アレックスの発想は大胆であった。内海に流れ込む河の北側に、新しい支流を設け、河を二本にするというものであった。とてつもない大工事である。村人たちはアレックスに言った。

『無理だ：：どれだけの時が掛かると思う？もう村を捨てて、移民するしか無かろう：：』  
『この工事が終われば、二本の川に挟まれた豊かな大地が出来る！俺たちの子や孫が、そこで豊かに暮らすことが出来るんだっ！』

アレックスの熱弁も空しく、村人たちは頭を振って、会議は散会となった。独り残されたアレックスは呟いた。

『俺はやるぞ。たとえ独りでも、いつか必ず、この土地を豊かな大地に変えて見せる：：』

翌日、内海北東の海岸線にアレックスは立っていた。彼は一人、岩に鶴嘴を振り下ろ

した・・・

『彼は来る日も来る日も、ただ一人で鶴嘴を振り続けました。やがて、彼の構想に賛同する村人たちが現れ、それは村全体に広がりました。村人たちは力を併せ、五十年という歳月を費やして、新しい河川を敷くことに成功したのです。以来、洪水は起きることなく、二つの支流に挟まれたこの土地は、豊かな実りを齎すようになりました・・・』

とてつもない話である。ただ一人の男の行動が、これほどの土地を生み出したのだ。

『・・・人々の「この土地を豊かにしたい」という想い・・・その想いが、私を生み出したのです。そう、私はこの土地に生きる人たちによつて生み出された土着神、そしてそれは、現神も古神も関係なく、デイル||リフイーナの神々全てがそうなのです・・・』

『・・・つまり・・・』

水の巫女は頷いた。

『神とは、人間が生み出したのです』

## 第二十八話：運命を切り開く力

『神とは、人間が生み出したのです』

水の巫女は、言葉をつづけた。

『三神戦争以前の旧世界において、ヒトは「機工女神」という神を生み出しました。しかしその遙か前から、ヒトは神を生み出していたのです。いわゆる「古神」たちのことです。ヒトは、自ら創った神を信仰し、その信仰心が神の力を高め、ヒトに恩寵を与えていました』

『具体的には、どのような恩寵なのだ？』

『個人としては心の平穩、ヒトの集団である社会としては規範、文化としては技術や学問の土台、そして国としては統治の仕組みという恩寵です。ヒトは信仰に基づいて生き、信仰が中止として社会が形成され、信仰の下で文化が生まれ、信仰を核として国家が形成されたのです。もちろん当初は、各地で誕生した土着神でした。ヒトが行き交うことで、それら土着神が収斂され、より多くのヒトが信仰する神が、主神となりました。何柱かの主神のもと、ヒトは信仰に基づいて、平穩に生きていたのです。』

オレは思った。それは果たして「平穩」なのだろうか。神に「依存」しているだけで



はないだろうか。水の巫女は話し続けた。

『しかし、古神たちは大きな過ちを犯しました。ヒトが持つ欲望の力を読み誤ったのです。より多く、より高く、より遠く……この「より」というヒトが持つ渴望、この力により、ヒトは新たな信仰対象「科学と技術」を生み出したのです。原因があつて、結果がある。因果律を解き明かし、世界の構造を誰にも解るように紐解いていきました。その結果……』

水の巫女の言葉に、オレは続けた。

『……より強く、より賢くなつたヒトは、やがて自らを主とする。神の信仰よりも自分の判断に基づいて生きるようになる。それは古神への信仰を薄れさせ、古神は力を失つていった……』

水の巫女は頷いて、話を続けた。

『ヒトの思考は、信仰から自由となりました。「ルネサンス」と呼ばれる変化が、旧世界の古神たちを弱めたのです。ルネサンス以降、ヒトは急速に技術を発展させていきました。信仰に捉われることなく、自由に研究・開発をし、この世界について解き明かしていったのです。そして彼らについては、異世界への扉まで、開いてしまうようになりました……』

『三神戦争以前の旧世界イアスⅡステリナの住人にとって、ネイⅡステリナの神々、つま

り現神はどの様に見えたのだろうか．．．』

『彼らは忘れてしまつていたのです。ネイスティリナの現神と同じように、自分たちも神を持つていたことを．．．しかし、彼らは自分たちの世界には神は存在していないと考え、人造の神「機工女神」を生み出したのです。そして、その機工女神が二つの世界を繋げ、三神戦争という戦争を引き起こしてしまいました．．．』

『．．．あまりに技術を発展させると、ヒトはいつしか神を忘れ、そして悲劇を生み出していく．．．そう言いたいのか？』

『そうした事実が、過去に存在した、ということですよ．．．』

オレは目を細めた。何だろう、この違和感は．．．

『あなたが言っていることは理解はできるが、それはヒトが自ら、克服すべき問題だろう。実際、三神戦争において古神は現神と戦っている。科学が発展しても、全てのヒトが神を忘れたわけではないだろう？』

『ヒトは欲多き生き物です。例えば豊かになりたい、商売を繁盛させたいと強く願えば、やがて商神や福神というものが生まれます。毎日当たり前のように昇る太陽、その太陽に畏敬の念を持つ者、感謝の念を持つ者もいます。山から日の出を拝む者が多ければ、やがて太陽神が生まれるのです。イアスステリナにも、そうした欲望や文化が残っていました。故に、古神が存在することが出来たのです。ですが、多くの災厄をもたらし

た三神戦争を引き起こした機工女神、その機工女神を生み出したのも、ヒトなのです』  
『その機工女神の相手である、現神や古神もヒトが作り出したのだろ？つまり、ヒトの信仰そのものが、やがて三神戦争に繋がった、とも言えるのではないか？』

水の巫女は沈黙した。オレも黙って彼女を見つめる。オレは一つの疑問を提示した。  
『一つ聞きたい。ヒトの想いが神を生み出すというのは理解した。その力は、ヒトだけが持っているのか？』

『ヒトは時として、凄まじい力を発揮します。長寿のドワーフやエルフ、あるいは他の巫人たちは、不可能だと思つたことは諦めてしまいます。しかしヒトは違います。どれほど歳月が掛かろうと、強固な意志を持ち続け、血のにじむ努力の末に、それを実現させてしまいます。ヒトが持つ、ヒトだけが持つ、意志の強さとその実現力、奇跡を引き起こす力・・・私たちはこれを「運命を切り開く力」と呼んでいます』

どこかで聞いた言葉だ。オレは大天使サリエルを思い返していた。確かあの厨二も、同じようなことを言っていた・・・

『私は、四百年前に実在した若き農夫、アレックスが発現した「運命を切り開く力」によって誕生しました。そして時が流れ、人々が彼の名前を忘れ、いつしか当たり前のようこの土地に住むようになって、この土地で豊かに暮らしたいという想いは変わりません。この地に住む人の想いが、私の力の源なのです』

『面白いな。人々は豊かに暮らしたいと願ひ、その想いを源として巫女殿は存在し、この地に住む人々に恩恵を与えることで、さらにその想いを集める。共存共栄、持ちつ持たれつつ、か……』

『……あなたは時として、身も蓋も無い言い方をされますね……』

オレは肩をすくめた。思つたことを端的に伝えたまでだが……

『それで、あなたはオレにそんな話をして、何を望んでいるんだ？そろそろ肚の内を明かしてもらえないだろうか？肚の探り合いも、度が過ぎれば胃にもたれる……』

水の巫女はオレを見つめると、やっと肚の内を見せてくれた。

『あなたのその考え方、ヒトは自らの力で克服すべきという考え方、その考え方の方向を見定めたかったのです……』

『ほう？オレは別に、自分が変なことを言っているとは思わんぞ？ヒトは誰に強制されるでもなく、自らの意志で、将来を決めるべきだ。ヒトは愚かなこともするが、その結果をも受け入れ、自らの糧として、次に活かしていくべきなのだ。そうすることで、一歩ずつ成長する……』

『ですが、ヒトの命には限りがあります』

『そうだな、だから歴史を見ると、同じ過ちを繰り返し続けるのだろう。だがそれで滅びるのなら、それがヒトの限界だとは思わないか？』

『・・・その結果が、新たな三神戦争だとしても、ですか?』

『そうだつ! いまこの大陸では、ヒトが繁栄をし始めている。いつの日か、ヒトは現神を越えるぞ。魔法なのか、科学なのか、何によつて越えるかは解らんがな。そして、それで滅びるのなら仕方がないではないか。ヒトが自らの力でそれを克服すべきであり、神に救われる必要などない!』

オレは違和感をようやく理解した。水の巫女も含め、神に対する不信感の原因について・・・

『思うのだが、なんでアンタら神は、そんなに偉そうなんだ? 所詮はヒトによつて産み落とされた、ヒトの想いの残留物ではないか。産み落とされた自分が存在し続けるために、ヒトの欲望やヒトが持つ感情を「信仰」という形で利用しているに過ぎないのではないか? オレから言わせれば、神などという存在は、ヒトの「思想上の寄生虫」に過ぎんつ!』

『・・・・・・・・』

『巫女殿、アンタはまだいい。寄生虫は寄生虫らしく、宿主に恩恵をもたらすべきだからな。だが現神は・・・例えばバリハルトの狂信者たちのやつていることを見てみろつ! ヒトの欲望を利用し、狂信という形でヒトを操作し、殺戮と破壊という手段で、自らを信仰する信者たちを増やそうとしている。寄生虫如きが人間様を操ろうなどは・・・い

ずれヤツには、オレ自身の手で身の程を教えてやるつもりだ・・・』

『・・・あなたは、なにをやるうと思ってるのですか?』

オレは、この世界に舞い降りて以来、ずっと思っていたことを初めて口にした・・・  
『ヒトにもう一度、ルネサンスを起こすのさ・・・』

私が畏れていた懸念は、やはり本当だった・・・

(ヒトが魔神の肉体を持ったら、「運命を切り開く力」は発現するのだろうか?)

この男個人が、神をどう思おうと、それは構わない。だがこの男は、その考えを広めようとしている。この男は、半分は人間で半分は魔神、だから可能なのだ。彼が本気になれば、数百年後には新たな三神戦争が起きかねない・・・

私は瞑目した。もう一度だけ、説得してみよう。もしそれで翻意しなかったら・・・  
・・・殺すしかない。

## 第二十九話：繋ぎ留める者

神と魔神の戦い・・・

その不安が私の心の中に広がる。彼は剣を持って行かなかった。神が相手となれば、かつて会った「はぐれ魔神」の比ではないだろう。まして場所は神殿、相手の勢力内だ。彼は自ら、虎口に飛び込んでいったのではないか・・・

グルグルと不安に悩まされ、彼の帰りを待ちきれなくなった私は、居ても立っても居られずに立ち上がった。

彼を助けに行かなければ・・・

私は腰に自分の剣を指し、彼の愛剣を背負った・・・

ヒトにもう一度、ルネサンスを起こす・・・

オレは水の巫女にそう告げた。これまでの旅から、現神とそこで生きる人々の様子は見えた。この世界の人々は、何の疑いも無く現神を信仰している。彼らがそれで幸福なら、それでも良い。だが実際は、多くの不幸を生んでいるのだ。

現神は、自分を信仰する者のみを幸福にしようとしている。単なる選民思想ではないか……

『……あなたはいつ、その考えを抱いたのですか?』

水の巫女がオレに尋ねてきた。旅で会ったスティンルーラ族たちの言葉を思い出す。「闇夜の眷属」と烙印を押され、光の中で生きられなくなった人々を思い出す。現神の在り方そのものに疑問を持ち、それを変えようとして魔人となったブレアード・カツサレの想いを考える……

僅かな期間の旅の中でも、そうした不幸を見てきた。オレは水の巫女にそのことを伝えた。ヒトは皆、誰しも自由に想いを馳せることが出来るべきなのだ……

『……気づいていますか?あなたは今、ブレアード・カツサレと、同じ途を歩もうとしています。彼はどうなりましたか?』

『オレは魔神だ。最初から神の肉体と力を持っている。ブレアードとは違う……』

『いいえ、あなたも気づいているはずです。確かに、彼らは光から追われた存在かも知れませんが。でもその状況を改めるのは、他ならぬ、彼ら自身の手によつてでなければなりません。あなたは以前、スティンルーラ族の女性に言ったではありませんか。』

『現状が嫌なら戦え……』それはヒト全体に言えることではありませんか?』

『……』



『あなたは魔神です。ブレアード・カッサレよりも上手くいくかもしれません。ひよつとしたら成功するかもしれません。でも仮に、それでヒトが神から自由になったとして、「誰かの手によって与えられた自由」など、ヒトの為になるのでしょうか?』

『・・・ではこのままで良いと、あなたは言うのか?』

『・・・いいえ、ヒトは神の家畜ではありません。ヒトが己の道を歩む土壌は必要でしょう。ですが、急進的な変革は、必ず大きな歪みを生み出します。あなたがやろうとしていることは、改革でも進歩でもありません。破壊的な革命です・・・』

オレと水の巫女を視線を合わせた。龍人族の長老の言葉を思い出す。

(・・・物事は決して善悪で区別できるものではなく、灰色の濃淡によって分けられる。ドワーフにはドワーフの生き方、エルフにはエルフの生き方がある。何人にも、それを侵す権利は無い・・・)

『・・・ヒトにはヒト、神には神の生き方があるか・・・』

オレがそう呟いた時、ボタンツという音が響いた。音のほうを見ると・・・  
神官を剣で脅しているレイナの姿が見えた。

リタが止めるのを押し切り、私は馬に飛び乗った。急ぎ神殿に向かう。驚いている神

官に剣を突きつける。

『ディアン・ケヒトはどこだ？』

両手を挙げている神官に案内をさせる。昨日の中庭ではない。もつと奥にいるようだ。私は脅して、神官の足を急がせる。扉が開かれた。光が私の眼を眩ませる。大きな泉の中央に、彼と神が立っていた……

レイナがオレの胸の中で震えている。どうやら余りに不安で神殿まで駆けつけてきたようだ。

『話をするだけだと言ったじゃないか……』

『でも……でも、あなたは……』

魔人であるオレが神と会う。それだけで不安を引き起こす。言われてみればその通りだ。実際、オレ自身もその覚悟はしていたのだから。だからオレは彼女を責めることはしない。事情を知る者にとっては、不安に駆られて当たり前なのだ……

私は目の前にいる金髪の美しい女性を見ていた。最初は殺気だっていたが、いまは魔

神の胸の中で、安心した表情を浮かべている。そして、それは魔神にも言えた。

(彼は、こんな表情を浮かべるのか……)

胸の中にいる彼女の頭を撫でる魔神の表情は、「最愛の恋人に向ける顔」そのものに見えた。短い時の中で、精一杯に命を咲かせる人間が見せる、素晴らしい貌。魔神であるこの男が、その貌を見せている。彼は気づいているだろうか。彼女の存在によつて、どれほど救われているかということ……

『レイナ……この地に住む神・水の巫女殿だ……』

彼女は弾かれたように男の胸から顔を上げ、その場で片膝をついた。

『これは……大変ご無礼を致しました。私めは、アヴァータル地方東域出身の剣士レイナ・グルツプと申します。あろうことか神官殿に剣を突きつけてのこの乱入、全ては私の一存で行ったこと。いかなる罰でも、お受け致します』

まるで男のような口調で、私に詫びをしてくる。きっと腕も立つのだろう。私は首を振った。

『お立ちなさい。いきなり呼び立てたのは私なのです。私の配慮が足りませんでした。周りから見れば、誤解をするに十分だったのでしよう。こちらこそ、お詫びします……』

レイナを扉の向こう側に下がらせたオレは、再び、水の巫女と向かい合った。

『巫女殿、オレの考えは変わらない。ヒトは神から独立して、自らの足で歴史を歩むべきだ。だが、あなたの言うことも正しいのだろう。神からの独立は、ヒトが自らの力で成し遂げるべきであり、ヒト以外の力で成し遂げてはならない、そう言いたいのだろうか？』

『あなたは半分はヒト、でも半分は魔神です。最初にした質問、ヒトなのか魔神なのか…… どちらの貌で、あなたがこの世界に関わるつもりなのか、不安でした。私にはあなたに、ヒトの貌で生き続けて欲しいと願っています……』

オレはため息をついた。ヒトだからこそ、自らの願いを求めて精一杯に命を輝かすことが出来る。半分は魔神であるオレは、どのように生きたら良いのだろうか……

『……もう少しだけ、この世界を観てみるよ。そうだな……あと五百年かな……』

『無限の時間がありながら、何を為せば良いのかが見えない……辛いでしょうね……』

『……それも、オレが自分で選択した結果さ……』

その会話をもって、水の巫女との会話は終わった。オレは一礼をすると、扉の向こうで待つレイナと合流した。彼女から愛剣を受け取り、背負う。扉が閉まる前に、振り返る。水の巫女はじつと、オレを見続けていた……

神殿を出たオレは、大きく伸びをした。レイナは神官に何度も詫びを言っている。当然だ、あとで思いっきりお仕置きをしてやる。だがその前に……

『腹減ったな．．．朝食、まだ残ってるか？』

彼女は大笑いした。

彼が扉の向こう側に消えた後、私は独り、瞑目をした。

(危うい．．．)

あの魔神には、共に歩む人間がいる。彼が独りきりであつたら、とうに魔神になつていたかもしれない。彼女の存在が、黄昏の境界に彼を留めている。彼女こそが、彼をヒトの側に繋ぎ留める者なのだ。だが、そのロープは一本しかない。もし、彼女が死んだら．．．

(レイナ・グループが死んだら、デイアン・ケヒトは最悪の破壊神になるだろう．．．) そのための準備をしておかなければならない。何百年後かには、彼に伍する存在が現れるかもしれない。彼と同じく、ヒトの魂と神の肉体を持つ存在が．．．

破壊神と戦える力、それを受け入れる土壌を創つておく必要がある。私は神官への神託を下した。

『．．．国を創りましょう．．．』

彼からの「甘美なお仕置き」の後、彼は私を抱きしめてくれた。いつもと少し様子が違う。彼は私の抱きしめて、こう言ってくれた。

『レイナ……お前がいてくれて、本当に良かった……』

私の「存在自体」を受け入れてくれる彼の言葉に、私は嬉し泣きをした。彼はきつと、私の想像もできない悩みを抱えている。人間でありながら、魔神として永遠に生き続ける。それはきつと、とても辛いことなのだろう。だから、私が共に歩む。私が少しでも、彼の癒しになるのなら、それだけで私は幸福なのだ……

後日、神官に神託を下した私に、彼らから意外な問いかけがあった。

『……国の名前、ですか？……』

『はい、巫女様……国を創る以上、名前が必要です。プレイアというのは街の名前ですし……』

『……わかりました。考えておきましょう……』

これまで名前など、考えたことも無い。私自身にすら名前が無いのだ。水の巫女とは、彼らが呼んでいる名前に過ぎない。私は少し考えた。

（そうだ、あの者の名前を貰ってはどうかだろうか・・・）

四百年前、「運命を切り開く力」を発現して、この大地を生み出した独りの男。彼亡き後、その名も忘れ去られ、いつの間にか私がこの地を創ったことになっている。それもまたヒトの歴史と思い、何も言わずにいたが、私を生み出してくれたのだ。国の名前に彼の名を貰うくらいは良いだろう。たしか、彼の名前は・・・

「アレックス・レウイニア」

だったと思う・・・

## 第三十話：リタの店

プレイアの街に到着して三日目になった。昨日までは土着神「水の巫女」との対談でそれなりに刺激的であったが、三日目になると暇を持て余すようになる。レイナと終日過ごすのも悪くないが、部屋の中に居続けても鬱屈するだけなので、リタの物件探しに付き合うことにした。

『うーん……悩むねえ、城門近くにするか、大通り沿いにするか、それとも中央広場にするか……』

リタはブツブツと呟きながら、物件を見て回る。後代のプレイアの街は、南北両川を堀として防衛機構を高めつつ、中央広場を中心に放射状に街が広がる大都市になるが、この時点では都市計画そのものが不十分であり、どの場所に出店をしても一長一短がある。

『ねえリタ、やっぱり神殿近くの大通りが良いのではないかしら？人通りも多いし……』  
『確かにいいんだけどねえ、ただ賃料が高いし……』

二人は物件を見回りながら、キャツキャとはしゃいでいる。女同士で買い物でもしているかのようだ。オレは黙って、街の様子を見ていた。プレイアの街は大きくなる。将



来はこの大陸でも、最大規模の大都市になるだろう。この土地を切り開いたという男は、これほど豊かな土地になると想像していたのだろうか。ヒトの力というものは、時として神をも超えてしまうものだ……

『ディアン？あなたはどう思う？』

『そうだな……オレなら……』

オレは北門から中央広場に入る通りの角地を示した。神殿からは離れていて、賃料はそれほど高くない。

『えっ？どうして？この周辺は住居は少ないし、神殿からも離れているけど……』

『最も人が集まり、発展するであろう場所だからだ……』

プレイアは南北を流れる大河に挟まれ、行商人は河を渡る「渡し舟」を利用してはいる。既に発展しているレンストからは、多くの行商人が、南の河を渡って来る。一方、北側の河には、東西に伸びる大街道が走っているもの、穀倉地帯であるバーニエの街から行商が来る程度で、それほど行商人の行き来は無い。

『今は渡し舟だが、近い将来間違いなく、この川に橋が掛けられる。現在、中原は国家形成期だ。あと三十年もすれば、東西にそれなりの大きさを持つ国家が出来るだろう。そうすればこの大街道は、大勢の行商人が通るようになる……』

何十両もの荷車と大勢の人々が行き交う、東西の大街道……街道と街を繋ぐ大きな

橋・・・北門から街の中央広場を通り、南門に抜ける大通りが走る・・・南門からレンストなどの南部の都市に一直線を繋がる・・・

リタもレイナも、その光景を想像したようだ。

『この中央広場は、アヴァタール地方における、商取引の中心地になるだろう。大通りの角地は、将来は垂涎の物件になる。今のうちに抑えておいた方が良い・・・』

『・・・ニツシツシツシツシツ!!』

リタが口を抑えながら、いきなり笑い出した。すぐに神殿の行政政府に向かう。どうやら決めたようだ・・・

『ぶはあっ！いやあ、自分の店を出すって思うと、酒も旨いねえ〜』

リタは上機嫌で黒麦酒を呷っている。どうやら相当な上戸のようだ。レイナもワインなどは飲めるが、それほど酒好きというわけではない。オレは付き合い程度に杯を傾けながら、リタに聞いた。

『ところで、何の商いをするんだ?』

リタの杯がピタッと止まる。

『い、いやあ〜まあ・・・ボチボチと・・・』

『・・・つまり決めていないんだな?』

『うつ．．．いや、私は行商人ですからね！そりや、食料や酒、あとは素材なんかを扱いたいと思っっていますが．．．』

『．．．もう、すでにあるな．．．』

『ぐぬぬぬっ．．．』

人が集まる街には、当然、店が出来る。プレイアにも行商人街が出来ており、そこで大抵の必要物資は揃えられる。各地から運んだ雑貨店を開いたとして、どこまで繁盛するかは疑問だ。

『はあ．．．ウリが無いんだよねえ〜　いくら私が「美人で綺麗で可憐な看板娘」だとしても．．．』

『．．．行商人から仕入れれば、結局は価格で負けるしな．．．』

『．．．いま軽く受け流しましたね？ねえ、レイナ〜　あなたがウチで働いてくれたら、きつと繁盛すると思うんだけど？』

『ゴメン、リタ．．．私、客商売は無理．．．』

ため息をついたリタは、思い出したようにオレの顔をみた。

『そういえば、プルノーさんが言っていたけど、ディアンは商売の才能があるそうね？』

『そうか？まあ、オレだったらこうする．．．というのは、ないではないが．．．』

『なにになに？教えて！成功したらお礼はするよ〜』

『……礼ねえ……』

オレはリタの顔を見て、胸元を見た。まな板よりは多少はマシといったところか……

『……あまり、期待できなさうだな……』

『……いま、思いつきり失礼なことを考えていたのでは……』

『……酒の肴程度にはなるか……』

自分がリタの立場であつたらと想定し、オレは案を語つた。

『オレだつたら、両替商をやる』

『両替商?』

オレは黒麦酒のツマミとしてゐる豆を三粒取り、机に置いた。

『プレイアがここだとすると、南にレンスト、東にはメルキア国の首都インヴィディアがある……』

『フムフム……』

『この三つの都市は、それぞれに街で使える通貨を発行している。この都市間で交易をしようとする、それぞれの都市の通貨で、仕入れをしなければならぬ。だが、それを別の都市に売つたとしても……』

『……ああ……なるほどねえ』

この三都市で行商をやろうとすると、三都市それぞれの通貨を持つていなければなら

ない。つまり常に、多額の現金を持っておく必要があり、そんな力を持つ行商人は極めて稀なのが現状だ。大抵の行商人は、その街で売り、売ったカネを全て仕入れに回し、別の街に持っていくことをしている。だがこの方法では、物量によって価格が変動するため、損失を出すことも多いのだ。

『レンストやインヴィディアの通貨をこの街の通貨に両替する。その際に、多少の手数料を取る。行商人たちは、利益を見越した適正量を仕入れれば良く、残った通貨は再び、レンスト通貨やインヴィディア通貨に両替すればいい．．．』

リタは目を輝かせ始めた。

『まあ実際にはそんなに簡単な話ではない。物価相場によつて交換比率を変える必要がある。将来的には、三都市それぞれに支店を出し、相場などを見ながら交換比率を調整すればいい．．．』

通貨が誕生したばかりのこの世界では、こうした「金融」という概念が存在しなかった。リタが行商人だからこそ、その概念を理解できたのだろう。リタは盃を置いて、オレの話を書きとめた。

『．．．各地に国が出来れば、これまでのように行商人たちを狙った盗賊なども減少するだろう。これからは商いの時代だ。その時代においては、通貨を握った者が勝者だと思う．．．』

リタは色々と図を描いている。やはり商才は天才的だ。両替だけではなく、カネの貸し借りを促す商売、銀行まで考えているようだ。一通りオレの話が終わった頃合いに、レイナがリタに質問した。

『ねえ、リタ。お店は、何て名前にするの？リタの店？』

『それも難しいんだよねえ。「リタの店」にすると、下手したら娼館と間違われそうだし・・・まあ、私の苗字から付けようかね』

オレとレイナは首を傾げた。リタの苗字を聞いていなかった。その様子にリタも気づいたようだ。

『あれ？言っでなかったっけ？私の苗字・・・』

頷くオレたちに、リタは苗字を明かしてくれた。

『では、改めて・・・リタ・ラギールです。ニヒツ』

## 第三十一話：バーニエの街

メルキア国建国当初、アヴァタール地方東域は無数の集落、豪族に分かれ、それぞれに小規模な勢力を形成していた。戦争、婚姻による合併、後継争いでの分裂を繰り返し、その戦乱は、実に五百年に渡つて続いた。この地から戦争が消えるのは、ルドルフ・フィズⅡメルキアーナから三十九代後の皇帝、ヴァイスハイト・フィズⅡメルキアーナの登場を待たなければならない。

メルキア国始祖のルドルフは、湖に面した中規模豪族の跡取りとして誕生した。豪放な父親と優しい母親のもと、特に不自由なく幼年期を過ごした。野山を駆け回り、湖で泳ぎ、いたずらをして周囲を驚かせる腕白であったと言われている。ルドルフがいつ頃に、建国の志を持ったのかは明確な資料がないが、彼が十八歳の時に、後に正妻となる恋人「ヴェローチエ」に対して送った手紙の中に、当時の彼の一端が書かれている。

「・・・先日、ドワーフの職人が我が家に来ました。遙か北に住んでいたのですが、戦争によつて住処を追われたそうです。我が家で数日過ごし、南へと旅立っていかれました。独りで旅立つその後ろ姿を見ながら思いました。何故、住み慣れた土地を一方的に追われなければならないのでしょうか。「人は争うものだ」と簡単には言いますが、その争

いによつて多くの者たちが苦しむことになります。争いの無い世を創るには、どうしたら良いのでしょうか。私の心は、あなたと共にあります。ですが私の夢は、何に向けるべきなのでしょうか……」

宰相ベルジニオ・プラダは、当主ルドルフの自室にて、メルキア国の将来について話をしていた。およそ国家とは、統治者独りで運営できるものではない。統治者は、国家の理想と方針を示し、行政府にて中長期の具体的目標が立てられ、それに基づいて各省庁が実現の計画を立案するものである。つまり、統治者の理想と方針が、国家の命運を左右するといつても過言ではない。統治者が「我が身の幸福のみ」を考えれば国は傾き、「より多くの幸福」を考えれば国は栄えるものである。そしてルドルフは、明らかに後者であった。

『我が君、国の将来を考えますと、やはり穀倉地帯を抑えることは必須です。南方集落の制圧が終わり次第、西方の穀倉地帯に、軍を向けるべきと考えます……』  
『つまり、バーニエを抑えるべき、ということか……』

ルドルフとプラダは、机上の地図を見ながら話し合いをした。

『バーニエは人口も多く、その西には内海に続くバルマ大街道があり、交通の要衝です。この地を抑えれば、西と北に自由を持つことが出来、我が君の理想にも大きく近づくと



思われます』

『だが、先の戦にて民衆も疲弊している。南方集落は戦をせずに制圧できようが、バーニエを獲るとなると、大きな戦になりはしまいか?』

『バーニエの領主は暗愚だと聞いています。出来ることなら、戦ではなく調略で、バーニエを取り込むことが出来ないかと考えています・・・』

ルドルフとプラダの話し合いはその後もしばらく続き、幾つかの方針が決められた。一服中に、ルドルフは話題を変えた。

『そういえば、リザベルは息災か?』

『お陰様で体調も良く、三月後には出産の予定です』

『そなたが、ドワーフの娘を妻に持つと聞いたときは、驚いたぞ』

『この年で幼女のような妻を持ち、周りからも随分と冷やかされました』

『気にするな。妬いているだけだ。クレーマーにも、嫁を世話してやらねばならんな・・・』

ルドルフとプラダは、笑いながら僚友の話をした。

プレイアの街を出発したりタ行商隊は、東西に延びる大街道を通り、アヴァタール地

方東域の入り口「バーニエの街」を目指していた。大街道であることから、盗賊などの危険は低く、護衛たちも気楽な気分です。ディアンは北側の山々を見ていた。

『あの山の向こう側は、ルーンエルフ族が住む森「トライスマイル」です。独自の薬などを作っているそうなので、店を出したら、仕入れのツテを作りたいと思います』

『エルフは滅多に森から出てこず、人間と接触をしない排他的な種族と聞く。仕入など可能なのか？』

『初めから無理だと思っていたら、仕入れなんて出来ません！商人は、たとえ細い路でも、少しずつたくしていくものなのです！』

リタ・ラギールが開いた店「ラギールの店」は、後にアヴァタール地方の各地に支店を構えるようになる。やがて「ラギール商会」として、アヴァタール地方から西方地域にかけて、商神セーナルの中央交易区を担う大商会となるのだが、この時はまだ、商才溢れる若い娘の夢でしかなかった。ディアンはリタの様子を眩しそうに見つめた。

バーニエの街は、人口八万二千人の大都市である。大街道沿いの開けた土地にある街で、穀倉地として、また東西の交易拠点として古来から栄えた街である。しかし、ムス

カ・バーニエが現在の領主になって以降、その繁栄に陰りが見え始めた．．．

『こう言つてはなんです、現在の領主は正直、あまり褒められたものではありません．．．』

『ほう？リタが他人を悪く言うとは、珍しいな．．．』

『強欲で女好き、自分のことしか考えない領主です。バーニエでも通貨を発行しているのですが、領主が勝手に発行して使つてしまうので、街ではプレイアやインヴィディアの通貨のほうが喜ばれます。出来れば立ち寄りたくないのですが、この街では黒麦酒が安く仕入れられるので、今後を考えると、ここで何泊かしなければなりません．．．』

『．．．まあ、ある意味では、人間らしい領主ではあるな．．．』

日が沈みかける頃、リタ行商隊はバーニエの門をくぐつた。

リタ行商隊は、酒場に併設された宿に宿泊をした。次の街はいよいよ、メルキアの首都インヴィディアである。レイナの表情も緊張している。オレはレイナを誘い、一階の酒場に向かった。酒場は宿泊者の他、近隣の住民や街を警護する兵士なども利用している。いつものことだが、レイナを伴うと必ず男たちが、嫉妬の視線を送ってくる。剣を背負っているオレが傍にいるため、これまではレイナに粉を掛ける奴などいなかった

が・・・

『何故、私がお前たちの酌をせねばならんのだ？』

『いいじゃねえか、ちよつと付き合えよ・・・』

手洗いから戻ると、レイナが複数の男に囲まれている。どうやら問題発生のようなのだ。オレはレイナの傍に寄った。

『何かあつたのか？』

『ええ、この人たちが・・・』

『なんだ？ テメエは・・・』

男たちがオレを凄む。こういうのを「身の程知らず」と言うのだろう。オレは思わず失笑した。

『彼女はオレの連れだ。粉を掛けるなら、別の女にするんだな・・・』

『ふざけんなっ！』

『テムエ・・・俺達がムスカ様の直属警護隊だつて知つてて言つてんのか・・・』

『知らんな・・・先ほどこの街に着いたばかりだ』

『なら引つ込んでろっ！』

男がオレの胸をどついた。レイナの顔色が変わる。店の中が静まり返り、周りの客も固唾を飲んでゐる。オレは目を細めた。

『…先に手を出したのはお前だぞ…痛い目を見たくなかったら、さっさと帰れ…』  
『うるせえっ!!』

男がオレに殴りかかってきた。右手だ。オレは瞬間に抜剣した。男が気づいた時は…

男の右腕は、根元から消えていた。

『…あ…——ッ——』

オレは他の男たちに剣を向けた。

『死にたくなかったら、そこで泣いている奴を連れて、さっさと出ていけ…』  
顔を青くして、泣き叫ぶ男を連れて出ていった。

『迷惑を掛けた。他の客たちの支払いは、オレに回しておいてくれ…』  
剣を納めたオレは店主に告げ、レイナを連れて部屋へと戻った。

## 第三十二話：バーニエの黒豹

酒場での一騒動があつた翌朝、リタが血相を変えてオレの部屋に飛び込んできた。

『ディアンツ！アンタなんてことを・・・つて、ハダカ？』

レイナは既に服を着ていたが、オレはまだ下穿きの状態だ。オレは特に顔色を変えることなく、服を着始めた。リタは顔を手で覆いながら、なぜか目を隠さずに話しはじめた。

『どうした？何かあつたのか？』

『何かあつたのかじゃないよツ！アンタ、昨日酒場で領主直属の人を斬つたんだつて？』

『ああ、向こうから先に手を出してきたんだ。お前の名前は出してないぞ？』

『そんなこと言っているんじゃない！早く逃げないと・・・』

『オレを捕えるつて？そりゃ、無理だろ・・・』

『アンタ、判つてないよ。この街には、凄腕の警備隊長がいるんだよつ！』

その時、通り沿いから声が響いた。女の声だった。

『宿改めであるつ！』

リタは頭を抱えた。

鎧を付け、槍を持った兵士十名が宿を囲む。バーニエ警備隊長のグラティナ・ワツケンバインは、宿に向かって大声で告げた。

『宿改めであるっ！この宿に昨夜、傷害事件を起こした者がいると聞いた。大人しく出てくれば、手荒な真似はしないっ！』

一気に告げたワツケンバインは心の中でため息をついた。領主直属の奴らには、本当に腹が立つ。大方、自分たちが先に仕掛けて、痛い思いをしたんだろう。腕を切り落とされたと聞いた時は、さすがにやり過ぎだと思つたが、いい気味だと思つている民衆も多いはずだ。だが、領主直々に捕縛命令が出ている。役目は果たさなければならぬ。

(捕まえて、適当に尋問して釈放するか……)

そう思っていたら、中から人が出てきた。背中に剣を背負った黒髪の男と、腰に剣を下げた金髪の美しい女であった。

宿から出たディアンとレイナは、槍を持った兵士たちに囲まれた。馬に乗った褐色の女が、ディアンたちを見下ろしている。ディアンはその貌に思わず見惚れた。警備隊長

と聞いていたからゴツイ奴だと思っていたら、レイナに勝るとも劣らぬ美しい女だったのである。

(褐色の肌に銀色の髪・・・胸もレイナとほぼ同じか・・・耳の形から見て、ダークエルフか? いや、そのハーフか・・・)

他の兵士たちは鎧を着けているが、ワッケンバインはむしろ、自分の胸を誇示するかのように、胸元を晒していた。ワッケンバインはディアンの視線を感じ、眼を鋭くした。「男の視線はいつも同じだ」と思ったのだ。

『昨夜、警備隊の者を斬ったのはお前か!』

『ああ、腕を一本貰った。先に手を出してきたのは向こうだな・・・』

『そのような話は、取り調べの際にしてもらおう。大人しく縛につけっ!』

ワッケンバインはディアンに向かって、馬用の鞭を向けた。男の視線に虫唾が走ったのか、機嫌が悪くなっている。

(コツテリ絞ってやるっ!)

だがディアンは、ワッケンバインに向けて平然と言い放った。

『断る。先に手を出したのは向こうだ。警告したにもかかわらず、オレに殴りかかろうとした!』

『・・・腕一本を切り落とした。やり過ぎだとは思わないか!』



『思わんな。むしろ優しいくらいだ。下半身を斬って女にしてやれば良かったと思つて  
いる……』

(何なのだ？この男は……)

ワッケンバインは齒ぎしりした。「バーニエの黒豹」と呼ばれ、男たち皆から怖れられる自分を前に、この男は先ほどから平然とし、自分の胸元ばかりを見ている。捕縛される心配など無いとでも思っているのか……

『縛につかないとなれば、手荒なことをすることになる。命は惜しくないのか！』  
すると、目の前の男の気配が変わった……

オレは目の前のオンナを値踏みしていた。レイナと同じく、豊かな胸を持っている。顔もイイ。秀麗な顔立ちと鋭い目つきが逆にソソル。後ろから貫いて、この顔を悦楽で歪ませてみたいと思つた。オレの視線に気づいたのか、オンナの声が鋭くなっている。こちらとしては正当防衛のつもりなのだが、そんなことは関係ないらしい。多少、腹が立つてきた。

『縛につかないとなれば、手荒なことをすることになる。命は惜しくないのか！』  
そう言われたオレは、抑えていた殺気を解放した……

デイアンの気配が変わった。魔神の気配ではないが、そこには明らかな殺気があった。レイナは思わず止めるべきか迷った。デイアンの身を案じたのではない。ただ、ここで斬り合いをしたら、リタに迷惑が掛かる。

『・・・デイアン・・・』

レイナの小声に、デイアンは少し頷いた。デイアンもレイナの不安は理解している。任務不履行は、デイアンの望むところではなかった。

『命は惜しくないのか・・・それはオレの台詞だ。お前たち・・・その程度の人数で、オレを捕えられるとでも思っているのか？』

一変した男の気配に、ワッケンバインは思わず唾を飲んだ。兵士たちもジリジリと後退する。この殺気を受けても槍を構えたままなのは、ワッケンバインの調練の賜物であった。普通なら逃げ出している。

(これは・・・読み誤ったか・・・)

ワッケンバインが撤退を命じようとしたときに、様子見をしている民衆の中から声が掛かった。

『何をしておるのだ？早く捕えぬか・・・』

領主のムスカが、昨日の男たちを連れてそこにいた。

『グラティナよ……そなた何をしておるのだ。早くその男を捕まえぬか……』

脂ぎった中年の男、ムスカ・バーニエが、ワッケンバインの横に馬を進める。ワッケンバインは一礼して、後ろに下がった。

『領主様、コイツですつ！コイツが昨日、俺たちを斬りつけた奴ですつ！』

『何を言っているっ！貴様らが先に手を出したのではないかっ！』

レイナが睨み付けながら叫んだ。レイナの姿を見たムスカが、顎をさする。ディアンを見下ろしながら言う。

『その方、この者たちが私の直属警備隊であることを知りながら、斬りつけたそうだな？まして腕を切り落とすとは……そなたの腕だけで、済むと思うなよ？ほれ……早く捕えぬか……』

ムスカの指示で、兵士たちが槍を構える。ディアンはため息をついた。その様子を諦めと誤解したのか、ムスカが笑いながら言葉が続けた。

『両腕、両足を切り落として放り出してやろう……じゃが……そのオンナを差し出せば、許してやっても良いぞ？』

『・・・・・・・・』

グラティナが後ろで、舌打ちしたような顔をする。デイアンは表情を変えずに、ムスカに話し掛けた。

『バーニエ領主、ムスカ・バーニエ殿とお見受けする。オレの名はデイアン・ケヒト……あなたにお尋ねしたいことがある』

『ほお、何だ？ 諦めてオンナを差し出すか？』

『バーニエ殿は、「領主」とはどのような存在だと思っておられるのか？』

その様子を見て、ワツケンバインは思った。

(この男、いまどういう状況か解っているのか？ こんな時に問答など……)

ムスカが連れてきた兵を合わせ、既に三十名以上の兵士に囲まれている。だが目の前の男は顔色一つ変えずに、ムスカと向かい合っている。その豪胆さに、ワツケンバインの中でデイアンの評価が変わり始めていた。

『ほっ……領主とは何かだと？ 決まっておろう、領主とは支配者だ。この土地も、領民も、みな私のものだ』

『なるほど……つまり支配者である自分は、領民に対しては何をしても良いと思っっているのか？』

『そうだっ！ 私の命令を聞けない者は、領主に逆らう者、つまり罪人だ！ お前も、私に逆

らえば罪人だぞ！』

『お前たちも、みなそう思っているのか？』

ディアンは自分を取り囲む兵士や、様子を見る民衆に問いかけた。兵士も民衆たちも黙っている。

『お前たちはずっとこのまま、この男の言うがまま、されるがままで生きるのか？それを受け入れるのか！』

『黙れっ！何をしておるっ！早くこ奴を捕えろっ！いや、殺せっ！殺してしまえっ!!』

兵士たちが槍を構えながらディアンに近づく。だがその表情には戸惑いがあった。ディアンは極小の純粹魔法をムスカの乗る馬に放った。鼻先での爆発に驚いた馬が、棹立ちになる。ムスカは悲鳴を上げて馬から落ちた。だがそれ以上に、ディアンが魔法を使ったことに、兵士たちは驚いた様であった。ディアンが剣を抜いた。

『お前たちも思っているはずだ。こんな領主、こんな奴に従っていてよいのかとな。これまで領主に散々な目に合されてきただろう！お前たち兵士も、オレを取り囲みながら思っているはずだ！こんな仕事は本当はしたくないとな！』

民衆たちが騒ぎ出す。しかし兵士たちは忠実であった。ワッケンバインが鍛えぬいた精兵たちである。ディアンは剣を振るった。自分を取り囲む槍の穂先が落ちていく。

『……退っている……』

デイアンの一睨みに、兵士たちが後ずさる。ムスカへの一本道が開かれた。

『お前たちに代わって、オレが状況を変えてやる……』

一人に向けて、明確な殺気が放たれた。ムスカは尻餅をついて、後ずさった。

『ひっ……た、助けて……おい、お前たち……私を助けるっ！』

ムスカは直属の護衛たちに命令をしたが、彼らは後ずさると、そのまま民衆の中に逃げていった。ムスカの前にデイアンが立つ。ムスカが片手を上げて、デイアンを止めようとする。デイアンは剣を振るって、手首を斬り飛ばした。

『ひぎやあああつ!!』

『これは、いままで虐げられた民衆たちの痛みだ……そしてこれは……』

デイアンが剣を振り上げ……

『……オレをここまで不快にさせたことの罰だ……』

振り下した……

キンツ

ムスカの首筋の直前で、ワッケンバインが剣で止めた。ムスカは泡を吹いて気絶した。

『……先ほどの魔術、槍先を斬り飛ばす剣術、そして皆を黙らせる口先……見事な手管だ。だが、私は騙されんぞっ！』

『……騙したつもりはないがな……』

『……フツ!』

ワツケンバインがディアンの剣を押し戻し、斬りつけようとする。紙一重でディアンの後ろに飛びのいた。ワツケンバインは口元に笑みを浮かべながら、剣を納めた。

『……腕を斬り飛ばされたと告発したものは、どこかに消えたようだ。領主の片手を斬り飛ばされたが、殺せと言ったのは領主のほうが先であった。正当な自己防衛であることは私が認めよう。だが、このままでは領主の命に関わる。この場はこれで、おさめてくれ……』

ワツケンバインがディアンの頭を下げた。ディアンは剣を納めた。ワツケンバインは頷くと、民衆に向かって叫んだ。

『バーニエ領主、ムスカ・バーニエは病のため、当分は領主が務まらぬ! 街の警備は引き続き私が取るが、どのようにこの街を治めるか、街の有力者たちと話し合いをしてくれっ!』

民衆たちの中に、声上がる。それは次第に大きくなり、やがて街全体に広がった:

## 第三十三話：仕合前夜

暗愚な統治者であったとしても、民衆たちに直接影響する部分での統治が機能すれば、それなりに平穩を維持することができる。すなわち「公正な税制」「公正な裁判」「治安の維持」である。バーニエ領主であるムスカが暗愚である中、バーニエがそれなりに繁栄を維持できたのは、この三つを担う行政の役人たちが優れていたからに他ならない。バーニエは古来より人口が多かったため、経験のある役人の数も多かったのである。それでも、ムスカが行った混乱は、バーニエの輝きを失わせるに十分であった。商人の中には、バーニエに立ち寄りせず、そのままインヴィディアまで向かう者も多かったのである。

ディアンが、ムスカの手を斬り飛ばした事件のあと、街の中央にある行政府では役人の責任者が集まって、話し合いが行われていた。ワッケンバインが宣言した通り、ムスカを軟禁状態にして事実上の追放処分とし、当面の統治は、役人による話し合いで行われることが決まった。役人たちの多くも、ムスカにはウンザリしていたのである。だが、近隣では戦乱の中で、この豊かな街を維持するためには、統治者が必要であった。本来役人とは、与えられた目標を実現するための計画策定や、発生した課題に対する対処



は出来ても、目標そのものを考える仕事ではないからである。民衆が納得する統治者を選ぶとすれば、それなりに時間が必要であつた……

オレとレイナは、事情聴取のため政府の警備隊に呼び出されていた。事情聴取と言つても、帯剣を認められた客人待遇である。いわば形式的なものであつた。一通りの聴き取りが終わつたところ、ワッケンバインが部屋に入つてきた。

『改めて名乗らせて頂こう。バーニエ警備隊長のグラティナ・ワッケンバインだ。この度は、とんだご迷惑をお掛けしてしまつた。申し訳ない』

グラティナが頭を下げた。オレとレイナはその謝罪を受け取り、自分の名を名乗つた。グラティナは、レイナの姓がグルップであることに驚いたようだ。

『ひよつとして、劍聖ドミニク・グルップ殿は……』

『はい、私の父です。父を御存じなのですか？』

『知っているも何も……』

奇縁なことに、グラティナの父親は劍聖ドミニク・グルップの弟子であつた。皆伝の証である「護身の剣」を受け取り、バーニエの前警備隊長を務めていた。彼女自身は、父親から剣の手ほどきを受け、その職を継いだそうである。

『……十一年前の事件で、父も大きな衝撃を受けていた。当時九歳であった私は、どのような事情であったのかは知らないが……』

『……そうですか……』

『だがメルキア国には、グルップ殿の高弟、アウグスト・クレーマー殿がいる。彼はいま、メルキア国の万騎将となっているそうだ。彼なら、事情を知っているかもしれない……』

『メルキアに……クレーマーが……』

その話を聞いたレイナは、顔色を変え、拳を握りしめた。

領主ムスカの追放は、瞬く間にバーニエの街全体に広がった。最初は、民衆の多くが戸惑ったが、元々、混乱の元凶がムスカだったのである。当面の統治に影響がないことがわかると、民衆の顔にも久々の笑顔が戻った。事情聴取を終え、役所から戻ったオレたちをリタが待っていた。いつもの笑顔だが、心なしか、目が怖い。

『え〜 予定を少し変更しまして、バーニエの街に七日間ほど滞在したいと思います。行商店を出しますので、皆様、警護の程を宜しくお願いします。と・く・に！ディアン殿には毎日、しっかりと警護をして頂きますので悪しからず……』

『……なぜ、オレだけ毎日なのだ？』

リタはヒラヒラとオレに紙を見せた。見てみると、酒場の請求書である。そういえばあの時、他の客の請求はオレにつけてくれて言ったような・・・言ったな。

『・・・なんで酒代で、こんな額になるんでしょかね？ 今回の騒ぎを起こした原因であるディアン殿には、請求分をしっかりと稼いで頂きますっ！ 幸いなことに、あなたは今やバーニエの有名人ですので、あなたが警護をすれば、多くのお客さまがいらっしやるでしょう。ニッシッシッ！』

『・・・オレは客寄せか・・・』

隣でレイナが肩を震わせている。どうやら必死に笑いを堪えているようだ。

『さあ、気張って商売しますよ』

リタの元気な掛け声の後ろで、オレはため息をついた。

バーニエの政変は、すぐにメルキア国宰相プラダの知るところとなった。以前より、バーニエの街に諜者を紛れ込ませていたからである。

『・・・好機だ』

今やバーニエは、政治空白地帯と言える。役人たちは当面の維持は出来ようが、必ず統治者を求める。しかし人口八万人以上の都市の統治者など、一朝一夕で決められるも

のではない。その隙に、メルキアがバーニエの保護国として進出をすれば、勞せずして穀倉地帯を手にする事が出来る・・・

プラダは足早に主君のところに向かった・・・

グラティナは、自分の渾身の一振りをアツサリと躲した男について考えていた。劍は父から手ほどきを受け、自分でも磨き続けてきた。小柄であった父は、劍聖から「虚実の劍」を学んだ。足さばきと体速、そして技術によつて非力さを補う。虚と実を織り交ぜることで相手に隙をつくり、そこに斬り込む戦い方である。自分はそれを極めたつもりであった。半分はダークエルフである自分は、力と速さの両方を兼ね備えている。父を超え、劍聖とも伍すると密かに自負していた。その自分が、殺意は無かったものの、必中を期して放った一振りを躲されたのだ。それは、グラティナの自信を揺るがせるものであった。

あの男と仕合をしてみたい・・・

だが、行商人の護衛役として毎日夕刻まで店に貼り付いている。流石に店先で仕合をするわけにはいかなかった。グラティナは筆を取った。

店の警護中に、民衆から話し掛けられるのは、もう慣れてしまっていた。しかしグラティナの使いが、手紙を持ってきたときには驚いた。内容を見ると、仕合の申込である。今夜、街郊外で仕合をして欲しいとのことであった。正直、あまり意味のあることと思えなかったが、レイナも同じように仕合をしてから抱いたので、今回もその手で行こうかと考えた。あのダークエルフは、中々に魅力的だ。出来ればオレの傍におきたいと思うくらいである。オレは使いに了承したと伝えた。

『仕合?』

『ああ、グラティナが言ってきた。今夜、オレと立ち合いたいそうだ……』

『……ふーん……』

レイナがオレをじつと見る。何か罪悪感のようなものを感じていると、レイナがいきなり核心をついてきた。

『……ディアン、グラティナさんのこと、抱きたいんでしょう?』

オレは大抵の場合、顔に出さずにいられるのだが、この時は失敗した。

『……やつぱり……』

レイナが「じとつ……」とオレを見る。オレの使徒になるのだから、了承など必要ないと思うのだが、オレの中の何かがそれを許さない。しばらく視線に耐えると、レイ

ナは笑って言うてくれた。

『いいんじゃない？ 私あの人のこと、結構好きよ？ でも、ちゃんと朝までには、帰ってき  
てね』

オレは頷くと、愛剣を持って立ち上がった・・・

## 第三十四話：グラティナとの死合

「劍聖ドミニク・グルップ」の名は、アヴァタール地方東域を中心に知られているが、その半生は多くの謎に包まれている。その理由は、グルップ村の悲劇により、ドミニク・グルップの日記などの資料が、殆ど焼失してしまっているためである。ドミニク・グルップの晩年の高弟としては、メルキア国万騎将のアウグスト・クレーマーが著名であるが、彼がドミニクに弟子入りした時点では、既にグルップ村には多くの兄弟子たちが存在しており、何故、ドミニク・グルップは劍聖と呼ばれるようになったのか、その劍術はどこで学んだのか、などは解っていない。

ドミニク・グルップの研究において、第一級の資料としては、ドミニクの弟子であり親友でもあった「ワルター・ワッケンバイン」の手紙がある。彼はグルップ村が出来た当初から、ドミニクの弟子であり、「護身の劍」を受け取った最初の皆伝者と言われている。ワルター・ワッケンバインは小柄な体格ではあったが、ドミニクより「虚実の劍」を学び、その極みに達していたと伝えられる。またワルターは、弟弟子たちの面倒見が良く、謙虚で誠実な人柄であったと、複数の証言が残されている。ともすると苛烈になりがちなドミニクの劍術修行においては、ワルターの存在が貴重であったことは間違いない

いだろう。ワルターは日記を書く習慣を持たず、彼の半生もまた、歴史の霧の彼方ではあるが、ワツケンバイン家にはドミニクからの複数の書状が残っており、当時の中原の歴史および格闘戦術を知る上で、貴重な資料となつている。ワツケンバイン家に残された、劍聖ドミニク・グルップからの手紙には、このような一文がある。

『・・・過日の仕合において、貴殿より受けた技には、大きな衝撃を受けました。一撃で相手を屠る「極実の劍」があるとすれば、貴殿より受けた技は、いかなる人間も躲すことのできない「極虚の劍」と言えるでしょう。私の長い剣闘の人生において、他者の技を模倣したことは極めて少ないのですが、貴殿より受けた技は「極虚の劍」として、弟子に伝えさせて頂きたく、お許しを願いたい・・・』

劍聖をして「いかなる人間も躲せない」と言わしめた「極虚の劍」が、どのような業なのかは、残念ながら記録に残されていない・・・

緊急で招集された重臣たちの会議において、宰相ベルジニオ・プラダから「バーニエの政変」が伝えられた。プラダは、当初予定をしていた南方制圧を変更し、一軍をもつてバーニエに急襲し、示威行動と自治容認という「ムチとアメ」を使うことで、バーニエの役所責任者たちに開城させることを提案した。クレーマーは新兵の訓練状況を報



告した。クレーマー自身としては、あと一週間は欲しかったが、それは「陣形形成およびその変幻」という点での不安であり、軍としての規律を叩きこむという点では、既及第点以上を点けることが出来た。

『少々、訓練不足の感は否めませんが、バーニエへの急襲ということであれば、夜間行軍の訓練にもなりますので、私も賛成をします。ただ、出来ることならば精兵一千名を加え、三千の軍編成をお願いしたく存じます……』

『フム、その理由は、何か？』

『はい、バーニエは軍こそは少ないのですが、街内を保安する警備兵がいます。彼らの装備は我が軍よりは劣りますが、練度という点では、決して退けは取りません。また、それを指揮する指揮官も優れています……』

『その指揮官の名を知っているのか？』

『はい、私の兄弟子であるワルター・ワッケンバインの一女、グラティナ・ワッケンバインです。父親から手ほどきを受け「バーニエの黒豹」と呼ばれるほどの腕前と聞いています』

クレーマーの進言により、一千名の緊急動員が決定した。後年のメルキア帝国では兵農分離が進んでいたが、この時代ではまだ兵士專業という者は少なく、特に優秀な兵士のみが「専門兵」として雇用されていた。今回の出兵では、メルキア国の専門兵全員を

動員することになる。

会議後、クレーマーは僅かな時間ではあったが、自室にて休息を取った。だがとても眠れるものでは無かった。相手は「バーニエの黒豹」である。剣で劣るとは思わないが、師に次いで自分が慕っていた兄弟子の一女である。出来れば、戦いたくはなかった。クレーマーはため息をついて、目を閉じた。

翌朝、日の出と共にメルキア国の兵士三千名が、バーニエを目指して出陣をした。夜間行軍を兼ね、四日間でバーニエの街郊外に着陣する予定である。主君ルドルフ・フィズメルキアーナを総大将とし、陣頭指揮は万騎将アウグスト・クレーマー、調略およびバーニエとの外交折衝はベルジニオ・プラダが担当する。必勝を期した出陣であった。だが、彼らの情報には漏れがあった。バーニエの街には、その十倍の兵を持ってしても不足するほどの力を持つ「魔神」がいたのである。

グラティナの仕合に応じたオレは、レイナの許可を得て、バーニエ郊外の草原に足を見た。雲一つない夜空に、紅い月が出ている。気の強いオンナを抱くにはピッタリの夜だ。約束の場所には、グラティナが先に到着をしていた。

『待たせたようだな、ワッケンバイン殿……』

『グラティナで良い。気にするな。こちらこそ、一方的な仕合の申し込みを受けて頂いたこと、感謝をする』

『いや、まあそれなんだが・・・』

オレはグラティナに切り出した。

『正直、あまり気が乗らんのだ。やはり帰っても良いか?』

『なに・・・怖気づいたか!』

『そういうことにしておいてもいいんだが・・・要するに、オレに何の得もないのだ。グラティナに勝つても得るモノは無いし、負ければ痛い思いをするだけだからな・・・』

『貴様・・・剣士としての誇りは無いのか?』

『無いな。オレは剣は使うが「剣士」ではない・・・』

グラティナが歯ぎしりする。そして、オレが望んでいる展開へと繋いでくれた。

『では、どうしたら仕合を受けてくれる・・・』

『うん、オレのやる気を起こさせてくれ。勝ったら得るモノが欲しい』

『なんだ?カネか?』

『いや、お前だ・・・』

『?』

グラティナは理解できていないようだ。やはり男を知らないらしい・・・

『オレが勝つたら、お前を抱かせろ。そうだな．．．バーニエに滞在する五日間、毎晩抱きたいな．．．』

『なっ．．．』

グラティナが驚き、そして．．．明確な殺気を放ち始めた。

『貴様．．．レイナ殿がいながら、よくもそのようなことを平然と．．．』

『レイナも承知しているぞ?』

『．．．なん．．．だと．．．?』

『お前には理解できないかもしれないが、オレとレイナはそういう関係なのだ。オレに抱かれ続ければ、お前も解るようになる．．．』

『解りたくないわっ!』

グラティナが怒気を発した。殺気の鋭さと気迫は、正に「バーニエの黒豹」と呼ばれるに相応しい。

『．．．で、どうする?』

『．．．わかった。いいだろう．．．』

『オレが勝つたら、五日間は毎晩、オレに抱かれるんだ。それでいいな?』

『構わんっ! どうせ勝つのは私なのだ。お前のその穢れた殖栗を切り取ってやる．．．』

『．．．怖いな．．．』

グラティナは剣を抜いた。オレも抜剣する。オレたちは、もはや仕合ではなく「死合」となっていた。

『では……いくぞっ!』

剣を構えたグラティナの姿が消える。次の瞬間には背後から斬りかかってきた。オレは振り返ることなく、剣を背に回して剣を受け止めた。

『……凄いな……』

『まだまだっ!』

グラティナの躰が宙を舞う。まるで舞のように美しい。

『月虹剣舞ッ』

凄まじい連撃がオレに襲いかかる。オレは魔神剣でその連撃を全て弾き返した。グラティナが飛びのく。

『枢孔円舞剣ッ』

グラティナは、オレの間合いの外から、半円を描く複数の剣撃が放つ。オレは半分を躲し、残りは剣で受け止めた。

『……クツ……化け物め……』

グラティナの表情から焦りが出始めていた……

目の前の男の嫌らしい目つきに、私は感情的になった。ムスカとのやり取り、あの豪胆さと手管に、私は素直に尊敬の念を抱いた。だからこそ、仕合を申し込んだのだ。だがこの男は、その仕合をダシに私を抱こうとしている。しかも許せないことに、既にレイナ・グルツプという相手がありながらだ。仕合と言ったが、私は殺すつもりで剣を抜き、斬りつけた。

『……凄いな……』

必中を期した一撃が、またしても防がれた。だが私の意志は挫けない。この男を殺してやる！連撃を放った時には、斬ったと思つた。だが全てを防がれる。私は信じられなかった。この男が使う剣は、大型剣より一回り小さい程度だ。普通の人間では両手でも使いこなすことは難いだろう。だがこの男は、その剣を信じられない速度で振る。それも片手でだ。人間とは思えない膂力と速度だ。

私は次第に、焦り始めていた……

グラティナは「虚実の剣」を使う。その水準はヒトとしては最高域と言えるだろう。速さと力の双方を兼ね備えている。余裕で躲しているように見せているが、実際はギリ

ギリだ。そろそろこちらから仕掛けないと危ない。

『では……今度はこちらから行くぞっ!』

・・・虎爪斬

ギインツ!

剣に鬨気を込めた「実の一撃」を放つ。グラティナを斬るわけにはいかないから片手で振り下ろした。彼女は剣を両手で支え、それを受け止めた。余程の名剣なのだろう。並みの剣であれば、剣ごと真つ二つになっている。だがオレの一撃を受けて無事でいられるはずが無い。彼女は片膝をついて、劍撃を逃がすと、転がって距離を取った。

『……良く受け止めた……』

オレは笑みを浮かべ、賞賛した。

一合を交えれば、相手の剣の質が分かる。この男は「実の剣」を使うと予想していた。そして実際に予想通りだった。予想外だったのは、その速さと重さである。

・・・虎爪斬

実の剣としては、知られた技だ。受け流して反撃する技も持っている。だがこの男の剣は、とても受け流せる代物ではない。気づいた瞬間には間合いに入られ、剣を振り下

ろされていた。両手で辛うじて受け止めた。

重いつ・・・

父から譲られたこの剣でなければ、私は死んでいただろう。しかもこの男は、片手で実の剣を放った。私は、手加減をされていたのだ。このままではとても勝てない。私は、最後の技に賭けることに決めた。

父から教えられた「極虚の剣」に・・・



## 第三十五話：極虚の剣

デイルⅡリフイーナに存在している多様な「知的生命体」の中で、人間族に次いで数が多いのが「エルフ族」である。エルフ族は原初の種族とされ、デイルⅡリフイーナが誕生する以前の「ネイⅡステリナ」において繁栄をしていた。エルフ族はその多くが、第二級現神「ルリエン」を信仰している。エルフ族は、自分たちが暮らす森（メイル）の中に、ルリエン神殿と呼ばれる（聖地）を作り、聖地を守るように「杜」を形成する。つまり「杜」単位でルリエン神殿が存在しているが、ルリエンを信仰するという点では同じである為、部族間の争いは殆ど無い。

しかしそのエルフ族の中にも「闇夜の眷属」が存在する。ルリエンと戦い、その下半身を奪った闇の太陽神ヴァスタールを信仰するエルフ族が存在している。ルリエンを信仰する光側のエルフをルーンⅡエルフ、ヴァスタールを信仰する闇側のエルフをヴァリⅡエルフと呼ぶ。光と闇に分かれるこの二族は、互いに対立をしているが、人間族のように対立即戦争という関係ではない。「相手に関わらず、無視をしあう」という関係可言える。

ヴァリⅡエルフの特徴は、その外見にある。ルーンⅡエルフと比べて、黒、あるいは

褐色の肌を持つ場合が殆どで、男性は体格が良く、女性は豊満な体つきをしている。また生き方についても特徴が見られる。ルーンⅡエルフは、その生涯の殆どを一箇所の森の中で暮らし、己自身を見つめ続ける生き方をするが、ヴァリⅡエルフは特定の住処を持たず、各地を移動しながら暮らし、己の強さを求める傾向が見られる。これは、ルーンⅡエルフがルリエン信仰によって知性と長寿を得ていることに対し、ヴァリⅡエルフはヴァスタール信仰によって強さと長寿を得ている為、と考えられている。

ヴァリⅡエルフの女性は、自分より強い異性に対して、無条件に近い尊敬の念を抱く。また情愛が深く、その生涯を通じて一人の異性に尽くし続けることが多い。そのため「ヴァリⅡエルフを妻に持つことは、男の夢」とまで言われている。しかしそれには、人越の力を持つヴァリⅡエルフの女性を闘いによって降すことが最低条件となるため、人間でありながらヴァリⅡエルフを妻とした例は、ラウルバーシユ大陸の歴史上でも数えるほどしか存在しない。

### 「極虚の剣」

体格に恵まれなかったが故に、「虚実の剣」を極めたと言われる剣豪「ワルター・ワツケンバイン」が生み出した、「絶対必中」の剣である。グラティナはこの剣に賭けた。こ

の剣を出せば、目の前の男は確実に死ぬ。グラティナは既に、ディアンの強さに対して敬意を抱いていた。故に、父から教えられた「虚実の最終奥義」を出すのである。

(レイナ殿・・・許せよ・・・)

グラティナはディアンに対して告げた。

『次に出す技が、私の最後の技だ。万一でもこの技を躲すことが出来たら、私の敗けは確定する』

『・・・いいだろう。躲して見せよう・・・』

『・・・やってみせろ・・・』

グラティナは瞑目し、心気を統一した。気が充実し、五体の末端にまで闘気が伝わる。

『こぎゃっ・・・』

剣を構え、やや前かがみになりながら、グラティナはディアンに向けて、全速で直進した。互いの間合いが近づく。ディアンの間合いにグラティナが入る瞬間、グラティナは前かがみのまま、翼を広げるように高速で両手を広げた。ディアンの眼が、グラティナの利き手である右手に向けて動く。だが・・・

右手には、あるはずの剣が無かった・・・

『極虚剣技・天馬乃一突ッ』

技の名前が微かに聞こえたような気がした・・・

『・・・虚の極み、ですか・・・？』

龍人族の村での修行中、ディアンは剣術の師であるリ・フィナから「実の剣」を学んでいた。如何なる防御をも打ち砕き、一撃で相手を屠る「極実の剣」があるのなら、その真逆の「極虚の剣」というものは存在しないのだろうか？そう思ったディアンは、リ・フィナに質問をした。

『・・・そうですね、聞いたことはありませんが・・・』

リ・フィナは首を傾げた。やがて笑いながら

『想像ですけど、もし虚の極みがあるとすれば、実の真逆・・・つまり防御を打ち砕くのではなく、防御そのものが出来ない。「絶対必中の剣」ということになるのでは？ね』

『絶対必中の剣・・・それはつまり「極実の剣」と同じではありませんか？』

『虚実表裏一体です。極みに達すれば同じなんですよ。もしそのような剣があるのであれば、是非、見てみたいですね、聞きたいとは思いませんけど・・・その技を出されれば、確実に死ぬのですから・・・』

ぞわっ・・・

グラティナの右手に剣が握られていないことを見たオレは、凄まじい悪寒を感じた。殆ど衝動的に上体を後ろに反らす。それが最も速い回避方法だったからだ。同時に、下から剣が襲ってくる。

(バカなっ・・・手が三本あるというのか?)

剣先がオレの喉に届き、そのまま貫いてくる。オレは人外の数度で、上半身を後ろに反らし続けた。剣先が喉を切り裂き、顎の骨を削る。オレはそのまま後ろに倒れ、一回転してグラティナとの距離を取った。

ゴボツ・・・

大量の血が滴る。喉から顎にかけて、かなり深く切られていた。傷は気管や声帯にまで届いている。人間なら間違いなく死んでいる。いや、これを躲しきれる存在などいるのかとさえ思った。グラティナは右足を上げたまま、呆然とした様子でオレを見ていた。

『お、恐ろしい技だ・・・まさか、剣を足で扱うとは・・・』

オレは回復魔法を使いながら、枯れた声で呟いた。ヒューという音が混じる。

『あ、アレを・・・躲したのか・・・』

『いや・・・躲しきれなかった・・・』

オレは「天馬乃一突」という技について想像を巡らせていた。剣の柄を足で持ち上げ、相手の喉を突く技だということは理解できた。恐ろしいのはその過程だ。誰しも剣は「手で扱うもの」と思い込んでいた。実際、グラティナも常に手に握って闘っていた。故にどうしても、意識は上半身に向かう。前かがみで剣を構えて突進して来れば、次の動きを想定してこちらも構える。間合いに入る瞬間に、翼のように両手を広げられれば、剣を握っているであろう利き手に目を向けざるを得ない。その瞬間、意識の外から高速で剣が突き上げられてくる。オレが辛うじて躲したのは、ほとんど偶然のようなものだ。普通の人間であれば「何をされたかも解らずに」死ぬ・・・

グラティナは剣を失った。足で突き上げた剣は、オレの喉に突き刺さることなく宙を舞ったのである。回復魔法によって傷をふさいだオレは、グラティナの剣を取りに行つてやった。グラティナは坐り込んでいる。剣を拾い上げたオレは思った。

(もし、この剣が小指一本分でも長かったら、オレは死んでいた・・・)  
オレは深いため息をついた・・・

私は信じられなかった。仕掛けの機、速度ともに完璧なはずだった。技をしくじった

とは思わない。実際、男が上体を反らし始めた時には、剣先は既に喉元に届いていた。だが、この男は人外の速さで上体を反らし、剣が突き上げられるよりも速く躲したのだ。人間には絶対に不可能だ。目の前の男は人間ではない、そう思わざるを得なかった。男が剣を私に差し出した。私は男を見つめながら言った。

『お前……人間ではないな?』

『ああ……オレは半分、人間ではない。だが、それを言うならお前もそうだろう?』

『……』

そう、私にはヴァリエルフの血が半分流れている。そのことについて後ろめたいと思つたことは無い。陰口を叩く奴もいるが、私に勝てないからそうせざるを得ないのだ。私はヴァリエルフ、そのことに誇りさえ持つている。男を見上げた。傷は既に塞がっているようだが、服は血塗れのままだ。紅い月の光によって、更に紅く見える。私 はため息をついて笑みを浮かべた。

『……私の負けだ。強いな、お前は……』

『ほとんど偶然の勝利だ。もう一度、あの技を躲す自信は無いな……』

『……負けは負け、勝ちも勝ち……だ……』

『ああ、そうだな……では……』

男はいきなり、服を脱ぎ始めた。月に照らされ、男の上半身が浮かび上がる。紅い光

を受けたその躰は、私の思っていた以上に鍛え上げられていた。私は見惚れ、そして弾かれたように慌てた。

『な、何をしているのだっ?』

『なについて・・・約束だろ?』

男は私を押し倒した。私の頭は混乱していたが、男の匂いに包まれると、なぜか躰が熱くなった。

『ここ・・・ここですか?せめて、どこかの部屋で・・・』

『いや・・・この満天の星の下で、お前を抱きたい・・・』

男は私を見つめてそう言うと、私に唇を重ねた。私はそのまま・・・

・・・男を受け入れた・・・

紅い光によって、女の肌はさらに褐色の色味を増した。最初は固かった躰はすっかり蕩け、鋭かった目つきも喜悦で緩んでいる。男の腕の中で、女は幾度となく果てた。女は初めて知る喜悦に翻弄されながら、男の首に腕を回した。体位が変わり、女が上になる。下から両手で胸を掬い上げられながら、女は悦びの声を上げた。紅い月と満天の星空が二人を祝福していた・・・



## 第三十六話：新しい仲間

ラウルバーシユ大陸では、一般的な通信手段は手紙しかなかった。庶民は行商人に手紙を託し、家族や友人に近況を伝えていた。魔法を用いた通信手段も存在していたが、これは発信者と受信者の双方に魔術師が必要であり、ごく私的な関係の中で使われていたと言われている。

一方、都市の行政単位で使用される通信手段も存在していた。これは都市内で発生した火事や河川の氾濫などの災害対策に用いられていた。一般的には、都市近郊に櫓を建て、鐘を鳴らすことで伝える方法であった。「近隣からの侵略に備える」という面での通信手段を最初に用いたのはメルキア国だと言われている。メルキア国では、自勢力内に複数の「狼煙台」を建設し、一日三回「日出・真昼・日没」に、煙の色で状況を知らせる方法を取っていた。とは言っても、平常時は白色、異常時であれば黒色、緊急時であれば赤色、と三種を使い分けるだけであり、具体的にどの様な異常事態、緊急事態が発生しているのかを伝えるには、早馬による口頭伝達しか無かった。通信手段が大幅に進歩を遂げるには、五百年後のヴァイスハイト・フィズメルキアーナの治世において開発された「魔導通信」の技術を待つしかない。

メルキア国首都インヴィディアを出陣した三千の「バーニエ制圧軍」は、新兵とは思えない速度で西進していた。当初は四日間の行軍を計画していたが、三日目にはバーニエ近郊に着陣できそうな速度である。出陣初日の夜、クレーマーは糧食が入った器を持ちながら、紅い月を眺めていた。行軍中のため、糧食は豊かなものではない。塩湯に小麦を練った塊を三つほど入れ、それが程よく溶けた汁だけである。バーニエ近郊に着陣をしたら、近隣から牛や豚などを購入し、一日の休憩を入れる予定だ。バーニエへの侵攻は五日目ということになる。月を眺めるクレーマーに、副官が声を掛けてきた。

『クレーマー殿、あと四刻後には出発します。少し、お休みください。』

『ああ．．． もう少しだけ、月を眺めていたい．．．』

副官は一礼して下がった。クレーマーは月を眺めながら、昔のことを思い出し出していた。自分が剣聖に弟子入りをした時に、よく面倒を見てくれたのが大兄弟子のワルター・ワツケンバインであった。師とも親友で、ちょうど同じ時期にお互いに娘が生まれたため、クレーマーが世話を命じられることも多かった。師と大兄弟子の娘を並べて、オシメを替えたこともある。

『レイナ嬢とグラティナ嬢．．． 良い友人になるだろうと思っていたのだが．．．』

クレーマーは器を空にすると、幕舎に戻った。

グラティナとの死合の翌朝、デイアンは日の出前に宿に戻った。自室に戻るとレイナが眠っている。普通のオンナであれば、妬心ですつと起きているであろうが、レイナのデイアンに対する想いは、その遙か高みにある。安心して眠っているレイナの横に、デイアンが腰を掛けた。レイナが目を覚ます。

『すまない……起こしてしまった……』

『ううん……終わったの……？』

レイナは血の臭いに気づいた。慌ててランプを灯すと、血塗れのデイアンがそこにいた。口を手で押さえて悲鳴をこらえると、デイアンの服を脱がし、濡らした布で軀を拭く。傷は既に塞がっており、痕も見えないが、余程の死闘であったことは容易に想像できた。

『……強かったのね、グラティナさん……』

『ああ、強かった……一歩間違えたら死んでいたよ……』

デイアンは未だに、レイナに剣の修行をつけている。技だけならば、既に自分に伍する腕に達していた。流石に「剣聖の娘」である。だがグラティナは、デイアンが初めて

出会った「虚実の剣」の使い手であった。これまで見たことも無い技の数々に、ディアンは素直に感動していた。もし、レイナとグラティナがお互いに修行をしあつたら、二人ともさらに強くなるだろう。

『……血の匂いが落ちないわ……』

『そうだな……リタに頼んで、今日は浴場に行こうか。レイナに洗って欲しい……』  
レイナは笑顔で頷いた。

日の出前に家に戻った私を母が迎えてくれた。どうやら起きて待つていてくれたらしい。自室に戻り、躰を拭いた。

『……うつ……』

男の放った精が、太腿を伝ってくる。子が出来ることは無いと言いながら、あの男は私の中に三度も精を放った。そのたびに、私は真つ白になってしまった。男に抱かれるなど、考えたことも無い私にとって、今夜の出来事は一生、忘れられないだろう。信じられない程の快感だった。レイナがああ男から離れない理由が何となくわかった。

『レイナ殿は、毎日のようにあんな快感を得ているのか……』

心のどこかで、羨ましいと思う気持ちがあるのを否定できなかつた。冷たい水で顔を

洗う。これまで男から声を掛けられたことは幾度もある。自分に勝てるならと伝えると、無謀にも挑戦してきた男もいた。そして私は、ついに負けた。これから数日間は、毎晩あの男に抱かれる。あの男の腕の中で、快感に酔いしれることになる・・・

『・・・くっ・・・』

頭を振って気持ちを切り替える。あの男は行商人の護衛役だ。そして私は、この街の警備隊長なのだ。ほんの一瞬の邂逅に過ぎない。あの男に囚われてはいけないのだ。着替えをして居間に行くと、母が朝食を用意してくれていた。そういえば、昨日の昼以降は何も食べていない。母と向かい合う形で座る。スープを口にしようとする、母が言った。

『・・・男を知ったのね？』

私は思わず、スプーンを落とした。

『母上、私はっ・・・』

『いいのよ。あなたに刻める男が現れて良かったわ。あなたは強すぎるもの・・・』

『・・・』

母はしばらく黙って私を見つめた。私は俯いたまま、スープにすら手を出せなかった。母が話し始めた。

『ティナ・・・私は実家に戻ろうと思います・・・』

『……えつ……』

『あの人が死んで、もう三年になります。そろそろ、気持ちにも区切りが必要でしょう。ハレンラーマには私の親族もいますし、そちらに移ろうかと思つています……』

『母上……』

『だから貴女も、貴女の望む通りに生きなさい。その男に、着いていきたいのでしよう？』

『………』

私は自分でも、どうしたら良いのか解らなかつた。あの男にはレイナがいる。自分が入ることなど出来ないだろう。だが、本当は……

『会つてみたいわね。あなたに刻んだ男に……きつと、魔神のように強いのでしようね……』

母は笑いながら、私に食事を勧めた。私は頷いて、スプーンを手にした。

意外なことに、リタはあっさりと了解してくれた。リタ曰く

『ニツシツシツ！商売繁盛大儲け！いやあ、バーニエがここまで物資不足とは思わなかつたよ。七日で売る予定だったのに、初日で殆ど売り切れちゃいました。他の行商

人たちも店を出し始めているし、あとはインヴェディアで売る予定なので、店は今日で御仕舞です。明日はお休みにして、明後日に街を発ちましょう』

レイナと共に浴場に行ったオレは、ようやく血の匂いから解放された。グラティナと同じように、レイナも三度抱く。愉悅の余韻に浸りながら、湯船に漬かる。レイナに今夜もグラティナのところに行く旨を話すと、レイナは少し考えて言った。

『……グラティナさんも、使徒にしようと思っているの?』

『……将来的にはな……』

『……』

レイナは迷っているようだ。グラティナを使徒にすることには反対ではない。だが、自分とグラティナのどちらを大事に思っているのかで迷っているのだ。オレはレイナに告げた。

『これからも使徒は増えるだろう。第一使徒はお前だ。約束する。オレの寝顔は、お前以外には見せない……』

一度だけ、オレの太腿を抓り、レイナは笑顔になった。

男が用意した部屋は、街の中でも値の高い宿であった。部屋の隅に、護符のようなも

のが貼られている。「歪魔の結界」というらしい。どれだけ声を出しても隣に聞こえないようだ。レイナはこの結界の中で、喜悦の声を上げているのだろう。薄明りの中で、私は男に押し倒された……

『……オレたちと一緒に来ないか?』

男は私をそう誘った。男の胸の上で余韻に浸っていた私は、思わず顔を上げた。

『レイナも承諾している。一緒に、この世界を回ってみないか?』

『だが……私にはこの街の警備という仕事がある』

言い訳に過ぎない。ムスカが居なくなっただけで、警備の仕事も大幅に楽になった。副隊長でも十分に務まるだろう。男もそれを見越しているようだ。

『今すぐに返答する必要はない。オレたちはインヴィディアに行き、またこの街に戻ってくる。その時に返事を聞かせてくれ……』

私は頷いた。自分の中では、既に答えは出ていた。

バーニエの街に滞在をしてから五日目は休日だった。他の警備たちも気ままに街に出ている。オレとレイナも街の散策に出た。バーニエは古くから交易の中継地として栄え、多様な文化が交流している。レイナは、東方で鍛えられたという片刃の剣などを



見ている。レイナの剣もそろそろ替え時だろう。オレはレイナに声を掛けた。

『古の宮に行けば、ドワーフ族が鍛えた剣もあるだろう。良い剣を見つけたら、買ったかどうか？』

日も傾きはじめ、食事に戻ろうとしていたら、グラティナが馬で駆けつけてきた。顔に焦りがある。

『ディアン殿、レイナ殿！一大事だっ！』

『どうした？』

『メルキア軍が近づいている！どうやら、この街を攻める気のようにだっ！』

レイナの顔つきが変わった・・・

## 第三十七話：政治

首都インヴェディアを出陣してから三日目の夕刻、主君ルドルフを総大将とする「バーニエ制圧軍」は、バーニエ近郊に着陣した。直ちに幕舎が張られ、主君以下、主だった者たちが集められた。参謀長のプラダが、今後の方針を説明した。

『早速、バーニエに使者を出しましょう。メルキア法の遵守と税制を受け入れれば、都市としての自治を認めると伝えます。明日一日、話し合う時間を与え、明後日の朝に返事を貰いましょう』

『受け入れなかった場合はどうするのです？』

『その時は……仕方がありませんね……』

攻城用の兵器などは、一日遅れで到着をする予定だ。つまり明日一日というのは、メルキア軍側の都合でもある。ルドルフは頷いて立ち上がった。

『今回の出兵は、バーニエの政変を好機と捉えた緊急のものだ。あまり時間は掛けたくない。無血開城こそが、最も望ましい。そのためならば、多少の譲歩は認めても良いだろう。プラダ、交渉のほうは任せたぞ。クレマーは万一の戦に備え、兵を引き締めおくように……』

両人が頷く。ルドルフは言葉をつづけた。

『常に言っていることだが、民衆への略奪、暴行はこれを厳に禁ずる。違反する者は、如何なる身分の者であろうと極刑に処す。全軍に徹底させるように。』

幕舎から出たクレーマーは、調達隊を集めさせた。近隣の村々から食糧を調達するためである。

『穀類および肉、野菜などを中心に調達せよ。くれぐれも丁重に、礼節をもつて接するのだ。中には「供出」を申し出る者がいるかも知れないが、それは一切認めん。街価の二倍の額で、きちんと対価を支払うように。』

後世、アヴァタール地方の大帝国となるメルキアには、ラウルバーシユ大陸一と言われる厳しい軍規がある。総大将から兵士まで、戦場では全員が同じ糧食を採る。この三日間は、主君ルドルフですら、塩湯しか口にしていない。調達隊を一睨みした後、クレーマーは笑顔で告げた。

『明日は肉を喰らつて、大いに鋭気を養うぞ。俺も出来れば酒が欲しいが、それはバーニエの酒場まで残しておこう。』

場に笑いが満ちた。

バーニエの街は混乱に満ちていた。メルキアの大军が押し寄せてきた、この街を焼き払うと言っている、などの噂が飛び交い、街を脱出する者などが続出した。

「降伏か、交戦か」

きちんとした責任者がいれば、方針を決定して指示を出し、民衆の混乱を鎮めることが出来ただろう。だが統治者なき現在においては、役所も対応をすることが出来ず、混乱は深まる一方であった。行政府には主だった役人が集まったが、まとめ役を欠いた会議では、話し合いは混乱し、收拾がつかない。その中で、メルキア軍からの使者が来訪した。参謀長ベルジニオ・プラダからの降伏勧告である。使者が書状を読み上げる。

『我々メルキアは、いたずらに戦を好むものではない。開城し、速やかに降伏をすれば、メルキア国の保護の下、バーニエの自治を認める。なお、責任者を含め全ての役人、全ての民衆の生命と財産は、これを完全に保証することを確約する』

『・・・メルキアの保護とは、具体的にどのようなものか？』

役人たちの質問に、使者が更に読み上げる。その質問があることも、プラダは見越していた。

『メルキア国の保護とは、メルキア法の遵守およびメルキア国の税制を受け入れること、メルキア国軍の常駐を認めること、以上の三点である。なお、返答は明後日の真昼までとする・・・』

役人たちはそれぞれに顔を見合わせた。条件としては悪いものではなかった。自分たちも民衆も、生命と財産は保証される。つまりこれまで通り、役所での仕事を続けることを認めているのだ。またメルキア国の法や税制は、バーニエよりも優れている。メルキア国軍が常駐すれば、北に横行している盗賊たちに悩まされることも無くなる。つまり、良いことづくめなのだ。統治者がいれば、自分の立場を守る為に反対をするであろうが、幸いなことに自己保身を考えるであろう統治者は不在である。だが・・・

「誰が最終的に決定をするか」

この一点が問題であった。役人たちは今後もバーニエに住み続ける。誰が決めても「アイツが降伏を決めた」と言われ続けるのである。そのことを考えると、簡単に責任者を引き受けられるものではない。これは責められることでは無い。誰しも、自分自身や家族が大事なのだ。

『・・・それでは、明後日の真昼に、お返事を頂戴いたします』

メルキア国の使者が一礼して去る。部屋の中に沈黙が流れる。その中で、警備隊長のグラティナが発言をした。

『降伏をするにしても、あちらの言われるがまま、されるがままというのは癪ではないか？もう少し、譲歩を引き出せないだろうか・・・』

この発言で、再び議論は沸騰した。グラティナの意見に真つ向から反対する者もいれ

ば、賛同の声を挙げる者もいる。まとめ役を欠いた話し合いでは、場を動かす一言を発したものが、自然とまとめ役になっていくものだ。いつの間にか、議論はグラティナを中心に進んでいた。夜半になり、ようやく議論がまとまってきた。

『……つまり、降伏はする。だがその前に一度、話し合いの場を持ちたい。そういうことで宜しいか?』

全員が頷く。だがそうなると、誰が話し合いの交渉役となるかが問題だ。一軍を相手に交渉となると、命懸けである。グラティナが意見を出した。

『私一人が交渉をするというわけにはいかないだろう。私は口下手だしな。幸いなことに、交渉役としてうってつけの人物がこの街にいる。物事を公平に見ることが出来、口が達者で、しかもこの街には縁が無い男だ。現在の状況を創った元凶でもある。彼に交渉役を担ってもらおう……』

『……交渉役? オレがか?』

夜半、宿に来たグラティナから、交渉役を担ってほしいと言われた。役所での話し合いの状況を聴くと、どうも良く解らない。

『……話し合うと言っても、具体的にどのような譲歩を引き出すのだ? 目標が解らなけ

れば、話し合いようが無いだろう……』

『うむ、そうなんだが……』

グラティナの様子に、オレは察した。

『……要するに、ゴネたいわけだな？』

『身も蓋もない言い方だが、そうだ』

使者が来て、一方的に降伏をしたとなれば、後で民衆から責められる可能性がある。降伏をするにしても、話し合いの場を持ったという事実を残しておけば、その後の言い訳になる。オレは言い訳づくりのダシというわけだ。グラティナが言葉を続けた。

『この街の住人ではないお前に、このようなことを頼むのは気が引けるのだが、お前以外に候補者がいないのだ。ムスカ追放のきつかけとなつたお前は、この街でも名が知られているし、話し合いの後はずぐに街からいなくなる。条件としてピッタリなんだ……』

オレは少し考えて、返答した。

『わかった。引き受けよう。ただし、話し合いにあたって、向こうに要望を出して欲しい』

『どのような内容だ？』

『一つ、話し合いである以上は、対等な「座」を設けて欲しい。こちらからは街代表として、オレとレイナとグラティナの三名が出席する。先方からも、総大将以下三名を出す

ように伝えてくれ』

『了解した』

『二つ、対等である以上は帯剣を許可して欲しい。向こうは三千、こちらは三名だ。それぐらいいは認めて欲しい。三つ、万一、決裂をした場合でも、民衆の生命と財産を守ると確約して欲しい』

『決裂だと！決裂するような話し合いにするつもりなのか？』

グラティナが慌てたようにオレに詰め寄る。オレは笑みを浮かべて返答した。

『それが、交渉役を引き受ける条件だ。決裂することも覚悟しておいて欲しい』

『……決裂する時は、どんな時なのだ？』

『……オレが、向こうの総大将を斬ったときだ……』

私は久々に、彼と褥を共にしていた。彼は「お前以外に寝顔は見せない」と言ってくれた。その言葉通り、彼女を抱いた後も、夜明け前には必ず戻ってきてくれた。だから私の中に、彼女に対する嫉妬は無い。彼は私を大事に思ってくれている。

『いよいよね……』

『ああ、明日が楽しみだ……』



そう。明日の昼に、いよいよ父の仇と対面する。ルドルフ・フィズメルキアーナ：あの男を斬る為に、私はここまで来た。彼は「自分が判断する」と言っただけで、斬れと言うに決まっている。あの男は侵略者だ。父を殺し、村を焼き払った極悪人なのだ。

『オレが合図する。ルドルフを斬るのはレイナ、お前だ……』

私は頷いた。

『話し合いの座、ですか……』

主君の幕舎の中で、クレーマーは首を傾げた。武人であるクレーマーには、こうした政治は理解できない。笑いながらプラダが説明をした。

『要するに、言い訳づくりなのです。役人は自分で決めることを恐れます。後で責任問題になりますからね。ちゃんとした話し合いの場を持った、ということにすれば、後々で言い訳ができますので……我が君、明日は私とクレーマーのみで十分に御座います。帯剣をする場に、我が君をお連れするわけにはいきません……』

『ウム……向こうの使者は誰なのだ？』

『えー……うん？これは……』

プラダは報告書を読んで顔色が変わった。プラダが声を出す。

『向こうの使者は、ディアン・ケヒト、グラティナ・ワツケンバイン、そして……レイナ・グルツプ……』

クレーマーは思わず立ち上がった。だが立ち上がったのはクレーマーだけでは無かった。主君ルドルフも同じく立ち上がっていた……

## 第三十八話：言葉の力

クレーマーは眠ることが出来なかった。レイナ・グルップの生存を知った時、思わず涙を浮かべた。明日、十一年ぶりに顔を会わせることになる。「よくぞ生きていて下さった……」素直にそう喜んだ後で、クレーマーは不安に思った。

（私は、どのような顔をして嬢に会えば良いのだ……）

十一年前、当時八歳であったレイナ嬢は、自分がメルキア国の武将であったことは知らない。あの悲劇は、新参の武将が暴走したことが原因だ。だが、メルキア国の名で攻め込んだ以上、メルキア国の責任なのだ。そして自分は、今やその国の軍事を預かる身である。大兄弟子は理解をしてくれたが、事情を知らない者には「裏切り者」と思われなくても仕方がない。そして恨みの矛先は、自分に対してだけではないだろう。主君ルドルフに対しても、激しい怨恨を抱いているはずだ。万一の時は、何としても主君を護らなければならぬ……

『レイナ嬢……早まった真似だけは、して下さるな……』

暗闇の中で呟いた。

バーニエの街から一里（約4km）の小高い丘が、話し合いに指定した場所である。デイアンは、レイナとグラティナを連れて、徒歩でその場に向かっていた。

『なぜ、馬を使わないのだ？』

グラティナの問いかけに、デイアンは笑って答えた。

『今回は座を用意してもらった。馬上での話し合いじゃない。オレたちは街の代表、つまり民衆の代表だ。徒歩で行った方が、それらしく見えるだろう？』

実際の理由は違う。ルドルフを斬ったら即、戦争になるだろう。その時はデイアンは魔神化してメルキア軍を極大純粹魔術で全滅させるつもりだった。自分の馬を巻き込みたくなかっただけである。だがその理由は、グラティナにする必要はないと思っていた。

だが、指定の場所に着いたデイアンたちが目にしたものは、思っていたものとは違う光景であった。目の前には三千名の兵士が完全武装で整列をしている。馬に乗った三人の男が出てきた。中央の男は白馬に乗っている。デイアンは舌打ちを堪えて進み出した。

『バーニエを代表し、三名で罷り越しました。私の名はデイアン・ケヒト。こちらに控えているのは……』

『我が名はグラティナ・ワツケンバイン、バーニエの街の警備隊長だ』

『私の名はレイナ・グルップ、劍聖ドミニク・グルップの一女だ』

ディアンたちから見て、中央の男と右側の男が、馬上からレイナを見つめる。左側の男が馬を進めてきた。

『わざわざ徒歩でお越しいただき、有難うございます。私はメルキア国宰相ベルジニオ・ブラダと申します』

『メルキア国万騎将、アウグスト・クレーマーです』

『私が、ルドルフ・フィズ＝メルキアーナだ』

それぞれが名乗り終わったところで、ディアンが切り出した。

『さて、挨拶も終わったので、早速話し合いといきたいところですが、これは一体、どういうことですか。．．？』

『どういふことか、と仰いますと？』

『我々は、対等に話し合いをする座を用意して欲しいとお願いをしたはずです。そちらも、それを受諾された。にも関わらず、貴殿たちは馬上で我々を見下ろしている。座も用意されていないようだ。どういふことか、とお尋ねしているのです』

ブラダが笑みを浮かべながら、返答した。

『対等と仰られましても、実際には、バーニエは我が軍に攻められており、対等な立場と

は言えないでしょう。あなた方から持ちかけられた交渉を受諾しただけでも、こちらとしては譲歩をしたつもりです。本来であれば、この場で降伏をしなければ、即、攻め込むところなのですぞ?』

これは外交である。プラダは既に、バーニエは降伏するつもりであることを見越していた。話し合いの場といっても、実際は降伏の申し出なのである。となれば、今後のためにも「どちらが勝者か」を明確にする必要がある。そのため敢えて、座を用意せず、馬上からの返答という形式を取ろうとしていたのだ。ディアンの間い掛けも、外交上の形式的なもので、普通であればこれで終わりのはずであった。だが今回は相手が悪かった。ディアンの気配が変わり始める。

『・・・譲歩・・・だど?』

ディアンの躰を覆っていた魔力が消え、魔神の気配が溢れ出る。凄まじい「魔の気配」に空気が歪む。プラダの笑みが凍った。

《・・・勘違いをするなよ? 譲歩をしてやっているのはこちらの方だ。オレがその気になれば、貴様ら全員を一瞬で肉片にすることだって出来るんだぞ・・・》

プラダの乗った馬が逃げ出そうと暴れる。それは他の将兵たちの馬も同様であった。クレマーは、目の前の男の変容に驚きながらも、主君を護ろうと動く。ルドルフはさすがに、動揺を見せてはいない。

『……まさか……魔神なのか……』

額に汗を滲ませたクレーマーが、ディアンを見下ろしながら呟いた。彼の戦歴の中にも、魔神と戦った経験は無い。

《……一刻だけ待つてやる。すぐに座を用意しろ。命が惜しかったらな……》  
『わ、解りました。すぐに用意しますっ！』

プラダは、慌ててディアンの言葉に応答した。ディアンの変容には、グラティナも驚いていた。レイナは何事も無いように涼しい顔をしている。

（人間ではないと言っていたが……まさか、魔神だったとは……）  
プラダが兵士たちに、座の用意を命じたため、ディアンからは魔神の気配が消えていた。

座を用意する間に、クレーマーはレイナに話しかけたかった。積もる話は幾らでもある。だがそれは許されなかった。彼女はいま、バーニエを代表する使者であり、自分は交渉相手なのだ。私的な理由で声を掛けるわけにはいかない。

（嬢は生きておられた。お話をする機会は、今後もあるだろう……）

想像通りに、いや想像以上に美しく成長した師父の一人娘をクレーマーは眩しそうに

見た。

幕舎が張られ、三席ずつ向かい合うように椅子が並べられた。丁重に通されたディアンたちを、ルドルフたちが立つて出迎えた。着座を進められ、ディアンたちが座る。続いて、ルドルフたちが座った。客人を出迎える礼儀に沿った対応である。ルドルフが口を開いた。

『先ほどは、大変失礼をした。どうかお許し願いたい。また戦場ゆえ、茶の持て成しも出来ぬこと、重ねてお詫び申し上げます』

『お気になさらずに。こちらこそ、いささか興奮してしまったこと、お詫びします』  
謝罪という形で、双方の挨拶が済み、話し合いが始まった。プラダが口火を切る。

『さて、ケヒト殿・・・御三名がお越し下さった理由としては、一昨日に御提示させて頂いた降伏条件について、と認識しておりますが、それで宜しいでしょうか？こちらとしても、御要望をお聴きする準備はあります』

『ディアンで結構です。降伏の条件は、そちらが提示されたもので構いません。街の役人たちも、それで承っています。我々がこの座をお願したのは、ルドルフ・フィズメルキアーナ殿、あなたに会って、話をしたかったからです』



『私と話しを？』

『そうです。こちらにいるレイナ・グループは、グループ村という村の出身者です。十一年前、あなた方メルキア国が村を焼き、村人の多くが死んだと聞いています。彼女はそのことで、メルキア国、そしてあなたを大変に恨んでいます。私は彼女から話を聞いた上で、あなたにも話を聞きたいと思ったのです・・・』

『レイナ嬢・・・それは・・・』

発言しようとしたクレマーをルドルフが止めた。ルドルフは鎮痛な表情で語る。

『十一年前の、あの事件は全て私の責任です。責められても、恨まれても、仕方のないことです・・・』

『殿・・・』

レイナはルドルフを睨みながら、手を握りしめた。ディアンはその様子を見ながら、話を続けた。

『なるほど、解りました・・・メルキアーナ殿にお尋ねしたい。あなたは何故、戦をされるのですか？』

それは十一年前に、剣聖ドミニク・グループがした問い掛けと同じであった・・・

「あなたは何故、戦をされるのですか？」

ディアンの間い掛けに対し、ルドルフは瞑目し、そして応えた。

『もう、二十五年も前の話になります。一人のドワーフが、我が家を訪ねてきました。北のケレース地方に住んでいたようですが、人間の戦に巻き込まれ、住処を追われたそうです。南に行けば、闇夜の眷属たちがいる。そこに行つて新しい住処を作りたいと言つていました。数日、我が家に滞在し、そして南へと去つていきました。たつた一人で南に向かう彼の後姿を見ながら、私は思いました。何故、住み慣れた土地を追われなければならないのか？彼は何も悪くないのに…… 私は思いました。それは、戦があるからだ。戦が、彼を追いやってしまったのだと…… 戦を無くすにはどうしたら良いか、私は考えました。考え続け、誰かがこの地を統一し、平和を創ることなのだと思いつたのです』

『戦無き世を創る為に、あえて戦をする…… 私にはそう聞こえていますが？』

『そうです。戦無き世を創るには、現状を変えていくしかない。話し合いでまとまるのなら、それに越したことはありません。だが現実は違う。人は皆、我が身を可愛く思うもの。小さな集落の権力者という立場を守る為に、戦をするのが人間です。現状を変えらるるためには、敢えて剣を手にしなければならぬ時もあるのです』

『それは「戦無き世を創る」という、あなたの個人的な欲求を他者に押し付けているので

はありませんか？』

『否定はしません。私の夢が正しいなどと自己正当化するつもりもありません。だが、戦の無い世を創れば、多くの人が幸福になるのです』

『だが実際に、その実現の過程において、グルツプ村での悲劇のようなことが起きています。彼女のような憎しみを持つ者が生まれています。あなたが戦を続ければ、これからもうこうした憎しみは生まれてくるでしょう。多くの人を幸福にするために、多くの人を不幸にしているではありませんか？』

『だがその不幸は、報われない不幸ではないっ！』

ルドルフは決然と声を上げた。

『確かに、戦を続ければ多くの血が流れ、それと同量の憎しみを生んでいくだろう。だが私は、その憎しみを全て背負う覚悟で、戦を続ける。戦い続け、地を統一していけば、やがて平和が訪れるのだっ！』

『将来の平和のためならば、多くの犠牲を出すことも辞さない、と仰るか？』

『そうだ。これからも多くの者から私は憎まれるだろう。煉獄に焼かれる覚悟は既にできている。だが誰かが、未来の平和を創る為に立たなければならぬ。恨みも、怒りも、憎しみも……その全てを背負い、それでもなお歩み続ける者がいなければ、この地には永遠に平和が来ない。私一代では実現できないかもしれない。だが私の志を継ぐ者

たちが、私の歩みを繋ぎ続ける。そして、いつの日か必ずこの地に、「人が人を殺さずに済む時代」が来るっ！」

「ディアンは瞑目した。ルドルフは言葉を続けた。

『ドミニク・グループ殿の娘よ……あの事件は私にとつても痛恨であつた。言い訳はない。私を恨むのであれば、その剣で私を斬れ……』

『……くっ……』

レイナが立ち上がった。剣の柄に手を掛ける。だが剣は抜かない。クレマーが護ろうとするのをルドルフが止めた。立ち上がり、レイナの前に進み出る。

『いま語つた通り、私はこれからも戦を続ける。グループ村の悲劇のようなことが、将来無いとは約束できない。だが私は、その犠牲を決して忘れない。あなたの恨みも、他の多くの恨みも背負い、私はこれからも戦い続ける。それが許せないのであれば、私を斬つて構わん……』

剣に手を掛けたまま、レイナはルドルフを睨み続ける。柄に掛かった手は震え、瞳には涙を浮かべている。

私は混乱していた。十一年間、恨み続けた仇が目の前にいる。この男を斬る為に生き

てきたのだ。今なら簡単に斬ることが出来る。それなのに、私は剣を抜くことが出来ない。何故だ？何故……

何故、私の心はこんなに震えているのだ……

震える私をディアンが止めてくれた。

『レイナ、座れ……お前の負けだ……』

まるで糸が切れたように、私は座った。隣に座っているディアンが、眼を閉じながら呟いた。口元には笑みが浮かんでいる。

『……運命を切り開く力……か……』

私にはそう聞こえた……

ルドルフが着座する。クレーマーは汗をぬぐった。ディアンが口を開いた。

『メルキアーナ殿、数々の無礼な質問に丁寧にお応え下さったこと、心より感謝を申し上げる。バーニエはメルキアーナ国に降伏します。条件は、一昨日に御提示いただいた三つの条件で結構です。既に開城の用意も出来ておりますので、本日中には御入城頂くことが出来るでしょう。ただ、最後に三つばかりお願いがあります』

『なんででしょうか？』

プラダが問い掛けた。外交交渉は自分の役目だからだ。

『一つ、バーニエの役人、および民衆の生命と財産は、これを完全に保証すること。横にいるグラティナ・ワッケンバインも含めてです。これを今一度、確認させて頂きたい』  
『もちろんです。必ず、とお約束を致します』

『二つ、私とレイナは、これから行商人と共に、貴国の首都インヴィディアを訪れるつもりです。普通の人間として訪れます。そこでお願いしたい。メルキア国の法を犯さない限り、私たちへの関与は一切しないこと、これをお約束願いたい』

『・・・行商人？あなたが、行商人と一緒にインヴィディアを訪ねてくると仰るのですか？』

『人に紛れて、各地を旅するのが好きなんですよ』

プラダの疑問に、ディアンが肩を竦めて応えた。何と変わった魔神なのだと思いがら、プラダが返答した。

『そ、そういうことであれば、了解しました。我が国の法を守って頂く限り、我が国はあなた方に、一切関与は致しません』

『有難うございます。では最後のお願いとしまして、メルキアーナ殿に・・・』

ディアンの気配が一変した。再び、魔神の貌が現れる。

《オレにあれだけの啖呵を切ったのだ。信じる道を途中で諦めるようなことがあれ

ば、その時はオレがメルキアを滅ぼす……忘れるなよ……」

『承知ッ!』

ルドルフが胸を張って応えた。デイアンは再び人に戻ると、笑顔を見せた。

『では、三点のお願いも了解を頂きましたし、話し合いはこれにて終わりということで、宜しいでしょうか?』

デイアンが一座を見る。確認をした上で、頷いた。

『それでは、失礼を致します。レイナ、グラティナ、帰ろうか……』

六名が立ち上がる。一礼をし、デイアンたちは幕舎を出た。

ルドルフは丘を下りていく三名の後姿を見ていた。思わずため息が出る。クレイマーが気遣う。

『殿、お疲れではありませんか?』

『……恐ろしい交渉相手だった……』

『はい……まさか、魔神が出てくるとは思いませんでした……』

『あの男が本気になれば、我々は間違いなく全滅していた。助けられたのは、我々の方だったのかも知れん……』

ルドルフは、空を見上げて呟いた。

『グルップ殿、あなたの言葉は正しい。言葉こそ、最も強い力を持っているのだな……』  
空は、何事も無く平和であった……



## 第三十九話：インヴィディアの街

メルキア歴十六年、メルキア国は「西の都バーニエ」をその勢力下に取り込むことに成功した。穀倉地帯を手にしたメルキア国は、アヴァタール地方東域における一大強国へと飛躍したのである。「バーニエの会談」と呼ばれる、無血開城交渉は、公式記録にはグラティナ・ワツケンバインとレイナ・グルップの名前のみが残されており、デイアン・ケヒトの名は残されていない。意図的に隠匿をされたものか、「魔神が交渉役をするなどあまりに荒唐無稽」として後世の者が削除したのか、今となつては歴史の闇の中である。ただ一つ言えることは、この会談後にメルキア兵の中で「魔除けの護符」が流行した、という事実が確認されていることである。単なる偶然か、魔神との邂逅を恐れたためかは定かではない……

グラティナと別れたオレたちは、そのまま宿に戻った。メルキア軍を受け入れる準備などを考えると、グラティナは今夜は徹夜だろう。一方、レイナは会談以降、ずっと黙つたままだ。父の仇と憎み続けてきた男の実像を見て、混乱をしているのかもしれない。

こういう時は、ウサ晴らしをして気持ちを切り替えることが最も効果的だ。オレは部屋に戻るはずぐに、レイナを押し倒した。

『……私の十一年間は、何だったのかな……』

オレの胸の上で、レイナが呟いた。オレは金髪を撫でながら応えた。

『決して無駄では無かったと思うぞ。むしろ大いに有意義だったと思う。お前は強く、美しくなった。何よりも、オレと出会った。もし父親のことをそこまで強く想っていないか。』

『……うん……そうね……』

『今はただ、一つの区切りがついたということ、少し戸惑っているだけさ……』

レイナは躰を起こすと、オレの顔を見ながら笑った。

『……あなたに逢えて、良かった……』

オレはその笑顔の美しさに、思わず見惚れてしまった……

メルキア国宰相ベルジニオ・プラダは、その行政処理能力を遺憾なく発揮していた。会談終了後、その日のうちに、バーニエの街各所にバーニエがメルキア国傘下に入った旨を告知すると共に、民衆の生活は何一つ変わらないこと。メルキアの法と税制につい

ては、後日丁寧に説明をすること、などを伝えた。文字の読めない者の為に、口頭で伝える人間まで配置するという周到ぶりである。降伏翌日には、都市に常駐する精兵一千名が入城し、プラダが都市執政官として着任した。

主君ルドルフと万騎将クレーマーが率いる二千のメルキア軍は、城外で補給を済ませ、当初予定していた「南部制圧」に向けて出陣した。正に疾風の速さである。こうして、バーニエの街は目立った混乱も無く、メルキア国に組み込まれることになった。

『えゝ 誰かさんのせいで、インヴィディアへの出発が遅れています。やむを得ない事情とは言え、これ以上の先延ばしは利益に関わりませんので、本日中に出発をしたいと思えます』

リタがオレの顔を睨みながら、皆に告げた。オレとレイナは、出発前にグラティナに挨拶をするため、役場へと向かった。

『そうか……今日立つのか……』

『ああ、世話になった……』

オレとグラティナは握手を交わした。次いで、レイナとも握手をする。

『レイナ殿とは、もつと話をしたかった……』

『私もです。また戻ってきますので、その時にたくさん、お話ししましょう』

オレはグラティナに告げた。

『インヴィディアでの滞在日数が読めないが、二週間程度で戻ってくると思う。その時に、返事を聞かせてくれ。』

何の返事かは言わないが、それだけで、グラティナには理解が出来た。

『ああ・・・私もそれまでに、色々とやっておくことがあるからな・・・』

それは、形を変えた「諾」の返事であつた・・・

『さあ、次はメルキア国首都インヴィディアですよ。商売しましょう』

その日の午後、リタの掛け声と共に、オレたちはインヴィディアに向かつた。六日間での移動である。バーニエーインヴィディア間は、行商路として安定しており、盗賊や魔物の出現はほとんど無い。リタとレイナはお喋りをして笑っている。レイナの表情は明るくなった。復讐という鎖から解放されたからだろう。オレはインヴィディアについてリタに質問をした。

『インヴィディアでは、どれくらい滞在をする予定なのだ？』

『インヴィディアでは行商店を出す予定はありません。運んでいる塩と武器は、全て奉行所が一括購入をしてくれます。ワイン樽の仕入れのみですので、四日といたつたところでしょうかね』

『そうか、ならばその間に、レイナと行きたいところがあるのだが……』

オレはリタ断りを入れた。リタは笑いながら許可をしてくれた。

『もともと、インヴィディアでは自由に行動したいというお話でしたので、構いませんよ。逆に許可しなかったら「追加料金」を申請されそうですし……』

(その通り)

オレは笑って誤魔化した。

メルキア国の「南部制圧」は瞬く間に終わった。バーニエ制圧の情報が近隣にも知れ始めていたからである。ルドルフ自らが、各部落長たちと面会し、自らの理想やメルキア傘下に加わることの具体的な利点を説明していった。特に抵抗らしい抵抗も無く、三日で南部制圧は終了した。戦闘は一切なく、唯一の死者は、民衆からの略奪の罪で斬首となった兵士一名のみである。その罪状は「卵一つを盗んだ罪」であった。

インヴィディアはオレが想像していた以上に活気があった。人口はバーニエより若干多い程度と聞いていたが、人通りが多く、その顔も皆、明るかった。石造りの家々は統一された外観を持ち、路も人が歩く歩道と、馬車が通る車道とに分かれている。驚い

たことに学校まで存在していた。この時代に国営の学校など極めて珍しい。「国家」ということを意識した都市設計には、オレも関心を持った。

『それでは、私たちは商品を納めてきますので、宿にてお待ち下さい。ディアンとレイナは、四日後の昼までには、宿に来て下さい』

『ああ……了解した』

オレたちは自分で宿を取った。そのまま外出をしても良かったのだが、日も傾き始めたので、出発は明日にし、レイナと共に浴場に向かった。

『……この街を見ると、ルドルフという人物の大きさが解るな……』

『……うん……』

レイナを抱え込むように風呂に漬かりながら、オレたちは街の話をした。レイナの中には、既にルドルフへの恨みは無い。だが、十一年間続いた仇討ちの旅は、簡単には終わらないようである。オレはレイナの気持ちに区切りをつけるために、ある場所に向かうことを考えていた。

彼女の生まれた村「グルップ村」に……

## 第四十話：一つの旅の終わり

主君ルドルフより暇を貰ったクレーマーは、急ぎインヴィディアへと戻った。レイナと対面をするためである。役場にて、ディアンとレイナが宿泊している宿を確認すると、クレーマーは自室に戻り、すぐに宿に向かった。

『外出した?』

『はい、今朝方、お二人で出かけられました・・・』

『どちらに向かったか、教えて頂けないだろうか』

『ええ・・・そういえば、地図を見ていらっしやいましたね。南東に向かわれるようですが・・・』

それだけで、クレーマーには十分であった。南東でレイナに縁のある場所といえば、一つしかないからである。宿の主人に礼を述べ、クレーマーはすぐに追いかけた。

グルップ村は、インヴィディアから南東に馬で半日ほどの場所にある。森と山に囲まれた自然豊かな場所だ。オレたちは村の入り口に入ると馬から降り、手綱を引きながら

村内に入った。十一年も経てば、草が生え、木の芽が伸びる。だが焼け跡はそこかしこに残っている。レイナは悲しそうな顔をしながらも、村の中を見て回った……

『……誰もいないわね……』

『ああ……』

レイナは、ある焼け跡の前で止まった。他の家より少し大きい。

『……ここが?』

『うん……私の家……』

焼け跡の中にレイナが入る。昔を思い出しているようだ。

『……ここが台所……ここが居間……ここは道場……』

歩きながら、レイナが呟く。全てが焼け落ち、辛うじて柱が残されている程度なのに、レイナには十一年前の光景が鮮明に見えているようだ。話しかける必要は何もない。オレは黙って、その様子を見ていた。

日が傾き、西日が差し始めた頃、馬の嘶きが聞こえた。オレたちが振り返ると、村の入り口に体つきの良い一人の男が、馬から降りようとしていた。メルキア国万騎馬将アウグスト・クレーマーだった。馬の手綱を引きながら、オレたちに近づいてくる。レイナは黙って、その姿を見つめていた。オレは多少の警戒心を持ちながら、クレーマーに話しかけた。



『メルキア国万騎将アウグスト・クレーマー殿……』

『ディアン・ケヒト殿、レイナ・グルップ殿、その節は……』

クレーマーがオレたちに一礼して挨拶をした。

『……メルキアの法を犯さない限り、メルキア国はオレたちに関与しない……そう約束したはずだが……？』

『はい、ですからメルキア国万騎将として来たものではありません』

オレは首を傾げた。レイナはじつとクレーマーを見つめる。

『剣聖ドミニク・グルップの弟子、アウグスト・クレーマーとして、レイナ嬢にお伝えしたいことがあります、罷り越しました……』

『……レイナに？』

頷くクレーマーの様子を見て、害意は無いことを判断したオレは、レイナに顔を向け、  
て頷き、「馬の世話をする」と告げて、その場を離れた。

私は戸惑った。メルキア国に対する憎しみは、もう無い。だから彼を責めるつもりもない。でも、どのような顔をして彼と接すれば良いのだろうか。そう思っていたら、彼は馬の荷を解き、布にまかれた何かを取り出した。私に歩み寄る彼の顔は、十一年前よ

り少しだけ老けたように見える。彼は私の前に跪いた。

『これを貴女様にお返し致します』

『……これは……』

受け取った私は、布を解いた。布の中には、一振りの剣があつた。

『師父より頂戴した、皆伝の証「護身の剣」です。私には、これを持つ資格はありません。ですので、貴女様にお返し致します』

『……なぜです？なぜ、資格が無いと？』

『……師父より学んだ剣の道……私はその道から外れています。そのことに悔いはありませんが、この剣は持つべきではないと思います』

私は剣を抱きしめた。彼はこの剣を見ながら、どれだけ悩んだのだろう……彼もまた、十一年間、苦しみ続けてきたのだ。

『……わかりました。受け取ります……』

彼は立ち上がると、十一年前と同じ微笑みを浮かべた。

『嬢……いつまでも、お健やかに……』

そう言うと、彼は自分の馬へと戻った。話したいことや話すべきことが沢山あるのに、いざ顔を会せると、何を話して良いのかわからない……

『……アーグッ！』

十一年ぶりにその名を呼んだ。彼は足を止めた。

『私は、自分の生に後悔していない。これからの生き方にも後悔しない。だからお前も悔いることなく、自分の信じる剣の道を貫けッ!』

彼は振り返ると一礼した。西日のせいで、どんな表情をしているのか解らない。馬に乗り、そのまま振り返ることなく去っていった。その後ろ姿を見ながら、私の頬に一滴だけが零れた……

クレーマーは西日に当たりながら、眼を閉じていた。彼女から、十一年ぶりに呼ばれた自分の愛称、そして彼女の言葉を思い出し、目蓋の熱さに耐えていた。

「自分の信じる剣の道を貫け……」

それは、十一年前に師父から貰った最後の言葉と、同じ言葉であった。

(貫こう……どこまでも……私の剣の道を……)

クレーマーは胸を張って馬を奔らせた。彼の心は空と同じく、晴れ渡っていた……

『……話は済んだようだな……』

デイアンは馬に水をやり、草を食ませていた。クレーマーとレイナがどのような話をしたかは聞かない。知る必要もない。レイナの顔から迷いが消えているのを確認できただけで十分だ。デイアンはそう思っていた。

『・・・もうすぐ日が暮れる。今日はここで一泊するか？』

『うん。父にも、あなたのことを紹介したいし・・・』

デイアンと共に歩きながら、レイナは空を見上げた。自分の心のように澄んでいる。彼女はやっつと実感できた。

ようやく、十一年の旅が終わったのだと・・・

## 第四十一話：第一使徒

人口八万人以上のバーニエを組み込むということは、言葉で述べる程に簡単なことではない。単純計算でも、メルキア国の人口がおよそ二倍に増えるのである。法律を普及させ、税制を適用し、通貨を統一し、戸籍を調査し・・・やるべき仕事は数限りなくある。バーニエの行政執行官に就任したベルジニオ・プラダは、インヴィディアから自分が鍛えた部下たちを呼び、精力的に仕事を処理していった。幸いなことに、バーニエの役人たちも優秀で協力的だった。六日ぶりに仕事から解放された彼は、インヴィディアに残した妻のもとに戻った。久しぶりの休日である。

『我が君は、既に南部も制圧された。国が拡がるのは結構なことだが、我われ文官の身にもなってもらいたいものだ・・・』

『でも、仕事が無くなったらあなたは寂しく思うんでしょう？あなたは仕事人間だもの・・・』

リザベルは、自分のお腹をさするプラダの頭を撫でた。見た目は若いが、実際にはプラダより年上である。ドワーフ族の女性は、人間より遥かに長生きである為、たとえ百歳になっても若々しい姿のままである。プラダは笑って、妻にバーニエについて語っ

た。

『まあ、魔神が現れたのですか？』

『正直、腰が抜けた。人間だと思っていた目の前の男が、いきなり魔神になるんだぞ？馬に乗っていないかつたら、そのまま尻餅をついていただろうな・・・』

『でも話を聞く限りでは、その魔神は随分と変わっていますね？魔神なのに、まるで人間みたい・・・』

『確かに変わっている。だが、メルキアが魔神に目を付けられた、ということとは間違いない。我が君に限って、道を諦めるようなことはあるまいが、魔神は永遠に生き続けるからな・・・さて、どうしたものか・・・』

『百年後、二百年後はどうなっているか、解りませんものね』

『そうだ。百年後には、我が君も私も、この世にはいない。お前は、若く美しいままだろうがな・・・今回、我が君は言葉によつて魔神を退けられたが、百年後にあの魔神が現れたら、対抗のしようもない・・・』

プラダは考えていた。あの対談を振り返る限り、「道を諦めたらメルキアを滅ぼす」という魔神の言葉は、主君一人を指しているのではない。志を引き継ぐ者たち皆を指しているものだ。となれば、子孫たちにもその責任があるということになる。将来を考える、魔神に対抗する力が必要であった。賢妻のリザベルは、プラダの思考を鏡のように

見透かしていた。リザベルは夫の為に、ドワーフ族の秘密を明かした。

『……ドワーフ族には、神の力を封印した武器があると聞いたことがあります……』  
愛妻の言葉に、プラダが顔を上げた。

『ドワーフ族の集落「古の宮」には、神々の力を封じた武器があり、ドワーフと共に、魔物と戦っているそうです』

『神の力を封じた武器だと？そんな武器があるのか？』

『ええ……その名は「魔導巧殻」と言うそうです……』

グルツプ村から戻ったオレたちは、気ままに街中を散策した。迷いが晴れた為だろう。レイナは一際、美しくなった。最初に出会った頃の「険」は既がない。その様子に眼を細めながら、オレは決めた。

今夜、彼女を使徒にしよう……

ブレアード・カッサレの研究書の中には「歪魔の結界」を含め、様々な研究記録が記されているが、中には吐き気を催すような、悍ましい研究も記録されていた。その中の

一つが「神核」についてである。神核とは、神を構成する「核」となる存在であり、これが存在する限り、肉体は滅んでも再び蘇るそうである。神の力の源とも言える。ブレアードは、この「神核」についての研究として、低級の魔神を召喚し、神核を抜き取り、それを解剖するという研究を行っている。神核は如何にして構成され、それがどのような肉体に影響を与え、なぜ永久の命を齎すのかを調べようとしたのだが、結局のところは、殆どが不明であつたようだ。

ただ研究の中で、神核の一部を他者に与え、自分の臣下とする為の一連の過程を解き明かすことに成功している。現神の場合は「神格者」、古神や魔神の場合は「使徒」と呼ばれる存在は、いかにして生まれるのかを解き明かしたのだ。

ブレアードの研究では、対象者自身が使徒になることを受け入れなければ、本来の意味での使徒にはならないとしている。つまり「強制的な使徒」は創ることが出来ないのだ。ある種の神聖魔術を使い、対象者の心臓に己の神核の一部を埋め込み、肉体に疑似的な神核を形成する。これにより、使徒は主と精神的な繋がりをもち、主の力の一部を得ることが出来るそうである。ブレアードは、疑似的な神核形成を人体実験で行おうとしたが、彼の良心がそれを止めていたようだ。

・・・神核を人工的に形成することは不可能である。神の肉体を手にする以外に、神核を持つことは出来ないようだ・・・



彼の中の何かが、徐々に変わってきていることを感じたが、魔神であるオレにとつては助かる研究だった……

『今夜、お前をオレの使徒にする……』

彼はやつと、その言葉を口にしてくれた。私は抱きつき、頷いた。彼は私をそのまま押し倒した。すぐに愉悦が私を襲った……

『オレの使徒になれ……そして、未来永劫を共に生きよう……』  
『あなたの使徒になります……そして、未来永劫を共に生きます……』

上と下とで繋がりながら、私は彼に抱きつく。彼の力が流れ込んでくるのを感じる。ドクンツと心臓が動く。少しだけ鼓動が速くなる。指先まで、何かが変わっていくのを感じる。でも私は怖くない。彼がずっと、私を抱きしめ続けてくれるから……  
堪らない快感が私を襲ってきた。熱い精が、私の中に放たれる。そして私は……  
……彼の使徒になった……

(第二章 了)

### 第三章：魔導巧殻

### 第四十二話：科学と魔法

表題：「イアスⅡステリナ」と「ネイⅡステリナ」における、

文明発展の違いについての考察

三神戦争が始まる以前の世界は、科学文明の発達した「イアスⅡステリナ」と、魔法が発達した「ネイⅡステリナ」に分かれていた。この世界は極めて共通している部分が多く、例えばネイⅡステリナにおいても、火を発生させるためには「燃焼の三条件（酸素、温度、着火剤）」が必須である。イアスⅡステリナで古来より用いられていた「燃える水Ⅱ石油」は、ネイⅡステリナでも見ることが出来る。だが、似たような世界が並行していながら、そこで発展した文明は大きく異なる。そこで、当然ながら次の疑問が生まれる。

何故、ネイⅡステリナでは科学文明が発展しなかったのか？

この疑問を持つのは、主に人間の研究者たちなのだが、私が思うに、このような疑問を「持つこと自体」が、人間の特徴であり、科学を進展させた要因と言えるのである。「何故」という疑問が、探求を生み、論理的思考を生み出し、自然現象の解明が行われ、や

がて技術の発展へと繋がっていったのである。そこで、さらに一段深い疑問が生まれる。

何故、人間だけが「何故」という疑問を持つのか？

これは大きく分けて二つの原因が考えられる。

一つは人間族が極めて脆弱で、かつ寿命が短い生命体だということである。ドワーフ族やエルフ族などは、数百年間の寿命を持つことに対し、人間は数十年の寿命しかない。筋力や骨格、あるいは回復力なども遙かに劣る。このため人間族は、自然現象や、他の猛猛な生物から身を護る為に「観察」という習慣を形成した。観察が、何故という好奇心に繋がりに、やがてその現象（因果律）の解明へと繋がった。「観察、探求、解明」の繰り返しだが、科学を發展させた原動力と考えられる。

もう一つは、神々にその原因があると思われる。ネイーステリナの神々は、自らを信仰する種族に対し、様々な恩恵を与えていた。例えば「神格者」などはその最たる例であり、信仰をすれば、目に見える形で恩恵を受けられることが当たり前だったのである。一方のイアスーステリナでは、神々は人間からの信仰に対して、殆ど恩恵を与えてこなかった。その理由は、ネイーステリナの知的生命体の多くが長寿であり、死生観以外の信仰の土台が必要だったことに対し、イアスーステリナでは、知的生命体は人間族しか無く、かつその寿命は短いものであったため「死への恐怖」を利用することだけで、信

仰を獲得できたからである。

神々の恩恵が無ければ、人間は自らの力で、危険・危機を克服するしかなく、そのため第一の原因に、さらに拍車がかかったのである。皮肉なことに、人間が科学文明を展覧させるほど「死への恐怖」は薄くなり、神々への信仰心も希薄となつていった。これが、三神戦争において古神が敗北をした最大の原因であると考えられる。

二つの世界が併さり、デイルリフィーナへと変化をした以降、現神たちは古神の失敗を学び、人間族に対しても、死生観以外の信仰の土台を形成するように腐心している。また同時に、科学文明の発展を恐れ、先史文明期の技術を封印すると共に、信仰を土台とした教育を行うことによつて、科学的思考の発展を遅らせようとしている。人間族も現神の恩寵の下、現神への信仰で生きるべきと教えることで、デイルリフィーナにおける科学文明の発展は、大幅に遅れているものと思われる・・・

バーニエの街の宿で、オレはブレアード・カツサレの研究ノートを読み返し、溜め息をついた。外は雨が静かに降っている。このような日は、思索に耽るのに向いているものだ。ブレアード・カツサレは、三神戦争や七魔神戦争でも消えなかつた、先史文明期の記録や資料をかき集め、科学文明についての研究を行っている。闇夜の眷属の研究者

である彼は、現神の信仰心に阻害されることなく、論理思考を蓄積し、客観的に、相互世界の比較を行っている。転生する前は、科学文明世界で生きていたオレにとつて、ブレアードの仮説は当たらずとも遠からず、だと思つた。

．．．確かに、七魔神戦争以降の一千年間において、人類社会の科学技術的發展は、驚くほど停滞している。一千年前の人類だつて、原始人だつたというわけではなく、ある程度の知識を持ち、道具を使つていた。家を建て、道を拓き、河川を整備していた。にもかかわらず、一千年を経ても、それらの技術には殆ど進歩が見られない。戦争においても、弓矢と劍が主な道具だ。メルキアでは、魔導士も用意していたが、あれは「治療」が目的で用意をしているに過ぎない。戦争は良くも悪くも、科学技術を發展させる促進剤なのに、なぜここまで、技術發展をしないのだろうか．．．

隣の部屋から、レイナの声が聞こえる。リタ、グラティナと談笑しているようだ。レイナはオレの使徒になつてからも、その外見やオレへの接し方に大きな差は見受けられない。ただ一点、力と魔力が飛躍的に強くなつた。さすがに魔神化したオレには敵わないが、人間の姿をしているオレとはほぼ互角といつて良いだろう。美しく、頼もしく、それでいて人間としての魅力を失つていないレイナに、オレは満足していた。笑い声から、オレの意識は再び思索に入る。

．．．ブレアード・カッサレは、人間族の科学的發展を阻害しているのは、現神への

信仰が原因としているが、本当にそうだろうか？彼はイアス・ステリナの世界を知らないだろうが、少なくともオレがいた世界では、信仰による障害はあつても、人類は着実に科学文明を形成していた。一千年も時があれば、無線通信くらいは開発されてもおかしくないはずだ。だがこの世界には、信じがたいことに顕微鏡すら存在していない。病気を治すために祈禱に頼っている村もあると聞く・・・

・・・ブレアード・カツサレは魔術師だ。魔法が当たり前に存在していた世界の人間から見た科学と、もともと科学文明に生きていた人間が見た科学とでは、見え方に違いがあるのではないか？例えばオレから見れば、魔法とは科学ではない。科学とは、原因が同じであれば、結果は必ず同じでなければならぬ。普遍性が科学の大原則だ。だが魔法は違う。オレが使う純粹魔法と、レイナが使う純粹魔法では、同じ術式でも威力に差が出る。「計算者によつて、式が同じでも答えが違う」のは科学とは呼ばない。つまり魔法は標準化できない。普遍的なものではないのだ。だがもし、魔法が普遍的に使えるようになったら・・・

扉がノックされ、オレは思索の海から抜け出した。レイナが顔を覗かせる。オレにお願いごとのようだ・・・

『ディアン、その・・・これから女三人で飲みに行きたいんだけど・・・』

『護衛は・・・必要ないな。わかった。オレは適当に過ごすから、楽しんでこい』

オレに口づけをして、レイナが嬉しそうに部屋から出ていく。思索の海から出たオレは、本を閉じて呟いた。

『・・・ブレアード・カツサレか・・・会ってみたい人物だな・・・』

外は未だに、静かな雨が降り続いていた・・・

## 第四十三話：魔神の貌

インヴィディアの街で酒を仕入れたリタ行商隊は、バーニエの街に到着をしていた。リタは相当な量をインヴィディアで仕入れたらしいが、驚いたことにバーニエで馬と荷車を手配し、さらに大量の黒麦酒を仕入れていた。荷車の量がこれまでの二倍になっている。オレが護衛人数が不足すると疑問を提示すると・・・

『ニッシッシッ！大丈夫！凄腕を一人雇っていますから！』

そう言われて紹介されたのが、グラティナだった。どうやら警備隊長を辞めたらしいが、オレたちにくつつくとなると報酬が無いため、リタにお願いをしたらしい。リタの方も、仕入れをする以上は護衛が必要と感じていたようで、需要と供給が上手く合ったようだ。

『これから行く北は、魔物や山賊が横行している。行商人たちも滅多に行くことは無い。これだけの規模の行商隊になれば、間違いなく襲撃を受けるぞ。覚悟はしておいた方がいい・・・』

『山賊とは、どの程度の規模なんだ？』

『私が聞いているだけでも、百名以上だ。相当に酷い奴らで、村々での略奪や暴行が後を



絶たない……』

『……そいつら、顔は隠していないのか？』

『顔か？隠しているという話は、聞いたことが無いが？それが何か関係あるのか？』

『……顔を隠していないということは、罪悪感も羞恥心も、感じていないということだ……なるほど……』

『……殺すのか？』

『まあ、襲つて来たなら、その時に聞いてみるさ……』

古の宮に出発する前夜、グラティナがオレの部屋を訪ねてきた。

『そ……その、明日の出発前に、今一度、打ち合せをしておこうと思つてな……』  
顔を朱くしてそう言う様子に、オレは彼女が何を望んで来たのか悟つた。

『……レイナに話してくる……』

『い、いや……もう、レイナには話して……ある……』

『……そうか……』

オレはグラティナを部屋に入れると、そのまま押し倒した。

『い、いきなりだな……』

『……そういう割には、顔が喜んでるぞ？』

グラティナはオレの首に腕を回した……

バーニエを出発したリタ行商隊は、北にある「古の宮」を目指した。六日の行程を予定している。古の宮はドワーフ族が多く住む集落で、北のケレース地方から、魔物などの襲撃も受けることも多いらしい。これまで、古の宮を目指した行商隊もいくつかあるそうだが、途中で山賊や魔物の襲撃に合う可能性が高く、古の宮も決して、安心できる場所ではない。リタ自身も、インヴィディアで悩んでいたようだ。

『狐穴に入らざれば狐子を得ず、と言いますからねっ！危険が高い分、利益も大きいのですっ！』

(キツネじゃなくてトラだろ……)

オレ以外にもそう思ったようだが、誰もツツコミはしない。実際、バーニエの街を出て二日目からは、集落なども殆ど見受けられなくなっていた。グラティナがレイナの傍に馬を進めた。

『レイナ、ディアンにも聞いたのだが、山賊に襲われた時は、殺すのか?』

『んゝ ディアン次第かしら…… 彼が殺せと言ったら、迷うことなく殺すわ』

『……そうか……』

『……人を殺すのは、抵抗がある?』

『うむ．．．私は、人を殺したことが無いのだ．．．』

グラティナの悩む表情を見て、レイナが笑いかけた。

『大丈夫よ。彼は簡単に人は殺さない。実際、彼が人を殺したところを、私はまだ見たことが無いもの．．．』

『そうなのか？』

『でも、覚悟はしておいたほうが良いわよ？山賊に襲われたら、戦わざるを得ないでしょ？』

『うむ．．．斬るだけならば、躊躇はしない．．．』

バーニエの街を出発してから三日目の夜、徹夜で警戒をしていたオレは、多数の馬が近づいているのを感じ、剣を構えた。

『レイナツ！グラティナツ！来るぞツ！』

事前の打ち合せ通り、リタや他の護衛を荷車に隠し、オレたちは三人で、山賊を待ち構える。

『リタ、決して顔出しちゃダメよ？他の人たちも、いいつて言うまで、顔を出しちゃダメ』

レイナがリタたちを皮布で覆い隠す。話し合いによつては、一方的な殺戮になる。リタには見せないほうが良いだろう。やがてオレたちの前に、馬に乗った山賊たちが現れ

た。百名程度であろうか。後ろからは走ってくる者も見受けられる。行商隊を取り囲むように包囲した。

『……こんな規模の行商隊が通るなんて、久々だぜ……カネと荷物とオンナを置いて、さつさと帰りな……』

男たちが卑下た笑い声を上げる。レイナとグラティナに、値踏みするような視線が集まる。オレは進み出て語りかけた。

『オレの名はディアン・ケヒト……この山賊の頭目と話をしたい』

『俺がそうだ。なんだ？命だけなら助けてやるぞ？』

また笑いが起きる。オレは笑みを浮かべながら語りかけた。

『聞きたい。あなた方は、なぜ行商隊を襲うんだ？』

『ああ？』

『行商人たちが苦心して集めた荷物や蓄えた富みを奪う……それは「悪」であると感じないか？』

頭目は大笑いした。他の男たちも笑う。

『コイツは面白え……悪だど？感じねえなあ。俺たちは殺し、奪い、犯す。そうやって生きてんだ』

『なるほど、つまり殺し、奪っても構わない……と考えているわけか？』

『ああそうだった！わかったらさっさと……』

頭目が凍った。オレの気配が変わり始めたことに気づいたからだ。躰を覆っていた魔力が消え、魔神の気配が溢れ出す……

《……殺し、奪つても構わない……だったら覚悟は出来ているな？殺され、奪われる覚悟が……》

『な、な、なんだ……テメエは……』

《……オレが奪つてやろう……貴様らの命をな……》

馬たちが騒ぎ出す。近くの山賊が尻餅をついた。魔神と化したオレは、腰を抜かした山賊の首をいきなり刎ねた。

《レイナツ！グラティナツ！無理に殺す必要はないッ！だが誰一人として五体満足で帰すなッ！》

二人が抜剣し、斬り始める。オレは口元に笑みを浮かべたまま、手当たり次第に斬った。もはやそれは戦いではなく、一方的な殺戮であった。逃げ出そうとする山賊の背中に、レイナが魔法を放つ。男の躰が弾け散る。グラティナも斬つてはいるが、手や足を斬りつけるだけで殺してはいない。オレは、逃げ出そうとする男を背後から斬り、躰を真つ二つにした。逃げ出そうとした頭目の馬を倒す。残りは二人に任せれば良いと考えたオレは、頭目に近づいた……

『……て、テメエ……人間じゃねえのか……』

後ずさる頭目を見下ろす。オレはずっと笑みを浮かべたままだ。

《……誰が人間だと言った？……》

『た、た、助けてくれッ！』

片腕を斬り飛ばす。

『ぎ、ぎやあああつー！』

切り口から血を噴出させながら、絶叫する。

《……お前はそうやって、助けを乞う人間を何人殺した？……》

右足を膝から斬り飛ばす。再び叫び声上がり、泣き声が聞こえ始める。

《……泣き叫ぶオンナを何人犯した？……》

両耳と鼻を斬り落す。叫び声のみで、もはや何を話しているかは理解できない。

《……殺し奪うのなら、殺され奪われる覚悟もしておけ。生まれ変わったら思い出すがいい……》

頸を斬り飛ばし、ようやく静かになる……

振り返ったオレは、レイナが無表情のまま、最後の一人の首を斬り落とすところを見た。オレは頷くと、魔神から人間へと戻った。グラティナが切った山賊たちが逃げている。切り口を抑えたり、足を引きずったりしている。グラティナは震えていた。オレの

殺戮の姿を見たからだ。オレは何も言わず、リタたちが隠れる皮布に声を掛けた。

『終わった・・・片付けたいので、男二人の手を借りたい。頼む・・・』

他の護衛たち二人と共に、死体を一か所に集める。グラティナの介抱はレイナに任せた。集めた死体を燃やす。メルカーナの轟炎である。骨も残らずに、全てが灰になる。

『・・・一度堕ちた人間は、簡単にはそこから這い上がれない。生まれ変わって、人の道を生き直せ・・・』

オレはそう呟いて、瞑目した・・・

私は恐ろしかった。斬ったことではない。あの男が、笑いながら平然と殺戮をしている姿に戦慄をしたのだ。

(やはり、あの男は人間ではない。魔神なのだ・・・)

レイナが男を後ろから魔法で仕留めるのを見た。躰が碎け、脳や内臓が飛び散る。私は襲ってきた奴らの手や足を斬っただけだ。命までは奪う必要はないと思っていた。だがあの男は、完全な殺戮を望んでいた。「無理に殺す必要はない」とは、私の為に言った言葉なのだ。レイナだけなら、全員殺せと言ったはずだ。あの男の期待通り、レイナは表情一つ変えずに男の首を刎ねた。あまりの冷たい表情に、私はゾツとした・・・

『ティナ？大丈夫？』

私の愛称を呼びながら、彼女は私を気遣ってくれた。その表情は、先ほどの殺戮の表情とは全く違う。どこまでも私を心配してくれている表情だ。

『お、お前は・・・恐ろしくないのか？あんな・・・一方的な殺戮をして・・・』

私は思わずレイナに問い質した。彼女を笑みを浮かべながら応えた。

『だって私は、使徒ですもの・・・』

何を言っているのか、私には理解できなかつた・・・



## 第四十四話：白と黒、正と邪、善と悪

ラウルバーシユ大陸において、国家形成期を前後して大幅に変化をしたのが、各地を結ぶ交易であつた。国家形成期以前は、しばしば盜賊団が出現をし、街道を往来する商人や小規模の集落を襲撃していた。そのため、行商人は武装した護衛を雇い、集落は自警団を形成するなどの対処療法を行つていたが、その効果は限定的であり、ヒト・モノ・情報の行き来はごく限られた範囲に留まつていた。しかし各地で国家が形成されると、盜賊団に対して国家的な対策が取られるようになり、その数は劇的に減少をした。そのため行商人の護衛を生業としていた者たちは、傭兵として活動をするようになり、レンストの街などは「傭兵派遣の街」として変貌をしていくのである。

一方、国家形成期以降もそれほど活性化を見せなかつたのが「海洋交易」である。これは陸上交易と比べて、海洋交易には多額の初期投資が必要であつたため、交易が可能であつたのは、神殿勢力や一部の国家に限られていたという背景がある。また一説には、海洋交易が盛んになれば、造船技術が進歩し、いずれ神々の大陸である「神骨の大陸」にまで人間族が進出する可能性があつたため、現神がそれを恐れたとも言われている。

交易の輸送手段に革命を齎したのは、メルキア帝国ヴァイスハイト・フィズルメルキアーナの治世で開発された「魔導戦艦」である。魔導戦艦は、巨大な船を低高度で浮上させて移動するため、大量の物資を安全に運ぶことが出来、これを海洋交易に適用すれば、人間族の活動範囲は飛躍的に拡大するはずであった。しかしながら、メルキア帝国が内陸国であり海を持たなかったこと、また他国との交易で魔導戦艦を利用すれば、軍事的な警戒を与えるのみならず、技術流出の危険があつたことなどから、魔導戦艦は未だに「純軍事的目的」でのみ使用されている。

殺戮の夜から一夜明け、私たちは変わることなく、古の宮を目指していた。驚いたことに、レイナのみならずリタまでもが、数十人をも殺したあの夜のことについて、何とも思っていないようだ。彼女は私にこう言った。

『まあ商人をやっていたら、盗賊の襲撃は当たり前だからねえ。自分で戦つたことは無いけど、死体なら見慣れちゃったかな』

あつけらかんと言う彼女に、私は自分の世界の狭さを感じた。バーニエで警備隊長をしていた時も、追ひ払うだけであつた。「殺す」という意志で人を斬つたことは無い。だがそれは、あの街の中でのみ、許されていたことなのかもしれない。外の世界では「殺

さなければ殺される」ことが常識であり、私が非常識なのかもしれない。そう思い悩んでいると、レイナが声を掛けてくれた。

『昨日の夜のことと悩んでいるのなら、一度、ディアンに相談してみたら？』

もちろんそれは考えた。だが私は怖かった。あの男が、私とは違う考えの持ち主だったら？殺戮を何とも思わず、人を平然と殺すことが出来る男であつたら？そう思うと、切り出すことが出来なかつた。あの男について行こうと思つた私を否定することになるのだから……

結局、相談も出来ずに夜を迎えた。そして再び、襲撃があつた。今度はグレイハウンドの襲撃だつた。すると彼は言つた。

『出来るだけ殺すなッ！適当に傷つけて、追い払えッ！』

山賊は殺戮したのに、魔物は出来るだけ殺さないと言う。私にはその基準が理解できなかつた。だが襲いかかる魔物を殺さずに追い払うというのは難しい。私は一体を殺してしまつた。魔物を追い払つた後、彼はグレイハウンドの死体の傍にしゃがみ込むと瞑目し、牙や皮を剥がし始めた。素材を集めているのだ。その上で、残りを炎で焼いた。（この男は、簡単に命を奪う男ではない。彼なりの基準があるのだ……）

そう思つた私は、思い切つて相談をした……

グラティナから相談を受けたオレは、野營地から少し距離を取ったところに彼女と隣り合つて座つた。山賊襲撃後にグラティナが悩んでいることには気づいていた。だがこれは、自分自身の中で扨拭をするしかないと思つていた。この相談は説得ではなく、迷路に迷う彼女を出口に導いてやるものだと思つて臨んだ。

『……あの夜のことを、気にしているのか?』

『うん……』

グラティナは暫く黙つて、それから疑問を口にした。

『正直、あそこまでやる必要はあつたのだろうか。半分以上を殺した。殺さずに追い返すことも出来たのに……』

『そうだな。確かに、殺さずに追い返すことも出来ただろう。なあ、少し話をしたいんだが、お前は他人の物を盗んで良いと思うか?他人を傷つけたり、嘘をついたり、盗んだり……そうしたことをして良いものだと思うか?』

『思ふわけないだろう』

『そうだな、オレもいけないことだと思う。では聞くが、なぜ他人の物を盗んだり、他人を傷つけたりしちやいけないんだ?』

『……え?』

『これはしてはいけない、これはしても良い、何が悪で、何が善か……そうした判断は、どうやって学んだんだ?』

『それは……両親や近所の年寄り……あとは子供の頃の友人たち……だろうか……』  
『うん。こうした判断基準は、生まれながらのモノじゃない。後天的に身に付いたものなんだ。オレたちはそれを「倫理」や「道徳」という言葉で呼んでいる。ではなぜ、こうしたものが必要だと思う?』

『……それが無ければ……生きていけないから……かな……』

『そうだ。人間は社会的な生き物なんだ。個体としての人間はとても弱い。だから集まって暮らしている。集まって暮らす以上は、その中に共通した規律が必要なんだ。他人を傷つけてはいけません。嘘をついてはいけません。物を盗んではいけません……こうした規律を子供の頃から徹底して教え込む。これにより、その子は集団の中で生きられるようになる……』

『そうだな……』

『オレが言いたいのは、善悪の判断基準は絶対的なものではない。極端な話、バーニエの街で善とされていた行いが、他の街では悪とされることだつてあり得るんだ。そこまでは、理解できるな?』

『ああ……』

オレはワインが入った杯を傾け、口を湿らせた。グラティナも飲んでいゝ。こうした話は、少し酒が入ったほうが良い。

『だが人間は、弱い生き物だ。いけないことだと解つてはいても、つい嘘をついてしまふ。他人を傷つける言葉を発してしまふ。暴力を振るう人間だつてゐる．．．仮に、もしお前が、人を．．．例えばレイナを傷つけてしまつたら、お前はどうか感じる?』

『．．．その後で、ひどく後悔すると思う。そして許しを請うと思う．．．』

『そうだ。それが「罪悪感」だ。人間は、自分を顧みる生き物なんだ。だが自分を顧みるためには、何かの基準が必要なんだ。善悪の基準がな。お前が罪悪感を感じるの、何が善で何が悪かという基準がお前の中にあり、その基準に基づいて、自分自身を振り返るからなんだ。理解できるか?』

『うん、理解できる．．．』

『さて、では先日の山賊たちを思い出してみよう。彼らは、罪悪感を感じてゐると思つたか?』

『．．．いや、感じてはいないな．．．』

『何故だと思ふ?』

『．．．自分がやっていることが「悪」だと知らないのか? いや、そうではないかな．．．』  
『オレが頭目に、一番最初に質問した内容を覚えてゐるか? オレは「悪であると感じない

か」と尋ねた。彼は何と応えた？』

『・・・感じない、そう応えた』

『そう、自分たちの行いが「悪」だと知っていて、それでも罪悪感を感じていなかったんだ。どう思う？』

『・・・なんでそんなことが起きるんだ？』

『人間は弱い生き物だが、それは心も同じなんだ。一度や二度であれば、罪悪感を感じるかもしれない。だがそれが当たり前になってしまったら、心が麻痺してしまうんだ。罪悪感を感じながら悪を行うほど、人間の心は強くない。それでも悪を続けた結果、彼らの心が、罪悪感を感じることを拒否するようになってしまった・・・』

『・・・・・・・・・・』

『オレはこれを「墮落」と呼んでいる。この状態になってしまった人間は、そこから這い上がることは容易ではない。何故なら、自らを顧みる源である罪悪感を感じなくなっているからだ・・・』

『・・・墮落・・・か・・・』

『・・・憐れだとは思う。彼らだって、最初から罪悪感を感じない人間だったんじゃない。止むにやまれず、山賊になったんだろう。だが、もうあそこまで堕ちてしまったら、救うことが出来ない・・・』

『殺すことで、彼らを救った．．．と言いたいのか?』

オレは笑った。そこまで自己肥大はしていない。

『そうじゃない。オレは単に「彼らの善悪の判断基準に合わせた」にすぎない。さつきも言っただろう。善悪の判断基準は相対的なものだ。オレたちの善が、彼らの社会では悪なんだ。盗まなければ生きられない、殺さなければ殺される．．．そういう世界の住人にとつては、オレたちの基準は通用しない。オレの判断基準を彼らの基準に合わせてやった、ということだ。彼らは相手から奪い、殺すことを正しいと考えている。だからオレもその基準に合わせ、彼らから奪い、彼らを殺した．．．そういうことだ』

『．．．だが、奪い殺すことは、お前にとつては善ではないんだろう? いや、悪なんだろう?』

『ああ、オレにとつては悪だ。だがオレは、自分の判断基準が絶対的なものではないことを知っている。彼らの判断基準も、彼らの社会の中では成立することを知っている。だから、彼らに合わせる事が出来る。彼らに合わせ、奪い殺し、そしてオレは．．．』

『．．．後悔はしていないが、胸クソが悪い思いをしている．．．』

グラティナは笑った。どうやら、オレの言いたいことを理解してくれたようだ。



彼と話しをして、私の中でモヤモヤしていたものが、綺麗に拭い去ることが出来た。彼はやはり、人と魔神の間に立っている。だから、あんな視野で動くことが出来るのだろう。彼の話を聞いて、私の中の視界も少し拡がった気がした。彼とはその後、とりとめもない話をした。

そして翌日に、小集団の山賊が襲ってきた。彼は相変わらず、相手と話し、そして私たちに「全員殺せ」と命じた。

私は躊躇うことなく、山賊を斬り殺した・・・

## 第四十五話：古の宮

バーニエの街を出発してから六日目の夕刻、リタ行商隊はドワーフ族の集落「古の宮」があるチスパ山まで辿り付いていた。だが魔物の数はオレたちの想像を超えていた。まるで魔物の巢そのものに飛び込んだようである。古の宮の本城がある洞窟までの山道 را 走り続けるが、次々と魔物が襲いかかってくる。

『あわわわっ……』

リタが慌てながらも、何とか行商隊を先導する。レイナとグラティナが、前後左右から襲いかかってくる魔物を退けるが、やはり護衛役が絶対的に不足していた。

『チイッ！レイナッ！手綱を頼むっ！』

オレは馬から荷車に飛び移った。手のひらを上に向けて魔力を集中させる。

『純粹魔法・拡散追尾弾ッ！』

オレが開発した純粹魔法だ。数百もの極小の魔力弾が、魔物をめがけて飛び散る。倒すほどではないが、退ける程度の威力は十分にある。一時的に魔物がいなくなる。

『今だっ！全速で走り抜けろっ！』

古の宮の扉が開かれる。僅かに開いた隙間を行商隊が走り込んだ。これで一安心か

と思つたら、その期待は見事に裏切られた。古の宮は、魔物に襲われ続ける戦場であつたのだ。至る所でドワーフたちが戦い続けている。

『ディアンツ！』

レイナが馬の手綱を引きながら、オレに呼びかける。オレは両手を上にかざした。  
『疲れるが仕方がない……』

オレは拡散追尾弾を両手から同時斉射した。両手斉射は本当はやりたくない。魔力の消費というよりも、精神的な疲労のためだ。ドワーフたちに当てることなく、魔物に正確に当てなくてはならぬ。処理する情報量が多すぎるのである。

『……数発外したか……』

だが魔物を退けるには十分であつた。その間にドワーフたちが体制を立て直した。洞窟の中には、鋼鉄の城壁に守られた、巨大な街があつた。周囲を溶岩の壕によつて囲まれてゐる。温度も湿度も相当高い。不快な場所と言つて良いだろう。オレたちは城門を潜り抜けた。後ろで分厚い扉が閉まる。一息ついたのもつかの間、オレたちはドワーフに取り囲まれた。

『え、えくと……あのお……』

ドワーフの中から、一人の男が出てきた。口ひげを生やしているが、ドワーフ族の中では若い方だ。

『……あんたら、人間のようだが何しに来たんだ?』

『そ、それはですねえ』

リタが揉み手をしながら、人外の速度で男の前に立つ。

『私、リタ・ラギールと申す行商人です。南のバーニエの街から来ました。お酒をたーんと運びましたので、是非ここで、商売をさせて頂きたいと思ひましてえ……ニヒツ』  
(最後の「ニヒツ」は余計だろ……)

だがドワーフの男はオレたちを一瞥すると頷いた。

『……行商人が来るなんて十数年ぶりだ……親父の処に案内をしよう……お前らツ！今のうちに異仕掛けとけツ！』

男は他のドワーフに命令をすると、オレたちの先頭に立つて歩き始めた。オレたちは荷車を曳きながら、古の宮の奥にある城へと進んだ。そこかしこに鍛冶場があり、何かの研究施設のようなものも見える。だが緑が一切ない。空気が淀んでるように感じるのそのためだろう……

『……』

オレたちは場内の一室に通された。城と言っても、バーニエやインヴェディアのもの

とは、意匠がまるで違う。オレには巨大な鍛冶場に見えた。真ん中に座った、白鬚の男が、ドワーフ族の長らしい。先ほどオレたちを案内したのは、息子のようだ。黙って息子から話を聞いている。

『……城前の広場を使わせる。バーニエの麦酒は久々だろう……』

長が頷いた。どうやら許可をくれるらしい。するといきなり、オレに視線を向けて尋ねてきた。

『……先ほどから気になっているのだが、お主が差しているその剣……それはどこで手に入れたのだ？』

『……人にもものを尋ねる前には、まず身分を明らかにされるべきかと思いますが？』  
『ぐぬっ!!』

リタがオレを睨んだが、オレは無視した。長が低い声で笑った。

『……それはそうだな。儂は、古の宮の長ヴェストリオ・ドーラ……横にいるのは、儂の倅だ……』

『ヴェイグル・ドーラだ。お前の名は？』

『オレの名は、ディアン・ケヒト……ディージェネール地方出身の旅人です。いまは縁あって、リタ行商隊の護衛を勤めています。この剣は、ここより遙か南のニース地方を訪れた際に、ドワーフ族の鍛冶屋に鍛って頂きました』

『……スマンが、見せてはくれまいか?』

オレは鞘ごと外し、ヴェストリオの前に差し出した。ヴェストリオはしげしげとそれを眺めた。剣を抜き、細かく鑑定する。

『……良い鉱石を相当な高温で、長時間を掛けて鍛ったな……鋼と会話をしながら、均一に、それでいて一打ちごとに魂を込めている……余程の会心の一振りを見た……この核は、魔神の神珠を加工したものか。使い手の意志で、剣の属性を変えられるようにしてあるのだな……それに、この魔法系の結び方……ドワーフ族の中でもこれが出来る者はそう多くない……』

『鞘も良い……年代物の竜族の木、それも一番いい部分のみを使っている。雅地龍の血に浸すことを繰り返しているな。剣の血を拭わなくても、鞘自体が血と脂を吸収してくれる……』

やはりドワーフなのか、武器には目が無いらしい。ヴェストリオとヴェイグルはオレの剣をしげしげと眺めている。

『……南、と言ったな?』

『ああ……』

ヴェストリオが低い声で笑い、そうか……と呟いた。どうやら心当たりがあるようだが、オレはあえて聞かなかった。

『いや、良いものを見た。劍が主人のもとに戻りたいと言っている……この劍にここま  
で言わせるとは、お主も相当な使い手だな?』

『この劍が背にないと、オレ自身も何か落ち着きません……』

ヴェストリオオから劍を返してもらい、オレは背に戻した。オレの姿を見て頷くヴェス  
トリオの様子に、かつてこの劍を鍛ってくれた、孤高の鍛冶屋を思い出した。恐らく、何  
か縁があるのだろう。

『さて、行商店を開くのは構わんのだが、見てのとおり、いま古の宮は魔物の襲撃を受け  
ておる。そのため最近は、採掘にも手間取っておつてな。さて、どこまで商売になる  
か……』

リタの顔が、面白い程に沈んでいる。破産危機の商人は放っておいて、オレは質問を  
した。

『……魔物の襲撃は、この最近に起こったことなのですか?』

オレの問い掛けに、ヴェストリオとヴェイグルが顔を見合わせた。ヴェイグルが頷い  
て口を開く。

『実は、この十年くらいで激しくなった。それまでも襲撃はあったのだが、それほど強い  
魔物が出てこなかった。見張りを数人おいておけば、それで十分に対処が出来ていたの  
だ……』

『魔物は、どこから襲撃をしてくるのですか？』

『この山は、全体が鉾山のようになっているのだが、ケレース地方と繋がっている洞窟がある。そこから襲撃してくる。百年ほど前に、ケレース地方と繋がってしまったのだ。以来、洞窟内部から魔物が溢れ出してくるようになった・・・』

『つまり、百年前に洞窟がケレース地方に通じて、その洞窟を通じて、この古の宮まで魔物が侵入をしてくるようになった。だがこの十年で、侵入する魔物が強力になった・・・そういうことですか？』

『うむ・・・』

オレは首を傾げた。この十年で強力な魔物が現れるようになった、ということは、十年前にこの地に何かが生まれたからだ。あるいはケレース地方に何か変化があったため、とも思われるが、どうもしっくりこない・・・

『十年前、何かこの地で見つかりませんでしたか？あるいは何か変化があったとか・・・』  
二人は顔を見合わせた。首を横に振る。

『・・・変だな・・・』

『ディアン、何が変なの？』

グラティナの問い掛けに対してというよりは、オレ自身が整理をするために応えた。

『魔物というものは、必ず襲ってくる理由があるんだ。大きくは二つあって、一つは、縄



張りに侵入したため、もう一つは餌を得るためだ。それ以外の襲撃の理由は、魔物を惹きつける何かがある、ということだ。例えば、魔神を封印した呪物とか・・・そういったものが魔物を惹きつけるんだ。だが話を聞く限り、この地にそういったものは出てきていない。とすると、強力な魔物がいきなり出てくるのはおかしい・・・』

『十年前というと、ちょうど北の方で戦争があつたな。あれが原因ではないのか？』

『その可能性は低いな。あの戦争はレスペレント地方だ。オウスト内海の更に北だ。ケレス地方で生きている魔物の縄張りに変化が出るとは思えない。魔物にも一定の規律があるんだ。互いに縄張りを尊重し合う。この山で生きる魔物たちは、それぞれに縄張りをもっているはずだ。他族の縄張りを侵してまで襲つてくるということは、余程の何かがある、この地にあるとしか思えないのだが・・・』

『・・・』  
二人のドワーフは沈黙をしたまま、オレたちの様子を見ている。ヴェストリオが話題を変えた。

『ところで・・・ここで行商をするのであれば、一つ頼みがあるのだが・・・』

オレは思考を中断して、長に顔を向けた・・・

## 第四十六話：大魔術師の研究室

デイル||リファイーナには多様な知的生命体が存在するが、亜人間族としてはエルフ族に肩を並べて有名なのが「ドワーフ族」である。ドワーフ族はその多くが山岳地帯に住んでおり、洞窟に入っては鉱石を探し、それで武器や道具を作っている。エルフ族が現神ルリエンを信仰しているのに対し、ドワーフ族は「山岳の神シウ」「鍛冶の神ガール」を信仰している。特にガールは現神でありながら、「イアス||ステリナ」で栄えた科学文明に強い関心を持ち、魔法と科学を融合させた「魔導」という概念を生み出した。ガールは自身が「モノづくり」への関心が強く、その知識を神の恩寵としてドワーフ族に与えている。そのため、ドワーフ族が鍛えた剣などの武器類、馬の鞍や鎧などの道具類は、極めて質が高く、人間族の中では高値で取引がされている。無論、彼らにとつて人間族の通貨など何の価値も無いため、大抵の場合、対価は「酒」となる。

ドワーフ族は、その外見こそ人間族よりも二回りほど背が低い、強い骨格と筋力を持ち、大抵の岩なら槌の一振りでも破壊できる。その平均寿命は、エルフ族と比べると短い、それでも三百年以上は生きるとされており、人間族の平均寿命である六十年の、実に五倍以上である。そのため、老化の速度が遅く、齢九十歳のドワーフ族の女性も、背

の低さと相まって、その見た目は幼女に見える場合もある。

山岳地帯に住み、一日の多くを洞窟で過ごすことから、ドワーフ族は暗いという印象を持つ者も多いが、それは間違いである。ドワーフ族は、他族に対してこそ排他的な一面もあるが、酒を好み、歌を謳い、冗談を飛ばし、陽気に一日を過ごす種族である。無論、これも個体差があり、特に年齢を重ねたドワーフは、その長い人生経験から簡単には笑わず、無口になる傾向が見受けられる。

このように、ドワーフ族の関心事は「酒」「モノづくり」と二つが主であり、それ以外に関心を払うことは、ほとんど無い。この狭い範囲の興味関心が、ネイ＝ステリナにおいて「最も科学に近い存在」でありながら、科学文明を形成することが出来なかつた理由だと言われている。彼らは良い道具を作り、それを酒と交換し、一日を陽気に過ごせれば、それで満足をする種族なのである……

『ニツシツシツ！それじゃあ、いつてらっしや〜い！』

リタは満面の笑みでオレたちを送り出した。古の宮の長ヴェストリオの頼みとは、行商店を出している間、魔物撃退を手伝ってくれ、というものであった。オレたちが手伝えば、他のドワーフが鉱石などを取ることが出来、酒も捌けるといふことらしい。破産

危機で落ち込んでいたリタは、その話を聞き一瞬で復活した。

『そりやもう、お好きにだけ使つて下さい、ニヒツ』

揉み手をしながら勝手に決められ、オレたち三人はため息をついた。雇い主の命令である以上は聞かないわけにはいかない。オレは洞窟内を調査し、出現する魔物が強力になつた原因を探りたいと持ち掛けた。ヴェストリオは調査の為に、現在の洞窟の地図を渡してくれた。

『・・・洞窟内では、魔物を退けるといふことは難しいだろう。殺すこともやむを得ないと思つておいてくれ・・・』

オレの言葉に二人は頷いた。松明を片手に洞窟内に入ると、すぐに魔物の襲撃を受けた。オークやアースマンなどである。それほど強力な魔物ではない。そう思っているときなり石地龍が現れた。オレは二人を退けると、石地龍の攻撃をすり抜け一刀両断にした。オレは首を傾げた。

『・・・やはりおかしい。縄張りなども関係なく、とにかく古の宮を目指して魔物が殺到しているような雰囲気だ・・・一体、あそこに何かあると言うんだ？』

その後も魔物の襲撃は続いた。オレたちはとにかく倒し続けたが、さすがにレイナとグラティナにも体力の限界が見え始めた。オレはこれ以上の探索は中止し、引き上げようとした。その時、松明の光により、壁に何か描かれているのを見つけた。

『うん?』

『ディアン?どうしたの?』

『・・・ちよつと待つてくれ・・・これは・・・』

それは、結界の紋章だった。かなり複雑な術式で描かれているが、もう魔力は通じていない。ただの絵になっていた。

『・・・見たことも無い術式だな・・・この洞窟には、昔は結界が張られていたんだ・・・』  
詳しく調べたかったが、魔物の咆哮が聞こえた為、オレたちは古の宮まで引き返した。

『そうか・・・結界を見つけたか・・・』

『・・・ご説明頂けないでしょうか?』

ヴェストリオは目を閉じたままである。オレが沈黙をしていると、いきなり立ち上がった。

『・・・ついて来い・・・』

ヴェストリオは城の一室までオレを案内した。頑丈な扉には鋼鉄の鍵が掛けられている。懐から鍵を取り出し、扉を開ける。古い書物、埃と油の匂いが溢れる。かなりの年月が経っているようであった。

『……この部屋が開けられるのは、十年ぶりだ。昔、ある魔術師がここで研究をしていた。十年前、儂らも調べようとしたが、何が書かれているのか理解できなかった。あの結界は、その魔術師が張ったものだ……』

オレは微かな期待と共に、部屋に入った。部屋の壁一面に書籍が並び、机の上には機械工具や実験用の器具が置かれている。走り書きがされた、大量の紙が束ねられている。他にも見たことも無い素材や道具があった。壁の八角には、見慣れた印を描いた布が張られている。オレの期待は膨らんだ。オレ以外であの印を使う魔術師など、思い当たる人物は一人しかいないからだ。

『……その魔術師は、この部屋とドワーフの知識を貰う代わりに、洞窟に結界を張り、ある一定以上の魔物は入り込めないようにする、と取引を持ち掛けてきた。悪い条件では無かった。儂はその条件を受け入れ、この部屋を与えた。あの男はここで、五年間ほど研究に没頭していた。その姿は正に狂気だった。だが、あの男は約束を守った。実際、その結界によって、手ごわい魔物が入り込むことも無くなり、この宮も、かつての活気を取り戻した……』

『……だが十年前、その結界が破れた……』  
『そうだ。だから結界を元に戻したくて、この部屋を開け、研究資料を読もうとした。だが、あの男は慎重だったのだな。あの男が書き残したものは全て、儂らには理解できない

い言葉で書かれていた・・・」

机の上に置かれた、一冊の書籍を手に取った。埃を払うと、オレが持ち歩いている書籍と同じ装丁のものであった。表紙の左下に、見慣れた署名が書かれていた。

「B. K a s s e r e」

オレは、少なからず興奮した・・・

## 第四十七話：その男、天才につき・・・

大魔術師ブレアード・カッサレは、一般的にはレスペレント地方出身の「闇夜の眷属」と言われているが、それは彼が引き起こした大戦「フェミリス戦争」の中心地がレスペレント地方であったことからそう言われているに過ぎず、ニース地方、ディジエネール地方の出身という研究者もいる。実際に、フェミリス戦争の主戦場であった「ブレアード迷宮」は、アヴァタール地方南部の新興国「エディカーヌ帝国」においても、同様の迷宮が見ることが出来る。そのため、彼を生み出した魔術師の系譜「カッサレ家」の始まりは、アヴァタール地方南部と考えられている。

ブレアード・カッサレはその生涯を研究に費やし、ディル||リフイーナ成立以降の歴史において、最大の科学者、数学者、錬金術師、魔術師であったことは間違いない。彼の足跡は多方面に及んでおり、国家形成期以前にも関わらず、南のセテトリ地方、西はリガーナル半島、さらに東方諸国、北方諸国まで及んでいる。国家形成期以前は、各街道に山賊や魔物が横行していたことを考えると、驚くべき行動範囲と言える。無論、これは後世の人間による脚色も多分に入っていると思われる。東方諸国の記録には「西から来た魔術師」、北方諸国に至っては「黒い魔法使い」としか書かれておらず、これがブ



レアー・カッサレを指すものという確たる証拠は無い。だが少なくとも、リガーナル半島レノアベルテにあるルリエン神殿には、彼の署名が残されている。大魔術師でありながらも、フェミリンス戦争の首謀者という以外に、あまり知られていないことから、こうした話が独り歩きをした、という研究者もいる。

フェミリンス戦争以前のブレアーの足跡については、確たる証拠が少なく、殆どが不明のままである。その理由としては、ブレアー・カッサレにとつて、魔術師としての名声など、路傍の石ころ程度の価値しかなかったからである。彼にとつての研究とは、名声を高めるためのものではなく、自身の知的好奇心を満たすためのものであった。そのため彼は、研究で知り得た貴重な知識や魔術の術式を公表することが無かった。もし彼が研究成果を公表していれば、人類の魔術研究は、一千年は進んだだろうと言われている。

ブレアー・カッサレは、一般的には「女神フェミリンス」の肉体と力を奪おうと企んだ「悪の魔術師」という姿で知られているが、これはあまりに、現神側の視点に立ちすぎていると言えるだろう。女神フェミリンスは、もともとは神格者であったが、それが神に転じた時、現神としての「公平性」を欠き、人間族に対して異常な偏愛を持つようになつた。その結果、レスペレント地方においては、闇夜の眷属のみならず、エルフ族やドワーフ族までが迫害の対象となつていた。

ブレアード・カツサレの起こしたフェミリンス戦争は、「人間のみを偏愛する現神の暴走」を止めるための、一種の革命運動と捉えることも可能なのである。実際、彼の手によって、姫神フェミリンスは封じられ、レスペレント地方の闇夜の眷属は、全滅の危機を逃れることができた。彼が召喚した「深凌の楔魔」という魔神十柱は、召喚契約に縛られていたとはいえ、序列一位の魔神ザハーニウをはじめ、魔神十柱が、半ば以上は自発的に、彼に協力をしていたのである。ブレアード・カツサレが、単に利己的欲求の充足のためだけに戦争を起こしたのではなく、そこにはより大きな目的が存在していた傍証と言える。

ブレアード・カツサレは、一度終了した研究には見向きもしなかった。そのため彼の研究記録は各地に残されていると言われている。特に、彼の書き残した魔術書は「カツサレのグリモワール」と呼ばれ、「ディルリフィーナにおける「最重要書物」となっており、マーズテリア神殿で厳重に保管されている。カツサレのグリモワールは、現在二冊が確認されているが、彼の研究人生を考えると、この十倍以上が存在しているもおかしくはない。

実際、深凌の楔魔の一柱である魔神グラザは、カツサレの書を愛読し、かなりの数を収集していたと言われている。だが、勇者ガーランドが魔神グラザを討伐した際には、その書棚は殆どが空であった。単なる噂話であったのか、何者かが事前に持ち去ったの

かは、現在となつては謎のままである・・・

『ブレアード・カツサレ・・・』

『お主、この字が読めるのか？』

ヴェストリオは驚いて、ディアンを見つめた。ディアンは目の前の書物に釘付けになつてゐる。

『・・・オレも、彼の魔術書を持っています。他にもあるかもしれないとは思つていたのですが、まさか古の宮で見つけるとは・・・』

『結界についての記述はあるのか？』

『調べてみなければ、何とも・・・この書物、オレが預かっても良いですか？』

『ここにあるモノ全てを持っていつて構わん。そのかわり、何としても見つけてくれ・・・』

ディアンは研究室を使わせてもらう許可を得、レイナやグラティナにも手伝つてもらいながら、部屋の大掃除をした。

『・・・そんなに凄い魔術師なのか？』

『世界一の魔術師だ。歪魔の結界も、彼の魔術書の中で見つけたんだ・・・』

『ディアンは、この人の本に夢中だものね』

ブレアードの魔術書は、全部で三冊が見つかった。それぞれ「魔術編」「錬金術編」「魔導術編」と書かれている。その他に、走り書きの紙が数百枚、未知の素材や道具などだ。後世の研究者が見たら、涎を垂らすほどの貴重資料の宝庫であった。

『結界の復活を最優先にさせたい。洞窟探索は中断して、洞窟の入り口を固めることを優先させよう・・・』

『そうね。他のドワーフたちにもお願いをして、交代しながら守りを固めましょう』

ディアンたちは話し合いをし、昼夜四交代で守りを固めることにした。ディアンは自分の担当時間以外は、不眠不休で解読作業に当たった。

・・・現神ガーベルは、旧世界の科学技術と魔法を融合させ、「魔導」という概念を生み出した。ガーベルは、魔法の欠点である「不安定性」を科学によって補えると考えた。魔法に科学を組み込むことで、「魔法を知らない者でも魔法が扱える」ことを目指したのである・・・

・・・錬金術とは、物資の構成要素を分解・再構成する技術である。鉄が含まれた石を高熱で熱すると、鉄が溶け、鉄だけを抽出することが出来る。液体の鉄を個体に再構成する。これも立派な錬金術である・・・

ディアンは読み飛ばしながら、結界についての記述を探した。「魔術編」の中に、結界

の記述を発見した。

・・・結界とは概念である。その概念は、空間を「内と外」で分割して捉えることで生まれる。例えば「ここは自分の家」と扉を造るとする。「ここ」が結界の内側であり、扉を造ることを「結界を張る」というのである・・・

・・・結界は、その強さと利便性が相反する場合が多い。例えば「他者は出入りできないが、自分だけは出入りできる」結界は、極めて利便性が高いが非常に脆い。「扉に鍵をかけ、自分だけがそのカギを持っている」ということなのだが、その結界は誰でも見ることが出来、力ある者からすれば、鍵のかかった扉など、紙を破る程度のものでしかない・・・

・・・この洞窟に張った結界は、エルフ族が杜を守る為に張る結界と同種のものである。プラテットなどの弱い魔物は通過が出来るが、悪魔族や龍族など、強力な魔物であれば、それに比例して強固になる結界である・・・

『・・・エルフ族の結界・・・』

・・・エルフ族の結界は、現神ルリエンの祝福とルリエン神殿を中心とした森全体の魔力によって維持されている。その結界をここに張るためには、ルリエンの祝福に代わる魔力の供給源が必要である。そのため、ここに住むドワーフたちを利用する。彼らの血で印を描くことで、彼ら自身を魔力の供給源にすることが出来るだろう・・・

・・・血液の提供者が死んだ場合、血の結界に供給される魔力は減少する。そのため、出来るだけ多くの者から集めようと考えたのだが、提供者がそれほど多くなく、結局は四名からのみ、血液を提供してもらった。これでは誰かが死亡すれば、結界の効果は消える可能性がある。しかし提供しなかった側の責任でもあるので、このことは黙っておこう・・・

『・・・なるほどな・・・』

翌朝、ディアンはヴェストリオに解読した部分を説明した。

『・・・確かに、あの男は血を分けて欲しいと言っていた。だがその目的を言わなかった。あの男の狂気の姿や、我々の秘密に対する執着から、嫌っている者も多かった。目的を言ってくれば、協力も出来たものを・・・』

『ブレアード・カツサレは、天才的な魔術師ではありませんが、その才能故に、他者から理解されない傾向があつたのかもしれませんが。余りに秀でた才能や、過剰な情熱というもの、時として他者の嫌悪を誘うものです・・・』

ディアンは、ヴェストリオの言葉にある「我々の秘密」という部分が気になった。だがまずは、結界を張ることが優先である。ディアンは血液提供の協力をヴェストリオに

依頼した。

『・・・出来るだけ多くの者に協力を呼び掛けよう。いつから結界を張ることが出来る？』  
『術式は既に明らかですので、血液が集まればいつでも・・・ただ・・・』  
『ただ？』

『この結界の範囲は極めて狭いものです。ケレース地方と繋がる洞窟に描いたとしても、他の洞窟で新しく繋がってしまったら、効果がありません。もちろん、そこに新しく結界を張れば良いのですが・・・』

『・・・そうか・・・』

ヴェストリオは立ち上がると、息子のヴェイグルを呼んだ。ディアンの話を端的に伝える。ヴェイグルが頷いて出ていく。他のドワーフ族たちに呼びかけるためだ。ヴェイグルが出ていったあと、ディアンがヴェストリオに尋ねた。

『・・・お尋ねをしたいのですが、先ほど仰られた「ドワーフ族の秘密」とは何でしょう？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ヴェストリオは暫く黙り込んだ。話すべきかを悩んだのだ。だが半ば諦めたように口を開いた。

『あの男の資料を読めば、知れてしまうか・・・話せる部分で良ければ、話してやろう』

『ぜひ、お願いします』

ドワーフ族の長、ヴェストリオは語り始めた・・・



## 第四十八話：魔導技術の可能性

ラウルバーシユ大陸で「魔導技術」が登場したのは、七魔神戦争以前である。現神ガールは、先史文明の科学技術と魔法を融合させ、「魔法を使えない者でも、魔法と同じ効果が得られる技術」として、魔導技術を生み出した。ガールが一番最初に開発をしたものは「魔導火付け石」と言われている。かつての「ネイリスティナ」では、火を起さず際には、魔法か火付け石、もしくは紐錐式という共同作業での着火に頼るほか無かった。そこでガールは魔力が封じられている石「魔力石」を加工し、誰でも「極小の火焰魔法」を使えるようにした。これが「魔導火付け石」である。

だが、ガールに対して、他の現神から慎重論が出た。三神戦争以前の人類は、科学を高度に発展させたが、その代償として生命が存在できなくなるほどに環境を破壊していた。もし魔導技術が広まれば、同じことを繰り返す可能性がある。そう危惧した一部の現神たちは、ガールに対して魔導技術普及の制限を求めた。ガールはそれを受け入れ、自分を信仰する種族の中で、最も魔導技術を発展させられそうな「ドワーフ族」に対し、魔導の概念と技術を与えたのである。

ドワーフ族は、ガールの期待通り魔導技術を使った兵器や道具を開発したが、その

最大の発明が「魔導巧殻」である。魔導巧殻は、ドワーフの魔導技術とルーンⅡエルフの秘術を掛け合わせて創られた「人工生命体」である。その製造方法は、まず神々の力を宿した石を精製し、それとルーンⅡエルフの魂とを掛け合わせ「疑似的神核」を形成する。その神核を「肘から指先までの長さ程度（七十cm）」の体長を持つ機械人形に組み込む。これにより、神を模した力と魂を持った機械人形が完成するのである。

製造過程を簡単に説明すれば上記のようになるのだが、実際に製造するには、ドワーフ族の技術とルーンⅡエルフの秘術を修める必要がある、事実上、魔導巧殻を製造することは不可能な状態である。現在、魔導巧殻は全部で四体が存在しており、それぞれに、デイルⅡリフィーナに存在する四つの月にちなんだ名前が付けられている・・・

『・・・魔導巧殻、ですか・・・』

ヴェストリオオの話聞きながら、オレは考えた。ブレアード・カッサレは「魔導巧殻」という人工生命体について、調べていたようである。彼は魔導巧殻の何について、調べていたのだろうか？ブレアードは以前、「神核」を創ることに関心を持っていた。魔導巧殻はドワーフの魔導技術とルーンⅡエルフの秘術によって「疑似的神核」を創り上げている。彼はその作り方を解明しようとしていたのではないか？オレはその疑問をヴェ

ストリオオにぶつけると、苦そうな顔をして頷いた。

『・・・そうだ。あの男が求めていたのは、魔導巧殻の核を創る技術だった。そしてあの男は、ドワーフ族の技術に関しては、ほぼ修得したようだ』

『教えたのですか？』

『バカな・・・教えるわけが無かろう・・・だがあの男は、魔導巧殻の一体であるナフカを調べることで、ドワーフ族に伝わる錬金術「魔銀結晶」に独力で辿り付いたようだ・・・』

『・・・その魔導巧殻ですが、見せて頂くことは出来ませんか？』

ヴェストリオオは首を横に振った。

『悪いが、見せるわけにはいかん。お主のことはある程度は信頼しておるが、魔導巧殻はドワーフ族の最高秘密でもある。簡単には見せられん・・・』

(まあそうだろうな・・・)

『残念です。それで、ブレアードがあなた方の錬金術を修得していたということですが、そう考えられる根拠があるのですか？』

『・・・十年前にあの部屋を開けた時に、魔銀結晶らしき石を見つけたのだ。完全では無かったが、かなり近いものだった・・・』

ヴェストリオオはため息をついた。

『・・・儂は、人間族というものを見縊っていたのかもしれない。魔術師と言っても所詮は

人間族、我々から見れば原始人のようなもの……どこかでそう思っていた。だがあの男は僅か五年で、独力でドワーフ族の秘技まで辿りついた。人間の可能性の、なんと恐ろしいことよ……』

(ブレアードは特別だ。他の人間までそう思われたら困るな……)

『ブレアード・カツサレが、どの程度までドワーフ族の技術に近づいていたのかは、彼の研究書を読めば解るでしょう。もう済んだことです。それよりも、まずは結界を張って、魔物の侵入を防ぎましょう……』

ヴェストリオは苦笑って、頷いた。

ヴェストリオとの話し合いが終わり、オレは城前の広場に向かった。そして目にした光景に唾然とした。そこはまるで祭りのように、ドワーフたちが歌い、踊っていたのだ。リタたちも酒を売りながら歌っている。

『ディアンツ！』

レイナとグラティナも酒を飲んでいる。洞窟の防御は良いのだろうか……

『ヴェイグルさんが、結界の話をしたら、なんだかこのお祭りになっちゃって……』

レイナが言うには、ヴェイグルが「血液が集まれば結界が張れる！すぐ解決するぞ」と

言ったらしい。オレから言わせれば「解決しそうだ」と「解決した」では全く違うのだが、彼らにとつては似たようなものらしい。オレはヤレヤレと思いつながら、リタから黒麦酒を受け取った。リタも上機嫌のようだ。

『ニツシツシツ！洞窟の問題、何とかなるそうじゃない？そうなればお酒もガンガン売れて……ニヒヒツ！』

『……まあ、メドは立ったな。で、これ洞窟の防御は良いのか？』

レイナに尋ねる。レイナも既に酒が回って顔が朱い。

『一応、ドワーフ族の人たちが守りに立っててくれてるけど……』

『……まあ、いざとなったらオレが出るか……』

杯を開けると、オレは研究室に先に戻ると伝えた。あの分なら皆、酔いつぶれるまで飲みそうだ……

研究室に戻ったオレは、ブレアードの魔導書「魔導編」を開いた。ブレアードは魔導技術の可能性を高く評価している。

……旧世界において、人間族は高度な科学文明を形成していた。しかしその代償が、環境の汚染であった。空気は汚れ、森林は減少し、平野は砂漠となった。科学を発展さ

せるほど、自分たちの生活を苦しめていたのである。その最大の原因は、科学文明においては、その動力が全て「化石燃料」と呼ばれる外部動力源に依存していたことにある。彼らは魂の活動が生み出す「魔法力」を知らなかった。「化石燃料」を使つて機械を動かす、その結果、大気を汚していたのである。魔導技術は、魔法に普遍性を与えるものである。使用者が魔法を知らなくても、魔法と同じ効果を得ることが出来る。それはつまり「化石燃料を使わずに機械を動かす」ということを意味する。魔導技術が人間族に拡がれば「新たな科学文明」が形成される可能性がある。現神が恐れるのは、正にこの事態であろう。魔導技術を普及させないための言い訳として、先史文明期の環境汚染の繰り返しになると言っているのである……

『……環境汚染をしない科学文明か……』

ブレアードの記述を読みながら、オレも思索の海へと沈んだ。

……確かに、オレのいた科学文明世界でも、環境破壊は深刻な問題だった。人類を豊かにするはずの科学が、いつの間にか人類を苦しめていた。そして環境破壊の最大の原因が、動力となる「電気」を生み出すための原材料「化石燃料の燃焼」だった。環境を破壊していると知りながら、人類は化石燃料を消費し続け、その結果、大気は汚染し、生き難くなり、その中で生きるためにさらに電気を使う、という悪循環に陥っていた。もし、化石燃料が不要な動力源が見つかったとしたら、オレのいた世界も全く違って

ただろぅ・・・

ブツブツと独り言を呟いていたオレは、ふと視線を感じて顔を上げた。扉の隙間から、宙に浮いた人形がオレの様子を見ていた・・・

## 第四十九話：四姉妹との邂逅

オレはその人形が「魔導巧殻」であると直感した。話しをしてみたいと思い、手招きをする。人形が恐る恐る入ってきた。蒼い服を着た可愛らしい人形だ。

『・・・この部屋は、ずっと使われていなかったのに、明かりが見えたから、つい覗いてしまったんですの・・・』

『ヴェストリオ殿にお願いをして、使わせて頂いています。はじめまして。私の名はディアン・ケヒト、ここから南西にあるディージェネール地方という処から来た旅人です。今は縁あって、行商人の護衛をしています。どうぞ、ディアンとお呼びください・・・』

オレは出来るだけ丁寧に挨拶をした。人形は、オレの目の前で宙に浮いている。飛行魔法だ。一体どういう術式なのだろう・・・

『わたくしはリユーンと言いますの♪外はお祭りなのに、ヴェストリオの爺から「外に出るな」と言われて、退屈していますの。遊び相手を探していたんですの♪』

『お聞きしたいのですが、リユーン殿は「魔導巧殻」なのですか?』

『ふふん♪わたくしは魔導巧殻四姉妹の長女ですの♪ディアンは、こんなところで何をしているんですの?』



(やはり魔導巧殻か・・・)

ヴェストリオオに見つかったら大変だなと思いつながらも、オレは好奇心を抑えることが出来なかった。

『ヴェストリオオ殿からの依頼を受け、私はここで、洞窟を護る結界の研究をしていました。そのメドも立ち、この部屋を使用していた前任者の記録を読んでいたのです。リユーン殿は、この部屋を使っていた人物をご存知ですか?』

『知つてますの♪ブレードとかいう陰気な中年オヤジですの♪・・・あれ?ブレードだったかな・・・?』

『ブレアード、ですね。リユーン殿にお聞きしたいのですが、彼はどのような人物でしたか?』

『そうそう、ブレアードですの♪あのオヤジは、わたくしの極上の笑いが理解できない頭でっかちですの♪研究以外のことは、何もしゃべらない様な狂人ですの♪わたくしのカラダをバラバラにして、色々調べていた変態オヤジですの♪』

(酷い言われようだな・・・)

オレは苦笑いをしながら、リユーンの悪口を聞いていた。

『ディアンは、わたくしの笑いがきつと理解できるですの♪』

『ほう・・・リユーン殿の笑いですか・・・興味深いですね・・・』

『んふふふ．．．では披露しますの♪．．．』

リユーンは咳払いをして．．．

『大変やつ！大変やつ！．．．おう、どうした？．．．鍛冶屋が火事やく』

『．．．．．．．．．．』

オレはどう返して良いのかを躊躇した。笑うべきなのか？これは笑わなければダメなのか？その迷いがリユーンを不機嫌にさせた。

『むむっ！ディアンもブレードと同じですの！わたくしのお笑いが理解できない頭でっかちですのっ！』

『．．．申し訳ありません。どうやら、私にはお笑いの才能が無いようです．．．ところで、他の三名の御姉妹は、どちらにいらつしやるのでしょうか？出来れば、ご挨拶をさせて頂きたいのですが．．．』

『．．．上手く話を変えやがったですの．．．まあいいですの♪わたくしについて来るですの♪』

オレはリユーンに連れられて、研究室を出た。

ヴェストリオは考え事をしていた。洞窟の結界についてメドが立ったことは喜ばし

い。だが、ブレアード・カッサレの研究内容が気になっていた。本来、魔導技術はドワーフが独自に持つ技術であった。ブレアード・カッサレが提示をしたのは、洞窟に結界を張る替わりに、魔導巧殻を含め、魔導技術を学ばせて欲しい、というものであった。それを自分は受け入れた。五年間という条件をブレアードが呑んだからだ。五年程度では、大したことは学べないと甘く考えていたのだ。だがブレアードは独自に、ドワーフの秘技まで辿り付いてしまった。魔導技術はともかく、魔導巧殻の秘密は、何としても護らなければならない。

『一度、エレンダ・メイルの王に相談してみるか・・・』

外の祭りに見向きもせず、ヴェストリオは四姉妹のいる部屋へと向かった・・・

『リユーン、ヴェストリオ翁から外に出るなど言われていたではないかっ!』

部屋に入ったリユーンとオレに、鋭い声が向けられた。紅い髪をした人形が、鋭い目つきで睨んでいる。

『退屈だったのでしよう・・・必然の結果ね』

『・・・リユーンが男を連れてきました・・・』

灰色の髪をした人形と、薄青い髪をした人形がオレたちを見つめる。

『客人を連れてきましたの♪わたくしのお笑いを全く理解しない頭でつかち男、ディアンですの♪』

『ディアン・ケヒトです。行商隊の護衛をしています。先ほど偶然、リユーン殿の知己を得ました。どうぞ、ディアンとお呼びください』

紅い髪をした人形が、オレの前に飛んでくる。やはり飛行魔法を使えるようだ。値踏みするようにオレを見る。

『・・・ほう・・・お主、中々デキそうだな。私の名はベル。よかつたら、手合わせを試みないか?』

『・・・ヴェストリオ殿に怒られそうですね・・・』

他の二体もオレの目の前に来た。四姉妹全員が飛行魔法を使えるようだ。

『ナフカだ』

『アルです。リユーンの笑いが理解できないということとは、つまりマトモということですよ』

リユーンがアルの頬を引っ張っている。どうやら人工的な皮膚で覆っているようだ。オレはブレアードについての質問をした。

『ブレアードか・・・あの男は、極めて勤勉に研究をしていたな。戦いたいとは思ったこととは無いが、知識を求める情熱は、認めてやっても良い』

『私は嫌いでは無かったわ。あの男は必要なことしか口にしない。私たちを完全に「調査対象」として扱っていた。私、おしゃべりは嫌いなものよ』

『あまり印象がありません。殆ど会話をしたことが無いので……』

オレは頷いた。本当であれば、オレ自身の手で魔導巧殻を徹底的に調べて見たいが、それはヴェストリオが許さないだろう。そう思っていたら、後ろで咳払いが聞こえた。

『……お主、ここに何をしておるのだ？』

ヴェストリオが不機嫌そうな顔で立っていた……

『ディアンは悪くないですの。わたくしが勝手にディアンの部屋に行っただけですの……』  
『……いえ、リユーン殿が魔導巧殻と知りながら、この部屋までの案内をお願いしました。ヴェストリオ殿に黙って部屋に立ち入ったこと、お詫び申し上げます……』

ヴェストリオはため息をついた。

『……まあ、見てしまったものは仕方がない。お前たちは部屋で大人しくしておれ。僕はディアンと話がある……』

オレはヴェストリオと共に部屋を出た。これは失敗だったと後悔しながら、後に続

く。やがて別室に案内され、着席を求められた。オレの前に座ったヴェストリオはずつと沈黙をしたままだ。

(うーん……居心地が悪い……)

そう思っていたら、ヴェストリオが口を開いた。

『……魔導巧殻を見て、お主はどう思った？』

ヴェストリオの貌に、疲れが見えていた……

## 第五十話：魔導巧殻の秘密

デイル||リフィーナには、全部で八つの天体が存在している。具体的には、四つの太陽と四つの月であり、光側・闇側の神々が司っている。

### 【四つの太陽】

黄の太陽：光の三太陽神アークリオン（現神第一級神）

赤の太陽：光の三太陽神アークパリス（現神第一級神）

青の太陽：光の三太陽神パルシ・ネイ（現神第一級神）

アークパリスとパルシ・ネイは、アークリオンの息子と娘である。つまりデイル||リフィーナでは、四つの太陽のうち三つは、アークリオン一族によって「独占的支配」がされている、と考えることも出来る。そして無論、闇側の太陽も存在している。

暗黒の太陽：闇の太陽神ヴァスタール（現神第一級神）

デイル||リフィーナでは、このように「光対闇」の構造が出来上がっているが、光と闇は表裏一体である為、どちらか一方だけが消滅するという事は無い。ある意味で「談合」の構造が出来上がっている。

### 【四つの月】

紅の月：赤の月女神ベルーラ（中立の現神）

蒼の月：蒼の月女神リユーシオン（光の現神）

鏡の神：賢王ナフカス（光の現神）

闇の月：闇の月女神アルタヌー（闇の古神）

八つの天体のうち、古神アルタヌーが存在するのは、アルタヌーの親であるアルテミスが現神に降伏し、アルタヌーはアルテミスの怨念を受け継いで「暗黒神」へと堕ち、現神が住む神骨の大陸の半分を闇で覆ったことから、闇の月を司るようになったと言われている。しかし、ラウルバーシユ大陸では闇の月は観測することが出来ず、その存在も知らない人間族も多数いることから、ラウルバーシユ大陸におけるアルタヌーの影響力はそれほど大きくはない。

いずれにしても、ディルリフィーナの世界は、三神戦争の勝者である現神によって実効支配されている。現神は自らを「絶対的な正義」とし、自分たちへの信仰を集めることで古神の台頭を阻止している。特に、人間族の信仰を得ることでより大きな力を得ることから、光側の現神たちは、自分たちを信仰しない「闇夜の眷属」を弾圧する場合もある……



「魔導巧殻を見て、どう思った？」

ドワーフ族長ヴェストリオ・ドーラの問いに、ディアンは慎重に応えた。

『まず驚いたのは、想像以上に小さいということですよ。しかしそれでいて、それぞれに強い力を秘めている。また、当たり前のように宙に浮いて飛んでいます。飛行魔法の術式は私も知れません。いずれにしても、現在の人間族の技術水準を、遥かに超えた存在だと思えます』

『……』

『そして、ここから先はオレの想像なのですが、この古の宮に魔物が殺到する理由は、あの魔導巧殻の存在が、関係をしているのではないのでしょうか？』

『何故、そう思うのだ？』

ヴェストリオの眼が光る。ディアンは自分が核心に近いことを感じながら、言葉を選んで説明した。

『魔導巧殻は月の神の力を模している、とお聞きしました。確かに四体の魔導巧殻それぞれの名前「リユーン」「ベル」「ナフカ」「アル」は月の神の名前を模しています。であるならば、その中で最も気になる神が「闇の古神アルタヌー」です。闇の月は、このラウルバーシユ大陸では観測することが出来ない月です。観測できないはずなのに、闇の月の力をどのように模したのか……』

『・・・もういい・・・』

ヴェストリオは話を中断させようとした。デイアンは言葉を途中で切った。

『僕は、魔導巧殻の誕生については何も言えん。言わないのではなく、言えないのだ。一つ聞きたいが、仮にお主の想像通りだったとして、お主はそれでどうしようと思うのだ？』

『・・・別に何もしませんね』

デイアンは肩を竦めて笑った。

『ここにきてまだ数日のオレでさえ、この程度は考えられるのです。ブレアード・カツサレであれば、とくに御見通しだったでしょう。だが、彼の興味は古神などではなかった。彼は人工生命体を生み出した「疑似的神核の技術」に興味があつたのです。オレも同じです。封印された古神などに興味はありませんね。オレの関心は、彼女たちを浮遊させる「飛行魔法の術式」です』

『・・・魔導巧殻そのものには、興味は無いのか？』

『ありません。オレの興味関心は、魔導巧殻であれば「飛行魔法の術式」、ドワーフの技術であれば「魔導技術」、古の宮についてであれば「洞窟の結界」、そしてこの城の中の興味は「ブレアード・カツサレの残した書物と彼がやっていたこと」です』

ヴェストリオは腕を組んで沈黙した。暫く黙つたのちに、ポツリと呟いた。

『……変わった男だな、お主は……』

『よくそう言われます。自分はただ正直に話をしているだけなのですが……』

『……魔導巧殻たちをどう扱うべきか、儂自身も悩み続けているのだ。あの四体をどの様に処すれば、最も良いのか……』

『……悩まれることもまた、あなたの責任です。部外者のオレがどうすれば良い、などとは言えません……』

『全くだな……』

ヴェストリオは低く笑った。デイアンは言葉を続ける。

『ただ、無責任を承知で、あえて言わせて頂くのなら、オレであれば、この古の宮には置きませんね……』

『……ほう、ではどうすると言うのだ？』

『魔導巧殻を創るにあたって協力をした、もう一つの種族があるでしょう。そちらの方が安全だと思いますよ。何しろ、強力な結界によって、護られていますからね……』

『……エルフ族か……』

『部外者の無責任な発言と笑って下さい。ヴェストリオ殿が悩み、お決めになれば宜しいのです……』

ヴェストリオは頷いた。先ほどより少しだけ、顔が晴れている。準備が出来次第、結

界を張りに行くと言え、ディアンは部屋を後にした。

翌日、二日酔いで使い物にならないレイナとグラティナを置いて、ディアンは一人で、結界を張りに洞窟に入った。無事に結界を張り終えて戻ると、リタが満面の笑みで酒を売っている。リタに結界を張り終えたことを伝えると、嬉しそうに頷いた。

『お疲れ様々 ニヒヒツツ！見込み通り、お酒が高値で売れてますよぉこりや想像以上に儲かりそうです』

『そりや良かった・・・出来れば、荷車を一台分、確保して欲しいんだが・・・』

ディアンはリタにブレアード・カッサレの研究資料一式を運び出した旨を伝えた。リタは簡単に許可を出した。行きと違い、帰りは荷物も少なくなるため、空の荷車も多くなるからである。ディアンはヴェストリオに面会し、結界を張り終えたことを伝えた。ついでにブレアード・カッサレの資料を全て引き取りたいと伝える。

『ここにあつても意味の無いモノだ。持っていつて構わん・・・』

『有難うございます』

『・・・一つ教えておく。魔導巧殻は、飛行魔法の術式など使っておらん・・・』

『え？では、どうやって浮遊しているのですか？』

ヴェストリオはディアンに小さな部品を渡した。魔導巧殻の一部のようである。

『魔導巧殻は複数の部品を組み合わせて作られている。その部品は、魔導巧殻に飛行能力を与えるものだ。あの娘たちは、それに純粹魔力を通すことで、浮遊している。どの様に作るかは教えられませんが、その部品をお前にやろう・・・』

ディアンは手に軽く純粹魔力を込めた。部品が宙に浮きあがった。この部品を解析すれば、飛行魔法について解るかもしれない・・・

『お前の言う通り、魔導巧殻は暫くはエルフ族に預けようと思う。結果が切れるのは恐らく三百年後くらいだろう。その頃に改めて、エルフ族と話し合ってみよう・・・』

『そうですか・・・カツサレの魔術書といい、この部品といい、お世話になりました。礼を申し上げます』

ヴェストリオは笑みを浮かべた。ディアンは初めて、この老ドワーフの笑顔を見たような気がした・・・

## 第五十一話：ドワーフの国

後世、メルキア帝国はラウルバーシユ大陸の中で、最も魔導技術が進んだ国となる。その契機となったのが、メルキア国宰相ベルジニオ・プラダが、ドワーフ族族長の娘「リザベル・ドーラ」を妻として迎えたことである。リザベルの父ヴェストリオは、保守的な思想の持ち主で、ドワーフ族は、どの種族に対しても中立であるべきという考えを持っていた。だがリザベルは、幼いころからドワーフ族以外の世界に興味を持ち、人間族の中で生活をしてきた。つまりリザベルは、ドワーフ族の中では珍しく「開明的思想」を持っていたのである。

ヴェストリオの後を継いだ長男「ヴェイグル・ドーラ」は、リザベルほどに開明的では無かったが、人間族が集落社会から国家形成期に入っていることを知っており、ドワーフ族も国家を形成すべきという考え方を持っていた。これまで、人間族とドワーフ族の関係は、あくまでも個人対個人の関係であったのだが、今後は国家対国家の関係が必要になると考えていたのである。

メルキア国は、バーニエの街近郊を制圧した後に、古の宮に向けて正式に使者を派遣している。国交を樹立し、物資支援の見返りとして魔導技術の提供を求めたのである。

ラウルバーシュ大陸初の「異種族間外交」は、双方に大きな利益をもたらした。ヴェイグル・ドーラが建国したドワーフ族の国「ドウムニール」は、肉や穀物といった食料の他に、メルキア国との貿易路を得ることにより、自分たちの制作した武器を安定的に輸出できるようになった。メルキア国は、ドワーフ族から魔導技術を学び、それを軍事に活かすことで、より強力な軍隊を持つことが出来たのである。この歴史的外交の立役者である「リザベル・ドーラ」プラダ」が、兄に宛てた手紙が残されている。

・・・人間族の成長と拡大は、凄まじいものがあります。そう遠くないうちに、人間族は独力で魔導技術を生み出すでしょう。そしてそれは、ガール神の制限を受けていない分、より危険な存在になると思われます。であるならば、今のうちにドワーフ族が技術提供者となり、人間族の魔導技術を「管理する立場」になるのが理想だ思うのです。兄様、私はドワーフ族が山中で閉鎖的に暮らしていることに危機感を持っていません。父様が間違っているとは言いませんが、人間族を「未開」と見下すことは、ドワーフ族の未来にとって、決して良いとは思えないのです。人間族の全てが信頼できるとは私も思っておりませんが、少なくとも夫や、族長のルドルフ殿は、信頼に値する人物です。兄様が族長になられた際には、一度、話し合いの場を持って頂けると、大変嬉しく思います・・・

リザベルは人間族の中で長く暮らしていた分、人間が持つ爆発的な推進力を知ってい

た。彼女はドワーフ族の未来のためにも、人間族の魔導技術の進歩に一定の歯止めを掛ける必要があると考えていたのである。もしプラダが、この先見性のあるドワーフ族を妻に向かえていなかったら、メルキア帝国の成立は無かったとさえ言われている・・・

ドワーフ族次期族長のヴェイグル・ドローラは、妹からの手紙を読んで考え事をしていった。洞窟の結界が復活し、古の宮は安全となった。無論、チスパ山は依然として、危険な魔物が住む場所ではあるが、人間族は様々な手を考えて、行商路を切り開くに違いない。実施に、たった一隊の行商隊が来ただけで、皆が酒を飲み、かつての明るさを取り戻したのだ。ドワーフ族の良さである「陽気さ」はそのままに、人間族との付き合いを深める必要は、自分も感じていた。だがどの様にしたら良いかが解らなかった。父に相談をするわけにもいかない・・・

(あの男に話をしてみるか・・・)

結界を復活させ、古の宮を救ってくれた。礼儀と節度を重んじるため、父からも一定の信頼を得ている。何より、あの名剣が主人と認めているのだ。「名剣を使いこなす男は信頼できる」というドワーフ族の諺もある・・・

ヴェイグルは立ち上がり、研究室へと向かった。



『・・・では次は私が・・・さあ、このタオルを頭に巻いて・・・はあ、頭があつたまるう  
く』

『キャハハハツ！面白いですよ♪ディアンもやつと、笑いの神髄を掴み始めたんですの  
♪』

ヴェイグルは扉の向こうから聞こえてくる「極寒の会話」に躊躇したが、意を決して扉を叩いた。椅子に腰かけるディアンの膝上に、魔導巧殻リユーンが座っている。リユーンは四姉妹の中では開放的な性格だが、魔導巧殻がドワーフ族以外の人間に触れている場面をヴェイグルは初めて見た。

『これはヴェイグル殿、如何なさいました？』

『いまディアンと「笑いの神髄」について修行中ですよ♪用件があるなら後にするですよ  
♪』

『・・・そうした方が良いか？』

『いえ、大丈夫です。リユーン殿、ヴェイグル殿が何か大事なお話があるようです。修行はまたの機会にしましょう・・・』

『むう・・・ディアンがそう言うなら仕方ないですよ・・・』

リューンはフワフワと浮き上がり、扉から出ていった。デイアンはようやく、ため息をついた。苦笑いをしてヴェイグルに謝意を示す。

『いい場面に来て下さいました。もう少しで、自分の中の何か壊れるところでした……』

『まあ、リューンの駄洒落に付き合うには、かなり忍耐力が必要だからな……』

デイアンとヴェイグルは、応接用の椅子に向き合う形で腰を掛けた。ヴェイグルは早速、妹からの手紙について、デイアンに話をした。

『……いずれメルキア国から使者が来るだろう。妹の意見は一理ある。だが、ドワーフ族はどの種族とも等距離を保つべしという、親父の意見も正しいと思うのだ。魔導巧殻では、エルフ族と協力をしあったが、それは魔導巧殻についてのみ関係だ……』

『確かに、メルキア国と正式に交易をするようになれば、人間族との距離は大幅に近くなりますね。それも多方面の分野で……』

『そうだ。ドワーフには、ドワーフの文化がある。ドワーフの生き方がある。親父は、それを守るためにも人間族とは距離をおくべし、という考え方だ。妹は、積極的に人間族と交流をすれば、ドワーフ族も繁栄すると考えている……』

『ヴェイグル殿ご自身の意見はどうですか？』

『正直、迷っている。俺としては、陽気に歌い、酒を飲み、良い道具を作って満足すると

いうドワーフ族の在り方を守りたいと考えている。これまでは、親父のやり方でそれが出来ていた。だが今後もそれで上手くいくのだろうか……』

ディアンは考え込んだ。これは難しい問題である。ドワーフ族は排他的ではあるが、決して人間嫌いというわけではない。人間族との交流が深まれば、人間族の文化、たとえば「金の為に働く」という考え方に染まるドワーフも出てくるだろう。そうなれば、ドワーフ族社会の中に貧富の差が生まれる。それは、ドワーフ族の良さを消しかねない事態だ。同じ人間族同士であれば「文化は入り混じるもの」で片付けるのだが、異種族間という点が、さらに問題を複雑にしているのだ。ディアンは言葉を選びながら応えた。

『……オレはここに来る前に、バーニエの街で、ルドルフ・フィズ＝メルキアーナ殿、ベルジニオ・プラダ殿と面会をしたことがあります。確かに、両名とも信頼に値する人物である、オレも思います。ですがオレは、妹君ほどに人間を信頼していません。もし無制限に人間族と交流をすれば、人間のほうが数が多い分、ドワーフ族の文化は間違はなく「汚染」されるでしょう……』

『二人に会ったことがあるのか?』  
『ええ、バーニエの街を代表して、彼らと交渉をしました』

ディアンは経緯を簡単に説明した。さらに、ルドルフの思想である「戦無き世」についても客観的立場から説明をした。

『・・・なるほど、やはり親父のやり方通り、メルキアーナやプラダと個別で付き合う方が良いのか・・・』

『いえ、それはそれで、危険だと思います。メルキアーナ殿個人は、いたずらに侵略をするような人物ではありませんが、彼の子孫はわかりません。彼の子孫が軍隊を率いて、このチスパ山に攻めてこないという保証はどこにもありません。そうなったら、妹君個人の力では、とても止められないでしょう・・・』

『つまり、交流をしたらドワーフ族の文化が壊れるし、交流をしなかつたらドワーフ族そのものが滅亡しかねない、ということか？それでは八方塞がりだな・・・』

悩むヴェイグルに、デイアンが一つの考えを提示した。

『白か黒で考えるからそう思ってしまうのです。交流をするにしても、一定の制限を掛ければ良いのです。たとえば、古の宮と交流をする行商人を指名制にしたり、持ち込まれる物資に制限を掛けるようにする。ドワーフ族から提供する魔導技術も、その使用目的を明確にし、それ以外に使われていないかを定期的に査察する、こうしたことで、かなりの歯止めが掛けられると思います』

『だが、そのようなことは、我々はしたことが無い』

『いまの体制では無理ですね。古の宮はドワーフ族の「集落」に過ぎませんから。ですから、これから出来るような体制を作れば良いのです』

『体制をつくる?』

『集落内に一定の規律を作り、皆が豊かになるように富の再分配機能を担う。異種族との交流においても、その役割を担った組織をつくり、そこに担当させる・・・こうした体制を人間族は「国家」と呼んでいます』

『・・・国家か・・・』

『ヴェイグル殿には、聡明な妹君がいらつしやいます。これは幸運なことだと思います。これは幸運なことだと思います。ヴェイグル殿が族長になられた時に、妹君に国家形成について話し合われては如何ですか?また、段階を踏むことも出来るでしょう。いきなりメルキア国と国交を結ぶのではなく、まずはバーニエの街との交流から始めるとすれば、ヴェイグル殿が懸念されている「文化的侵略」という危険も少なくなると思います・・・』

ディアンの話は、ヴェイグルに一定の方向を与えたようであった。

腕を組んで考え込むヴェイグルの口元には、微かに笑みが浮かんでいた・・・

## 第五十二話：美女二人

TITLE: ドワーフ族の武器製造技術の特殊性に関する考察 (B. Kasser)  
イアス・ステリナでは、人間族は高度な科学文明世界を謳歌していた。環境破壊という深刻な問題はあつたにせよ、純学問的見地に立てば、現在のデイル・リフィーナのどの種族よりも優れた技術を持つていたと言えるだろう。しかし人間族は、デイル・リフィーナの誕生に伴い、それまで蓄積を続けてきた科学を失ってしまう。なぜ、人間族が科学を失つたのかは不明だが、一説にはそれまで人間族が利用していた「電気」と呼ばれるものが、その性質を変えてしまったため、全ての機械が使用できなくなつたと言われている。しかし、先史文明期の遺産の中では、稼働する機械も存在するため、この説には疑問視もされている。いずれにしても、人間族は蓄積し続けてきた科学知識を失い、原始文明へと戻つた。それにより、デイル・リフィーナにおいては、ドワーフ族が最も優れた製造技術を持つ種族となつたのである。

ドワーフ族は、武器や道具の製造技術が優れていると言われているが、これはあまりにも漠とした言い方であろう。具体的に、製造工程のどの部分が優れているのかを明確にしなければ、人間族の参考にはならない。私は数年間を掛けて、彼らの製造工程をつ

ぶさに観察し、人間族の製造工程との比較を行った。その結果、彼らの製造技術で最も優れているのは「冶金」と呼ばれる技術だと判明した。

「冶金」とは、鉱石などから必要となる金属を抽出し、それを精製、加工し、実用可能な金属材料を製造する一連の技術工程を指す。鉱石から金属を抽出する技術を「採鉱冶金」、金属同士を組み合わせる等により金属の性質を変えることを「製造冶金」、金剛石などの粉末状の金属を一つの塊に変えることを「粉末冶金」、物理的な圧力を加たり、金属以外の他の成分と混ぜ合わせることを「物理冶金」と呼ぶ。

人間族と比べて、ドワーフ族はこの冶金の技術が優れており、それ故に、優れた武器、道具が製造できるのである。言い換えれば、この冶金技術を人間族が修得すれば、ドワーフ族と同様の武器、道具を造ることが可能である。ドワーフ族は、師弟制によってこれらの技術を伝えているが、人間族であれば、これを学問として体系化し、より広く、より深く研究をすることが可能である。私はあえて、この技術を「冶金学」と呼びたい……

『この剣もいいわね……』

レイナは一振りの剣を手にとった。鞘から抜いて、鑑定をする。目の前には多くの剣

が並べられている。オレとグラティナは肩を竦めて、顔を見合わせた。レイナの剣選びは、まるで服を買いに行く乙女のようなのである。事の始まりは、昨夜になる……

『剣を一振り欲しいって？既に持つてるじゃない』

リタは腸詰肉を頬張りながら、オレに疑いの目を向けた。リタ行商店は、酒類販売の売上として、希少鉱物の他、多くの武器や道具を得ていた。その中から、剣を一振り欲しいと依頼をしたのだ。リタからすれば、売上金に手を付けるようなもので、当然、渋い顔をする。

『オレじゃない。レイナが使う剣が欲しんだ』

『なあんだ。イイよ。好きな一本、持っていきなよ』

『……………』

なぜオレは駄目でレイナなら良いのか、彼女の判断基準には甚だ疑問を感じながらも、オレは謝意を示した。翌日、売上金が溜まっている荷車を見て仰天した。大量の剣が並んでいるのである。リタが武器屋を開いたら、アヴァール地方で最も充実した武器屋になるだろう。取りあえず、目ぼしい剣を選択し、机に並べたのだが、それでも十振り以上はある。

『ああん、迷うなあ〜』

レイナがアレもいい、コレもいいと悩んでいる。こういう時は、男は黙って待ってい



るのが正しいのだが、オレとしてはブレアードの魔術書を早く読みたいので、つい口を出してしまった。

『迷うのなら、ヴェイグルに鑑定をしてもらったらどうだ？』

『いいのっ！私が使うんだから、私が選ぶっ！』

レイナはムキになる。

(ヤレヤレ……)

心の中でそう呟きながら、レイナの剣選びに付き合った。結局、二刻以上も時間を掛けて、ようやく一振りを選び出した。白い鞆と緋色の魔法糸が映える一振りだ。見た目は良いのだが、剣は使い勝手である。レイナは実の剣を使うが、最近グラティナから虚実の剣も教わっているようだ。剣士として一段の高みの昇るのであれば、剣もそれに合わせなくてはならない。レイナは、鞆から剣を抜き、構えた。

『思っていた以上に軽い……凄く振りやすいと思う』

『……試してみようか……』

グラティナが剣を抜いた。軽い試合をやるようである。

(美女二人が剣を抜いて構え合う様子は、中々見ごたえがあるな……)

オレは呑気にそんなことを思いながら、二人の試合を観ることにした。グラティナが一瞬でレイナに詰め寄り、斬り掛かる。レイナはそれを躲し、反撃をする……ほんの

数合だが、試すには十分であったようだ。

『これにするわ。振りやすいけど、決して剣質は軽くなっていないみたい・・・』

『抜剣の速度が上がっている。実と虚の剣を使い分けるには、ちょうど良いだろう・・・』

レイナとグラティナがお互いに笑い合う。こうした様子を見ているとつい思ってしまう。

(二人同時に抱けないだろうか・・・)

そんな邪なことを考えていると、リタがやってきた。手を叩いてオレたちに告げる。

『さあ、商品もそろそろ売り切れるし、明後日には出発しましょう。バーニエやプレイアに運んで、これをお金にしないといけませんからね。そこまでいってはじめて、行商は成功と呼べるのですっ！ニヒッ』

四つの豊かな乳房が男を挟み込む。二人が呼吸を合わせて、男に快感を与える。呻く男を見る二人の瞳は、愉悦で霞んでいる。男は二人に体を重ね合うように命じた。金の女が下になり、銀の女が上になる。男の目の前には、上下二つの花園が晒される。男はまず、下の花園から貫く。金の女が愉悦の声を上げる。続いて、上の花園を貫いく。銀の女が歓喜の声を上げる。上と下、交互に貫ぬく。二人の声が、男を愉しませる。三人の饗宴は夜遅くまで続いた・・・

出発の朝、リタ行商隊を見送る為に、大勢のドワーフ族たちが出てきた。これほど大勢が住んでいたのかと思うくらいの人数である。リタは次期族長のヴェイグルと話しをしている。バーニエⅡ古の宮間の行商について交渉をしているようだ。チスパ山は魔物が多いため、簡単には行商路は出来ないだろうが、リタなら何とか切り開くだろう。ヴェイグルはオレにも挨拶をした。

『世話になった。お前の話を聞いて、俺も将来について明るく考えられそうだ。妹への手紙は、リタに渡してある。道中、気をつけてな・・・』

ヴェイグルと握手を交わした後、族長のヴェストリオにも手を差し出した。

『ヴェストリオ殿には、大変お世話になりました。魔導巧殻の姉妹たちにも、宜しくお伝えください・・・』

『皆に笑顔が戻っている。しばらくは魔物の襲撃も無くなる。倅の代は、平和に暮らせそうだ。感謝するぞ・・・』

ヴェストリオがオレの手を握った。その瞬間、ヴェストリオの眉が上がる。

『・・・お主・・・』

『魂は人間ですよ・・・ご安心ください・・・』

『・・・』

ヴェストリオがオレを見つめる。やがてため息をついて笑みを浮かべた。

『……まあ、先入観ではなく、見た事実を信じるか……』

ヴェストリオとの挨拶が終り、出発をする直前に、魔導巧殻のリューンが飛んできた。オレに頭に抱きついてくる。

『ディアン』 寂しくなるですの……』

『リューン殿、またお会いすることもあります。それまで、笑いの神髓を鍛えておきますよ……』

『笑いはどこでも修行できますの♪次に会った時は勝負ですの♪』

『楽しみにしています』

リューンがオレの頬に口づけをしてくれた。リタが手を挙げた。

『さあっ！出発しますよ！バーニエの街へっ！気張って商売しましょうっ!!』

古の宮の扉が開かれる。オレたちは光の中へと足を進めた……

## 第五十三話：使徒への誘い

ラウルバーシユ大陸初のドワーフ族の国「ドウムニール」は、メルキア国と同盟関係を結び、魔導技術を人間族に伝え始める。メルキア国はこれにより、飛躍的に成長を遂げ「メルキア帝国」として中原東方部に大帝国を築き上げた。メルキア帝国で名家として元帥を輩出するプラダ家は、ドワーフ族と特に深い繋がりを持ち、魔導技術の大家として史に名を刻むことになる。

魔導巧殻は、ドウムニール建国に伴い、一時的にエルフ族の集落「エレン・ダ・メイル」にその身を移す。エレン・ダ・メイルは、幾重にもわたる強力な結界に護られているため、魔導巧殻アルが宿す「闇の月神アルタヌーの力」に魔物が惹きつけられることも無く、魔導巧殻たちはエレンダメイルで三百年近くを過ごすのである。魔導巧殻が再び歴史の表舞台に登場するのは、ドウムニールを護ってきた結界が消える三百年後である。ドウムニールは同盟国であるメルキア帝国に軍事支援を求め、メルキア帝国はその対価として、魔導巧殻を求めたのである。魔導巧殻は、メルキア帝国の四人の元帥たちに、それぞれ一はずつ割り当てられた。メルキア帝国元帥は、それぞれの軍権に基づいて、メルキア帝国の版図拡大を図ると共に、魔導巧殻の保護者としての役割を担

うことになる。

メルキア帝国内乱時において、後に皇帝となる元帥ヴァイスハイト・ツェリンダーは、魔導巧殻アルの保護者であったが、当時の皇帝ジルタニア・フィズⅡメルキアーナの「究極の魔導兵器を生み出す」という野望により、魔導巧殻アルの身に封印されていた闇の月神の力「晦冥の雫」が暴走してしまふ。ヴァイスハイトは、盟友であったバーニエ領主「エイフィリア・プラダ」を戦いの中で失うが、エレン・ダ・メイルの王「エルファティシア・ノウゲート」、ドウムⅡニールの首領「ダルマグナ・ドーラ」の協力を得て、神の力を打ち破る道具「黎明の焰」の開発に成功する。究極の魔導兵器「アルファラ・カーラ」を撃破し、メルキア帝国史上最大の内乱を鎮圧、新皇帝ヴァイスハイト・フィズⅡメルキアーナとなる。

ヴァイスハイトは、残った三体の魔導巧殻リユーン・ベル・ナフカを封印、内乱についても史実を闇に葬り「篡奪王」という汚名を甘受する。その後ヴァイスハイトは、国内の安定と魔導技術の更なる発展を推進し、メルキア帝国は最盛期を迎えるのである……

私にとっての初めての旅となった古の宮への行商は、感慨深いものとなった。バーニ

エで警備隊長を続けていたら、一生知らなかったであろう世界であつたと思う。ディアン・ケヒトという男は、人間と魔神という二つの貌を持つている。そのことに私の中で迷いもあつたが、この旅で私は決めた。

「この男について行こう。もつと広い世界へ……」

バーニエに戻る途中に、私は彼に相談をした。これからの旅の前に、私の母に会つて欲しいと……

純血のヴァリール Elf を初めて見たオレは、グラティナの父であつた「ワルター・ワツケンバイン」に、多少の嫉妬心まで覚えた。Elf 族は長寿である為、たとえ百歳でも若々しいままである。グラティナの母「ララノア・ワツケンバイン」は、グラティナより多少、褐色の色味が強いが、服の上からでも解るほどに豊かな胸を持つていた。一見すると、グラティナの姉とさえ思える程に若い。男なら誰しも、獣欲を覚えるであろう美貌に、母親としての母性を感じさせる表情を持つている。横にレイナとグラティナがいなければ、口説いていたかもしれない。挨拶をして着席をしたオレをララノアは微笑みながら見つめ、アッサリと正体を口にした。

『娘に打ち勝つた男は、魔神のように強いのだろう……そう思っていました、本当に

魔神だったんですね……』

『……肉体は魔神、魂は人間、そのような姿で生まれました……』

『あの人が生きていたら、きつとあなたに仕合を申し込んだでしょうね。あの人は強い人が好きだったから……』

『グラティナから受けた技「極虚の剣」、あれほどの技を生み出した御仁であれば、ぜひお手合わせをしたかったですね……』

ララノアは微笑みながらオレを見つめる。そしてその表情を変えないまま……

『あなたにとって、私の娘グラティナ・ワッケンバインはどのような存在なのですか？』  
そう斬りこんできた。さすがに劍豪の妻である。オレは言葉を選んで語った。

『……グラティナと最初に会ったのは、この街で領主であったムスカの部下を斬った事件からでした……』

オレはグラティナとの出会いを語り、そしてその時の印象を語った。

『グラティナは、強く、美しく、芯を持った女性です。そうした女性を傍に置きたいと考えるのは、男として当然だと思います』

堂々と発言するオレの横で、グラティナは真っ赤になっている。母親は依然として表情を変えずに、オレとレイナを見た。

『ですが、あなたには既に、そちらのお嬢さん……レイナさんがいらつしやいます。あ



なたにとって、娘グラティナは、単なる浮気相手、遊び相手ではないのですか？それとも、そちらのレイナさんが遊び相手なのかしら？あなたにとって、レイナさんや私の娘は、何なのですか？』

『オレの「使徒」にしたいと考えている女性たちです。そしてレイナは、既にオレの使徒になりました』

オレは覚悟を決めて、使徒について語った。ララノア次第では、ここでグラティナと別れるつもりであった。

『・・・魔神と共に、永遠に生きる存在ですか・・・』

『これはまだ、グラティナにも話をしていないことです。使徒は無理に持つことは出来ません。本人が心から望まない限り、使徒にすることは出来ないのです。もし、あなたが反対をすれば、オレはこの場で諦めます・・・』

私は彼の言葉をじつと聞いていた。使徒という言葉は、レイナから一度、聞いたことがある。その時は、この男の家臣程度と考えていたが、私の想像を遥かに超えた存在だった。道理でレイナが強いわけだ。彼女は、魔神の寵愛とその力を得ているのだ。そしてもし、私も使徒になったら・・・

未来永劫、この男と生き、この男に尽し、この男から身を焦がすほどの愉悅を与えられ続ける……

何という蠱惑的な存在なのだ。レイナが使徒になった理由もわかる。永遠の命と人越の力、そして女としての最高の悦びを得られるのである。だが、母が反対をしたら、私は使徒を受け入れることは出来ないだろう。どうしても、心にわだかまりが残ってしまったからだ。母が呟いた……

『狡いですね。そんな魅力的なこと、断れる女など、いないではありませんか……』  
母は私を見つめていた……

『母親ですもの……娘の様子を見ていればわかります。娘はあなたに出会って、二つのモノを手に入れた。女としての悦びと良い友人です。そしていま、三つ目のモノを手に入れようとしている。尽し続ける殿方、それも未来永劫、永遠に……』

『母上……』

『ティナ……私はあなたが羨ましい。ヴァリルエルフは人間よりずっと長く生きる。人間の夫を持つてしまったら、すぐに別れがやってくる……でもあなたは違う。あなたは永遠の幸福が得られる。尽したいと思う殿方に、尽し続けられる……これは、ヴァ

リ＝エルフにとって最高の幸せなの……』

『母上、では……』

『子供の幸せを願わない親などいません。娘が望むのであれば、あなたの使徒になることに私は賛成をします。ただ、その前に一つだけ、確認をしたいのですが……』

『なんででしょうか?』

『あなたにとつて、娘と、そちらのレイナさん……どちらが大切なのですか?』

やはりこの質問が来たか。だが使徒を持つためには、一切の誤魔化しは許されない。僅かでもわだかまりがあれば、使徒にすることは出来ないからだ。オレは自分の気持ちを正直に語った。

『どちらも大事、などという卑怯な言い方はしたくありません。ですから正直にお応えします。レイナは第一使徒です。ですからレイナが優先されます。もし、レイナとグラティナ、どちらか一方しか助けられない事態となったら、オレはレイナを助けます』

『ディアン……』

レイナが心配そうにオレを見つめる。だがここは正念場だ。オレは言葉を続けた。

『第一使徒には、一つ特権があります。オレの寝顔を見ることが出来るのは第一使徒だけ、そう決めています。これからも使徒が増えるかもしれない、そう思った時に決めた、彼女に対するオレの誓いです』

『……つまり、私の娘は「二番」ということですか?』

『そうです。一番がレイナ、二番がグラティナ、そして三番がオレです……』

『……三番目があなたとは?』

『先ほどの例えですが、レイナとグラティナ、どちらか一方しか助けられない場合は、レイナを助けます。ですが、その時はオレは死んでいるでしょう。オレにとつて使徒とは「命に代えても護る存在」です。そうでは無い魔神もいますが、使徒を犠牲にして生きるなど、オレの人間としての魂が許さないのです』

『娘が死ぬときは、あなたも死ぬ……そういうことですか?』

『死なせませんよ。命に代えても……』

いきなりララノアが笑い始めた。オレは何事かと首を傾げた。

『フフフツ……あなたはどうかやら、女心というものが解っていないようですね。もしあなたが死んだら、レイナさんも娘も、自ら命を絶つでしょう。それくらい、あなたに惚れ切っていると思いますよ? 残された者の気持ちも考えなくては……あなたは、死んではいけないのですよ?』

『……お恥ずかしい限りです。オレは死にませんよ。二人もオレも生き続けます。何故なら、オレは人間ではなく <<……魔神ですから……>>』

グラティナの母、ララノアは頷いた。そして娘に対して告げる。

『ティナ、あなたは、あの人と私の大切な娘……あなたには幸せになって欲しい。誰よりも幸せに……。ですが、あなたにとつての幸福は、あなた自身にしか解らないことです。あなたが、この魔神と共に生きたいと思うのであれば、迷わずにそうなさい……。』  
グラティナは涙を浮かべながら頷いた。

グラティナの母親ララノアへの挨拶を終えたオレは、グラティナに告げた。

『オレの使徒になるか、ならないかは、お前が決める。たとえ使徒を拒否しても、お前はオレにとつて大切な存在だ……。』

『わたしは……。』

『すぐに決める必要はない。自分でよく考えろ。レイナも使徒について知ってから、実際に使徒になるまで二か月以上を掛けている……。』

『……。レイナに、使徒について聞いて聞いても良いか？』

『オレは今日は一人で寝る。ブレアードの本も読みたいしな……。』

レイナはグラティナの肩を叩いて、微笑んだ……

## 第五十四話：プレイアの危機

オレにとつて、ブレアード・カッサレの研究資料は、今回の行商の大きな収穫品であった。だがそれにより、ある問題が発生した。資料の量があまりにも多く、通常の宿の部屋では入りきらないという問題だ。この資料は極めて貴重なものだ。盗難などの危険もある。

（いつそ、水の巫女に預けるか・・・）

だが水の巫女がどこまで信用できるか、オレ自身も疑問だった。まだリタに預けたほうが信用できそうだった。だがその場合は、リタはまた報酬を要求してくるに違いない。悩んだ挙句、オレはありきたりな結論に達した。

（どこかに、家を持つか・・・）

リタ行商隊は、バーニエの街で行商店を開いた。古の宮から戻ってきたという噂はすぐに広まり、メルキアの武将や兵士のみならず、素材を求めて鍛冶屋や薬屋まで買いに来た。大規模な行商店になるため、オレたち三人が常時警備に入る。ドワーフ族の武器や道具、古の宮でしか産出しない素材ばかりなので、相当な高値で売れているようだ。

リタは笑いが止まらないに違いない。バーニエの街での最後の夜、酒場でリタ行商隊の打ち上げがあった。

『ニツシツシツ！さあ、飲んで飲んで、酒も食べ物も、みんな私の奢りだよ』

『ご機嫌な様だな。まあ確かに客が殺到していたが・・・』

『ぶはっ！最初に予想していた利益の二倍以上になりそうだからね。やっぱ、規模大きくして正解だったわ』

『全部、ここで売り切らなかつたようだが？』

『ん？ここでは半分だけ売って、残りはプレイアで捌くつもり。店を出すのはプレイアだからね。そこでしつかりカネを得たいわけ！』

『・・・じゃあ、メルキアの通貨なんていらんやないか？』

『ディアンが最初に言っていた「両替商」をやるなら、メルキアの通貨も持ってなきや出来なんでしょう？行商規模を二倍にしたおかげで、出店費用と運転資金を差し引いても、まだ十分に資金確保が出来るから、最初から大規模に両替商をやりたいの！』

商魂逞しいリタに、オレは感心をした。酒が進むにつれて、オレの口も軽くなったのか、家を持ちたいという考えをリタに話してしまった。

『なありタ、ちよつと頼みがあるんだが・・・』

『なに？い、言つときますけど、私は高いですよ？これでも自分には自信があるんですか

ら……たとえ胸が無くてもっ!』

『……何の話だ? いや、プレイアあたりに、家を持ってないかと考えているのだが……』  
耳ざといレイナが聞こえたらしく、杯の動きが止まった。リタはオレの考えが読めたらしい。

『……例の荷物なら、ウチで預かってもいいよ? ディアンは男としては結構問題だけど、護衛としては優秀だからね。ウチ専属になるんなら、タダで預かってあげる……』

『オレは男としては問題か……まあ有り難い話だが、オレは誰かに専属でつくつもりは無い。自由気ままに旅をしたいんでね』

『残念く じゃあ無理っ! 家探しくらいなら、手伝ってあげてもいいけど、倉庫代だつてバカにならないからね。プレイアについたら、あの荷物も引き取ってもらうからヨロシクツ!』

オレはため息をついた。やはり水の巫女に頼るしかないか……そう思っていた時にふと気づいた。

『……リタ、お前はレンストまで行かないのか? オレたちはレンストで雇われたんだが……』

『ん? 行かないよ? プレイアで行商はお仕舞っ! ドルカ斡旋所には、完了確認の書類を送るから、それで問題ないでしょ?』



『いや・・・そういうわけにもいかんだろう・・・』

仕事というものは、結果をきちんと報告して、そこではじめて完了と呼ぶのである。途中で紙切れで「終わりました」と伝えたとところで、対面報告をしない限り終了とは呼ばないのだ。

『・・・まあ取りあえず、水の巫女に依頼をして一時的に神殿に預かってもらい、レンストに報告をした後で、家探しをするか・・・』

『ディアンゝ家を買うなら、私は大きな鏡が欲しいなあ』

いつの間にか、レイナがオレの横に来ていた。家を買うことが、いつの間にか決定事項になっている。グラティナも目の前に座り、家について意見を出す。酒が入っているので、目が若干据わっている・・・

『はやり、必要なのは広い庭だろ。剣を振る場所が必要だ。あと、武器庫も必要だな・・・』  
『・・・家というよりは、練兵場に近いな・・・』

リタまで参加をして、三人はまだ決まってもいない家について、あれやこれやと意見を交わっていた。オレはプレイアに戻った後について、考えを巡らせていた・・・

『さあっ！プレイアへの帰還だよ！最後まで気張って、商売しましょうっ!!』

翌朝、リタ行商隊は最後の目的地、プレイアの街への路に入った。トラナ大街道をプレイア方面へと向かう。この辺りは元々治安が良い上に、バーニエの街がメルキア国傘下になった今、盗賊や魔物の姿は完全に消えている。オレたちは安心して、プレイアへと向かっていた。この時は、知る由も無かった。プレイアの街を目指していたのは、オレたちだけではなかったのである・・・

鉦山で栄える都ノヒアには、嵐の神バリハルトを祀る神殿がある。デイアンたちがバーニエの街を出発した同日、この神殿から五千名以上の神兵たちが出陣をした。神官のゴドニアが教典を手に声を上げる。

『これより、我らが神に逆らう不届きな邪神を討つ！神の兵たちよ、恐れることなく進めつ！我らには、バリハルト神がついて下さっている！これは神聖なる戦い、聖戦であるっ!!』

バリハルト神殿の兵士たちは、ノヒアを発ち、東へと進み始めた・・・

バーニエの街を出て五日後、オレたちはプレイアの街に到着した。二か月半ぶりで

あったが、人の往来が多く、オレの眼には、以前よりも活気があるように見えた。リタは、数日間ならオレの荷物を預かると言ってくれた。その間に、水の巫女に相談をしなければならぬ。城門をくぐったオレは、レイナに荷物を任せようと思っていたが、その前に神殿からの使いが来ていた。すぐに神殿に来てほしいというのである。何事かと思ひ、オレは神殿に向かった。

奥の泉に通されたオレは、栈橋を渡り、泉に手を浸した。神気が集まり、水の巫女が現れる。

『よく来てくれました。間に合つて安心しました。ディアン・ケヒト殿……』

『巫女殿、先ほど、古の宮から戻りました……何か、あったのですか？』

『実は、あなたにお願いがあるので……』

水の巫女の貌には、深刻な表情が浮かんでいた。

リタ行商隊が到着してから一刻後、街に鐘が鳴り響く。いきなり城門が閉ざされ始めた。人々も何事かと不安げな様子だ。リタたちは警備兵を呼び止め、状況を聴いた。水の巫女の神託により、城門を閉ざしたらしい……

『ああんもうっ！なんだってバリハルト神殿がここに攻めてくるのよっ！』

リタは地団駄を踏んだ。バリハルト神殿の兵士五千人以上が、プレイアの街近郊まで近づいてきているのだ。既に村一つが焼かれたという話まで流れ始めている。レイナとグラティナは顔を見合わせた。

『リタ、取りあえず荷物を安全な場所に運び入れて、すぐに宿に隠れて頂戴。私たちは、ディアンを呼んでくるっ!』

二人は急いで、神殿へと向かった・・・

『バリハルト? 現神の嵐神バリハルトが、どうして巫女殿を狙っているんだ? 巫女殿は古神ではないだろ?』

『確かに私は、古神ではありませんが、現神というわけでもありません・・・なにより、私の考え方が、気に入らないようです』

『巫女殿の考え方?』

『そうです。土着神である私は、現神も古神も関係なく、皆が共に生きられる世界を望んでいます。神官たちの教えにも、古神を悪とするような排他的なものが入っていません・・・そうした私の考え方が、バリハルトには気に入らないのでしょうか・・・』

『確かに、現神バリハルトは古神を嫌っているからな。古神と聞けば、それが無害な存在

でも関係なく、どんな奴でも殺そうとすると聞いています……』

『ですが今回は、バリハルト自身が来ているとは思えません。バリハルト自身が来ているならば、いくら何でも村を一つ焼くとは思えないのです……恐らくは、ノヒアにある神殿の神官たちの判断でしょう……』

『……子の仕出かしたことは親の責任、部下の仕出かしたことは上司の責任、信徒の仕出かしたことは神の責任だろ……』

その時、奥の院の扉から、神官が声を掛けた。水の巫女が頷く。

『あなたの使徒が来たようです……』

『おそらく、街が騒いでいるのだろう。プレイアの街は、両河に挟まれているとは言え、街を護る兵士は少ないからな……』

ディアンのところに、二人が駆け寄ってくる。グラティナは水の巫女の姿に驚き、膝をついて礼を取った。

『構いません。今はそれどころではありません。ディアン殿、筋違いかもしれませんが、あなたにお願いがあります……』

『この街を護れ……ですね。お引き受けしたいのは山々ですが、条件があります……』  
『何でしょう？ 私に出来ることがあれば、言っして下さい……』

ディアンは水の巫女に対して条件を提示した。水の巫女は少し考え、了承した。

『レイナとグラティナは、街の防衛に当たれ。北から来る本体はオレが引き受ける。だが、船を使って別動隊が動いている可能性もある。お前たちは城門を固く閉ざし、民衆は家から出ないようにしろ。警備兵たちを城門前に固めさせて、火矢を打ち込んで来たら、すぐに消火作業に当たれっ！』

『了解っ！』

『巫女殿、オレはバリハルトが嫌いだ。まして今回は、村を焼いている。つまり奴らは、オレから見たら「悪」だ。だから今回は、遠慮なく貌を出すぞ・・・』

『・・・お願いをしている以上、何も言えません。ただ、あなたが人として、この街に戻ってくることを祈るだけです』

『心配するな。オレなりのやり方でやるさ・・・』

ディアンは二人と共に、奥の泉を後にした。土着神は心配そうに、黄昏の魔神の後姿を見つめた・・・

## 第五十五話：バリハルト神官との問答

嵐の神バリハルト（Barouhart）は、太陽神アークリオン、軍神マーズテリアと並ぶ、光陣營の第一級神である。その姿は、強靱な肉体に刺青の入った人型の上半身と、狼や熊の四肢に猛禽類の翼を持ち、大型の竜巻雲を周囲に纏った姿とされている。バリハルトの妹は風の女神リ・バルナシア、妻は裁きの女神ヴィリナ、三人の子供がいたが、一人は三神戦争にて戦死し、一人は闇勢力側へと墮落している。三神戦争で三人の子のうち、二人を失ったバリハルトは、それ以来、三神戦争の敵であった「古神」に対して強烈な憎しみを抱くようになったと言われている。

バリハルトは、粗暴さの中に魅力的な情熱を持つ性格で、三神戦争以前に、妻のヴィリナ、盗賊の神フール・トラーマ、鍛冶の神ガールベルらと共に、試練を乗り越えたことから、太陽神とはまた異なる英雄の風格を持ち合わせている。しかし、やむを得ない状況においては犯罪に手を染めることもあり、夫のいる女神を寝取るという行為で、厳格な性格の妻ヴィリナの逆鱗に触れ、歪みの世界へ落されたという詩歌も残されている。バリハルトは、辺境や開拓地、冒険者の守護神として広く信仰され、開拓の神として開拓民を先導し、政治や警察機構の役割も担うことから、民衆にも密接に浸透している。

だが一方で、開拓民たちによって、住み慣れた地を追われた先住民たちには、バリハルトは信仰されておらず、むしろ「邪神」と忌み嫌う者もいる。実際、バリハルト神殿はデイル||リフィーナの一般的な認識である古神||邪神という考えを最も苛烈に実行し、古神を倒すためならば、信者の生贄や大量の犠牲者を出す儀式も容認している……

バリハルト神殿の神官ゴドニアは、プレイアから半日の場所に陣を構えた。ここからプレイアまでは一直線である。敢えて河を後ろにしたのは、何としても邪神を滅ぼすという決意の現れであった。ゴドニアの中には、水の巫女は、プレイアの住民を煽動する邪神である、という確信があった。大司祭より許可を得て、このセアール教区から邪神を一掃すべく、兵を起こしたのである。

『亡くなった村人たちの安らかな死に、祈りを捧げましょう。彼らの御霊は、死によって救われたのです……』

教典を手に、ゴドニアは天に祈りを捧げた。邪神を信仰する信徒たちを殺害することは、彼らの救済だと信じているのである。それは、これから攻める街に対しても同じであった。街は既にバリハルトの神兵が近づいていることに気づいている。それでも逃げ出さないのは、邪神「水の巫女」を信仰する異教徒である。他の現神たちを信仰するならともかく、異端の神を信仰するなど、現神が許さない、聖なる炎によつてのみ、プ



レイアの街は浄化される・・・瞳には絶対的確信という狂気を宿し、ゴドニアは神兵たちに語りかけた。二刻の休憩の後、バリハルト軍は兵を進めた。今日中に、レイアの街の北側に着陣するためである。彼らが兵を進めると、一人の男が立っていた。黒髪に黒い服、そして背中には剣を指している。

『何者かッ!!』

神兵たちは止まり、一斉に槍を向けた・・・

五千人以上の「狂信者」たちを目の前に、オレの精神は昂っていた。兵たちは立ち止まり、オレに槍を向けてくる。オレは語りかけた。

『オレの名はディアン・ケヒト、レイアの街を代表して来た。バリハルト軍の責任者と話をしたい・・・』

オレの言葉に頷いた兵が、奥に下がった。やがて馬に乗った神官らしい男が出てくる。手には教典を携えていた。

『レイアの街を代表して来たという者はそなたか？ 私はノヒアにあるバリハルト神殿の神官ゴドニアである。話しとは何か？』

『聴こう。あなた方バリアルト神殿の兵士たちは、レイアの街を目指しているようだが、何をしようとしているのか？』

『何をする？ 決まっておるではないか。プレイアに蔓延る邪教を駆逐し、バリハルト神の教えを広めるために、我々は兵を進めている・・・』

『なるほど、プレイアの住民は、水の巫女という土着神を信仰している。あなた方はそれを「邪教」と仰るか？』

『そうだ。曲がりなりにも現神であれば、古神の存在を認めるなどあり得ん。水の巫女とやらは、古神も関係なく受け入れると言っておる。何と言う悪しき教え、悪しき信仰だっ!!』

『なるほど・・・現神であれば、古神の存在など認めるはずが無い、と・・・ではお聞きするが、古神の存在を認めないことが正しいと、どうして言い切れるのだ？』

『なに？』

『あなた方が信仰されるバリハルト神は、確かに古神に対して苛烈であり、その存在を決して認めない。しかし、それが正しいと、どうして言い切れるのだ？』

『神の教えを疑えと言うのかっ!!』

『そうでは無い。あなた方が何を信じようが、それはそれで良いだろう。だが同じように、他の人間が何を信じようと、それはその人間の勝手ではないのか？ 土着神だろうが、闇の現神だろうが、古神だろうが、信じることで本人が救われているのであれば、それで良いではないか？』

『それは救われておるのではないっ！騙されておるのだっ!!』

『あなた方こそ、救われているのではなく、騙されているのかもしれないぞ？どうして自分たちは違うと言い切れるのだ？』

ゴドニアの額に青筋が浮いた・・・

水の巫女は、デイアンとゴドニアの問答を水を通して聞いていた。現神バリハルトの気配はない。信徒を相手にするのであれば、デイアンが敗けるとは思えない。だが、水の巫女はデイアンの問答の内容が気になった。デイアンは「信仰の在り方」について、語っているのだ。

（デイアン・ケヒトが持つ最も恐ろしい力、それは彼が発する「言葉の力」・・・彼の言葉で、人々は己の信仰心に疑問を持ち始める。その疑問が、神の束縛からの解放「ルネサンス」へと繋がる・・・それは現神の支配体制、延いてはディル||リフィーナの世界全体を揺るがしかねない事態・・・でも同時に、人間をより進歩させる可能性をも秘めている・・・正に、黄昏の力・・・）

ゴドニアは退くに退けなかった。神官は言葉によって教えを広め、言葉によって信徒を増やし、言葉によって信仰心を高める。その自分が、言葉で負かされてしまつては、信

仰そのものが揺らいでしまう。ゴドニアはさらに言葉を続けるしかなかった。

『・・・ディアン・ケヒトと言ったな。確かにそなたの言う通り、信じることで救われているのであれば、それで良いだろう。だがその教えが、信仰をしない他の者たちを傷つけている。水の巫女の教えにより、この地には魔神や闇夜の眷属まで入り込む可能性がある。そうなれば、水の巫女を信じない者たちは不安に苛まされる。関係の無い他者を傷つけること、それは悪ではないのか?』

『信仰をしない他の者たちを傷つけているのは、あなた方だろうか? 村一つを焼き、一体何人の人間を殺した? 彼らがあなた方に何をした? 単に、水の巫女を信仰していただけだろう。あなた方は、彼らを救った気にいるのかもしれないが、客観的に見れば、あなた方はただの大量殺人者だ・・・』

『第一級現神であるバリハルト神と、誰が生み出したかも解らない土着神を同じにするなっ!』

『何故だ? バリハルトも水の巫女も、同じ「神」だろうか? 第一級も第十級も関係ないだろう。あなた方はなぜ、バリハルト神が水の巫女より上だと言い切れるのだ?』

『バリハルト神は、三神戦争において邪神を駆逐し、人間族を救った神、冒険者、開拓者に祝福を与え、人間族に繁栄をもたらす神であるっ!』

『つまり、三神戦争において古神と信仰心を巡って争い、勝利をしたから相手を「邪神」

と決めつけ、開拓者を煽動して先住民を苦しめ、自分を信仰する特定の人間に対してのみ、繁栄をもたらす神なのだ？随分と器の小さい神だな．．．』

ゴドニアの我慢が限界に達した。むしろ、ここままでよく耐えたと褒めるべきであろう．．．

『だまれっ！バリハルト神を愚弄することは許さんっ！この者は、邪神の教えを広める闇の神官に違いないっ！神の兵たちよ、いまこそ戦いの鬨ぞっ！この者を．．．』

ゴドニアの言葉がそこで止まった。目の前の男から、とてつもない邪の気配が発していたからだ。ディアンが魔神の貌を表に出した。

《．．．闇の神官か、当たらずとも遠からずだな．．．オレは神官ではない。邪神そのものだよ。お前たちから見たらな．．．》

ゴドニアをはじめ、神兵たちが後ずさる。彼らはバリハルト神を信仰しているが、本物の神を見たことは無いからだ。たとえそれが「魔の神」であっても．．．

『こ、この者は．．．邪神なのか．．．皆の者っ！神が我らについておるっ！バリハルト神の祝福をっ!!』

ゴドニアの言葉に、怖気づいていた神兵たちの震えが止まる。信仰心が心を護つたのだ。彼らは再び、槍を構えた。魔神となったディアンがその様子を見て嗤う。

《面白い。試してやろう．．．お前らの信仰心と、実際の痛みと恐怖、どちらが強い

かをな・・・》

ディアンは、背中から魔神剣クラウ・ソラスを抜き放った。最後の警告をディアンが与える。

《今すぐバリハルト信仰を捨てれば、五体満足で帰してやるぞ？ 棄教するか、死ぬか・・・どちらを選ぶ？》

返ってくる応えは、兵士たちの雄たけびであった。ディアンの笑みが大きくなった・・・

## 第五十六話：惨劇

プレイアの街は騒然としていた。バリハルト神殿の軍が迫ってきているのである。レイナとグラティナは、街の混乱を鎮めるために警備兵たちを統率して動いた。部外者であるが、水の巫女直々の指名である。警備兵たちは出歩く住民たちを家々に返し、街は無人状態になりつつあった。

『ひよつとしたら、バリハルト神殿の手の者が既に潜んでおるやも知れん。また、これを機として窃盗などの邪なことを考える輩も出る可能性がある。今後は、出歩く者を見かけたら即座に拘束せよっ！間違いであれば、後で詫びれば済むっ！』

グラティナはバーニエの街の元警備隊長である。都市防衛についての知見は十分に持っていた。デイアンがバリハルト神殿の神官と問答を始めた頃には、プレイアの街は静まり返っていた・・・

『ぎやあああつ!!』

断末魔の悲鳴と共に、神兵が倒れる。左腕の手首から先が無い。デイアンは意図的

に、殺さずに傷つけるようにしていた。右足を太腿から失ったもの、腕を肩から切り落とされた者など、既に数十人に上っている。さらにディアンは、十人に一人程度の割合で、あえて殺していた。しかも惨たらしいやり方で……

『……母さん……母さん……』

腰から下を失い、腸を飛び出させて腕だけで動く兵を見下し、ディアンはその兵の頭を踏みつけた。頭蓋が割れ、潰れる。脳漿や目玉が飛び散る。魔神の表情は、酷薄の笑みを浮かべたままであった。あまりの残酷さに、兵士たちも青ざめる……

《フンツ！ 死の間際に口にするのは、神の名ではなく母親か……お前たちの信仰心とは、この程度なのか？》

『おのれ……邪神め……恐れるなっ！ たとえ死しても、神の御許で永遠の安らぎを得られるのだっ！』

ゴドニアが兵士たちを鼓舞する。ディアンは嗤う。

《……死んだことも無いのに、何でそんなことが言えるんだ？ お前は見てきたのか？》

再び動き出す。矢を射かけられるが、ディアンには当たらない。純粹魔術を応用した物理障壁結界である。自分が斬りつけるときは結界を解除し、矢を射かけられたら結界を張る。ディアンを倒すためには、剣をもって相手をするしかないのだ。そして、魔神



となつたディアンに剣で勝てる存在は、限りなく皆無である。腕や足を切り落とされ、うずくまる者と、惨たらしく殺されるもの、どちらが幸福なのだろうか……手足を失いながら生きていくのは、この時代ではそう容易なことでは無いのだ……

《……どうした？もつと泣け、もつと叫べ、もつと神の名を連呼しろっ！そうすれば、バリハルトとかいうエセ神が助けに来るかも知れんぞ？それとも、お前らの信じる神は、神骨の大陸とやらで怯えているのか？》

虐殺という言葉ですら生ぬるい、残酷極まりない「魔の饗宴」に、これまでは信仰心で抑制していた恐怖が抑えられなくなる。叫び声を上げ、逃げ出す兵士が出始めた。だが魔神は一切容赦をしない。人外の数度で走り抜け、逃げ惑う兵士を背中から斬りつけ、首を飛ばし、下半身を切断する。内臓を撒き散らしながら息絶える者、大量出血で気を失うものなど、犠牲は既に千名を超えた。

《……さすがは我が愛剣……これだけ斬つても、刃こぼれ一つしていない。それどころか益々、切れ味が鋭くなる……お前となら現神をも両断できそうだ……》

ディアンの言葉に呼応するように、魔神剣クラウ・ソラスが輝く。逃げる兵士の背に純粹魔法を当てる。破裂する肉体に、ディアンは見向きもしなかつた。あまりの圧倒的な力に、神官ゴドニアも狼狽える。

『……神よ……この試練は、余りにも過酷です……』

《…そうだな。試練とは普通、努力をすれば超えられる程度のを指すのだ。お前たちが挑んでいるのは試練ではなく、ただの自殺行為だ。だがそれも、お前たち自身を選んだのだがな…》

火焰魔法で兵士たちを焼く。炭となつて倒れる者もいれば、腕だけ炭化した者もいる。暗黒魔法で発狂し、噛み出す者もいる。ディアンは剣を振るい、狂乱する兵士の首を飛ばした。血が噴水のように吹き上がる。阿鼻叫喚の中を散歩をするかのように歩く。ディアンはついに、神官ゴドニアの前に立った。

『邪神めっ！私は恐れんぞっ！たとえ死しても、私の後を継ぐ者たちがいる。いつの日か必ず、バリハルト神が貴様を…』

《…黙れっ》

ディアンが剣を振るつた。教典ごと腕が落ちる。ディアンは教典を拾い上げた。

《この本は貰つていこう…バリハルトとかいうエセ神が、どのように信徒を誑かしているのか、興味がある…》

ゴドニアは切り落とされた腕を抱える。だが悲鳴は上げず、脂汗を流しながらもディアンを睨み付ける。ディアンは多少驚いた。信仰心というものは、こうした肉体の痛みを超えてしまう時もあるのだ。ディアンは、目の前の狂信者がどこまで耐えられるのか、試したくなった。剣を振るい、両耳を切り落とした。

『ぐうううっ!!』

《・・・お前は楽に死ねんぞ？お前が棄教するまで、小刻みに刻んでやる。信仰心がどこまで肉体的痛みに耐えられるか・・・貴重な生体実験だ・・・》

右足の指先だけを切り落とした。ゴドニアが倒れる。だがまだその瞳に意志は失っていない。ディアンは更に刻もうとした。その時、河の方から声が掛けられた。水の巫女であった。

自分の眼を覆いたかった。しかし、自分が頼んだ以上、眼を背けるわけにはいかなかった。何と残酷なのだろう。一撃で死んだ者は、むしろ幸福かもしれない。魔神はあえて、時間を掛けて殺している。内臓を飛び出させても、人間は簡単には死なない。飛び出した腸を必死に戻そうとも、がきながら、出血で死んでいく兵士。全身を焼かれながら、なおも意識だけは残っている兵士。中途半端に頭を斬られ、脳の一部が生きている兵士。腕や足を切り落とされた者も、多量の出血でいずれ死ぬだろう。仮に生き延びたとしても、兵士としては生きてはいけない・・・

「楽には死なせない。生き残ったとしても、一生を後悔しながら生き続けさせる」

この魔神は、あえてそうしているのだ。しかもそれでいて、この魔神の中では「まだ

優しい」ほうなのである。黄昏の魔神が、魔神の方に軸足を置いただけで、この虐殺なのだ。彼が完全に魔神となったら、惨劇はこの比ではないだろう。水の巫女は、これ以上は耐えられなかった・・・

『お止めなさいっ！ディアンツ！もう十分です。バリハルト神殿の兵士たちは逃げ帰っています。これ以上、傷つける必要はありません』

ディアンは無表情になり、河辺に立つ水の巫女に、顔を向けた。だが、剣を下したその隙に、ゴドニアが短剣でディアンの太腿を刺した。

『あっ・・・』

水の巫女が小さな悲鳴を上げる。ディアンに一矢を報いたゴドニアは、一瞬笑みを浮かべたが、すぐに叫び声が変わった。ディアンがゴドニアの腕を切り落としたのだ。短剣を引き抜き、回復魔法を掛ける。傷口は一瞬で塞がった。

《・・・見たか？巫女殿・・・これが現神を信仰する信徒たちの実態だ・・・オレの眼から見れば、どう見てもただの狂信者だ。コイツらは、自分の頭で考えずに、ただ現神の教えに依存しているに過ぎない。生きる辛さから、生きる過酷さから目を背け、信仰に逃げているだけだっ！》

『……ここであなたと、信仰について議論をするつもりはありません。ですが、これ以上はお止めなさい。これ以上の虐殺は、あなた自身まで殺してしまいます……』

暫しの沈黙後、ディアンは溜め息をつくど、剣を一振りした。ゴドニアの首が落ちた。兵士たちは既に逃げ出している。

『……言っておくが、コイツらはまた攻めてくるぞ？ 大司祭とやらは、まだノヒアで生きているからな……攻めてきたら、またオレに助けを求めめるのか？』

ディアンは愛剣を一振りし、血と脂を落とした。鞘に納めると、河辺に立つ水の巫女に歩み寄る。

『オレはアンタのことは嫌いじゃない。だが、オレはアンタの傭兵じゃないんだ。次にまた攻められたときに、オレが助ける保証は無いぞ？』

『……解っているはずだ。アンタが愛する、あの街を守る為には、何が必要かというのをな……』

水の巫女は瞑目した。ディアン・ケヒトの言っていることは解っている。バリハルト神殿がある限り、再びプレイアは攻められるだろう。水の巫女は自分が悔しかった。平和を愛する故に、軍隊を持つことを躊躇っていた。話し合えば、現神バリハルトとも解り合えると思っていた。だが人間というものは、時として愚かしい判断をするものなの

だ。バリハルト神殿は、自らの判断で水の巫女討伐を決めた。プレイアには人々を守れる力が無かった。だから魔神の力を借りざるを得なかった。そしてこの惨劇である。全ては、自分の見通しが甘かったということなのか・・・

水の巫女の眼尻に涙が浮かんでいるのを見て、ディアンは人間に軸足を戻した。たとえ神であっても「オンナの涙」は常に男を左右する。本来であれば、水の巫女自身に口に出させるところだが、この辺で勘弁してやろう、という気になったのだ。

《・・・このままノヒアに向かう。バリハルト神殿を純粹魔術で吹っ飛ばしてやるっ！》

水の巫女は顔を上げ、ディアンを見た。魔神のままだが、先ほどまでの禍々しさが消え、人間の気配を感じる。

《・・・心配するな。関係の無い人間には事前に警告するさ・・・》

ディアンは乗り捨てられた馬に乗ると、鉱山で栄える街、ノヒアを目指して北西へと向かった・・・

三日後、ノヒアの街は巨大な茸型の雲で覆われ、一瞬で廃墟となった。生き残った人たちは、とてつもない魔物が現れ、逃げざるを得なかったと口々に語った。この惨劇とノヒアの街崩壊により、バリハルト神殿が再びセアール区に進出するまで、百年以上の

歲月を必要としたのであった・・・

## 第五十七話：出会いと別れ

バーニエの街の執政官であるベルジニオ・プラダは、報告書に眉を顰めた。メルキア国は現在、バーニエの街を勢力下に治め、近郊の集落も続々とメルキア国に服従し始めている。メルキア国の将来を考えた場合に、穀倉地帯の次に必要になるのが「塩」「鉱物」の二つである。このうち「鉱物」については、チスパ山「古の宮」に使者を派遣している。ドワーフ族長の娘である妻も協力をしてきている。希少鉱物と魔導技術については、メドが立ちそうであった。「塩」を手に入れるためには、ブレニア内海沿岸まで進出をする必要がある。幸い、ブレニア内海沿岸地帯は、治安が良い割には強力な国家が出来ておらず、特にプレリアの街は、豊かな土壌を持ち、内海にも近いことから、メルキア国の次の進出先として、検討していた。プラダは既に何人かの諜者を派遣し、プレリアの街の情報を集めていた。そこに、バリハルト神殿の軍隊が押し寄せたことと、撃退され逃げ帰ったことが知らされたのだ。

『プレリアには、大規模な軍隊は存在していなかったはずだが……』

プラダは首を傾げて、更なる情報収集を行った結果、バリハルト軍が、たった一人によつて壊滅させられたことを知ったのである。報告書には、黒髪で黒服、背中に大きな



剣を背負った男が、五千名以上のバリハルト軍の前に立ち、凄まじい虐殺の末、一千名以上が死傷したという。更には、バリハルト神殿があるノヒアの街までもが、一夜にして「消失」してしまい、その犯人はバリハルト軍を壊滅させた男と、同一人物である可能性が高いと書かれていた。そんなことが可能な存在は、プラダは一人しか知らなかった。

『プレリアを統治している神「水の巫女」は、あの魔神と同盟関係にでもあるのか?』

もしそうなら、メルキア国にとって最大の脅威は、プレリアの街ということになる。魔神の恐ろしさは、神に匹敵する凄まじい力にある。一方で魔神は、基本的には「自己欲求」でしか動かなく、誰かに頼まれて動くことは無い。味方にはつけられないが、敵に回ることも無いのが「本来の魔神」なのだ。だが、魔神デリアン・ケヒトは違う。この魔神は、自身の欲求ではなく「政治的判断」で動く場合があるのだ。味方につければ心強いが、敵に回したら最悪の相手であった。プラダは謀者に対し、水の巫女と魔神デリアンの関係を徹底的に調べるように命じた・・・

『彼を癒してあげて下さい。それが出来るのは、あなただけなのです・・・』

水の巫女からそう頼まれたときは、私は恐縮して了承しながらも、疑問に思っていた。水の巫女が何を懸念しているのが、よく解らなかつたからだ。だけど、八日目に彼が

戻ってきたときに、私は直感した。彼の「心の疲れ」を感じたのだ。顔はいつも通りだが、全身から血の匂いがした。おそらく血の雨の中を歩き、どこかで躰を洗ったのだろう。私はすぐに、彼を浴場に連れて行つた。私は黙つて、彼の躰を洗つた。プレイアの街の守備などについて聞かれたので、出来るだけ笑顔で答えた。バリハルト軍のことは彼には聞かなかつた。

夜、私はふと目を覚ました。窓から月を眺める彼の姿が映つた。彼は月を眺めながら、私に呟いた……

『……殺しまくつたよ……出来るだけ残酷に……恐怖、痛み、絶望……この世のものとは思えないくらいに虐殺をした……オレは……魔神なんだ……』

私は起き上がり、彼の背中に抱き着いた。彼の人間の部分が、魔神となつた自分を責めているのだろう。

『私はあなたを魔神だとは思わない。魔神の力を持つていても、人間の心を持つているから……あなたは立派な人間よ？人間だから、後悔をしたり、罪悪感を感じたりするんだと思う……』

彼は黙つて、月を眺めていた。私は黙つて、ずっと彼の背に抱き着いていた。彼の背中が少しだけ、震えていた……

翌日、オレはレイナやグラティナを連れて、リタに会いに行つた。荷物を八日間も預かってもらったことの礼と共に、護衛終了の署名を貰わなければならぬからだ。リタは既に、開業する店の内装についての打ち合せなどで忙しいようだが、オレたちが姿を現すと、すぐに駆けつけてきた。相変わらぬ明るい笑顔と元気さだ。おかげで、オレの気分も少し晴れた。

『ニツシツシツ！バリハルト軍が来たおかげで、この街でも警備を強化するらしいよ？武器も素材も、ゼーんぶ売れちゃいました。今回の行商は大儲けだったよ。それもこれも、みんなあなた達のお蔭だよ。本当に有難うございましたっ！』

リタがオレたちに、素直に感謝を示しているのを初めて見た。思わず「裏がある」と疑つてしまうほどだ。そして案の定、裏があつた。

『えー 今回の儲けから、護衛の皆様にもそれぞれ、追加報酬をお支払いします。これはレイナ、こつちはグラティナ、ディアンは……』

『オレの分もあるのか？』

『何だかんだ言つて、一番働いたから、一番出したいんだけど、その中から「荷物の預かり賃」を貰うので……これくらい……』

『……レイナやグラティナの方が多くように見えるのだが……』

オレはそう呟いたが、笑顔を浮かべることが出来た。荷物は既に、水の巫女がいる神

殿に運び込まれている。レイナが根回しをして、一時的に一室を借りたらしい。オレたちは書類を渡し、リタから署名を貰った。あとはこれをレンストのドルカ幹旋所に持っていけば、任務完了である。オレはリタに手を差し出した。

『有難う。いい旅が出来たよ……リタの護衛が出来て良かった……』

『こちらこそ、良い護衛役と巡り合いました。またぜひ、お願いしますね……』

リタはオレの耳元まで顔を寄せた。二人に聞こえないように、オレの耳元で囁く。

『……レイナとグラティナ、どちらも泣かしちゃだめだぞ、魔神ディアンさん♪』

オレは驚いてリタの顔を見た。ニヒヒツと笑って、リタは手を振りながら、その場から離れていった……

(参ったな……御見通しだったのか……)

オレはため息をついて笑った。この世界には様々な人間がいる。軽蔑してしまう者もいるが、尊敬できる人間も多い。こうやって人と巡り合い、出会いと別れを繰り返しながら、オレはこれからも生きていくのだろう。神の悪戯で死んで、転生をしたこの世界も、決して悪いものじゃない……

『さて……レンストに行つて、仕事を終わらせるか……その前に、水の巫女に会わないとな。約束の確認と、部屋を借りる礼を言わないと……』

『レンストの街までは、往復で一週間くらいなのか?』

『そうね。でも出発は明日にしましょ。折角、追加報酬を貰ったんだもの。今夜は豪勢に飲みましょよっ!』

オレたちは笑いながら、神殿へと足を向けた・・・

第三章：了

## 第四章：新たなる旅へ

### 第五十八話：國産み

デイル||リファイナの世界では、多様な国家が存在する。それら国家を大きく二つに分けると、以下になる。

教権主義：特定の宗教を国教と定め、その宗教権威および聖職者による国家社会支配を肯定する

俗権主義：行政機関が、特定の宗教に左右されず、独立した俗権による国家社会支配を肯定する

教権主義の代表としては、アヴァタール五大国の一つである「レウイニア神権国」、俗権主義の代表は、同じくアヴァタール五大国の一つ「メルキア帝国」である。この隣り合う二つの国は、国家社会の支配体制が全く異なるにも関わらず、長年にわたって友好関係を続けている。レウイニア神権国は、その教義自体に「侵略的概念」が存在しないが、メルキア帝国は軍事力と経済力で各地を征服していった「侵略国家」である。当然、メルキア帝国内でレウイニア神権国への侵攻が議論されたことは、一度や二度ではなかった。

それにも関わらず、メルキア帝国がレウイニア神権国への侵攻を諦めてきたのは、大きく二つの理由がある。一つは、レウイニア神権国が持つ十一の軍隊である。レウイニアを統治する神「水の巫女」の祝福を受けたこの軍隊は、専守防衛を原則としながらも、各隊が強力な力を持っていた。この強大な軍事力が、レウイニア神権国の広大な領土と平和を守っているのである。

そしてもう一つは、メルキア帝国最高機密に属する理由からであった。建国者であるルドルフ・フィズメルキアーナから続く、歴代皇帝にのみ伝えられる口伝「バーニエの誓約」である。それは、ただ一人で一国を滅ぼし得る、圧倒的な力を持った「魔神D」と国祖ルドルフが交わした約束であった。

『メルキアは、戦の無い世を創る為に、敢えて戦をする。戦のための戦は許されない……』この口伝がレウイニア神権国との戦争を回避させていたのである。友好関係であり、あえて戦をする必要が無い中で兵を興せば、「戦のための戦」と受け止められ、「魔神D」がメルキアに災いをもたらすとされた。無論、歴代の皇帝の中には、この口伝を鼻で笑い、兵を興そうとした皇帝も存在した。しかしその皇帝は直後に、何者かによつて暗殺をされた。プラダ家が動いたとも噂されたが、その真相は一切が、闇の中である。

ただプラダ家でも、歴代当主のみが読むことを許される「ベルジニオ・プラダの日誌」の中に、この「魔神D」について書かれていると言われている。巷で流れる俗説では、そ

の日記のあまりの内容に、読んだ当主たちは恐怖にかられ、こぞって「魔導技術の推進」へと勤しむようになり、それがプラダ家を魔導技術の大家に押し上げる一つの要因になった、と言われている・・・

外は静かな雨が降っている。神殿の一室で、ディアンは水の巫女との会談を待っていた。バリハルト軍を退け、レンストの街でドルカへの報告を終えたディアンは、活動拠点をレンストからプレイアに遷した。ドルカに引き留められたが、これからのことを考えると、プレイアの方が都合が良かったのだ。雨の中、南門から入ったディアンたちを神官が待っていた。水の巫女がオレ一人に会いたいと言うのだ。レイナとグラティナは、宿で待っている。

『・・・どこかに家を持つと思うている。神殿の口利きで、家を用意して貰えないだろうか?』

バリハルト軍の撃退を水の巫女から依頼された際に、ディアンはこの条件を提示した。水の巫女はその条件を承諾した。レンストの街に行く前にも、再度の確認をしている。もし約束を違えることがあれば、ディアンにもそれなりの考えがあった・・・

『ディアン・ケヒト殿・・・巫女様がお会いになります。こちらへ・・・』

神官に呼ばれ、ディアンは「奥の泉」まで通された。奥の泉にも雨が降っているが、会



談をする場所には屋根がある。デイアンは棧橋を渡り、巫女の像が置かれている泉の中央まで進んだ。泉に手を浸すと、神気が像に宿る。像が生命を宿し、土着神「水の巫女」が姿を現す……

『デイアン殿、レンストから戻られたばかりなのに、早々にお呼び立てをして、申し訳ありません……』

『なに、構いませんよ巫女殿……』

『改めて、あなたにお礼を言わせて頂きます。あなたのお蔭で、プレイアの街は救われました。有難うございました……』

『……お気になさらず。オレがやりたくてやったのです……』

水の巫女がデイアンに頭を下げた。土着神といっても、現神の一柱である。それが魔神に頭を下げるのだ。デイアンは頭を掻きながら、謝意を受け取った。水の巫女はデイアンに着座を求めた。どうやら少し、長い話になりそうであった。

『あなたが希望されていた家についてですが、神殿の方で手配をしました。まずはそこらを使つて下さい……』

『感謝します。……まずは……』

『あなたの望む家となると、一から建てなくてはならないでしょう？当面の仮住まい、と理解して下さい……』

『なるほど．．．お気遣い、有難うございます』

ディアンは目の前に置かれた杯を手取る。ただの水だが、気持がそれを求めている。口を潤すと、水の巫女に質問をする。

『それで、オレを呼んだのは、そんなことではないでしょうか？バリハルトの次は、マーズテリアあたりが侵攻してくるんですか？』

『いえ．．．実は、あなたに相談に乗って頂きたいのです．．．』

『オレに相談？巫女殿の相談事となれば、こちらも構えてしまいますね．．．』

水の巫女は、腰かけて笑うディアンを見ながら、相談事を口にした。

『．．．国とは、どうやって創れば良いのでしょうか．．．』

レイナとグラティナは、神官に案内をされ、仮住まいに向かっていた。宿で神官が待っていたのである。

『仮住まいか．．．ディアンは恐らく、魔術や魔導技術の研究室を欲しがるだろうから、そうなると思われるの屋敷を建てなくてはならんからな。プレイアに屋敷を持つのだろうか？』

『でも、ディアンは旅好きだから、屋敷を持つても殆ど不在になっちゃうと思うけど．．．』  
『いずれにしても、まずは家具などが必要だな。ディアンが戻ったら、買い出しに行く』

か』

『そうね。何だか楽しみ・・・』

宿暮らしから、新しい住まいに移る。あいにくの雨だが、二人の胸は期待に膨らんでいた。

『・・・国とは、どうやって創れば良いのでしょうか・・・』

水の巫女のこの問い掛けに対し、デイアンは笑いを堪えるのに苦労した。肩を震わせ、デイアンを水の巫女は黙って見つめる。

『アハハハッ・・・オレは魔神ですよ？オレに国造りの質問をして、どんな回答を期待しているんですか？』

『魔神としてのあなたに聞いたものではありません。転生前に、科学世界で生きていたあなた・・・転生者デイアン・ケヒト殿にお尋ねしているのです・・・』

デイアンは水の巫女が何を求めているのか理解をした。ディル||リフィーナは、誕生してまだ二千年と少ししか経っていない。その間、まともな国家というものが出来ていない。つまり歴史が浅いのだ。転生前のデイアンがいた世界は、数千年の国家興亡の歴史がある。その歴史から、繁栄する国家を創る為の質問をしているのだ。

『なるほど・・・つまりオレの知識を求めているんですね？』

『虫の良いお願いであることは解っています。ですが、わたくしも神官も、国家というものを見たことが無いのです。神官たちも知恵を出し合っていますが、参考となるのはメルキア国程度しかないのです……』

『……一つ申し上げておきますが、メルキア国は参考にしないほうが良いですよ。あの国はいずれ、帝国になります。そして大帝国になった後は、おそらく分裂するでしょう。そうですね、千年後くらいには……』

『……そうした見立てが出来るのは、あなたの中に、わたくしたちには無い「国家の知識」があるからですね。あなたは人間族が生み出す国家の興廃を知っている。実際に見ていなくても、その歴史を知識として持っている。だから未来の歴史が予想できる……』

『……大まかな流れ、というだけです。メルキア国に似た国として、オレがいた世界で「ローマ帝国」という国がありました。繁栄をしたのですが、結局は東西に分裂をしました。この世界でも多分、そうなるでしょうね……』

ディアンは水差しから杯に水を入れた。口を湿らせると、再び話し始める。

『……それで、オレが国造りの知恵出しをするとして、その見返りに何を頂けるんですか?』

『あなたが希望させるもので、出来る範囲のもの……』

『……たとえば、オレが貴女自身を求めたとしても……ですか?』

『……それを望むのなら……』

水の巫女が真剣な表情でディアンを見つめる。雨音が少し強くなってきた。ディアンは沈黙した後、噴出したように笑い始めた。

『……冗談ですよ。そんなに真剣に受け取らないで下さい。プレイアの皆から信仰される巫女殿を抱いたとなれば、この街に住むことなど出来なくなっていますからね。家を建てるための土地と資金、そしてこれからの旅への援助……この程度で十分です』  
水の巫女は相変わらず表情を変えない。ディアンは思った。

(……惜しいことをしたかもな……)

『さて、国造りの知恵出しといっても、結構時間が掛かりますよ？何から話せばよいか……』

『あなたは先ほど、メルキア国は参考にしないほうが良いと言いました。その理由から教えて貰えませんか？』

『簡単に言えば、国家とは建国者の思想が反映されるからです。メルキア国は、建国者ルドルフ・フィズメルキアーナの思想「戦無き世を創る為に、敢えて戦をする」という考えの下に建国されています。統治機構もそれに合わせて設計されているのです。聞こえは良いですが、要するに「従わなければ侵略する」という考え方です。巫女殿の目指す国も、そういう国なんですか？』

『いえ．．．皆が平和に、幸福に暮らせる国が出来ればと願っています。現神も古神も、闇夜の眷属でさえも．．．』

『様々な神が対等に受け入れられ、差別も無く、皆が平和に暮らす国．．．オレの知る限り、そういう国は一つしかありません。転生前にオレが住んでいた国だけです。』  
「日出る国ジパング」という国です．．．』

雨足が強くなる。天気は荒れそうであった．．．

## 第五十九話：易姓革命と万世一系

『・・・家だと？たかが家一軒で、プレイアは魔神の力を手に入れたというのか。ハッ！何という安い買い物だ。魔神なら国の半分くらいは要求しそうなものを・・・』

メルキア国宰相にしてバーニエ行政執行官のベルジニオ・プラダは、プレイアに潜伏させている諜者からの報告書を読んで失笑した。魔神ディアン・ケヒトは、水の巫女と数度の接触を持っており、水の巫女はバリハルト軍の迎撃をディアンに依頼し、ディアンは屋敷の提供をその見返りに求めた、というものである。神殿が屋敷を一つ押さえ、そこにディアンたちの私物などが運び込まれている、などが細かく書かれており、結論として「水の巫女とディアン・ケヒトは同盟関係、あるいは個人的に親しい関係」とされていた。赤子を抱えた賢妻リザベルが、プラダから報告書を受け取り、素早く目を通す。

『・・・あなたから話を聞いた時には、随分と変わった魔神だと思いましたが、本当に、まるで人間ですわね』

『全くだ。バリハルト軍への虐殺やノヒアの街を破壊したことなどは、魔神の所業そのものだが、そうした暴力的部分を除いて、冷静にこの男を見ると、どこからどう見ても

人間としか思えん』

『・・・もしかすると、それが正解なのかもしれませんね。このディアン・ケヒトという人物は、元々は人間だったのではないかしら？それが何か理由があつて、魔神になつた』  
賢妻の推理に、プラダが頷く。プラダ自身、実際に対面した印象や、その後の報告書から、ディアン・ケヒトは魔神の力を持つ人間だと結論付けていた。

『人間であれば、取り込むことは可能ではないか？たとえば美女や財産などで・・・』  
『無理ですわね。この人物のこれまでの行動、言動などを見ると、そうした物質的な欲求には、あまり執着していないように見えます』

『うむ、そうだな。人間である以上、無欲ではないだろうが、小人的欲求でのみ動くような単純な男ではない。一体、コイツは何を目指しているのか』

『ひよつとしたら・・・旅をするのを単純に愉しんでいるだけ・・・かもしれませんわね』  
『それが一番平和だな。是非、そうあつて欲しいものだ』

腕の中の赤子は、それが正解だと言うように、笑っている。実際、賢妻リザベルの推理は、当たらずとも遠からずであつた。ディアン・ケヒト自身、無限の寿命を何に使うのか、まだ明確に決めていなかったからである。

『オレが住んでいた国「ジパング」について語る前に、まずオレがいた世界からお話しま



しよう』

『ディアンは静かに語り始めた。ディルリフィーナの世界とは違う世界の物語である。』

『オレがいた世界では、人類は数千年以上の歴史を持っていました。この世界のように、エルフやドワーフがいない世界です。現神だって、目に見える形ではありませんでした。人々の信仰の中にのみ、神々が存在していたのです。そうした世界で、数千年前に初めて、国家が誕生しました。最初は一つの都市に一つの国家だったのですが、やがて国家同士が集まり、より大きな国に変わっていったのです。そうなる、国家同士の争いになる。つまり「戦争」です。オレのいた世界では、何千年にもわたって戦争が続きました。無数の国家が、無数の戦争を繰り返していたのです』

『あなたの世界でも、人間は戦争をするのですね。戦争をする理由は、何だったのですか？』

『理由は様々です。信仰する神が違う、社会制度が違う、土地や資源を巡っての争いなどなどです。中には、ルドルフ・フィズメルキアーナのように「戦の無い世を創る為に戦をする」なんて戦争もありましたが、それも突き詰めれば「個人的欲求」での戦争です。およそ、戦争なんてバカバカしいですよ。避けられるのであれば、戦争はしないほうが良い』

『そうですね。ですが、そうした戦争の果てに、やがて平和が訪れたりはしなかったのですか?』

『・・・残念ながら・・・おそらく人間から戦争を無くすことは出来ないでしょう。オレのいた世界を見る限り、オレ自身はそう思っています。・・・話を国家に戻しますが、そうした戦争の中には、当然「内乱」もありました。国の統治者が悪い、それを辞めさせようと国民が運動をすると、統治者は自己保身のためにそれを弾圧します。その結果、国内で反乱が相次ぎ、やがて国家が倒れ、新しい統治者が生まれる。実際のところ、外敵によって滅亡した国家というのはあまり多くないのです。役人の汚職や治安の悪化あるいは食糧不足などで、国家自体が腐敗していて、国民も国家から心が離れている状態・・・そんな状態になれば、反乱が起きて新しい国家を創ろうという動きになります。』

“ 国民を幸福にしない国家などさっさと滅ぼして、新しい国家を建国すれば良い・・・ ”

こうした思想を「易姓革命」と呼んでいました』

『易姓革命・・・』

雨足が強まってきていた。どうやら本降りに入ったようである。ディアンは再び水を含んだ。

『数千年の歴史の中で、この易姓革命が何度も起きました。そうして国家は興亡を続けてきたのです。ですが、そんな中にも例外がありました。それがオレの住んでいた国

「ジパング」です。ジパングは、建国してから二千数百年間に渡って、一系の統治者によって国が治められてきました。現在進行形という条件付きで「不滅の国家」とさえ言われていたのです』

『二千年以上も……このデイルリフイーナよりも古い歴史を持っているのですね。どうして、ジパングだけは例外だったのでしょうか？』

『ジパングが島国だった……というのも一つの理由ではありますが、最大の理由は、国家の設計思想です。多くの国が「易姓革命」で国を設計する中で、ジパングは全く違う設計をしていました。それを「万世一系」と言います』

『易姓革命と万世一系……その万世一系とは、どのようなものなのですか？』

『万世一系の最大の特徴は、国の統治者と為政者を分けたことにあるのです。統治者は「国家の象徴」として、ミカド族という血統によって代々、担われてきました。ただ、この統治者はあくまでも「国の象徴」なのです。実際に政事を担当するのは為政者です。この為政者は、歴史の中で様々に変わってきました。権力闘争で為政者の座を得た「フジワラ族」、武力闘争で為政者となった「トクガワ族」、その後は国民の手によって選出された為政者が、権力者として国家の政事を担っていました』

水の巫女は首を傾げた。万世一系というものが、まだ理解できなかったためである。

『その……ミカド族という一族は、何をしていたのでしょうか？ 国家の象徴と政事をする

為政者の違いが、まだ解らないのですか?』

『簡単に言えば、統治者は政治的な権力を持たないのです。象徴として、歴代の為政者を「任命」するのが仕事です。また、法律などを「承認」したりします。あとは、国民の祝日などでは、国民の前に姿を現し、国家の象徴として手を振ったりしていますね』

『失礼ですが、随分と「楽」と言いますか・・・』

『とんでもない。楽なんかじゃありませんよ。国家の象徴であるミカド族は、常に国民から見られる存在です。国民はミカド族を見て、自分たちはジパングの国民だ、と認識するのです。統治者らしからぬ行動は、ミカド族には決して許されません。生まれた時から、死ぬ時までです』

水の巫女は想像をした。人間は欲望がある。寝たいと思う時、食べたいと思う時、そうした時でも、自分の欲求を抑え、国家の象徴として常に振る舞わなければならない。たとえ衣食住が保証されているからと言っても、それは確かに、過酷なことなのかもしれない・・・

『ミカド族は権力を持ちません。ですが国家の象徴として、統治者として、国民全体から慕われる存在です。普段は意識をしていない国民も、もしミカド族に危害を加えるような輩が出たら、間違いなくミカド族を護ろうとするでしょうね。国民の求心力となる存在、それが「国家の象徴」なのです』

『・・・良く解りました。国民を「国民」として精神的に束ねる存在、それが権威を担う存在、ミカド族なのです。ね？』

『そうです。そしてミカド族に任命される形で、権力者は常に交代していきました。人間である以上、政事に失敗することもあります。腐敗をする場合もあります。権力を国民のためではなく、自分の為に使おうとする為政者もいました。そうなると当然、その為政者は国民から責められます。国内も混乱します。新しい為政者となるべく、武力で争われた時代もありました。ですが統治者である「ミカド族」に代わろうとする輩は出ませんでした。権威と権力を分離することにより、ジパングという国家の象徴、国民を精神的に束ねる力は、二千数百年間も変わることがなかったのです。これが「万世一系」の思想です』

水の巫女は考えた。自分は土着神である。易姓革命の国りよりも、万世一系の国の方が、自分の目指す国に近いのではないか・・・自分が国の象徴として統治し、自分の任命の下で権力者が政事を行っていく。神である自分は、永久に変わることなく、この泉から国を見続けるのである・・・

『大変参考になるお話でした』

水の巫女の様子を見ながら、デイアンは思った。やっぱりこの貌を快樂で歪めてみたい。目の前の美しい土着神が快感で翻弄されている姿を見たい。

『・・・巫女殿、国造りについてはまだ続きがありますが、そろそろ日が暮れます・・・今日はこの辺で・・・』

『そうですね。また機会を設けて、お話を聞かせて下さい』

『喜んで・・・と言いたいところですが』

『・・・何か?』

ディアンは水の巫女の手を取った。

『やはり気が変わりました。屋敷も貴女も、欲しいと思います』

光るディアンの瞳を見つめる水の巫女の表情に、ほんの僅かに変化があった・・・

## 第六十話：思想と信仰

神官から教えられた道をディアンは歩いた。雨は上がり、夕日が美しく映える。水の巫女からの相談は「国造り」についてのことだった。一国の建国に携わることになり、ディアンは正直、荷が重いと思っていた。転生をする前は、多少は知識があつてもただの一市民だったのだ。そんな自分に、国家建設の助言を求められても困る・・・（ヤレヤレ、今日はとんだ厄日だ・・・訳の分からない相談は受けるし、美人からは振られるし・・・）

仮住まいとして神殿が用意をしてくれた屋敷に向けて、ディアンはトボトボと歩いた。その後ろ姿は、どこから見ても落ち込んだ青年の姿そのものであった。

水の巫女は、泉の中で考えていた。先ほどまで話をしていた、人間であり魔神でもある男との出来事を振り返っていたのである。

『・・・やはり気が変わりました。屋敷も貴女も、欲しいと思います』

ディアンはそういうと、水の巫女を押し倒した。巫女の表情はほとんど変わらさず自分の上に押し掛かったディアンを見つめる。ディアンは水の巫女の両手を抑え、彼女の胸

を弄ろうとした……

『……お止めなさい。これ以上の乱暴は許しません。ここで止めれば、この無礼は忘れましょう』

水の巫女は硬い表情のまま、デイアンに告げた。デイアンは手を止め、水の巫女の貌を暫く見つめた。そしてため息をついて、体を起こした。デイアンは頭を掻きながら呟いた。

『ヤレヤレ……振られてしまいましたか』

『そういう問題ではありません。いきなり襲いかかるなど、普段の貴方らしくありませんね』

『オレは半分は魔神だからね。巫女殿の冷たい表情を見ていたら、この表情に喜悦を浮かべてみたい……そう思ったのさ』

『あのような乱暴をされて、喜ぶと思えますか?』

デイアンは再び、深いため息をついて水の巫女を見た。

『巫女殿……先ほどの話を聞いて、自分に万世一系が可能だと思ったのなら、少し勘違いをしている。万世一系は、権威を担う象徴が人間だから可能なんだ。神である貴女に、人間が理解できるのか? 生活の為に働いたことが、貴女にはあるのか? 飢えを知らず、子を持つ親の気持ちを知らず、異性を愛する心を知らず、男女の営みの悦びも知ら



ないのに……それで国民の象徴になれると思つていいのか?』

『……』

『巫女殿がプレイアの住民たちを大切に思つてゐるのは間違いないだろう。この土地を豊かに繁栄させたいという願いも本物だろう。だがそれだけでは、国家の象徴にはなれない。人間の国の象徴は、人間でなければならぬ。だからオレの世界では、万世一系の国家はジパングしか存在しなかつた。他の国々は、それが出来ずに、神……つまり「宗教」に頼つたんだ』

『この世界は、あなたのいた世界とは違います。神が現実に存在しているのですよ? それでも無理なのですか?』

『……可能かもな。だがそれは、あなたを神と崇める宗教国家と同じだ。国民では無く信徒たちの集まり……国を思う気持ちではなく、貴女を思う信仰心になつてしまふ』

『……あなたがなぜ、それほどに信仰を……宗教を嫌うのか、教えて貰えませんか?』

『……オレ個人の問題だ。オレのオンナでもない貴女に、教える筋合いは無いね』

『……ダイアンはそういうと、奥の泉から出ていった。』

水の巫女は思つた。  
(あの男に抱かれれば、少しは人間のことか理解できるのだろうか……)

確かに自分は、飢えを知らない。子を持つ気持ちを知らない。特定を異性を愛したことも無い。男に抱かれたことも無い。当然、生活の為に働いたことなども無い。生きるための不安や悩み：そうした普通の人間が持つ、当たり前の感覚が自分には無かった。そんな自分が、人間たちの象徴になれるのだろうか？デリアン・ケヒトの言葉が、水の巫女の心に深く刺さっていた。

(もう少し、あの男と話をしましょう。必要なら、抱かれるくらいは構いません)  
水の巫女はそう決めた。

神殿が用意してくれた屋敷は、程よい大きさの落ち着いた邸宅だった。庭はほどほどに広く、五つの寝室に厨房、応接間、地下室もある。研究室となる書斎には、ブレアー・ド・カッサレの資料が全て収められていた。だがやはり、風呂が無かった。将来を考えると、温泉を発掘してそこに屋敷を建てるのが、最も理想に近いだろう。デリアンにとって、研究室と風呂は必須条件だった。

『デリアンッ！この家、凄く広くてイイねッ！』

『うむ。庭で剣も触れるしな。悪くない』

レイナとグラティナは、二人してはしゃいでいる。デリアンは二人の様子を見て、当面はここに住むことに決めた。

『さて……では早速、ベッドの具合を確かめてみるか』

ディアンは二人の肩を抱いて、寝室へと向かった。

水の巫女とぎこちなく別れてから二日後、ディアンは再び、神殿に呼ばれた。奥の泉で水の巫女を呼び出す。

『ディアン殿、よく来てくれました』

『先日は失礼をしました。いささか、性急すぎました』

ディアンは水の巫女に向けて、謝罪した。水の巫女は頷き、ディアンに着座を勧めた。  
『……あれから、あなたに言われたことを考えてみました。確かにわたくしは、人間のことを知りません。普通の人間が持つであろう「苦悩や歓喜」といったものをわたくしは感じたことが無いのです』

『まあ、巫女殿は「神」なのでですから、それも当然でしょう。オレだって、重い荷物を巣まで運ぶ「蟻」の気持ちは理解できません』

『……お聞きしますが、仮に貴方に抱かれたとしたら、わたくしは人間を理解できるでしょう吗？』

『まあ、多少は視野が広がるでしょうね。ただ、オレとしてはやはり遠慮をしたいですね。これでも欲情で動いたことを反省しているですよ……もちろん今でも、貴女のそ

の冷たい表情に喜悦を浮かべたい、という想いは変わりませんが、プレイアの民衆からこれだけ慕われている貴女を抱くのは、やはりちよつと、気が退けますね』

『・・・わたくしは男を知りません。ですが、これからの国造りにおいては、知っておいた方が良いのかもしれない・・・そう思っています。男女がなぜ、生殖目的以外で異性を求めるのか、わたくしには理解できません。男を知れば、理解できるのかもしれない』

『ああ・・・なるほどね。それは男を知らなくても理解はできますよ。貴女の操を犠牲にする必要はありません。オンナの躰というのは、男に触れたら快感を得られるように作られているのです。オトコの躰も同じです。まあ場所は男女で、多少違いますけどね。お互いに快感を交換しあつて、そうやって男女は盛り上がるのです。経験してみますか?』

『・・・ええ・・・お願いします』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ディアンは固まってしまった。冗談のつもりで言ったのに、水の巫女が真に受けてしまったからだ。

(いや、そこは「いえ、結構です。理屈としては理解できました」くらいで流してくれないと・・・)

『……どうかしましたか?』

『ああ、いえ……まさか本気だとは思わなかったの……解りました。ほんの少しだけ、お相手をしましょう』

ディアンはそう言うのと、水の巫女の後ろに回り、両腕を前に伸ばした。水の巫女は微かな期待と共に、目を閉じた……

『ヤレヤレ……まさかあんなに感じるとは』

ディアンは神殿で食事を取っている。水の巫女は、少し躰を冷ましたいと言って、泉に消えた。会談は二刻後と決められた。食事を取り終えると、神殿の中を散策する。書棚には水の巫女の教えについての書籍があった。神官が書いたものらしい。ディアンはそれを手に取り、読み始めた。

……この世界には、あまねく神が存在しています。現神や古神だけではありません。川の流れの中に、山の土の中に、森の木々の中に……大いなる命と共に、無数の神々が存在しているのです。ヒトは誰しも、目に見えるモノだけを信じ、理解できるものしか受け入れようとしません。ですが多くの場合、それらは僅かな経験から生み出された「先入観」で判断をしているだけなのです。大いなる中で、あなたは存在しているのです。生きていることは、それ自体が過酷であり、修行のようなもの……だから時とし

て、心が弱くなることがあります。そういう時は、自然の中に生きる神々のことを思い出しなさい。あなたは偶然に生まれたわけではありません。あなたは常に、見守られています。あなたは決して、独りではないのです……

(……自然信仰に近いな……水の巫女自身が、水の精霊から生まれている為か……) 水の巫女の教義は、古神を排除しないと言われていた。だがそれを言葉として読むのは初めてであった。読み進めていく中で、水の巫女を中心とした国家像の在り方が、ぼんやりとディアンの中で形成されていった。だがそれは、水の巫女および神官たちが考へるべきことだ。ディアンと水の巫女は、個人的に親しい程度でしかないのである。

『ディアン・ケヒト殿……水の巫女様がお待ちです』

神官に呼ばれ、ディアンは思索の海から上がった。奥の泉に行くと、水の巫女が既に待っていた。先ほどまでの貌は無く、普段通りの表情である。

『ディアン殿、お待たせしました』

『いえ……落ち着かれましたか?』

『お恥ずかしい限りです。あのように乱れてしまうとは……』

『貴女の、あの貌と姿が見れただけで、オレとしては大満足ですね。一生の思い出になり

ますよ』

『忘れて下さい……と言っても、無理でしょうね』

『ええ、忘れません』

水の巫女はため息をついて、ディアンに着座を勧めた。

『さて、先日のお話の続きですが、わたくしでは、万世一系の国家は作れない……. そうあなたには言いました。その理由をもう少し聞かせて下さい』

『簡単に言えば、思想と信仰の違いですね。万世一系は、国家統治の仕組みなのです。そこには国民一人ひとりがどの様に生きていくべきか……. などという「教義」は存在しません。つまり国民は、自分の人生や自分の判断に「自己責任」を求められるのです。ミカド族を敬まわれないという選択まで、許されるのです。ですが信仰は違います。信仰とは、国民一人ひとりを縛るものです。国民は程度の差こそあれ、自分の人生や自分の判断を「神に委ねる」ことになります。解りますか？「思想は、自らが主なのに対し、信仰は、神を主と仰ぐこと」なんですよ』

『以前、あなたがバリハルト軍と戦った時に言っていましたね。彼らは信仰に逃げているだけだ…….と』

『自らを主とするのは、実は過酷なことなのです。何があっても自分の責任なのですからね。「神の試練」とか「神のお導き」にしたほうが楽なんですよ。でもそれでは、人は成長しません。自分の責任として受け止め、反省し、学び、次に活かすことを繰り返し、人は成長するんです。もちろん、宗教の効用は否定しませんよ。社会形成をする上

で、教義が一定の効果を持ったことは事実です。汝殺す無かれ……こうした教えが、人々の倫理や道徳を形成したのは事実でしょう。ですが、バリハルトの神官のように、自分で考えることなく「教義は正しい」と妄信するようでは、それは考えることを放棄していることと同じです。「汝殺す無かれ」という教えがあれば、どうして殺してはいけないのかを考えなければならぬのです』

『……そして行きつく先が、神からの解放「ルネサンス」なんですね？』

『まあ、この世界でいきなりそこまで求めるのは難しいでしょう。ルネサンスとは、極論すれば「自らを神とすること」なんですから。ですが、断言しましょう。いずれ人類は、必ずそこに辿り着きますよ。時間は掛かるでしょうがね』

水の巫女は考え込んだ。自分が神官に伝えたことは、人はどう生きるべきか……などというものではない。だが、自分が権威を担うとしても、実際の政事は宗教とは別枠で運営すべきではないか……水の巫女は自分が考えたことをディアンに伝えた。

『まあ建国時、ということを考えて、いきなりそうした政治体制は難しいでしょうね。神殿の神官たちによる政事になるでしょう。ですが何百年かしたら、そうした権力は神殿から取り除き、神殿はあくまでも権威を担う存在、とすべきでしょうね。理由は簡単です。人間が権力を持てば、必ずそこに腐敗が生まれます。どんなにあなたが神官たちを論しても、必ず腐敗しますよ。ですが、権威は穢れてはならないんです。象徴なんで



すから……つまり、あなたは穢れてはならないんです。そしてあなたを祀る神殿もね……』

『またお礼を言わなければなりませんね。良いお話を聞かせて貰いました』

『この程度で良ければ、いつでも……ところで、気になっていたのですが、国名は何とするのでですか?』

『この地を生み出した人の名前、アレックス・レウイニアの名を取り「レウイニア国」にしようと考えています』

『ダイアンは首を傾げ、うーんと唸った。』

『……何か、気になることでもありますか?』

『いえ、レウイニアとは、人の名前から取ったんでしょう?正直、国名としてはいま一つ：いえ、いま三つは足りませんね。アレックスさんの名を知らない人にとつては、レウイニアって何?となるでしょうから……国名とは、誰もが「どんな国か?」が判る様な名前が良いんですよ』

『そう……ですか……』

『まあ、巫女殿がレウイニアという名に思い入れがあるのであれば、それは残すとして、もう少し「ドス」を利かせたほうが良いでしょうね』

『例えば、どんな名前でしょうか?』

『神である巫女殿が統治者となる・・・神による統治のことを「神権」といいます。この「神権」を加えては如何ですか？』

『・・・レウイニア神権国・・・』

『悪くないでしょ？』

真剣に考える水の巫女を見ながら、デイアンは笑みを浮かべた・・・

## 第六十一話：別れ

後世、レウイニア神権国はアヴァタール地方随一の大国となる。その政治体制は、土着神「水の巫女」を絶対的な君主とし、「レウイニア教」を国教と定めた宗教国家である。一方で、その教義自体は排他的なものではなく、古神なども受け入れる土壌を持つている。水の巫女が絶対君主であるが、通常の政治体制は、水の巫女の使徒である「王」と王に選ばれた「貴族」および水の巫女を祀る「神殿」によって政治が行われる。

そのため、後世においては、水の巫女を絶対視する「神殿派」と、政治から宗教色を廃し、王政に基づいた政治を行うべきとする「貴族派」に分かれ、派閥抗争が繰り広げられることになる。水の巫女は、その姿を殆ど人前に顕さないことから、貴族派の中には、水の巫女の存在自体を疑う声すら出る。いずれにしても、水の巫女自身はレウイニア神権国の国民から広く敬愛され、敬われる存在で在り続けているのは確かである。

レウイニア神権国は、『第一軍 宮廷騎士団テルフヴァシーン』、『第二軍 聖堂枢機軍サーフヴァラツサ』、『火龍騎士団テルナヴァシーン』、『白色魔導騎士団ナグヴァイツフールス』、『第七軍 鋼鉄槍騎兵隊シユブナガリユヴァイ』、『第八軍 不死騎兵隊アナートヴァイ』、『虹色騎士団レルヴァシーン』、『第十一軍 白地龍騎士団

ルフィドⅡヴァシーン』など計十一もの軍を有する軍事大国となる。その理由は、レウイニア国教が古神をも認めるため、他の現神および神殿勢力からの攻撃に備えるため、と一般的には言われている。

ただ一方で、自主防衛のために十一もの軍隊が必要なのか、という疑問の声もあり、何のためにそれほど軍事力を必要とするのかは、後世の者達自身すら不明であり、全ては水の巫女の意志の中に秘められている…

水の巫女との会談は、不定期で数度にわたって行われた。オレは自分の転生前の世界などを交えながら、情報提供をしていた。その礼というわけではないが、水の巫女の「あられもない姿」を何度か見ることが出来たので、オレとしては満足だった。だが、そろそろ水の巫女の中に、目指す国家像ができた頃に、水の巫女とオレとの間に、考え方の相違が出始めた…

『王政？レウイニア神権国を王政にすると言うのですか？』

『はい。わたくしの使徒を選び、王とし、王自身がわたくしを敬う形式ではどうかと考えました』

水の巫女は、オレが住んでいた国「ジパング」を参考に、レウイニア神権国の政治体

制について考えたらしく、オレに相談を持ちかけてきた。オレは腕を組んで考えた。オレ自身としては、国民が為政者を選ぶ民主国家にすべきだと思つていたのだが、水の巫女は「ミカド族は、ジパングの宗教の大司祭を兼ねていた」という話から、この政治体制を考えたらしい。

『まあ、あなたが建てる国ですから、オレがアレコレと言うべきではないのですが、覚悟はしておいてくださいね？王政とは、つまり「特権階級」を創るということになります。巫女殿の下で、皆が平等・・・ではなく、そこに「血縁」という身分制度が誕生します。自分で努力をしたわけでも無いのに、生まれがそうだったから・・・というだけで身分が決まる。こうした身分制度は、人間を腐敗させる土壌です。オレのいた世界の歴史が証明しています』

『ですが、実際に政事を行うにあたっては、誰かが為政者とならなくてはなりません。あなたは言いました。わたくしは穢れてはならない。政事から離れるべきだと・・・です。ので、政事を行う組織体として、王および貴族は必要なのではないのでしょうか？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

オレは考えた。民主主義とは、誰かから与えられるものではない。民衆自身がそれを望み、自らの手で勝ち取らなければ価値が無いのである。長い歴史を見れば、王政となつて腐敗し、民衆による革命が起きたほうが、良いのかもしれない。その時は、水の

巫女は廃されるかもしれないが、それはそれで彼女の責任である。そこまでオレが面倒を見る義理はない。

『まあ、仰ることはわかりました。巫女殿が建国者です。オレとしては、これ以上は何もいえません。それに、あとは人間たちの手によつて造られるべきでしょう。何から何まで、神々が設計をしたら、それこそ人間のためになりません』

水の巫女はオレを見つめた。相変わらずの無表情だ。やおら、オレに質問をしてきた。

『もし、あなたが国を創るとしたら・・・』

『その時になつたら考えますよ。ただ言えることは、どんな国でも「不滅」では無いということです。オレが住んでいたジパングでさえ、いつの日か消えるでしょう。あなたがこれから建国する、レウイニア神権国もね』

『数々の協力、ありがとうございました：あなたはこれから、どうするのですか？』

『また旅に出ますよ。グラティナの母上殿をハレンラーマまで護衛したいと思つています。その後は・・・そうだな、ケレース地方あたりに行つてみようかな』

こうして、水の巫女とオレとの「神々の國産み」は終わった。水の巫女は、これまでの礼として、相当額の支援金を出すと云つてくれた。オレとしては有難い話であり、感謝して受け取つたが、この時点でオレは既に気づいていた。このレウイニア神権国に

は、いつまでも住み続けることは出来ない・・・

『母上の護衛をしてもらえないのは有難いが、母上は強いぞ？一人でも大丈夫だと思おうが？』

仮屋敷に戻ったオレは、レイナとグラティナにハレンラーマ行きの話をした。グラティナの母親が引越しをするにあたって、その護衛をしたいと伝えたのだ。オレとしては、ハレンラーマという土地を見てみたかったし、その後はケレース地方に行つてみたかった。

『まあ、母上殿の護衛はついでだ。あのあたりは、闇夜の眷属が多いと聴く。一度行つてみたいと思つていたので。その後は、出来ればケレース地方に行つてみたい。幸い、神殿からも支援を貰つたし、当分は旅ができるだろう。リタを見習つて、行商しながら旅するということのもアリだな』

『この屋敷に住んだばかりだけど、しばらくは戻らないわね。掃除をしておかないと』

『そうだな。一応は現状保存用の結界を張っておくか。建物が傷まないように』

『出発はいつにするのだ？母上は別に、急いではおられないが・・・』

『片付けと準備なども入れたら、三日後といったところか。その間に、リタにも挨拶をしておこう』

オレは書齋に入ると、革袋にブレアード・カツサレの魔術書と彼の研究メモ、他数点の書籍や素材、道具を入れた。失うわけにはいかない資料のみ、選出する。今回の旅は長い。ひよつとしたら・・・いや恐らく、この屋敷には二度と戻らないだろう。

三日後、オレたちはグラティナの母親「ララノア・ワツケンバイン」が住むバーニエを目指して出発をした。二台の荷車である。一台はオレたちの荷物などだが、もう一台はリタからの依頼だ。塩や素材類などが載せられている。旅から戻った時にカネは受け取ると言っていた。形を変えた、餓別のつもりなのだろう。神殿からの支援金は、通貨ではなく「黄金および宝石類」だった。これから行くところには、プレリアの通貨は使えないからだ。水の巫女なりの気の利かせ方なのだろう。

バーニエに行く途中の野営中に、オレは予感を感じた。焚き火に二人を残し、オレは森の中に入る。小さな小川に、水の巫女が立っていた。相変わらずの無表情で、オレを見つめていた。

『もう、レウイニアには戻らないつもりですか？』

『わからん。だが、巫女殿が作ろうとしている国は、オレが住みたいと思う国ではない』  
『残念です。新しい国で、あなたに人として生きて欲しかったのですが・・・』

『巫女殿には感謝をしているよ。だが、オレにはオレの生き方がある。お気遣いはあり



がたいが、生き方は自分で決める』

『次に会うときは、敵として会うことになるかもしれませんね．．．』

『ああ、だから今のうちに．．．』

オレは水の巫女に近づき、頬に手を当てた。彼女は抵抗しなかった。

『操は頂かないが、あなたの唇を頂く』

水の巫女が少しだけ、表情を変えた。しばらくの間、オレたちは唇を重ねた。去り際にオレは水の巫女に伝えた。

『あの屋敷はお返します。中の資料などは処分してもらっても構わない』

『いいえ、残しておきます。あなたは戻らないかもしれない。ですがいつの日か、あなたに替わる人が、我が国に留まってくれるかもしれないから』

『オレに替わる存在か：ソイツなら、オレを殺せるかもな』

オレは笑って、水の巫女と別れた．．．

## 第六十二話：ララノアの弓

メルキア国傘下に入ったバーニエの街は、かつて以上の活気を見せていた。東西の商人は無論だが、古の宮や東北部の亜人地帯からも、行商人や人々が往来している。交通の要衝らしく、巨大な行商街が幾つもできていた。オレたちは大きく変わりゆく街を見ながら、グラティナの実家に入った。

『私の引越しのために、わざわざ来てくださるなんて』

『グラティナは、私にとって大切な存在です。その母君である以上、あなたも、私にとって大切な存在ですよ』

ララノアの引越しは、それほど時間が掛かるものではない。時間が掛かっているのは、大陸公路に入る為の通行許可証である。かなり厳重な審査があるようだ。ただでさえヴァリⅡエリフのララノアは、一か月以上、待たされている。

『役所にもお願いはしているのですが、「彩狼の砦」の通行許可が下りないのです。かなり時間が掛かるようで……せつかく手伝いに来ていただいたのに、本当に申し訳ありません。許可が下りるまで、狭いですけど我が家にお泊まり下さい』

『いえ、宿を取っておりますので、お気遣いなく……何か、お手伝いをすることはありません』

んか?』

『そうですわね、しいて言うなら……一度、お手合わせを頂けないかしら? 娘に刻んだほどの強さ、私も見てみたいと思っていました』

『は、母上っ!』

『構いませんよ。ただ、仕合にして下さいね。グラティナの母上殿と死合うわけにはいきません』

ララノアは妖艶に笑った。グラティナは不安そうな顔をし、オレと母親を見つめた。

『ディアン、本当に母上と、仕合うのか?』

宿に荷物を入れると、グラティナがオレに問い質してきた。今夜、ララノアと手合わせをすることが決まっただけから、グラティナはずっと不安そうな顔をしていた。

『ん? ただの手合わせだろ? 負けるつもりはないが……何か不安なのか?』

『私が心配なのは、母上の方だ。父上が死んでもう三年になる。その間、母上はオトコをずっと絶っている……』

『なるほどね。そういう心配か』

グラティナの不安とは、オレとララノアが男女の関係になることだ。確かにララノアは、オトコを刺激する妖艶な美人だ。もし誘われたら、間違いなく受けるだろう。だが

グラティナがいながら、その母親に手を出すのは、さすがにケダモノ過ぎるというものだ。

『心配するな。オレだって節度は弁えている』

肩を叩くいてそう告げると、グラティナは首を横に振った。

『そうじゃない。その・・・もし母上がお前を求めたら、受けてあげてくれないか?』

オレは呆気に取られてしまった。

夜、バーニエ郊外の場所に向かったオレは、かつて同じ場所でグラティナと死合をしたことを思い出していた。

(娘と死合をした場所で、今度はその母親と仕合か)

ララノアは先に到着していた。奇妙な形の弓を持っている。オレは過去の知識の中から、その弓を思い出していた。「剣弓」と呼ばれる弓だ。遠距離から射掛けると同時に、弓自体が剣の役割をして、近接戦闘も可能な「遠近両攻」の武器である。

『良く来て下さいましたね。ディアン殿、ここからは娘を預けている親としてではなく、一人のヴァリールエルフとして、あなたに勝負を挑みます』

『解りました。ですが、あなたを傷つけるわけにはいきません。オレはコレを使います』

『よ』

オレは木刀を用意した。ドワーフの木から削り出したもので、相当に硬い。だがララノアは目を細めた。怒りの感情を持ったようだ。

『・・・私も甘く見られたものです。デイアン殿、そのような手加減など無用です。背の剣をお抜きなさいっ！』

『お断りします。もし負けるようなことがあれば、オレの実力はその程度、ということですよ。あなたが負けても恥ではありませんよ。オレはそれ程に・・・』

オレは気配を変えた。ララノアはオレが何者かを知っている。オレの強さを知りたいのなら、遠慮をする必要はない。全身を覆っている魔力を消す。身体から、魔神の気配が立ち上る・・・

『・・・強いですよ？』

『・・・どうやら、本気のようにですね。良いでしょう。こちらも全力でいきますっ！』

ララノアはいきなり弓を放った。殆ど構えすらしていない。物理障壁結界が弾くはずであったが、なんとそれを突き抜けてきた。顔を目掛けて飛んできた矢をオレは躲した。だが次の瞬間には、オレの間合いにララノアが踏み込み、剣弓で切り掛かって来る。後ろに飛んで躲したが、服が切り裂かれた。

『今のは警告ですよ？私の弓は、魔法結界を突き抜ける威力を持っています。次は本気でいきますからね』

《驚いたな・・・これはこちらにも真剣になるしかありませんね・

オレは啖い、そして動いた。人を遥かに超える速度である。一瞬でララノアとの間合いを詰め、木刀で撃ちかかる。だがララノアは、剣弓でそれを受け止めると、この近接距離からオレの腹を目掛けて弓を放った。だが・・・

『・・・嘘でしょう?』

オレは一瞬で十歩以上を下がっていた。手には矢が握られている。

『放った矢より速く後ろに下がる・・・本当に、人間ではありませんね』

《今のオレは魔神です。どうしますか? 手合わせ程度なら、これで終わりにしても良いのでは?》

これは仕合である。であれば、互いの腕が解る程度で十分であるはずだった。だがララノアは首を横に振った。

『あと一つだけ、試したい技があります。それが躲されたら、私の負けで結構ですわ』  
《ほう・・・では、躲して見せましょう》

ララノアは弓を用意した。十歩以上は離れている。この距離ならどんな弓でも躲すことは可能だ。オレはララノアが何を考えているのか、理解できなかった。

『極虚の剣があるのなら、極虚の弓がある・・・そう考えたことはありませんか?』

ララノアはそう呟くと、弓を放った。先ほどと同じである。簡単に捉えることが出来

る。そう思ったが、オレは違和感を感じた。とつさに右手の木刀を捨て、左腕で心臓を庇う。次の瞬間、左腕に漆黒の矢が命中した。一引きで、二本の弓を放っていたのだ。そしてその隙に、ララノアが間合いに入ってくる。

『木刀を捨てましたね？今度こそ．．．』

だが、ララノアの剣弓がオレに届くことは無かった。その前に、ララノアの腹に木刀が突き刺さった。捨てた木刀の柄を踏み、足の甲で蹴り上げたのだ。ララノアは腹部を抑え、膝を屈した。オレは左腕の矢を引き抜いた。鏝まで漆黒の矢である。夜であれば殆ど見ることは不可能だ。

『．．．足で．．．木刀を？』

《グラティナから見せてもらった「極虚の剣」を応用した。あの技を見ていなかったら、あなたの勝ちだったな》

『．．．私の負けですね。夫は、矢を捉えることは出来ましたが、その隙を私に突かれました。あの極虚の剣は、私の弓に勝つために、思いついたそうです．．．剣を捨てざるを得ない時でも、そこから逆転する方法として．．．』

オレは魔力を全身に回し、人間へと戻った。

『あなたの亡夫、ワルター・ワッケンバイン殿は、あなたに勝ったわけでは無かったのか．．．』

『夫は、とても誠実で優しく、それでいて芯の強い人でした．．．だから、私はあの人に惹かれたのです．．．たとえ、私より弱くても．．．でも、あなたが証明してくれました。夫の生み出した極虚の剣は、私の弓を超えた．．．あの人は、私よりも強かったですね．．．』

亡夫を想い、ララノアは肩を震わせて泣いた。グラティナと死合をした夜と同じように、紅い月がオレたちを照らしていた。

『ディアンツ！．．．その、母上は？』

宿に戻ったオレをグラティナが出迎えた。心配をして待っていたらしい。

『仕合には勝ったよ．．．母君は、強かった．．．そして、今でもお前の父君を愛している』

グラティナはオレに言った。母親は夫への操を立て続けているが、そろそろ吹っ切るべきだと。寿命の長いヴァリールエルフが再婚をすることは珍しいことでは無い。グラティナなりに、母親の幸せを考えて、オレに吹っ切る為の手伝いをして欲しいと望んだのだ。だが、あの姿を見てしまったら、とても抱きたいとは思わなかった．．．

『．．．焦ることはない。かけがえの無い存在を失った痛みは、時を掛けることでしか癒せないんだ』



『……ディアンも……そういった経験があるのか?』

『……ああ……ずっと昔にな……』

オレは目を閉じた。思い出したくない記憶だ。

『……さあ、寝よう。今日はお前を抱きたい』

『……まったく……母上に勝っておきながら、娘の私を抱くのか?』

グラティナはそう言いながらも、嬉しそうにオレに身を寄せた。

彩狼の砦の通行許可は、未だに下りていない。ララノアとも話し合い、インヴィティア経由ではなく、北回りの「キサラ経由」で目指そうと考えていた。かなり危険な道ではあるが、彩狼の砦を通過しないことには、大陸公路には入れない。

『やれやれ、かなり野営が続くが、仕方がないか……』

方針が決まると、オレたちは吹っ切れたように引越しの作業をし始めた。ララノアとグラティナは家の荷物をまとめる。オレは旅に必要な品などを適当に購入した。リタから貰った饑別は、これから先の集落などで役立つだろう。塩は東に行くほどに貴重になるからだ。ところが、出発の準備が整ったところに、オレの泊まっている宿に遣いが来た。オレに会いたがっている人がいるらしい。

『ディアン・ケヒト殿ですね。私、リザベル・ドローラプラダ様からの使いの者です。奥

様が、貴方様との面会を希望しています。恐縮ですが、御足労を頂けないでしょうか？』

『リザベル・ドーラー||プラダ?・・・ベルジニオ・プラダ殿の奥方か?』

オレは少し考えたが、一度会っておいても良いと思い、レイナとグラティナを宿に残し、遣いが用意をしてきた馬車に乗り込んだ。

## 第六十三話：ブラダ家の接待

ベルジニオ・プラダはソワソワと部屋を歩き来している。もうすぐ「あの魔神」がやって来るのである。「メルキアは関与しない」と約束をしているにも関わらず、妻が勝手に呼び出したのだ。賢妻であり、自慢でもある愛妻だが、時々、胃の痛い思いをさせられる。

『あなたっ！いい加減に落ち着いたら？私が勝手に呼んだのですから・・・あなたは隣の部屋でエルネストを綾しながら、聞き耳を立てていれば良いのです』

『そういうわけにもイカンだろう。お前とあの魔神を二人きりにするなど、私にはできませんっ！』

『ただお話をするだけです。それに、お土産も用意しているのですから、何も起こりませんわ』

普段はメルキア国の名宰相として、行政に辣腕を振るう夫も、妻から見れば「家庭を心配する良き夫」に過ぎない。リザベルは笑いながら、魔神の到着を待った。隣の部屋には、先月生まれたばかりの長男「エルネスト・プラダ」が寝息を立てている。

オレはプラダ家の屋敷に通された。メルキア国宰相の邸宅となれば、かなり大きいだろうと思っていたのだが「他の家よりは大きい」程度である。だが、隣家を改装して、一つに繋ぐようだ。数年後は大きな屋敷になっているだろう。

『ディアン・ケヒト殿、ようこそ我が家に……。その節は、お世話になりました』

応接間に通されたオレを、メルキア国宰相にしてバーニエ行政執行官のベルジニオ・プラダが、満面の笑みで出迎えた。隣には少女にしか見えない女性が立っていた。耳の形状から見て、ドワーフ族である。

『ご紹介しましょう。妻のリザベルです』

『リザベル・ドローラ・プラダです。ケヒト殿のお話は、夫より聞いています。ぜひ一度、お会いしたいと思っていました』

『初めまして、ディアンで結構ですよ。奥方様のお話は、兄君ヴェイグル殿からお聞きしていました』

『リザベルと呼んで下さい。兄からの書簡に、ディアン殿のことが書かれました。兄はドワーフ族の国を創ろうとしています。あなたと話をして、兄も迷いが消えたようですよ。兄に代わって、感謝を申し上げます』

着座を勧められ、オレは座った。執事らしき男が、茶を運んでくる。バーニエ産のハーブ・ティーのようだ。思えば茶など久々だ。オレは久々の茶を楽しんだ。リザベル

が古の宮の様子を聴きたがっていたので、オレはかい摘んで説明をした。

『まあ、あの部屋をディアン殿が使っていたらっしやったのですか。私が子供の頃に、魔術師が使っていたのですが・・・』

『ブレアード・カツサレですね。ヴェストリオ殿の許可を得て、彼の研究資料は、今はオレが所有しています。暗号で書かれているので、オレ以外は読めない資料ですからね』  
『ディアン殿は、魔術に興味がおありなんですか？』

『というよりは、このディル||リフイーナの世界そのものに興味がありますね。魔導技術も面白かったですよ。魔導巧殻の四姉妹とも話しました。リユーンの「笑いの真髄」には、いささか困りましたが・・・』

リザベルが大笑いをした。ベルジニオには何のことだか解らないだろうが、リザベルの名でオレを呼んだ以上、オレはリザベルの客人なのだ。夫と言えど、簡単に口出しをするわけにはいかない。

『ああ、可笑しい。あの娘はまだそんなことを・・・きつと、何百年後も同じようなことを言っているのでしょうかね』

『多分、そうでしょうね。ところで、オレが呼ばれたのは、古の宮の話を知りたいからなのですか？』

そうとは思えなかった。曲がりなりにも一国の宰相と妻が二人して出迎えているの

である。何か目的があるに違いない。リザベルが少し沈黙して、口を開いた。

『今日、お呼びしたのは「あなたという存在」を知るため、ですわ。魔神ディアン・ケヒト殿……』

オレは微かに目を細めた。オレに干渉しないという約束に触れる可能性があるからだ。リザベルはオレが発した微かな殺気を無視して、話を続けた。

『ディアン殿が、プレリア……今では「レウイニア神権国」というそうですが、その守護神である「水の巫女」と親しい関係であると聞きました。夫はあの国に、何人も謀者を送り込んでいますから』

『お、おいおい、お前……』

『あなた、この方には下手な虚言はかえって逆効果です。正直に、ありのままをお話した方が良いと思います』

『……まあ、メルキア国宰相ともなれば、隣国を気にするのは当然です。それで、オレの何を調べていたんですか？』

『ディアン殿が、水の巫女と複数回にわたって接触をしていたこと、バリハルト神殿の軍をあなたが撃退し、ノヒアの神殿まで破壊したこと、水の巫女はその見返りとして、あなたに住居を提供したこと、そして暫くして、あなたが荷物をまとめてその住居を出したこと……などですわ』

『……ブラダ殿?』

『ああ、いやいやっ!干渉するつもりなどありませんぞ。ただ、あなた様はメルキア国にとつても脅威なのです。ですので、その動向は逐次、把握しておくべき……そう思っていただけですっ!』

ベルジニオが手を振って説明をする。当然だろう。違約ギリギリといったところだ。もしオレが気づいていたら、何かしらの報復まで考えたかもしれない。オレはため息をつけて、座り直した。

『……まあ良いでしょう。それで、オレを調べて、どう感じました?』

リザベルの眼の光が鋭くなった。

『調査報告を読んで、私はこう推理をしました。魔神ディアン・ケヒト殿は、元々は人間であったのではないか。それが何らかの理由で、魔神の力を得た。そして、世界を旅する中で、水の巫女と知り合った。あなたは旅好きではあるが、どこかに拠点を求めている。一方の水の巫女は、迫り来るバリハルト軍の脅威に対抗する必要がある。そこで取引が交わされ、あなたはバリハルト軍を撃退し、その見返りとして、水の巫女はプレミアアの街に、あなたが住む屋敷を用意した……』

オレは感心した。ヴェイグル・ドーラが自慢をするだけあって、大した知性である。リザベルは言葉を続けた。

『もし、レウイニア神権国が魔神の力を手に入れたとなれば、隣国であるメルキア国にとつては、大変な脅威です。宰相である夫が、どれだけ焦ったか、ご理解いただけませんか。ですが、あなたはプレイアの街を離れた。その理由は解りませんが、私はひよつとしたら、水の巫女とあなたとの間に、何かしらの対立があつたのではないかとそう思つたのです』

(いささか小賢しいな)

オレはそう感じたが、表情には顕さなかつた。オレが沈黙をしていると、夫のほうに先に詫びてきた。さすがに元行商人だけあつて、人間の心の機微を巧みに抑えてくる。「この夫あつて、この妻あり・・・」であつた。

『ディアン殿、申し訳ない。自慢の妻なのだが、時々こうして、賢しいところがあるので。どうか、ご容赦下さい』

『いえ、お気になさらず。なるほど、ヴェイグル殿が自慢をされるわけです。リザベル殿、あなたの仰られたことは、ほとんど正解に近いです。オレは魔神の肉体を持つていますが、魂は人間なんですよ。水の巫女とは：まあ考え方の相違・・・ですかね』

『私もお詫びします。あなたという存在に、私は大変興味があつたのです。ですのでいささか、出すべきことを言つてしまいました』

(ひよつとしたら、この展開まで予想していたのではないか?)



そう思わせるほどに、夫婦の呼吸が合っていた。オレは肩を竦めながら、水の巫女についての経緯を話した。

『巫女殿からは、国造りにについての相談を受けました。具体的なことは仁義に反するの  
で話せませんが、その結果、彼女はレウイニア神権国の大枠を考えたようです。ただ、彼  
女が語った大枠は、オレが住みたいと思う国では無かつたんですよ。彼女が建国者で  
す。だからオレは何も言わず、そこから離れた・・・そういうわけです』

リザベルが質問をしてきた。オレという存在を問う質問であるため、慎重になつてい  
る。

『あなたが住みたい、と思う国はどのような国なのでしょうか？』

『・・・この世にはありませんよ・・・多分ね』

『どのような国なのか、教えて頂けませんか？』

『・・・自由と平等の国です。思想、信条、言論、表現の自由が認められ、現神も古神も  
魔神も、人間族も亜人属も天使族も魔族も・・・すべてが差別なく公平に生きられる国。  
どのような神を信じてても良い、為政者の悪口を言っても良い、神の教えを風刺しても構  
わない。全ての国民は法の下で、差別なく公平に統治されている・・・そんな国です。  
どうですか？この世界にありますか？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ベルジニオとリザベルが顔を見合わせた。理解できないようである。当然だろう。この世界に生きる人間にとつては、千年は早いはずだ。リザベルが質問をしてきた。

『・・・あなたは、その国家像をどこで考えたのですか？』

『これ以上はお話できませんね。ただ、水の巫女が創ろうとしている国は、オレの理想郷から遠いのです。そしてそれは、貴国メルキア国も同じです。この世界に無いから「理想郷」と言うんでしようね』

ベルジニオとプラダは考える顔をしている。オレを知ろうと読んだのに、さらに混乱が深まっているようだ。オレは話題を変えた。

『ところで、先程から気になっていたのですが、隣の部屋で赤子がグズツているようですが？』

考え事に夢中になっていた二人は、ようやく気づいたようだ。ベルジニオが立ち上がり、隣の部屋に向かう。リザベルが慎重にオレに問いかけてきた。

『・・・その、仮にです。仮にと考えて頂いて、メルキア国がディアン殿に屋敷などをご提供する、としましたら・・・貴方様は留まって頂けますか？』

『無理ですね。メルキアーナ殿個人は嫌いではありませんが、オレはメルキアの客将になるつもりなどありません。オレは単に、旅を愉しみただけなんですよ。それに、世話になってしまったら、万一、メルキアが道を諦めた時に、戒めることが出来ませんか

らね』

アツサリと断つたオレに、リザベルはため息をついた。オレはそろそろ切り上げ時と判断して、席を立ち上がった。

『今日はなかなか、楽しい一時を送らせていただきました。お茶、ご馳走様でした』

オレが立ち去ろうとすると、ベルジニオが隣部屋から出てきた。オレを呼び止めるのと、机の引き出しから封書を取り出してきた。

『こちらをお持ちください。彩狼の砦の通行許可証です。これがあれば、砦を通過し、大陸公路に入ることができます』

『これは……有り難く頂戴します』

『その代わりと言つてはなんです……一つだけお願いがあります。もし将来、このメルキアに危機が訪れた時は、一度だけで構いません。貴方のお力をお貸し願えませんか？』

『……』

オレはプラダの顔を見た。プラダは真剣な表情をしている。オレはため息をついて折れた。この許可証があれば、遠回りをすることなく、安全な道を進めるのだ。オレ自身都合だったら拒否するが、ララノアのためなら仕方がない。

『……わかりました。将来、メルキアに危機が訪れたら、一度だけ、力を貸しましょう』

『おおっ！有難うございます。心から、感謝を致します』  
『これを持っていて下さい』

オレは懐から小さな水晶片を取り出し、プラダに渡した。ブレアードの研究室で見つけたものだ。使い方は書かれていたが、名称が無かったので、オレは適当に名付けた。『魔神の呼び笛』です。将来、オレの力が必要になった時は、その水晶に魔力を込めて下さい。一度だけ、オレを呼ぶことができます。すぐに呼び出せるわけではありませんが、必ず駆けつけます』

『プラダ家の家宝として、大切に護り伝えます』

プラダは魔神の呼び笛を握りしめ、頭を下げた。

オレはリザベルに挨拶をし、屋敷を後にする。既に控えていた馬車は断り、徒歩で宿に向かった。プラダ夫妻は門まで出て、手を振って見送ってくれた。

『ふう、何とか、最低限の商談はできたな。寿命が縮んだぞ』

ベルジニオはディアンが渡した水晶を大切そうに箱に入れた。通行許可証と引き換えに、ディアンの力を借りる約束を取り付けることが、この会談の目標だった。賢妻リザベルは、考える顔をしながら呟いた。

『ですが、メルキアに留まることについては、拒否をされてしまいました。一度会っただ

けですが、私の思った通り、あの魔神は信頼できる人物です。こちらが信義を守る限り、あの方も約束を守って下さるでしょう。ただ将来を考えると、潜在的な脅威にはなり得ますわね。あの魔神に対抗できる力を持つ必要があります』

『・・・魔導技術か』

『早急に、兄に遣いを出しましょう。ドワーフ族の国を創る支援をする見返りに、メルキアへの魔導技術提供を求めるのです。そして、いずれは魔導巧殻たちも・・・メルキア国自体が強化されれば、あの魔神とて簡単には手出しできません』

『今後メルキアは、魔導技術を柱とした国造りを行うことになるな。エルネストか、もしくはその子供の時代には、魔導技術を浸透させておきたいところだ・・・』

仲睦まじい夫婦は、息子が眠る隣室へと向かった。

## 第六十四話：大陸公路

ラウルバーシユ大陸には、東西を結ぶ大街道「大陸公路」がある。東方諸国から上質な絹製品や香辛料、陶磁器などがアヴァタール地方まで運ばれる。アヴァタール地方の西端、ブレニア内海の西側の「レルン地方」まで、内海を通じて交易が行われる。レルン地方からさらに西は、現神ルク・クヴァルナの直轄領である「クヴァルナ大平原」をはじめ、西方諸国が広がっている。

大陸公路は、商神セーナルが要所に「セーナル神殿領」を置き、公道の安定を図っているが、全ての路を維持することは不可能である。国家形成期頃においては、盗賊や魔物の襲撃が頻発し、余程の行商隊でなければ、東方諸国に行くことは不可能であった。大陸公路が本格的に活性化したのは、各地で国家が建国され、公路の治安維持が可能になった後である。

出発前夜、宿の自室で剣の手入れを終えたオレは、一階の酒場に向かった。レイナやグラティナと、最後の打ち合わせをするためだ。二人は既に酒場にいた。この宿は、かつてオレが騒ぎを起こした宿だ。そのためか、美女二人が酒場で飲んでいても、チラチ

ラと見るだけで、声をかけるような無謀な男たちはいない。オレは二人と合流すると、地図を広げて行程確認をした。

『インヴィティアを北に行き、彩狼の砦を通れば、大陸公路に入る。ナイル街道、エリアン街道を通って、センタクスの街まで進もう』

『母上が言うには、センタクスの街から、チルス山脈に入れるそうだ。チルス山脈は、獣人族やナーガ族などがそれぞれ集落を構えている「無統治地帯」だそうだ。ハレンラーマというのは、山間の平地にあるそうで、獣人族とヴァリィエリフ族が多いらしい』

『オレの出身であるデイジエネール地方みたいなものか。チルス山脈というのは、山賊や魔獣が多いのか？』

『…少ない情報だが、山賊などはいないようだ。だが、危険かどうかは解らない。センタクスの街までは大陸公路だが、その先は路から外れる。闇夜の眷属が多いチルス山脈に入る行商隊は少ないそうだ。そのため、情報があまり取れないのが現状だ』

『なるほどな・・・』

オレは考え込んだ。安全を考えるなら、センタクスからアルスレムの街を通り、イウス街道まで大陸公路を使うべきだろう。だがそれではかなり遠回りになる。ハレンラーマはアヴァータル地方東端の山脈にあり、街道から離れているためだ。そんな僻地だからこそ、闇夜の眷属たちが住みやすいのかもしれない。

『まあ今回は行商ではないので、「襲われたら撃退する」を基本方針に進めば良いか。それに、未知の土地には興味がある』

オレたちは新しい旅に乾杯をした。

ララノアの引越しの護衛として、オレたちはインヴェティアを通り、彩狼の砦へと向かった。この砦は、つい最近までメルキア国の戦場であつたため、今でも警備が厳重である。本来であれば、通行許可を得るにはかなり時間が必要のようだ。プラダが根回しをして、オレたちに通行人許可証を優先的に回したのだろう。お蔭で足止めされることも無く、オレたちは通過をすることが出来た。

『この砦は、壊すどころか増設をしているわ。どうしてなのかしら？』

『首都インヴェティアの「北の防壁」にするつもりだろう。いずれは「彩狼の城」と呼ばれるかもな』

大陸公路は、商神セーナルの加護もあり、比較的安全に通ることが出来る。センタクスの街までは、野営をしながら、オレたちは進んだ。

野営をして驚いたのは、ララノアの料理の腕である。グラティナは下手という程ではないが、それほど料理上手というわけではない。だが母親は違った。

『これは……旨い』



オレは思わず唖った。魔神の肉体は、魂が生み出す魔力で維持されるため、極端な話、食事を必要としない。だが半分人間のオレにとつては、食事は極めて重要な「楽しみ」である。これまでの様々な料理を食べてきたが、ララノアの作った料理は絶品だった。

『羊の骨を水から煮て、塩と羊肉、野菜、唐辛子と香菜を入れます。そこに・・・』

ララノアはパンのようなものを差し出した。かなり硬い。

『小麦を水で捏ね、焼き固めたものです。これを小さくちぎって、汁に入れて下さい』  
言われたとおりにすると、さらに味が深まった。オレは夢中で食べたが、ララノアが途中で止めた。焼いた小麦が腹の中で膨れ、満腹になるそう。食べ過ぎると動けなくなるらしい。オレは腹八分で止めた。しばらくすると、満腹感が襲ってきた。

『母上の料理は、私も幾つか教わったのだが、どうも料理は苦手だな』

グラティナが恥ずかしそうに言い訳をした。オレは携帯をしている紙と筆、インク壺を取り出し、作り方を教わった。ララノアは他にも、何種類かの野営用の料理を教えてくださいました。これからの野営が楽しみだ。

ララノアの絶品野営料理を堪能しながら、オレたちは八日後に、センタクスの街に到着をした。センタクスの街は、アヴァタール地方東域の事実上の「玄関口」と言えるだろう。大陸公路はここから南東に伸び、アルスレムの街を通って、アヴァタール地方最

東端の街「アニヴァ」まで続く。セントクスは人口二万人程度、それなりに大きな街だ。オレたちは宿に入り、チルス山脈についての情報を収集した。

『悪いことは言わない。ここから東は止めておいたほうがいいよ』

宿の主人に、セントクスから北東に伸びる道について聞いたところ、手を振りながら反対をした。かなり危険らしい。

『山賊なんかが出るのか？』

『以前はね。でも今は、山賊よりもっとタチが悪いやつが出る』

『ほう、何が出るんだ？』

『・・・魔神だ』

オレは目を細めた・・・

『魔神か・・・』

彼の腕の中で愉悦の時を過ごした私は、胸板に顔を載せて余韻を楽しんでいた。私の銀髪を弄りながら、彼が独り言をつぶやいた。

『もし魔神が出たら、やはり戦うのか？』

『本当に魔神なら、やらざるを得ないだろうな』

本来の魔神は、戦いそのものを楽しむ傾向がある。破壊衝動があるようだ。そのため、魔神は強い存在を嗅ぎ分けることができる。もし彼が接近すれば、魔神なら必ず襲ってくる。

『……私の力では、お前を助けることすら出来ない』

そう。私はまだ使徒ではない。レイナなら、魔神にも対抗できるだろう。技は私のほうが上だろうが、総合的に見れば、彼女のほうが圧倒的に強いのだ。自分が弱いと思つたことはない。だが、彼と共に行くのなら、人外の実在とも戦えなければならぬのだ。私が悩んでいると、彼が言った。

『そんなことは無いだろう。お前には随分と助けてもらっているぞ?』

『そうなのか?』

私が顔を上げると、彼がニヤリと笑つた。体位を変え、私に襲い掛かってくる。すぐに甘美な感覚に包まれる。

『……こうしてお前を抱けるだけで……オレは随分と助けられているぞ?』

耳元でそう囁きながら、私に入ってきた。彼の背中に腕を回し、私は喜悦の声を上げた。

センタクスの街を出て、北東を進む。チルス山脈は路が無いわけではないが、無人の

山道だ。尾根を二つ超えた先に、目指す「ハレンラーマの街」がある。宿の主人が言うには、一つ目の尾根あたりで、魔神が出るそうである。だが、周囲を警戒しながら進んだが、特に魔神の気配は感じない。山賊も出ず、オレたちは順調に進んでいるかに見える。だが、街を出て三日目のことである。

『止まれっ』

オレは妙な気配を感じて、進みを止めた。魔神では無いが、確かに魔の気配を感じる。剣に手を掛けると、山道に沿った雑木林から、いきなり攻撃を受けた。纯粹魔術であった。全員がとっさに躲す。

(レイ・ルーンか……)

交わしながら、オレは複数の剣撃を放った。影が林から飛び上がった。オレは目を追った。

『ほう、躲したか……これまでの情弱な奴らとは違うようだな』

際どい服を着た美人が、背中の白い翼を羽ばたかせながら浮いていた……

## 第六十五話：ラウマカールの剣士

TITL E：飛行魔法の可能性について（B. K a s s e r e）

デイル||リフイーナにおいては、空を飛ぶ「飛行能力」を有した生命体が複数存在しているが、この飛行能力は、大きく二つに分けられる。

物理的飛行能力：有翼種（天使族、龍族、飛天魔族、睡魔族等）が有しており、翼を羽ばたかせて空を飛ぶ。原理としては鳥と同じ物理的現象

魔力的飛行能力：現神や古神、魔神等の「神族」、歪魔などの上級悪魔族、霊および精霊が有しており、魔力を使って飛行しているものと思われる

物理的飛行能力とは「翼の有無」と言い換えることが可能である。つまり人間がこの能力を保有することは、生物上不可能であると言えるだろう。ただし、物理的法則である為、これに代替する技術を開発することは可能であると思われる。先史文明においても「飛行機」という機械を開発し、人間が空を飛んで行き来をしていたことが記録されている。

魔力的飛行能力は、これまでは「重力制御」によって生み出されていると仮説していた。その仮説は大きく二段階に分かれる。一段回目は「重力遮断」である。星から受け

る重力を遮断することで「下に落ちる」という物理現象から解放される。二段階目は「重力場の創出」である。進みたい方向に重力場を生み出し、引き寄せられる形で飛行する。そのためには、一段階目で「星から受ける重力のみ」を遮断する必要があり、より複雑な術式が求められる。また、二段階目においても、一方向のみに進むのであればともかく、方向を自在に変えるためには、重力場を連続して創る必要があること、またこれまで進んでいた方向への「力の向き」を変えるためには、より大きな重力場を生み出す必要がある。複雑な術式と方向転換などで極めて不便ではあるが、重力制御によつて飛行をすることは必ずしも不可能ではない。

しかしながら、魔力的飛行能力の中には、これまで進んでいた方向と全く真逆に、いきなり方向転換をする例が数多く見られている。これは、重力制御魔法による飛行では不可能な動き方である。魔術的飛行能力を有する悪魔を解剖してみたが、残念ながらその能力の源は発見できなかった。また、全ての神族、全ての上級悪魔が魔力的飛行能力を有しているわけでは無い。このことから、魔力的飛行能力とは「その生物固有の能力」として、それ以上の説明は残念ながら不可能である・・・

『……これまでの情弱な奴らとは違うようだな』

六枚の白い翼を羽ばたかせ、美女が宙に浮いていた。

『これは・・・天使なのか？』

グラティナの眩きに、翼の美女が反応した。

『天使だと？私が天使に見えるかっ！我が名はファームシルス、誇り高き飛天魔族の剣士ぞっ！』

飛天魔族の剣士は、急速に滑空してグラティナに斬りかかった。グラティナは自身の剣でファームシルスの剣を受け止める。

『みんな手を出すなっ！コイツは私が斬るっ！』

グラティナはそういうと、ファームシルスを押し戻し、火焰魔法を放った。ファームシルスは驚いたように上空に逃げた。

『・・・これは驚いた。剣どころか魔法まで使える人間に会うとはな・・・面白い。お前がこの一団で最も腕が立つと見た。いざ、勝負っ！』

ファームシルスとグラティナは、魔法を交えながら剣闘を始めた。オレはあえて手を出さず、その闘いを見守ることに決めた。オレが手を出せば、グラティナの面子を傷つけることになるからだ。十数合を交えても、両者とも決着がつかない。力も技も、ほぼ五分であった。グラティナもファームシルスも肩で息をしている。そろそろ限界が近いようだ。

『……止むを得ん。使うか……』

グラティナは小さく呟くと、剣を構えた。「極虚の剣」の構えだ。ファームシルスも受ける構えを取る。心気を整えたグラティナが、一気に奔った。ファームシルスが受けに回る。互いに間合いに入る瞬間、グラティナの両腕が翼のように広がり、瞬間的に剣が下に落とされる。ファームシルスの眼が利き腕に流れる瞬間に、グラティナの右足が剣の柄を持ち上げ、ファームシルスの喉元に剣先が迫る。

ザクツ……

『なっ……』

グラティナは驚いた表情をしていた。それはファームシルスも同じだ。グラティナの剣は、ファームシルスの頸元でオレの右腕に刺さっている。ファームシルスの右腕も、オレが左手で抑えていた。

『ディアンツ！なぜ邪魔をしたっ！』

『……お前と五分に戦えるほどの腕を持っているんだ。惜しいだろ？』

ファームシルスは呆然として、剣を落とした。オレが腕で守らなければ、確実に死んでいたことを理解したためだ。ペタンとその場で崩れ落ちる。オレは右腕に刺さった剣を抜き、グラティナに返した。まだ納得していない表情だ。

『グラティナ、お前の勝ちだ。だから命まで獲る必要はない。勝負の邪魔をして、済まな



かった』

『……まあ、ディアンがそう言うのなら仕方がない』

グラティナは頷くと、剣を鞘に納めた。ファームシリスは未だに信じられないという表情をしている。オレの顔を見ながらようやく言葉を発した。

『……何故だ？』

『ん？』

『何故、私を助けた！右腕を犠牲にしてまでっ！』

『さっき言った通りだ。お前の腕を惜しいと思った。それに、右腕はどうということはない』

オレは回復魔法を掛けた。傷は跡形も無く消えた。ファームシリスは俯いて呟いた。

『……私の、負けだ……』

『……私は、遥か北の出身なのだ』

その夜、焚火を囲いながら、ファームシリスは身の上を話した。飛天魔族は集団で生活することは殆どない。彼女は物心ついた時から、母親と二人で各地を転々としたそうだ。

『母は、より強い者に仕えるために、各地を渡り歩いた。だが母は強かった。母に勝てる者などいなかった。だが、ある日ついに、母に勝てる者に出会った。強い剣士だった。母と数十合も剣を交え、ついに母は、その男に負けた』

『そして、その男に仕えたのか？』

ファーミシルスは首を横に振った。

『その闘いで負った傷がもとで、母は死んだ……』

レイナが口を覆った。ララノアもグラティナも悲しそうな表情をする。オレも恐らく、同じような表情をしていたのだろう。ファーミシルスは笑った。

『そんな悲しそうな表情をするな。母は幸せだったのだ。より強い者を探し、探し続けてようやく巡り合ったのだ。死んだのは、結果に過ぎない。その男は私に詫び、私が成長するまで面倒を見てくれた。剣も教えてくれた。魔族として人間に忌避されている私を娘のように可愛がってくれたのだ。感謝をしている』

『……その男は、どうなったのだ？』

『わからん。成長した私は母と同じく、強い者を探して各地を転々とし始めたからな。もう、随分と昔の話だ……』

『その男の名は、何というのだ？』

オレの問いに、ファーミシルスは笑った。有名な男だそうだ。

『言っても信じないかもしれないがな。私を育ててくれたのは、劍聖と呼ばれる達人ドミニク・グルツプだ』

オレを含め、ファーミシルス以外全員が、レイナを見た。レイナは微笑みを浮かべて、ファーミシルスを見つめていた。

## 第六十六話：獣人族の集落

デイル||リフィーナには、翼を持つ種族が複数存在するが、その代表としては天使族と飛天魔族である。天使族は、イアス||ステリナに属する種族で、古神の使徒として人間族を見守っていた。デイル||リフィーナが成立して以降は、古神に仕え続ける者もいれば、現神に仕えたり、あるいは独立をして独自で動く天使族もいる。一方の飛天魔族（ラウマカール族）は、ネイ||ステリナに属する種族であり、広義的には「魔族」に属する。デイル||リフィーナに住む数多くの魔族の中でも、貴族階級と言われている。その特徴は、三対六枚の白く美しい翼にあり、同じ白翼を持つ天使族と間違えられることもある。

飛天魔族は好戦的な性格ではあるが、決して野蛮というわけでは無く、気位が高く、闘いにおいては騎士道精神を重んじる傾向がある。剣と魔法を駆使して闘い、自分より強い者に仕えることを信条としている。そのため、主人が闘いで負けたら、勝った側に仕えることが多い。これは、主人の「強さ」に忠誠心を持ったためと言われている。このため、仕える主人を転々とする飛天魔族も多い。

飛天魔族は、露出の多い服装をする傾向があるが、これは自身の外見に自信を持って

いる為であり、自分より弱い者に肌を許すことは決してない。逆を言えば、自分が主人と認められた者に対しては、求められれば無条件で、肌を許すのである。

いずれにしても、飛天魔族は貴族階級を超える魔族であり、天使族と同様、老化をすることが無く、魔族の中では最上位の強さを持っている。特に、永きの修行を経て力と魔力を身につけたラウマカールを「ラクシユミール」と呼び、その強さは魔神にも匹敵すると言われている。

(やれやれ・・・一体なんで、こんな展開になるのか・・・)

オレはため息をついて、ファームシルスと向かい合った。相手は既に剣を抜き、殺気を放っている・・・

『・・・頼む、私の主人になってくれっ!』

ファームシルスはグラティナに頭を下げて懇願した。レイナの父親が「剣聖ドミニク・グルップ」であり、グラティナの父親は剣聖の高弟「ワルター・ワツケンバイン」であることを知ったファームシルスは、グラティナに主人になってくれるように願い出たのだ。オレたちと行動を共にしたいそうなのだが、その願い方は「主人と臣下」という関係らしい。グラティナは慌てて、オレの方が強いと言うと、ファームシルスは疑い深げにオレを睨んだ。

『本当に強いのか？ 膂力だけはありそうだが・・・』

レイナとグラティナは顔を見合わせて笑い、それなら仕合をしたら良い、と勧めたのだ。勝手に話が展開し、オレとしてはいささか不機嫌にならざるを得ない。ファームシルスの貌と軀は魅力的だが、どうも「脳筋」なのだ。戦うことしか考えていない。まあ、レイナもグラティナもオレと死合をしたのが、出会いの始まりなのだが・・・

『言っておくが、仕合といえど手は抜かんど。怪我をしたくないのなら、今のうちに降りろっ！』

オレとしては降りても構わないのだが、そうなるとグラティナにくつついて動くことになるだろう。今後が面倒そうな気がしたので、オレはいきなり貌を出すことに決めた。ファームシルスと数歩離れたところに立つと、オレは全身を覆っていた魔力を消した。魔神としての気配が立ち上る。

《・・・・・・・・・・》

魔神の気配を察し、ファームシルスは啞然とした。驚くのは当たり前である。魔神が人間やヴァリールエルフと一緒に、荷車を曳いて旅をしているのである。非常識にも程があるだろう。

《・・・・・・・・どうする？ やるか？》

『・・・・・・・・こや・・・・・・・・』

フアーミシルスは剣を両手で捧げる形にし、片膝をついた。

『礼を取らせて頂きます。我が名はフアーミシルス、どうか我が剣を貴方様に捧げさせて下さい』

『・・・よせよ』

オレは人間に戻ると、ため息をついてフアーミシルスを立たせた。

『仲間として、オレたちと一緒に旅をするのは構わない。だがオレは、誰からの忠誠も欲しいとは思わない。オレの使徒であるレイナのこと、オレは臣下だと思ったことは無い。良い仲間、良い友人であってくれればそれでいい・・・』

『仲間・・・』

『お前がオレをどう思おうとも、それはお前の自由だ。だが、オレと共に来る以上は、これだけは守ってくれ・・・』

『何でしょうか?』

『オレのことはディアンと呼べ。様も殿も必要ない。ディアンと呼び捨てて呼ぶんだ。あと堅苦しい口調もダメだ』

『うっ・・・わ、わかった・・・ディアン』

『ところで、お前のことは何て呼べばよいかな? フアーミシルスっていうのは、ちよつと長いな。うーん・・・』

『母は、ファミと呼んでくれていたが……』

『ファミか。良いな。ファミ、宜しくな』

オレの差し出した手を、ファミは笑顔を浮かべて握った。

飛天魔族ファームシルスが加わったことにより、オレたちの旅はグツと楽になった。ファームシルスが空から周囲を確認するため、かなり広い範囲を知ることが出来る。オレたちはファームシルスが見つけた集落へと向かった。二つ目の山の中腹地あたりに、獣人族と思われる集落があった。オレたちが村の入り口に近づくと、村内から歓声が聞こえた。どうやら祭り最中らしい。焚火を囲んで数十人の獣人たちが踊っている。どうやら熱中しているらしく、オレたちに気づいていない。

『ぬっ？誰だっ！』

獣人の男がオレたちに気づいた。狼の様な鋭い眼をしている。獣人であれば匂いで気づきそうだが、どうやら祭りに夢中になっていて気づかなかつたらしい。他の獣人たちも祭りを中断し、オレたちを取り囲んだ。男女は無論、子供や年寄りまでいる。それなりに大きな規模の集落のようだ。オレは進み出て、挨拶をした。

『祭りを中断させたこと、お詫びします。私の名はデイアン・ケヒト、我々はハレンラーマの街を目指している旅の一行です。一宿一飯の施しを求め、この村に罷り越しまし



た。多少のお礼も出来ると思いますので、屋根を貸しては頂けませんか?』

『・・・妙な取り合わせだな?』

男は警戒しながら、オレたちを見た。人間二人、ヴァリⅡエルフおよびそのハーフ、飛天魔族の一行である。傍目から見れば、怪しい一行だろう。だがこの地域は、闇夜の眷属たちが住むため、魔族が共にいても危険視はしないようだ。むしろオレとレイナを警戒している。

『人間は信用できない。お前たちが無害だと証明できるのか?』

『もし害意があるのなら、あのような挨拶はしません。いきなり襲いかかるでしょう。それに、御礼としてこちらを差し上げたいと思います』

グラティナが荷車から甕を一つ抱え上げ、男の前に置いた。男は中身を見る。

『これは・・・塩か?』

『ブレニア内海産の塩です。如何でしょう。これでこの村に泊めて頂けませんか?』

『族長と相談してくる。しばらく待て・・・』

男が族長と話し合いをしている間、オレは集落の様子を眺めた。獣人族の集落は、メルキア国のような石造りの家ではなく、木の柱と藁ぶきの屋根で出来ている。獣臭がすると思っていたが、清潔な生活をしているようだ。どうやら近くに、水浴び場などもあるらしい。族長らしい男が来た。

『儂が、族長のオルガじや。何も無い村じやが、泊まりたいのなら泊まつていくが良い。塩一甕ほどのもてなしなど出来んじやろうが……』

『屋根をお貸し頂けるだけで十分です。感謝を致します。ところで、この祭りは何の祭りなのでしょうか?』

『豊猟の祝いじや。熊と猪が獲れたのでな……』

『まあ……』

ララノアが目を輝かせた。ぜひ料理をさせて欲しいと願ひ出る。族長は笑いながら頷いた。

『ディアン殿、手伝いをお願いします』

獣人族たちと力を合わせ、魔法で眠らせた熊二頭と猪四頭を逆さづりにする。熊と猪の頭を飛ばす。桶を用意し、滴る血を集める。獣人族たちは興味深そうに見守る。彼らの場合、仕留めた獲物はそのまま捌き、焼いて食べるだけらしい。こうした「料理」はあまりしないようだ。

『皆さん、少しだけ我慢して下さいね』

ララノアが獣人の子供たちをあやす。子供たちはしやぎながら、レイナたちと遊んでいる。血抜きが終わると、捌き始める。まずは背骨や足の骨を取り除き、水から煮る。

その間に肉や野菜を仕込む。内臓は水で洗い、肉は脂を火で炙る。肝臓や脳も使うようだ。

『まずは一の鍋です。骨から取ったスープと血を入れた鍋で、茸や木の実と共に、内臓を煮込みます。二の鍋は、肝臓と脳を溶かした汁の中に、適当な大きさに切った肉と野菜と一緒に入れます。三の鍋は、骨を煮詰めた汁に、熊掌と猪足、猪脂、練った小麦を入れて、更に煮込みます。一の鍋から順に食べましょう……』

ララノアの説明が上手だったのか、獣人たちは涎を垂らし始めた。ララノアが鍋に香草を入れる。道々で採っていたものだ。デイル||リフイーナは自然豊かだ。知識と技さえあれば、猟で食べていくことも十分に可能だ。週三日だけ猟をし、一週間分の食料をあつめ、残り四日は歌って過ごす。こうした生き方もまた、一つの幸福なのだろう。物質社会で生きていたオレにとって、こうした亜人族たちの生き方は新鮮だった。物質社会にこだわるのは人間族だけなのだ。

二刻後に、一の鍋が完成した。皆で鍋を囲み、食べる。味が深く、旨かった。男たちが酒を出し始めた。どうやらこの村で造られている地酒らしい。オレにも回された。クセがある味だが、獣肉と合う。男たちが歌い始める。皆が手を叩いて囃す。レイナもグラティナも、ララノアもファーミシルスも心から愉しんでいるようだ。旨い料理と酒、歌と踊り、そして楽しい仲間たち。

月明かりの中、夜まで宴は続いた・・・

## 第六十七話：ハレンラーマ

アヴァタール地方北東部を決める山脈「チルス山脈」は、自然と鉱物資源が豊かな山脈である。この山脈に人間族が入らなかつたのは、古来から亜人族が魔物が多く、縄張りを張っていたからである。獣人族の集落を出たオレたちは、チルス連邦を通りイーグスと呼ばれる岩石地帯に入った。ここを超えれば、ヴァリールエルフたちが住むハレンラーマである。

『これは驚いたな……』

オレは立ち止まり、岩山を眺め、登り始めた。レイナたちは不思議そうに下から俺を見上げる。

『どうしたの、ディアン？』

『この岩を見てみる。これはリエン石だ。滅多に手に入らない最高級の鉱石だぞ。普通なら鉱山の奥深くで、稀に取れる石なのに、ここでは剥き出しのまま放置されている』

『リエン石って、レミの街でディアンが掘っていた石のこと？』

『そうだ。これだけの量をインヴェティアやプレリアに運べば、かなりの額で売れるだろうな』

オレは岩肌を手で撫でた。大きすぎて持ち帰ることは出来ないが、ここに鉱業を興せば、アヴァタール地方随一の鉱業都市が出来るだろう。

『何で、そんなお宝が手付かずになっっているんだ？』

『ヴァリールエルフは、ドワーフと違って石を取って剣を鍛えるということとはしません。獣人族や他の種族たちも同じです。彼らにとつては無価値なのでしよう』

ララノアの言葉にオレは頷いた。モノの価値というものは、それを必要とするから価値が生まれるのだ。この山脈に住む種族たちにとつて、リエン石など何の価値も無いだろう。あの獣人族の集落に持つていっても「食えない」と言われて捨てられるに違いない。オレは岩山を下りると、ララノアに尋ねた。

『これから行くハレンラーマは、ヴァリールエルフたちが多く住むと聞くが、そこは国のようなものは出来ているのか？メルキア国のような・・・』

『いいえ。ヴァリールエルフが住むと言っても、集落がある程度です。近くには獣人族の集落もあり、国というまとまりはありませんね。この山には、多くの種族が住みます。一つの国にまとまる、というのは、難しいのではないかしら？』

『そうか、惜しいな・・・』

もしチルス山脈に統一国家が誕生したら、メルキア国に匹敵する強国が誕生するだろう。これだけの鉱石と自然があれば、かなりの種族を養うことが出来る。だがそのため

には、国家としてまとまるための何かが必要だ。国として纏め上げる力量を持った人物と、種族を超えてまとまる為の具体的な理由である。現状では、部族の集まり程度で終わってしまうだろう。オレは考えた。

：もしオレがここに統一国家を築いたらどうなるだろう。幸いなことにララノアやグラティナという担ぎあげる人材もいる。彼女らを傀儡にして、オレが国家を設計する。全ての種族を束ねる教義としては、オレの母国の教義「神の道」を焼き直せば良い。現神も古神も魔神も関係のない、自然の中に住む八百万の神々を教義とし、使徒にしたグラティナを国家の象徴とする。その上で、信教の自由を完全に認める。統治の名分は簡単だ。「闇夜の眷属たちが、胸を張って生きれる国」にすればよい。政事は、種族たちの代表者による合議制の会議を行い、多数決によつて決める。経済面については、南侵して大陸公路を押さえれば、貿易での収入を得られるし、チスパ山のドワーフ族の力を借りれば、鉱業も盛んになるだろう。アヴァータル地方への行商については、リタの力を借りれば良いし、ケレース地方への道をつければさらに経済は豊かになる。軍事面はオレやレイナがいれば全く問題ない：

オレは頭を横に振った。水の巫女からの相談のせいか「国造り」などという柄にも無いことを考えてしまった。オレは転生者だ。ここにいる種族たちを束ねるなど、オレのすべきことではない。もし歴史の必然を信じるなら、ここに住む種族の中から、国家を

創る人材が生まれてくるだろう。

『済まない。もうすぐ日が暮れる。先を急ごう』

オレは気を取り直して、歩き出した：

バーニエの街を出てから一カ月、オレたちはようやく、ハレンラーマまで到着した。ハレンラーマは山の麓にあり、河と森に囲まれた豊かな土地であった。少し開けた土地に、小川を挟む形で大きな集落がある。どうやらハレンラーマは、複数の種族が集まって暮らす地域のようなのだ。ヴァリルエルフ族と獣人族が一緒に歩いている。ララノアやグラティナは無論だが、魔族であるフアーミシルスまでもが普通に歩けるようだ。むしろ人間であるオレやレイナのほうが浮いている。

『ここは、複数の種族たちが集まって生活をしています。種族の代表者たちが集まって、話し合いをする場もあるんです。私の親戚が、ヴァリルエルフ族代表としてここに住んでいます』

ララノアに案内をされ、オレたちは石造りの家に案内をされた。庭付きで、他の家よりも一回り大きい。叩扉をすると、中年のヴァリルエルフが姿を現した。中年と言っても、ヴァリルエルフである。数百歳にはなっているだろう。ララノアが話をすると、そ



の男は頷いて、オレたちを中に案内してくれた。荷物などは庭の中に入れた。

『ご紹介します。私の叔父であるアグラエル・ザラです。ハレンラーマに住むヴァリール族の族長です』

『アグラエルです。御客人の皆様、遠路はるばる、ようこそお越し下さりました…』

『ディアン・ケヒトです。縁ありまして、ララノア殿の護衛をしております。どうぞディアンとお呼び下さい』

オレたちは一人ひとり、挨拶をした。ヴァリール族とエルフということ、戦闘好きだと思っていたのだが、少なくとも族長は理知的な人物のようである。オレは興味があり、ヴァリール族やハレンラーマについて、幾つかの質問をした。多様な種族が集まって暮らしていることに、問題など無いのかが気になったからだ。

『実際のところ、問題がないわけではありません。部族長たちが集まって話し合いの場を持ち、そこで決めたことは皆で守ろうとしています。が、なかなか…』

『具体的には、どのような取り決めをしたりするんですか？』

『例えば、狩猟の場所や農耕地の開拓、利水の権利などですが、正直に申し上げてまとめることが難しいのが現状です。各部族長とも自分の部族の生活に関わるからですから』

『…誰かが、統率者として上に立ち、部族皆をまとめ上げる、といったことは無いのですか？』

『今は、このチルス山脈で最大の数を持つ獣人族の長が、まとめ役になってはいます。しかし、今は南で問題も発生していて、なかなか…』

『何か、南の方に問題でもあるのですか?』

アグラエルは少し躊躇をしたが、話してくれた。

『このようなことを御客人に申し上げるのは気がひけるのですが、南部から人間族が侵入をしてくているのです。我々が闇夜の眷属であることから「悪しき存在」と決めつけ、この地に攻め込んでくいているのです。獣人族や我々も対抗をしていますが、まとまりがなく、防戦一方となっていて…』

オレは目を細めた。またしても、この話である。

『大方、光の現神を信仰する「信仰心過多、判断力過小」の連中が、攻め込んでくいているのでしょうか?普通、そうした外敵が攻めてきたら、普段はバラバラな連中もまとまるのですか?』

アグラエルは苦笑いをした。どうやらそれでもまとまらないらしい。それでこの地が占領され、闇夜の眷属が追放されるのであれば、それはそれで彼らの責任でもある。だがララノアがこれから住む土地が、外敵に侵略されるのを黙って見ているわけにもいかない。オレはレイナ、グラティナ、ファーミシルスに話しかけた。

『…お節介かもしれないが、ちよつと南に行ってみるか』

三人が頷いた。

## 第六十八話：部族長会議

アヴァタール地方東端は、北側にチルス山脈が広がり、南側には広大な平野が広がっている。大陸公路は、ラウルバーシユ大陸の東にある「東方諸国」から、礫砂漠帯や草原地帯を通り、アヴァタール地方東端のセーナル神殿領に続く。交易都市アニヴァを通し、ブレニア内海まで繋がる。後世において、アヴァタール地方東端は二つの国によつて統治された。一つは、大陸公路を押しえ、交易がもたらす莫大な利益によつて栄えた国「アンナローツエ王国」、もう一つはチルス山脈に住む闇夜の眷属たちによつて創られた「ザフハ部族国」である。光側の現神を信奉する「アンナローツエ王国」と、闇側の現神を信奉する「ザフハ部族国」は、信仰する神も社会体制も異なるため、長年にわたつて確執があり、争いを繰り返すことになる。この地に平穏が訪れるのは、ヴァイスハイト・フィズメルキアーナの治世を待たなければならぬ。

ハレンラーマの南側に広がる広大な湿地帯「夕闇の大湿原」が、人間族と亜人族との境目である。本来であれば、この大湿原は闇夜の眷属たちの縄張りなのだが、最近、ここに人間族が進出をし、勝手に集落を作っているらしい。それだけならまだ我慢もでき

ようが、そこからさらに、ハレンラーマ近くまで侵食し始めているようだ。オレたちはハレンラーマを出て、夕闇の大湿原へと向かった。

『なるほど、確かに人間が集落を作っているな』

夕闇の大湿原は、湿地帯であるため棧橋が掛けられている。湿地の中にある土地に、人間たちが村を作っていた。馬を降り、棧橋を渡ろうとすると、槍を構えた男二人が、オレたちの行く手を遮った。

『待て、お前たちは村の住人ではないな？』

『ああ、ハレンラーマから来た』

男は、グラティナとファームシルスの姿を見ると、顔をしかめた。

『亜人たちはここを通すわけにはいかん。帰れっ！』

『なんだとっ！人間風情がっ！』

ファームシルスが剣を抜こうとしたので、オレが止めた。

『一つ聞きたい。ここは元々、亜人族が住んでいたと聞いていたのだが、彼らはどうなったのだ？』

男たちは顔を見合わせて、肩を竦めた。

『知らんな。俺たちは人間の集落を守っているだけだ。亜人なんてどうでも良い』

『貴様…』

グラティナまで剣を抜こうとする。殺気を放つ二人に、男たちも警戒をしている。オレは二人を宥め、男たちに聞いた。

『入れないということは解った。オレや彼女なら大丈夫なのか？』

『ああ、人間なら問題ない』

男たちはレイナに見惚れながら頷いた。レイナは冷たい表情で無視をする。

『…解った。ひとまず今日のところはハレンラーマに戻る。いずれまた来る』

『ディアンツ！なぜ奴らを生かしておくのだっ！』

フアーミシルスがオレに食って掛かった。レイナもグラティナも納得がいかないようだ。オレは皆にも納得するように説明をした。

『フアミ、オレは人間も亜人も魔族も関係ないと思っている。だが、それはオレの理屈であって彼らの理屈ではない。そしてそこには、どちらが正しいなどというものはない。彼らは彼らで「自分たちが正しい」と思っていて、その考えのもとで行動しているのだ』  
『だが間違っているっ！あそこは闇夜の眷属たちの土地だぞっ！』

『縄張りというのは、この世界が誕生してからずっと決まっていたものじゃない。時代と共に変化をするんだ。闇夜の眷属たちが、あの土地を自分たちのものだと言張をする

のなら、なぜ戦わないんだ？なぜ放置している？』

『彼らは侵略者だっ！』

『そうだな。オレもそう思うが、彼らは自分たちを「開拓者」だと思っっている。オレたちが自分たちのことを正しいと思うのは、オレたちの立場だからだ。彼らだって、自身を正しいと思っっている。相反しているが、どちらも正しいんだ』

『…つまりディアンは、私たちが間違っっている、というのか？』

『そうじゃない。絶対的に正しいこと、なんてものは殆ど無いんだ。種族は関係なくみんな平等、という考え方もあれば、種族によつて差別をする、という考え方も成立するんだ。オレたちの考え方が正しい、彼らが間違っっているなんて、どうやって証明する？』

『…私は、難しい理屈を言われても解らない。ただ、奴らはムカつく。腹ただしいっ！』

『そうだな。オレもブツタ斬つてやろうかと思つたよ。だが彼らはオレたちを追い返しただけで、危害を加えようとはしなかった。「考え方が違うから命を奪う」というのは、それこそ彼らを非難できなくなるぞ？』

グラティナとファームシルスが押し黙つた。レイナがオレに聞いてきた。

『でも、このまま放つておくわけではないんですよ？どうするの？』

『そうだな、とりあえずハレンラーマに戻つて、アグラエル殿に話を聞いてみるか…』

ハレンラーマに戻ったオレたちはアグラエルに状況を報告した。

『このままでは、人間族はハレンラーマまで侵入をしてくるでしょう。いや、もう侵入し始めていると言えます。部外者のオレがこのようなことを申し上げるべきではありませんが、このまま一方的に、されるがままで良いのですか？』

『……………』

アグラエルは腕を組んで沈黙した。グラティナが声を上げた。

『何を躊躇することがあるっ！戦うしかあるまいっ！剣を取り、侵略者からこの地を守るのだっ！』

『グラティナ、それはオレたちが決めることではない。この地に住む彼らが決めるべきことだ』

『しかし…』

ララノアが静止する。アグラエルは暫く考え、オレを見た。

『ディアン殿、このようなお願いは筋違いと思いますが、明日の夜、族長同士の会議に出て頂けませんか？』

『話し合っている場合かつ！』

煮え切らない態度に激昂するグラティナを抑え、オレが応えた。



『出席するのは構いません。ですがオレは部外者です。本来であれば、発言をすることすら許されなれないと思いますか？』

『会議の場において、私が皆に断りを入れます。残念ながら、会議を取りまとめる力量が、私には無いのです』

オレは頷いた。

翌日の夕刻、ハレンラーマに多様な部族が集まって、会議が開かれた。ヴァリⅡエルフや獣人は無論、龍人族やナーガ族もいる。冒頭に、アグラエルがオレの出席を皆に告げると、全員の視線がオレに集中した。獣人族の長が皮肉を吐く。

『…人間がこの場に出るとはな…』

オレは聞こえなかった振りをし、挨拶をした。会議が始まると、議論はいきなり過熱した。オレはとにかく、黙って話を聞くようにした。全員に共通していることは、南部から侵入してくる人間族をなんとかしなければならぬ、という点だ。だが取りまとめ役がいなかったため、議論が四散してまとまらないのである。オレは立ち上がって、筆を持った。全員の話が一旦止まり、オレの方を見る。

『今の話を聞いていると、南からの人間族の侵入を何とかしたい、という点は変わらない

と思います。これは宜しいですか？」

壁に文字を描き、オレは一人ひとりに確認をした。全員が同意をする。

『では次に、「何とかする」とは具体的にどのような状態をさすのでしょうか？ハレンラーマに侵入するのを止めるのか、それとも夕闇の大湿原そのものを取り戻すのか？』

全員が発言をしようとしたので、オレは一人ひとりを順番に指名し、発言を促していった。夕闇の大湿原を取り戻し、その地に人間が入れないようにしたい、というのが全員の意見であつた。

『では、どのようにしたらその状態になるのかを話し合ひましょう。まず、夕闇の大湿原を取り戻さなければなりませんね。人間族と話し合うのか、それとも戦うのか…』

ここで獣人族の長が声を上げた。

『先程からお主が仕切つておるが、人間の話を何故、我らが聞かなければならんのだ？』  
オレはため息をついた。本当なら使いたくなかつたが、バカを纏めるには単純な方法が良いのかもしれない。つまり「恐怖」でだ。オレはいきなり魔神の顔を出した。

《…黙つてろ…オレは人間じゃない…》

オレの変貌に、座が凍りついた。獣人族たちは毛を逆立たせ、ナーガ族は剣を抜こうとした。獣人族の長は、驚きながら、言葉を発した。

『ま、まさか魔神だつたとは…だが、それなら簡単ではないか。魔神殿に取り戻してもら

えげ……』

『断る。オレは自ら動かん奴には一切、手を貸さん。取り戻したければ、自分たちで取り戻せ……』

オレは人間に戻ると、全員に告げた。

『お前たちは話し合いの仕方を知らんのだ。だから皆が好き勝手に発言をし、議論がまとまらないのだ。持ち回りで良い。この中で取りまとめ役を決めろ。取りまとめ方は、いまオレがやってみせた通りだ。現状認識の確認、ありたい姿の具体化、そしてそのための手段の話し合いだ。この順番でやれば、大抵の話し合いが上手くいく。オレが指南役になってやる。ここで「会議の仕方」を学べ』

その夜は獣人族の長が取りまとめ役となり、会議を行った。取りまとめ役は、自分の意見を言ってはならない。あくまでもまとめ役に徹しなければならぬのだ。意見を言う時は最後に、皆に断りを入れてから言うのである。獣人族などは、血の気の多い連中だと思っていたが、元々それなりに年長なので、ある程度の自制は効くようである。皆がやり方に慣れ始め、ようやく会議らしくなった。

『……全員の共通認識として、彼らと話し合いは無理であり、取り戻すためには戦うしか無い……これで宜しいか?』

「戦って取り戻す」

これを決めるためだけに数刻を要した。オレのいた世界では考えられない程の非生産的な会議だが、オレは拍手をした。彼らにとつては大進歩だからだ。

『決まりましたね。あとは楽ですよ。いつ戦うか、誰が戦うか、どうやって戦うか、勝つた後どうするかを決めるだけですから…』

だが全員が疲れきっていたようで、ため息をついた。獣人族の族長に耳打ちし、いま言ったことを自分なりに考えて持ち寄ってくることで、今夜の会議は解散となった。アグラエルがオレに寄ってきた。

『お見事でした。私自身、大変勉強になりました。あのようにして、話し合いをするのですね』

『部族長同士であり、上下が無い以上は、ああやって取りまとめ役を持ち回りにし、全員の意見を尊重していく必要があります。この家を「族長会議の場」とし、壁に会議の規則を書いておいたほうが良いでしょうね。一晩寝ると、忘れるかもしれませんから』

『その…文字の読めない部族長もいるのですが…』

『ならば、会議が始まる前に、皆で確認のために唱和をしましょう。馬鹿馬鹿しいかもしれませんが、こうした取り決めが、必ず将来、役に立ちます』

それから三日間、族長会議が行われた。話し合いの仕方を学んだ彼らは、人間族への対策のみならず、部族間の縄張りの問題や利水権利なども話し合い始めた。己の意見の

みを主張するのではなく、相手の言い分を互いに聞き、妥協点もしくは代替案を探る。三日目には相当な案件を処理することが出来るようになっていた。三日目の会議が無事に終わり、次回以降は出席しないと皆に告げた。

(ふう…ヤレヤレ、ようやく終わったか)

紅い月と満天の星空を見上げ、オレは伸びをした。転生前に自分が経営をしていた会社の取り決めが、こんなところで役に立つとは思っていなかった。星空を見上げながら、オレは考えた。

…民主主義の基本は「自主自律」と「他者尊重」だ。この程度の話し合いすら出来ないようでは、とてもルネサンスには近づかない。統治形態というのは、そこに住む民衆の「民度」に応じて決定をすべきなのか。この世界には、まだオレの求める国家は早過ぎる…

オレはため息をついた。

## 第六十九話：光と闇

アヴァタール地方東域にある「アンナローツエ王国」は、デイルリフィーナにおける最古の「王国」である。ルドルフ・フィズメルキアーナが生まれた時には、既に王および貴族による統治が始まっていた。貴族層は太陽神「アークリオン」、騎士団は「アークパリス」、行商人たちは「セーナル」を信奉している。光の現神を信奉することで、その恩寵を受け、国家形成期においては、デイルリフィーナでも最大の勢力を持っていた。

この地帯にいち早く、王国が誕生したのは三つの理由が存在している。一つは莫大な富をもたらす「大陸公路」を抑えていたことにある。東西の行商人が活発に行き交う交易都市「アニヴァ」をはじめ、商業が発展し、交易によつて膨大な富を得ていたのである。二つ目は、肥沃な大地と人口にある。この地域は気候が安定し、古来より農業および畜産業が盛んであった。そのため多くの人を養うことが出来たのである。三つ目は、岩塩を算出していたことにある。後に王国の首都となる「フォートガード」では、岩塩を取ることが出来、内陸国において最も重要な「塩」を輸入する必要が無かったのである。この三つの理由により、アンナローツエ王国は数百年に渡つて繁栄をするのであ

る。

建国当時のアンナローツェ王国は、光側らしく「正義と平和」を愛する国であったが、後代においては、腐敗した貴族層によって、王国内に闇が生まれるようになる。貧富の差が拡大し、富める者が貧しき者を虐げ、北の亜人地帯から、獣人族を奴隷として捕まえてくるなど、国全体が腐臭を放つようになった。やがてチルス山脈の国「ザフハ部族国」の部族代表となったヴァリエルフ「アルフィミア・ザラ」の侵攻を受け、滅亡の危機を迎える。メルキア帝国の支援と女王「マルグレッタ・シリオス」の統率によって、危機を脱したかに見えたが、傭兵団長「フェイス」によって王国内が混乱し、最終的にはザフハ部族国と共に、メルキア帝国に吸収されるのである。

部族長会議で「夕闇の大湿原」の回復が決定されてから数日後に、獣人族、竜人族、ヴァリエルフ族が中心となった連合軍は、夕闇の大湿原に侵攻、半日も掛からずに、湿原を取り戻すことに成功した。しかしこれは、人間族の国「アンナローツェ王国」との永きに渡る確執を生むきっかけとなった。アンナローツェ王国は、軍の派遣を決定し、夕闇の大湿原に向けて進撃を開始した。

『我らは別に、人間族の国を侵そうなどとは思っておらん。これまで住んでいた土地を取り戻しただけなのに、なぜ人間族は我らを攻めようとしてくるのか…』

部族長会議では重苦しい空気が漂っていた。闇夜の眷属は、信仰している神が違うだけで、戦争を好んでいるわけではないのである。半分は人間であるオレには、人間族の考え方が理解できる。人間は基本的に「自我の塊」なのである。自分たちが奪っておきながら、それを奪い返されたとなると「奪われた」と感じる生き物なのだ。「自分が常に正しい」と考えるのは、人間の本能のようなものである。

『…オレが迎え撃とう。その上で、闇夜の眷属代表として、オレがアンナローツェ王国に行き、話をつける』

オレの提案に、部族長たちの表情が明るくなった。オレが出れば勝てると思ったのだろう。だがオレは、アンナローツェ王国とコトを構えるつもりは無かった。部族長代表の使者として認める一筆を貰い、オレは指示を出した。

『あくまでも「話し合いの場」を持つためだ。相手を潰したところで意味は無い。連れはレイナだけでいい。グラティナは皆の指揮を取って防衛線を構築しろ。ファミは上空から偵察だ。別働隊がハレンラーマを急襲する可能性もあるからな』

「レオポルド・グリズラー」率いるアンナローツェ王国歩兵隊五千名は、湿原南部の村「ガウ」にて陣を構えた。敵の数はそれ程多くはないが、亜人族が相手である以上、通常以



上の兵力が必要である。グリズラーは湿原帯の地図を広げ、各連隊長たちと議論を重ねていた。

『湿地帯である以上、馬を使うわけには行かん。まずは強弓で射かけ、敵が怯んだ隙に湿地帯に橋を渡し、進撃をする。だが無理に戦う必要はない。目的はこの地の占領だ。亜人たちを追い出せば、それで十分だ』

作戦が決まり、翌日から進撃という時に、副官が耳元で報告をしてきた。

『…使者？』

ディアンとレイナは、剣を預け、アンナローツエの陣に入った。前後に兵が付く。営舎には、指揮官と思われる人物が立っていた。まだ若いが相当に腕が立つとディアンは感じた。周囲には各隊の隊長と思われる男たちがいる。いずれも体格がよく、鍛えられた軍だということは一目で解った。

『アンナローツエ王国五千人将のレオポルド・グリズラーである。亜人族を代表する使者と聞いた』

『亜人族の使者、ディアン・ケヒトです。こちらは付き添いのレイナ・グループです。こちらが、使者を示す書状です』

副官から書状を手渡されたグリズラーは、一読して頷いた。

『代表であることを認めよう。我々と話し合いをしたいということだが、私にはその権限がない。首都トトサーヌに行き、王と直接話しをして頂く必要がある』

『そうしたいのは山々なのですが、我々が向かつて、恐らくお目にかかることすら出来ないでしょう。そこで、王と直接お話が出来るよう、あなた様にご手配をお願いしたいと思っております』

『…言ったはずだ。私には権限がない。王との交渉は、そちらの責任で行うべきだろう』  
グリズラーの言い分は、組織人としては正しい。湿地奪還の命令を受けてここまで来たのに、使者が来たから攻撃を止めました、では言い訳のしようも無いのである。無論、このことはディアンの予想の範囲内であった。相手を動かすには「そうせざるを得ない理由をつくる」ことである。ディアンは気配を変えた。人間の貌が消え、魔神の貌が表に出る。グリズラーたちは鳥肌が立った。

『…勘違いしてもらっては困るな。権限の問題ではない。そうしなければ、お前らはここで骸になる運命にあるんだぞ？』

『ひっ…ひいひいっ！』

兵士たちが逃げ出す。隊長の中にすら、尻餅をつく者もいた。グリズラーは汗を流しながらも、齒を食いしばり、拳を握りしめた。

『……まさか、魔神なのか……』

《トトサーヌに使者を出せ。魔神が出現し、王との直接交渉を望んでいるとな。拒否をすれば、貴様らは一人残らず肉片になるぞ？

『……………』

グリズラーは瞑目した。魔神が出現をした以上、このまま進撃をしても全滅をするだけである。自分一人ならまだしも、部下を巻き込む訳にはいかない。

『…解った。トトサーヌに使者を出そう。その上で、あなた方には直接、トトサーヌに行ってもらいたい。王を含め、誰も魔神を知らないのだ。使者だけでは信用しない可能性がある…』

《賢明な判断だ。言っておくが、オレたちが交渉をしている間、余計なことは考えないことだ。ここで大人しく待っている…》

『そのような卑怯な真似はせん。だが、王があなた方との交渉を拒否すれば、我々は即座に進撃する』

《軍人バカだな、アンタ… その時は、アンナローツェ王国が過去形になるだけだ。せいぜい祈るんだな。》

ディアンらは、剣を受け取り、使者と共にアンナローツェ王国首都「トトサーヌ」に向かった。

トトサーヌの王宮内では、グリズラーからの報告で議論が起きていた。王の前で、貴族派と軍人派が激しく言い争いをしていった。ディアンとレイナは別室で待たされている。

『何が魔神だっ！大方、怖気づいて嘘の報告をしてきたに決まっているっ！』

『グリズラー五千大将は、実績も人望もある将だ。それが攻撃を止めてまで知らせに来るとは、余程の事態があったのだろう。まずは話を聞くべきではないか？』

結局、その日のうちにはまとまらず、ディアンたちは王宮が手配した宿に泊まることになった。二部屋を用意されたが、レイナはディアンの部屋で一夜を過ごした。思えば、二人きりの移動というのは久々であった。ディアンの腕枕の中で、レイナが聞いた。『ひよつとしたら、私たちをここに留まらせて、その間に攻撃をさせる気かも知れないわね』

『魔神をここに引きつけておけば勝てる、などと視野狭窄の奴もいるかもな。まあその時は……』

『…あとは言わなくてもいいわ』

レイナがディアンの上に乗った。第一使徒であるレイナには、主人の考えが読めてい

た。万一の時は、あの豪壮な王宮は瓦礫になるだろう。

数日後、ようやくアンナローツェ王国の国王「ヘルムート・シリウス一世」への謁見が許された。無論、帯剣などは許されない。ディアンとレイナは謁見の間に通された。左右には軍人や貴族が並んでいる。片膝をついて挨拶をする。

『謁見をお許し頂き、有難うございます。私の名はディアン・ケヒト。チルス山脈の亜人族たちを代表して、使者として罷り越しました』

『レイナ・グルップでございます』

二人の挨拶に王が頷く。左右でヒソヒソと話がされる。王が二人に話しかけた。

『使者殿、亜人族たちの言葉を聞かせてくれ』

王からの直接の話しかけは、直答が許されたということである。ディアンは語り始めた。

『はい、我々はアンナローツェ王国と争うつもりはありません。夕闇の湿原は、元々は亜人族の縄張りでした。今回はそこを取り戻しただけです。これ以上の争いは避け、むしろ南北で交易を行い、末永く共生をしていきたいと考えております』

周囲から失笑が漏れた。王が彼らを代弁するように言った。

『光と闇が共生する。そのようなことが可能だと思うか？我々にとつて、北の亜人族たちは許し難い存在なのだ』

『何故でしょう？彼らが闇の現神を信仰しているからですか？』

『そうだ。我らは光を信仰している。彼らは闇を信仰している。光と闇は決して相容れぬ。湿原などの小さな土地の争いなど問題ではない。彼らが存在すること、そのものが問題なのだ』

『理解できないのですが、光と闇は相容れぬと、誰が決めたのでしょうか？』

『なに？』

『王はいま、こう仰られました。「光と闇は決して相容れぬ」と…それは、誰が決めたのでしょうか？何故、相容れないのでしょうか？』

『妙なことを言う。実際、光と闇の現神たちは、互いに争っているではないか』

『そうですね。確かに現神同士は争っているようです。ですが、それは神々の話です。人間の世界には関係がないではありませんか？』

『信仰する現神が、闇を許さぬ以上、信徒である我らも決して許さぬ。そんな理屈も解らぬのか？』

『残念ながら理解が出来ません。何が正しく、何が間違いなのか、その判断を自分でするのではなく、神に委ねるといふ感覚は全く理解できません』

『…もう良い。不愉快だ。この者達を処刑せよ。グリズラーには巫人共を皆殺しにせよと伝えよ』

衛兵が現れ、ディアンたちを取り囲む。その時、ディアンの気配が一変した。人間の顔が消え、魔神の貌が表に現れる。国王以下、その場にいる全員が凍りついた。取り囲んでいた衛兵たちは、腰を抜かして震えながら逃げ始めた。

《…どうやら言っても判らんようだな。ならば力で訴えよう。チルス山脈の闇夜の眷属には手を出すな。言っておくが、オレは要望をしているのではない。命令をしているんだぞ？

ディアンはレイルーンを天井に放った。爆発し、瓦礫が落ちてくる。

《さあ、考える。光の現神に従い、このまま闇と戦い続けるか、それとも魔神のオレに従い、闇と和睦するか…どっちだ？

ディアンは国王に手のひらを向けた。解答次第ではそのまま吹っ飛ばすつもりでいた。軍人の中から、勇気ある男がディアンに斬りかかる。だが刃が届く前に身体を吹き飛ばされた。レイナが放った魔法だ。

『お願いだから、黙っていてね。まだ死にたくないでしょ？』

レイナは手の平に炎を燃え上がらせた。その場にいる全員を焼き殺すに十分であった。シリウス一世は震えながら叫んだ。

『わ、解ったつ！命令に従うつ！亜人たちと和睦をするっ！』

《二言は無いな？もし約束を違えたら、いつでもオレが現れると思っておけ：：》

ディアンは人間に戻ると、レイナを連れて謁見の間から出て行つた。国王は椅子からずり落ちた。

ガウの村に陣を張っていたグリズラーのもとに、首都からの命令が届いた。「魔神を引きつけている間に、亜人族を攻撃せよ」との命令であつた。五千人将と副官は、顔を見合わせた。命令である以上は聞かなければならないが、その時は王国が滅びるのである。

『…如何しましょう？』

『命令は届かなかつた…』

『は？』

『命令は届かなかつたのだ。使者は途中で落馬し、命を落としたのだ。良いな？』

グリズラーの言っている意味を理解した副官は、敬礼をして幕舎を出た。その後、使者の姿を見た者はいない：



チルス山脈の闇夜の眷属と、アンナローツエ王国は和睦を行った。夕闇の大湿原は亜人族の縄張り決められた。獣人族の長とアンナローツエ王国代表が調印をする。これにより、この地帯での争いは治まった。その夜、ハレンラーマでは盛大な祭りが開かれた。部族も関係なく、皆が酒を酌み交わし、歌い、踊る。

『今回の活躍、お見事でした。ディアン殿』

ヴァリルエルフ族長のアグラエル・ザラが、ディアンに酒を注いだ。ディアンは笑顔で頷いたが、直ぐに表情が暗くなる。

『…如何されたのですか？』

『目出度い日に言うべきでは無いのかもしれないが、今回の和睦は恐らくは一時的なものだろう。オレが脅したので、渋々の和睦となったのだ。人間の欲というものは凄まじく強い。恐らくは数百年もせずに、必ず侵攻をしてくるぞ？』

『…そうですね。ですが、時は与えられました。それまでに、人間族が攻め込めないようにしましょう。各部隊長とも話し合いたいと思います』

ディアンの予想は、半分は当たり、半分は外れた。アンナローツエ王国は、魔神の恐ろしさに肝を冷やし、ザラの村に巨大な要塞を構築した。光と闇の奇妙な関係が崩れたのは、二項対立の思想に疑問を感じたヴァリルエルフ「アルフィミア・ザラ」による「闇

側からの侵攻」によってである。

『まあ、当分は平和が続くだろう。今日は飲もう』

デイアンは笑つて、杯を干した。

アンナローツェ王国の「元」五千人将レオポルド・グリズラーは、自宅で荷物をまとめていた。王宮に魔神を入れ、国王に危険を及ぼした責任を取らされたのである。幸いなことにグリズラーは独身であった。家を引き払い、行商隊の護衛でもやろうと考えていた。

(やれやれ……あの魔神に会ったのが運の尽きか……)

荷物の整理を終え、ため息を付いたグリズラーのもとに、行商人が訪れ、手紙を置いていった。差出人には「D. C. c h t」と書かれている。首を傾げて封を開けると、そこには手紙と共に、もう一つ封書が入っていた。手紙を読み、グリズラーは目を閉じた。手紙はある人物への紹介状であった。武人ならば、一度は名を聞いたことのある人物である。グリズラーは笑った。魔神がこんな気を利かせるとは思わなかった。家を出たグリズラーは、未来の活躍の場を目指して、西へと向かった。

「H r n. A u g u s t K r a m e r」

同封された封書には、そう宛名が書かれていた。

## 第七十話：ケレーヌ地方へ

後年のザフハ部族国は、各部族長が持ち回りで国の代表を務める緩やかな「部族連合国家」となる。ハレンラーマを首都とし、部族長会議の話し合いと多数決によって、国の方針や部族間調整、法律などが決められていた。歴史研究家たちは、後年に誕生する闇夜の眷属の国家「エディカーヌ帝国」と比較をするが、エディカーヌ帝国は一系の王家が存在したことに対し、ザフハ部族国には、そうした「血統による統治者」が存在しなかった。そのため、部族長会議はともかく、各部族間を「国家」としてまとめるタガが存在せず、メルキア帝国に各個撃破をされ、滅亡をするのである。

オレたちは、もともとは、ララノアの引越しを手伝うために、ハレンラーマに来たのである。思いもかけずにアンナローツエ王国との交渉役などを担ってしまったが、引越しが終わった以上は、次の旅を目指すべきだろう。オレはそう考え、レイナ・グラティナ・ファームシルスと次の旅について話し合った。デিজエネール地方の竜人族の村もそうだったが、どうも「亜人族の村」は、オレにとつて居心地が良いのである。日を決めて出発をしなければ、ズルズルと居続けてしまいそうだ。

『この地から行きやすいのは、東の東方諸国か、北のケレース地方だな。ディアンはどうしたいのだ?』

『オレはケレース地方に興味がある。あの地は魔族も多く、チルス山脈以上に混沌としているらしいしな』

『そういえば…』

ファームシルスが地図を指差した。チルス山脈の北側である。

『以前聞いたことがあるが、ここに「死者の国」に繋がる途があるらしいぞ?』

『ほう? 興味深いな…』

『死者の国ってことは、お化けとか幽霊とかが出るのかしら?』

『ゆ、幽霊…』

グラティナが青くなった。どうやらその手の話は苦手らしい。オレたちが笑いながら話し合いをしていると、アグラエルが声を掛けてきた。

『ケレース地方に行かれるのであれば、これをお持ち下さい。ケレース地方のエルフ領「トライスメイル」への紹介状です』

『…失礼ながら、ヴァリルエルフのあなたが、ルーンルエルフ領であるトライスメイルに知人がいらつしやるのか?』

アグラエルは笑った。種族間では無視しあっているが、個人的な付き合いを持つ場合

も多いようである。オレは礼を言って、紹介状を受け取った。

『ケレース地方への行き方としては、チスパ山とチルス山脈の切れ目にある「シユタツト森林地帯」を抜ける道が、一番早いですね。ただここには強力な魔物がいるようで、商人たちは通りません。安全な道としては、ブレニア内海に出て、トライスメイルの西側を通って北上する行き方ですが…』

『相当に時間が掛かりますね。それに、この「死者の国」に興味がありますし、この森林地帯を超えて行きます』

グラティナが腕を組んで震えた。

二日後、準備を整えたオレたちは、ハレンラーマの出発をしようとしていた。ララノアはもちろん、各族長まで見送りに来てくれた。

『ディアン殿、ティナのこと、宜しくお願いしますね。それと…』

ララノアはオレの耳元で囁いた。

『…次にお会いした時は、夜の方でも仕合をして下さいね』

どうやら、ララノアは吹っ切れたようである。オレは笑って頷いた。アグラエルや他の部族長たちと握手を交わし、オレたちハレンラーマを出発した。チルス山脈に沿っ

て、西に向かう。センタクスの街までは、道を戻ることになる。そこから北上し、キサラの村を超えてチスパ山の東側をさらに北上するのである。イーグスやチルス連邦を通り、センタクスの街を目指す。族長から礼として希少な鉱石や毛皮をもらったので、センタクスで食料などに交換するつもりだ。ハレンラーマを出発してから十二日後、オレたちは特に問題なく、センタクスの街に入った。

『恐らく、街らしい街はこれが最後になるだろう。食料などは無論、他の雑貨もここで仕入れておいたほうが良い』

オレたちはセンタクスの行商店を見て回った。ここではアンナローツエとメルキアの通貨を使うことが出来る。オレたちが歩いていると、周囲がジロジロと視線を送ってくる。どうやらファームシルスを気にしているようだ。魔族であることもそうだが、服装がかなり際どいのである。だが、ファームシルスは全く気にしていないようだ。

『ファミ、お前の姿に街の男たちが困惑している。もう少し、露出の低い服を用意しようか？』

『何故だ？私は気にしていないぞ。見られて恥ずかしい身体はしていないつもりだ』

飛天魔族と人間族では、羞恥心の感覚が違うらしい。オレは少し考え、ファームシルスに提案をした。

『これから北に行くにあたって、もう少し装備を整えたほうが良いだろう。ファミ、お前

の鎧を用意しよう』

『鎧か……確かに、あると安心だな。だが重すぎると飛べなくなる。軽い鎧にしてくれ』  
オレたちは、武器を扱う行商店でファーミシルスの鎧を見繕った。取り敢えずの応急的なものだ。肩や関節などを護る程度のものだが、露出は多少は下がる。

『ケレース地方に行けば、ドワーフ族もいるだろう。いずれ最上級の武器や鎧を特注してやる』

ファーミシルスは嬉しそうに頷いた。

センタクスの街では三日間を滞在して、オレたちはケレース地方に向かった。大陸公路はエリアン街道で終わりである。そこから北に行くと「キサラの村」があり、そこから北は魔物が多く出現する危険地帯に入る。キサラの村は寒村で、ほとんどが狩人だ。オレたちはそこでの情報などを集めた。キサラの村の西にある「シユタット森林地帯」には、強力な魔物が出現するらしく、狩人たちは森林地帯に入ることが殆ど無いそうである。狩人たちは口々に、止めたほうが良いと勧めてきたが、オレたちはそれを無視してケレース地方を目指した。

キサラの街を出て三日後に、シユタット森林地帯の入り口に到着をした。鬱蒼とした



森が広がっている。荷車を曳いたまま入ることは出来ない。

『少々乱暴だが、仕方がないか…』

オレは地脈魔術を使い、地割れを起こして木々をなぎ倒していった。火炎魔術はあえて使わない。森林を焼き払うのは、この森に住む魔物たちの住処を奪うことになるからだ。かなり時間のかかるやり方だが、オレたちは根気よく木々を退けて、道を作っていった。森林地帯に入って最初の野営は、まだ入り口から一里も進んでいない。

『ヤレヤレ、これでは数日は掛かってしまうな』

月が雲に隠れ、闇が濃くなる。焚き火の灯りだけが唯一の光になった。その時、魔物の気配を察知して全員が剣を手にとった。近くに強力な魔物が接近している。フアーミシルスが鼻をヒクつかせた。

『…この気配、魔獣じゃない。悪魔族だ』

オレはいつでも魔人化する準備をした。この三人が遅れを取るとは思えないが、上級の悪魔族になれば、かなり手強い。

『…来るぞっ！』

複数の黒い影が、森から飛びかかってくる。普通の人間の二倍の大きさはある。オレたちは剣を振って斬りつけた。斬った瞬間に解った。相当に手強い相手である。複数の魔法がオレたちに襲いかかってきた。オレは瞬間に、三人の前に出て、魔術障壁結界

を張った。月が雲間から顔を出し、悪魔族の正体が見えた。ファームシルスが呟いた。  
『これは…グレーターデーモンか』

純粹魔術と暗黒魔術を操る、上級の悪魔族である。ファームシルスの呟きを聞いて、  
オレは人間の貌を外した…

## 第七十一話：ガンナシア王国

デイルⅡリフィーナの世界において、知的生命体と限れば「人間族」が最も数が多いが、「種族」として最も数が多いのは「魔族」である。魔族とは一般的に「人間に仇をなす者達の総称」とされているが、これは人間側から見た呼び方であり、彼らからすれば「自分の縄張りに勝手に入ってくる人間こそ、自分たちに仇をなす者達」なのである。そのため、客観的に見れば「魔族Ⅱ悪」と決めつけることは出来ない。無論、魔族の中には「魔神」も含まれるため、「戦うために人間に襲い掛かってくる」という例も無いわけではないが、大抵の場合、人間族のほう魔族に接近し、結果として襲われるのである。魔族とは幾つかの種族を束ねる総称であり、神に匹敵する力を持つ魔神から、子どもの中でも倒せるほどのプラテットまで、その幅は広い。一般的な理解としては、その戦闘能力が高くなるほど、知能も比例して高くなる傾向があり、魔神は無論、上級悪魔や鬼族などは、人語を解すことができる。鬼族などは洞窟内で集団生活をし、独自の文化を形成する場合もある。

旧世界である「イアスⅡステリナ」「ネイⅡステリナ」のどちらが魔族の出身かは明らかではないが、少なくとも「ソロモン七十二柱」と呼ばれる魔神たちは、「イアスⅡステ

リナ」が出身である。悪魔族の中には、翼が無くとも飛行をする上級悪魔も存在するため、両旧世界に魔族が存在し、ディルリフイーナ世界の形成とともに、魔族たちも種族が融合されていったと考えられている。

悪魔族は、魔族の中でも代表的な種族である。魔神を頂点とし、飛天魔族、歪魔などの貴族悪魔の下に、睡魔族や悪魔たちが存在する。ピラミッド型に分類をすることは可能ではあるが、強さという観点で見ると、一概に分けられるものではない。飛天魔族の最上級になれば、下級魔神を超える力を持つようになる。また悪魔の中にも、上級悪魔から下級悪魔が存在し、貴族悪魔を超えるほどの力を持つ悪魔も存在している。そのため、悪魔は必ず魔神に従うと決まっているわけではなく、結局は「強き者」に従うという「力の論理」のみが、悪魔族の共通規範となっている。

ディアンは魔神へと変貌した。凄まじい魔の気配で空気が歪む。普通の魔物であれば、これだけで退散をするのだが、さすがは上級悪魔である。数歩退き、左手を上げる。部下と思われる他の悪魔たちが、グレーターデーモンの背後に退く。レッサーデーモンたちだ。

『…魔神か』

グレーターデーモンが言葉を発した。ディアンは気配はそのままに、名乗った。

《オレの名はディアン・ケヒト、白と黒・正と邪・光と闇・人と魔物の狭間に生きし、黄昏の魔神だ。》

『…黄昏の魔神か。その魔神が何の用件で、我らの縄張りを侵す？』

《この森の北、ケレース地方に行きたいだけだ。お前たちの縄張りを獲ろうとしていくわけではない。》

『……………』

グレーターデーモンはディアンたちを一瞥すると、頷いた。

『お前たちだけ、というのであれば通行を認めよう。出来るだけ森を壊さないこと、作つた道に結界などの余計な仕掛けはしないことが条件だ』

《人間族の侵入を警戒しているのか？》

『奴らはしつこい。どれだけ追い払っても、この地を侵そうとする。道が出来れば、そこを通ろうとする人間が、必ず現れる』

ディアンは頷いた。彼らの縄張りに侵入をしたのは、ディアンたちの方なのである。通過を認めて貰うだけで、十分であつた。

《約束しよう。道は最小限の幅にし、通つた後は倒した木々で埋める。人間たちがこの地を通ることが無いようにしよう…。》

グレーターデーモンは領くと、部下たちと共に姿を消した。デイアンは人間に戻ると、瞑目した。

…この地はいつの日か、人間族によつて占領されるだろう。アヴァタール地方東部からケレース地方に行くには、この森を通るのが最短なのだ。ならば人間は、どんな手段を使つても、ここに道を通そうとする。その地に住む生き物など関係なく、自分たちの都合によつて自然を変えるのが「人間の性」というものなのだ。願わくば、その日が遠い未来であることを、そしてせめて、森を焼くような愚者によつてこの地が占領されないことを祈ろう…

デイアンの願いは半分は叶えられた。後年、この地帯をメルキア王国宰相エルネスト・プラダが占領する。エルネスト・プラダは父親譲りの交渉力を發揮し、この地を縄張りとしていた魔族と交渉を行い、ケレース地方への道を通すかわりに、森には手を出さないことが約束された。デイアンがこの森を通つてから、四十年後のことである。

グレーターデーモンの襲撃から五日後、デイアンたちは森林地帯を抜け、ケレース地方へと入った。ケレース地方の情報は殆ど無く、集落の場所も不明である。ただ、魔獣の襲撃は無かった。これはデイアンが魔神であることよりも、ファームシルスの存在が大きい。上級悪魔である飛天魔族に対して襲撃をしてくる魔物は少ない。デイアンた

ちは森を抜け、見渡す平野を北へ向かった。東側にはチルス山脈の北側がある。だが西側にも山が見えた。森に囲まれた単体の山である。ファームシルスが空から付近を一周して戻ってくる。

『あの山の麓に、街らしきものがあるぞ』

チルス山脈北側にあるという「死者の国」に行く前に、まずはケレース地方の情報収集が優先である。ディアンたちはファームシルスが見つけた街へと向かった。

『ほう、なかなか立派な街じゃないか。いや、国か？』

山の麓には、城壁で囲まれた街があった。森の中には畑もあるようだ。亜人族や魔族たちが出入りをしている。城門には屈強な魔族が二人立っていた。人間の姿をしたディアンたちが、余程珍しいらしく、道行く者たちはジロジロと一行を見る。中には露骨な嫌悪を示す者もいた。ディアンたちが場内に入ろうとすると、門衛が止めた。

『待て、ヴァリールとラウマカールは通っても良いが、お前たち二人は通すことは出来ません』

『ほう、何故でしょう？我々は、アヴァタール地方から来た旅の者ですが？』

『ここは霸王ゾキウ様が統治する国「ガンナシア王国」だ。人間族は誰一人として通すわけにはいかん』

『ガンナシア王国……お聞きしたいのですが、ゾキウ王は魔族でいらっしゃるのですか』

『？』

『お前たちには関係の無いことだ、立ち去れっ！』

槍がディアンに向けられた。レイナは思わず剣の柄に手を伸ばしたが、ディアンが止めた。

『解りました。ここは立ち去りましょう。ただ、この二人は入っても構わないのですね？ グラティナ、ファームシルス。お前たちに、ここで情報を集めて欲しい。オレたちは近くで野営をする』

ディアンはそう言うと「魔神の呼び笛」をグラティナに渡した。

『何かあったら、これに魔力を込めろ。すぐに駆けつける』

『解った。二日程で戻る。待っていてくれ』

グラティナとファームシルスは宝石の入った小袋を手に、城内へと入った。ディアンたちは馬で半日程度の森の中に、野営地を設け、グラティナたちの帰りを待つことにした。

ディアンからの指示で、私たちはガンナシア王国の城内へと入った。城内といって、インヴェティアのような整然とした街並みではない。土がむき出しで茅葺の小屋な



どが乱雑に建てられている。センタクスの街の方が綺麗なくらいだ。私とファミは、酒場らしきところに入った。殆どが男で、商売女と思われる半獣半人がいるくらいだ。男たちは話を一瞬止め、私たちに注目した。男たちの視線を無視し、酒場のカウンターに座る。ワインを二杯注文する。獣人の店主が、黙って私たちに杯を出した。

『なあ、ちよつと聞きたいんだが・・・』

私が話しかけると、店主がジロリと私を睨んだ。その視線を無視して、私は質問を続けた。

『あの山は、何という山なんだ？』

『・・・あんたら、ここらの住人じゃねえな？悪いことは言わねえ。それを飲んだら、さつさと街から出ていきな・・・』

店主はそう呟いて、私の前から消えた。ファミと顔を見合わせて、私たちは盃を干した。その後、酒場以外でも幾つかの店で聞いて回ったが、あまり情報が取れなかった。後ろの山が「オメール山」という山であること、ここからさらに北に、人間族の住む村があることなどが聞けただけであった。ディアンが欲しがっている情報「死者の国」については、全く情報が得られなかった。私たちは寂れた宿屋に部屋を取り、一泊をした。翌朝、宿から出るといきなり男たちに囲まれた。兜や鎧などを着ているが、穴が開いていたり継ぎ接ぎだらけの鎧である。

『お前らか？色々聞いて回っているって女どもは……』

どうやら情報源が向こうからやってきたようだ。私は口元に笑みを浮かべた。

『そうだ。この街やケレース地方についての情報を求めている。お前たちが教えてくれるのか？』

男たちは笑い声を上げた。

『お前らがその躰で俺達を愉しませてくれるって言うんなら、教えてやってもいいぜ？』  
私は思わず笑ってしまった。身の程知らずの男というのは、人間族も魔族も変わらな  
いらしい。ファームシルスに顔を向ける。彼女も小さく頷いた。

『……どうやら、力づくでなければ無理な様だな。貴様らの身体に直接聞くとしよう』  
私とファームシルスは剣を抜き放ち、斬りかかった。

オレとレイナは城門近くまで来ていた。二人が心配だったわけではない。ただ、グラ  
ティナもファームシルスも好戦的な性格だ。情報が聞き出せないからと言って、腕尽く  
で聞き出そうとする可能性がある。オレの不安は、むしろそっちの方だった。下手をし  
たら、この国を相手に戦争をすることになるかもしれない。城近くまで行くと、門衛二  
人がいない。どうやら、不安が的中したようだ。

『あらあら・・・あの二人に任せたのは、失敗だったのかしら?』

レイナは肩を竦めて失笑した。オレはため息をついた。

獣人族や下級悪魔など、それなりの力を持った男たちが斬りかかってくる。だが私もフアミも、魔神から直々に訓練を受けている。この程度に負けるはずが無かった。フアミは純粹魔法を放ち、男たちを吹き飛ばす。主の思想に従い、命までは取らない。だが当面の継戦能力は奪っておく必要がある。兵らしき男たちが次々と現れるからだ。心地よい高揚を感じる。この戦いはちやうど良かった。彼の下では、戦闘そのものが少ない。私もフアミも、殺気に満ちた敵を次々と倒す。少し肩で息をするようになったころ、男たちが一斉に退き、私たちを取り囲んだ。

『中々、やる女たちではないか・・・』

兵たちの間から、黒い大きな馬に乗った甲冑の男が現れた。私は直感した。この男が、この国の王ゾキウであろう。私もフアミも剣を下すと、王と思われる馬上の男に問いかけた。

『私の名は、グラティナ・ワッケンバイン。ケレース地方を訪れた旅人だ。この街で情報を集めていたのだ。東のチルス山脈に「死者の国」というものがあるそうだが、聞いた

ことは無いか?』

甲冑の男が笑い始めた。

『気の強い女だ。気に入ったぞ。俺の子を産ませるに相応しい。どれ、俺が相手をしてやろう・・・』

甲冑の男は馬から降りた。ゾクツという悪寒を感じた。

(・・・強い)

同じ予感をファミも感じたらしい。掌に汗を感じながら、私は剣を握りしめた。甲冑は全身を覆っており、いかにも重そうである。私は手足の関節部分を狙って、最速で動くことに決めた。心気を統一する。男が嗤った。

『俺に勝ったら、お前の質問に答えてやろう。だが負けたら、お前は俺のものだ』

気を統一した私は、虚の動きを交えながら、最速で動く。この動きについてくる存在などいない。甲冑の隙間を狙って剣を突いた。だが私の剣は空を切った。目の前の男が一瞬で私の背後に回り込み、私の首筋に手刀を打った。私は一瞬で、意識が遠くなくなった。

『ティナツ!』

薄れゆく意識の中で、ファミの叫び声が聞こえた。だが私に見えたのは、崩れ落ちようとしているファミの姿であった・・・

## 第七十二話：半魔人の王

デイルⅡリフィーナには多様な種族たちが住むが、その繁殖方法は多様である。プラテツトのように細胞分裂によって繁殖をする生物もあれば、グレイハウンドのように雌雄に分かれ、交尾によって繁殖をする生物もある。リザードマンなどは単性生殖によって繁殖をする。睡魔族などは種族に牝しかいないため、異種の精子を受けて、遺伝情報のみを利用し、同族を生む。

一般的には、こうした生殖によって同族を繁殖させていくのだが、ごく稀に「異種交配による落胤」という存在がある。悪魔族と人間の間にも生まれる場合、人間と獣人の間に生まれる場合などである。遺伝情報が異なる為、大抵の場合は妊娠すること自体が無いのだが、低確率でそうした「双方の遺伝情報を持つ存在」が誕生するのである。多く見受けられる例としては「半獣半人」あるいは「半魔半人」である。これは、牝の獣人あるいは悪魔族と牝の人間族との間に生まれる場合であり、双方合意の上で誕生する場合もあれば、悲劇によって生まれる場合もある。

また、ごく数例ではあるが、「魔神と人間」との間に落胤が誕生する例もある。その代表例が、メンフィル第十一代国王「リウイ・マーシルン」である。半魔神として生まれ

た場合、神核を持つことが無いため永遠の寿命を持つわけでは無く、自身の使徒を作ることも出来ないが、魔神としての膂力や魔力を受け継ぐことが出来、その寿命はかなり長い。しかし反面、魔神が持つ「破壊衝動」も引き継いでしまうため、戦いと殺戮を求めて暴走する場合もある。

いずれにしろ、異種交配の落胤は、両種族にとつて「忌み種」とされ、特に人間族から迫害をされる場合が多い。先の半魔神であるリウイ・マーシルンも、人間族に対して怨念を持つていた。リウイの場合は、理知的で温厚であった父「魔神グラザ」と、優しい母親の記憶、そして最愛の妻「イリーナ」の存在によつて救われるのだが、これは特殊な例である。落胤は大抵、人間族に対して凄まじい怨念を抱き、魔族でさえも恐れる程に残酷になるのである。

私は冷たい石畳の上で気づいた。すぐに起き上がろうとするが、手が後ろ手に鉄の鎖で縛られている。頭を振って、記憶を蘇らせる。ガンナシア王国の国王と思われる男と戦い、負けたことまで思い出す。周りを見ると、どうやら牢獄のようだ。四方が石の壁で囲まれ、唯一の出入り口は堅い木の扉で閉ざされている。ファミの姿も見えない。

『クツ・・・まさか、あれほどに強かったとは・・・』

鎖を吹き飛ばし、脱走をしようと考え、手に魔力を込める。だが、魔法を使うことが出来ない。私は何とか起き上がって、壁にもたれかかった。その時、扉についた小窓が開かれる。男が様子を覗くと、扉が開かれた。屈強な悪魔二人が入ってきた。一人が剣を抜いて、私の頸元に突きつける。

『立て、ゾキウ様がお待ちだ』

『私の仲間はどうした？』

『ん？あの飛天魔族の女か？アイツは他の牢にいるさ。後で俺たちの相手をしてもらうからな』

卑下た笑い声を聞きながら、私は口元に笑みを浮かべた。生きている以上、必ず助かるだろう。いずれディアンが必ず来る。私は立ち上がり、男たちに連れられて牢獄を出た。

二人の門番が戻ってきたので、オレたちは森に身を隠した。だが、まだ二人は姿を現さない。二人の性格を考えると、二日と言った以上、必ず二日で戻るはずである。

『・・・何かあったな』

『どうする？乗り込む？』

『・・・そうだな。門番に聞いてみるか』

オレたちは徒歩で城門に向かった。オレたちの姿を見て、槍を構える。

『聞きたいのだが、オレの仲間二人が城内に居るのだが、知らないか?』

『まだこの辺りをうろついていたのか。お前の仲間など知らんつ!』

『本当か? ヴァリⅡエルフと飛天魔族だ。二人とも目立つはずだが・・・』

『知らんと言っているだろうつ!』

オレに向かつて槍を突き立ててきた。オレは抜剣し、穂先を切り落とした。

『・・・大事な仲間だ。悪いが通してもらおうぞ?』

レイナが純粹魔術で二人を吹き飛ばした。

『・・・出来るだけ殺すなよ?』

オレたちは城内に入った。

国王の自室らしきところに私は通された。頸元には、未だ剣を突きつけられている。

『ゾキウ様、女をお連れしました』

国王ゾキウが姿を現した。やはりあの甲冑の男である。兜は脱いでいた。中年の半魔人である。鎖を解かれ、私を連れてきた男二人は下がった。私は衣囊に手を入れ、



ディアンから受け取った「魔神の呼び笛」に魔力を通した。ゾキウは私を一瞥すると、背中を向けた。

『スマンが、甲冑を外すのを手伝ってくれんか?』

私は言われるまま、ゾキウの後ろに立ち、甲冑を脱ぐのを手伝い始めた。

『……私がこのまま逃げたり、お前を不意打ちすると考えないのか?』

『そんなつまらん女なら、惜しいとは思わん。お前は気位が高い。武器を持たない者を後ろから攻撃するような真似はしないだろう……』

ゾキウの言う通りであった。ここで不意打ちなどをしては、父の名を汚すことになる。私は沈黙したまま、鎧を繋ぐ紐を解いた。鎧を脱ぎ終えたゾキウは、素直に私に礼を言うと、杯を二つ持ってきた。ワインを注ぐと、私に差し出した。私は受け取ると、一気に干した。

『お前と一緒にいたラウマカールは無事だ。お前が大人しくしている限り、手荒な真似はしない』

『フンツ……人質というわけか。それで、私に何をさせようというのだ?』

ゾキウはワインを干すと、私の顔を見ながら言った。

『俺の子を産め』

私はベッドの上に突き倒された。ゾキウが私の上に押し掛かる。

『やめろっ！これ以上、私に手を出せば舌を噛んで死ぬぞっ！』

『……つまらん脅しはよせ。お前の瞳は死を覚悟した者の瞳ではない。何としても生き残り、勝利を得ようという者の瞳だ。そこが気に入った』

ゾキウが私の服を引き裂く。抵抗しようとするが、両手を抑えられてしまう。凄いい力であった。膂力だけなら、デイアンより上かも知れない。片手で私の両手首を抑えながら、もう一つの手で、私の胸を揉み始めた。

『いいカラダだ。これほどのカラダは滅多に無い。良い子が産めるだろう……』

『クツ……誰がお前なんかの……』

ゾキウがさらに私の服を引き裂く。下半身まで剥き出しにされる。ゾキウの腰が両股に割って入ってきた。いつの間にか、準備が出来ているようだ。

『さて……』

ゾキウが腰を進めてきた……

グラティナに渡した「魔神の呼び笛」からの知らせを受けたオレたちは、急いで城に向かった。城といつても石と木で造られた小さな砦の様なものである。門衛を斬り、純粹魔術で扉を吹き飛ばす。中から兵たちが現れた。オレは人間の貌を外した。周囲から叫び声が上がった……

ゾキウが私の中に入ろうとした時、大きな音が聞こえ、部屋が揺れた。

『何事だ？』

ゾキウは身を起こし、手早く身を整えた。部屋が激しくたたかれ、部下が入ってくる。

『ゾキウ様、侵入者ですつ！と、とんでもねえヤツです』

『狼狽えるなつ！相手は何人だ？』

『たつた二人です。ですが、うち一人が・・・魔神なんですつ！』

ゾキウが剣を手にし、部屋を出ていった。私は起き上がると、衣類を探し、適当に着た。牢獄にいるファミを助けにいった。

オレは無人の野を歩くように、城の奥を目指した。レイナは別行動をしている。オレに斬られ、蹲った魔族に問いかけた。

《たしか、ゾキウとかいうのが王だったな。ソイツの部屋はどこだ？》

『俺に何か用か？』

中低音の音が響き、男が姿を現した。灰色の髪と口髭を持つ、見るからに王としての威厳を醸している。耳の形からして、半魔人だろう。魔神となっているオレに慄いてい

る様子は一切ない。オレは魔神から人間に戻った。

『ガンナシア王国国王ゾキウ殿とお見受けする。オレの名はディアン・ケヒト、魔神であり人間だ』

『ゾキウだ。貴様も半魔神か。それで、俺に何の用だ？』

『オレの仲間が二人、ここに囚われている。ヴァリⅡエルフとラウマカールだ。返してもらおう』

『飛天魔族の女は返しても良いが、ヴァリⅡエルフは断る。あの女には、俺の子を産んでもらおう』

『ほう．．．それは本人が望んだことなのか？グラティナがそう言ったのなら、オレも考えるが．．．』

『フン、本人の意志などどうでも良い。俺がそうしたいと思っただけだ』

『つまり無理矢理か。あまり感心しないな。女を無理に犯す奴は．．．』

『．．．だったらどうするつもりだ？』

オレは再び、魔神へと変貌した。魔の気配が立ち上り、空気が歪む。ゾキウは剣を抜いた。

《．．．悪いが、力づくで返してもらおうぞ．．．》

『来いっ！』

オレは愛剣を抜き放つと、人外の速度でゾキウに斬りかかった・・・

## 第七十三話：各々が望む世界

デイアンの指示により、レイナは地下牢に向かった。魔神の呼び笛から感じた魔力は、建物の二階部分からだったが、捕えられているとしたら牢獄であろう。手分けをして探した方が早いという判断である。剣を振るい、二人の牢番をアツサリと切り倒す。鍵を取り、牢の扉を開けていく。

『ファミツ！』

ファームシルスが倒れていた。犯されたような形跡はない。後ろで縛っている鎖を魔法で弾き飛ばす。ファームシルスが目を覚ました。

『・・・レイナか？ここは・・・』

『助けに来たのよ、さあ、立って！』

レイナとファームシルスが駆け出す。番所で二人の剣、鎧を取り返した。主と合流するためだ。

獣人を倒し剣を奪う。グラティナはレイナたちに合流するために城内を走った。殆

ど半裸の状態だが、気にしている場合ではない。

『ティナッ!』

振り返るとレイナとファームシルスの姿が見えた。合流し、剣と鎧を受け取る。

『・・・乱暴されたの?』

『心配するな。大したことはされていない』

三人は魔神の気配が漂う城の奥を目指して駆け出した。

『オオオオオオッ!』

半魔人ゾキウが凄まじい速度でディアンに斬りかかる。魔神と化したディアンは愛剣を振るい、剣撃を受け止める。ゾキウが一旦離れる。ディアンは感心したようにつぶやく。

『見事な腕だ。誰かに習ったものではない。戦いの中で身につけたものだな・・・』  
『そう言いながら、我が剣を簡単に受け止める。ただの魔神では無いな?』

ゾキウは再び構えた。ディアンも合わせるように剣を構える。互いの空間が歪み、両名の姿が消える。剣がぶつかり合う音のみが響く。余りの速さに人の眼では追えないのである。剣撃が吹き荒れるため、魔族たちも遠巻きに見守るしかない。そこにレイナたち三人が合流した。

『な、何なのだ？これは……』

フアーミシルスが啞然としながら呟いた。レイナも厳しい表情をしている。数合の撃ち合いで、二人は再び離れた。ディアンは無傷だが、ゾキウは所々に切り傷が見受けられる。ディアンがグラティナの姿を見る。

《……犯されたのか？》

『いや、裸にされただけだ』

ディアンが頷いて、ゾキウを見た。

《オレのオンナに手を出したのだ。本来なら殺してやるところだが……》

ディアンは人間の貌に戻った。ゾキウも鬨気を鎮め、剣を下す。

『二人は返してもらおう。こちらも騒ぎを起こしたので、オレのオンナを剥いたことは勘弁してやる……』

周囲を囲んでいた魔族たちが、ディアンに襲いかかろうとした。ゾキウが手を挙げて止める。剣を収め、ディアンたちの前に進み出る。

『魔神ディアン・ケヒトよ、お前に問いたい。何故、旅などをしている？お前ほどの力があれば、好きなように生きること出来よう』

『勘違いをするなよ？オレは好きなように生きている。大事な仲間と共に、この世界を旅するのがオレのやりたいことなのだ』



『下らんな。力の無駄遣いというものだ。何故、その力を弱き者たちの為に使わぬ！人間族の不当な弾圧から、闇夜の眷属たちを守る為に使ってみたらどうだ？俺の下に来れば、お前の力を存分に揮う場を用意するぞ？』

ディアンは剣を納めた。相手から殺気を感じないからである。ゾキウの問い掛けに応えず、ディアンは質問を返した。

『こちら、国王ゾキウに問う。お前は何をやりたいのだ？』

『知れたこと、人間族をこの地上から抹殺するのだ。闇夜の眷属というだけで、奴らは「野蛮な魔物」と決めつける。勝手にこちらの縄張りに侵入し、それを取り返したら「平和を乱す存在」として攻め込んでくる。平和を乱すのはどちらだ？人間族なら何をやって良いと言うのか！まずはこのケレース地方から、人間族を駆逐し、やがてはアヴァタール地方、レスペレント地方、そしてこの大陸から消滅させる・・・それが俺の目指す道だ』

『・・・なんてことを』

レイナが口に手を当てて呟く。だがグラティナもファーミシルスも微妙な表情をする。二人に目を向け、ゾキウは言葉が続けた。

『お前たちも経験があるはずだ。ヴァリールエリフだからと蔑まれたことは無いか？飛天魔族だからと毛嫌いされたことは無いか？こちらは何もしていないのに、ただ闇夜の眷

属だから、魔族だから、人間では無いから差別をする……それが人間族だ！奴らがいる限り、我々には永遠に平和は来ない！』

ディアンは少しの間、瞑目した。口元に笑みを浮かべる。

『なるほど……お前の目指す道は人間族との戦いか……』

『魔神よ、俺と共に来い！お前の力があれば、俺の夢は大きく前進する。闇夜の眷属の未来のために、お前の力を貸せっ！』

『断るっ！』

ディアンは、ゾキウの誘いに対して決然と拒否をした。

『お前がこれまで、どれだけ差別をされ、どれだけ苦労をしてきたのかは知らん。お前の考え方も、お前がこれから進もうとする道も、否定するつもりはない。だが、お前の目指す世界は、オレが住みたいと思う世界ではない。誘いは有り難いが、お前には力を貸せん』

『何故だ？なぜ人間族を庇う。お前も人間族に恨みがあるだろう！』

『……オレは魔神だ。だが、オレは人間でもあるんだ。人間全員を抹殺すれば良いというお前の考え方には賛同できん』

ディアンは背を向けると、三人と共に出ていこうとした。兵たちがいきり立つが、ゾキウが止めた。

『行かせてやれ．．．旅人ディアン・ケヒトとその一行よ、今回だけはこの街を無事に出させてやる。だが二度とこの街に踏み入ることは許さんっ!』

ディアンは振り向かず、片手を上げて応えた。ゾキウは瞑目して、自室に下がった：

ガンナシア王国の街を出た四人は、東にあるという「死後の世界」を目指した。グラティナとファーミシルスは、どこか暗い表情をしている。野営をした夜に、ディアンは二人に話しかけた。

『．．．ゾキウの話を気にしているのか?』

『ああ．．．』

ファーミシルスは頷いて、自分の身の上を話し始めた。

『私は母と二人で放浪をしていた。何度か、人間族の集落に行ったことがある。だが、良い思い出は一つも無い。石を投げつけられたこともある．．．』

『ファミ、それは．．．』

『レイナがそんな人間ではないことは解っている。人間全てが、そうでは無いことも知っている。だが、ゾキウの言う通り、魔族だというだけで差別をする人間も多いのは事実だ。私はこの翼がある。ラウマカールにとってこの翼は誇りだが、人間族から見れば、魔物の証明のようなものだ』

ディアンは黙って、焚火に木枝を入れた。パチパチと弾ける炎を見ながら、小さく呟いた。

『知ら無いからだ・・・』

『えっ?』

『人間は、とても弱い生き物だ。肉体的にも精神的にも。それでいて想像力が強い。だから負の想像をしやすいんだ。知らない存在、未知の存在・・・そうした存在に対しては、本能的に負の想像をしてしまう。そして、一度でも悪い印象を持ってしまったら、それを是正するのは難しい。そうした見方をして、その見方を補強するような情報を仕入れ始める。魔物に助けられたとか、魔物は悪くないとか、そうした情報を全て「特殊」と片付けて、魔物は基本的に悪い存在だと決めつけてしまう。これは仕方がないことなんだ。そうでなければ、人間は生きていけない・・・』

『魔族は・・・闇夜の眷属は、人間族と共存できないのか?』

『ファミ、そうではない。人間が無知なだけなんだ。ちゃんと環境を整えれば、共存できるはずだ。魔族や闇夜の眷属について、正しい知識を学ぶ場を用意し、子供の頃から一緒に暮らす。魔族がいて当たり前前の環境になれば、そうした負の感情は消える』

『・・・それが、ディアンの望む世界なのか?』

『少なくとも、ゾキウの作ろうとしている世界は、オレの望む世界ではない。ゾキウは、

人間族を悪と決めつけ、それを抹殺しようとしている。ゾキウは、自分が憎んでいる人間族と、同じことをやろうとしているんだ。それでは救われない……』

グラティナは頷いたが、ファームシルスは暗い表情のままであった。

『私は……ゾキウの言葉に、少し心が動かされた……ゾキウがやろうとしていることは、確かにやり過ぎだと思ふ。だが、闇夜の眷属や魔物が、安心して生きられる世界になつて欲しい。デイアンの言うことは正しいとは思ふが、具体的にはゾキウのように、何か行動をしなければならぬと思ふ……』

『ファミ、言い過ぎよ?』

『いや、レイナ……ファミの言葉は正しい。ゾキウは、自分の望む世界を創る為に、具体的な行動をしている。ただ旅をしているだけのオレが、それについてアレコレと批評をする資格は無いんだ』

『デイアン……』

デイアンは自分の杯にワインを入れると、一気に干した。

『闇夜の眷属たちの国……か……』

デイアンは夜空を見上げて呟いた……

## 第七十四話：冥き途

TITILE: デイルリフイーナにおける「死後世界」についての考察 (B. Kasere)

旧世界であるイアスステリナにおいては、死後世界は「空想の産物」として片付けられていた。無論、イアスステリナにおいても古神信仰の中で、死後世界については数多くが語られている。中でも「神曲」と呼ばれる物語では「地獄、煉獄、天国」という三つの死後世界が語られ、この物語が事実上、イアスステリナにおける「死後世界」を形成したと言える。それが具体的にどのような物語であったのかは、残念ながら残されていないが、数少ない断片的な情報繋ぎ合わせると、旧世界の人類は、生前の「罪」によつて、死後にどの世界に行くかが決められると考えていた。これは、イアスステリナにおいて知的生命体が人類しか存在しなかつたため、宗教上定められた「罪」が、死後世界の行き先を左右するという結びつきになつたようである。

一方、ネイステリナにおける死後世界は極めて複雑である。ネイステリナには多様な知的生命体が存在していたため、それぞれが死後世界を描いている。代表的な例としては、ルリエンを信仰するルーンエルフたちの死後世界である。ルーンエルフ

は、死期が近くなるとルリエン神殿へと移る。そして最後の瞑想の後、ルリエン神殿の中にある「奈落」へと身を投じるのである。寿命を終え、奈落へと身を投じることで、肉体は森に再び還り、魂はルリエンの導きによって、転生をすると信じられている。またドワーフ族は、身は山に還り、魂は「ガールベル神の館」へと導かれ、そこで新たなドワーフへと生まれ変わると信じられている。

イアスⅡステリナ、ネイⅡステリナの両世界で共通して見受けられるのが「靈魂」についての考え方である。肉体が死んだ後に、靈魂は死後世界に導かれる、という点では全く同じである。また現世に強い執着を持ったまま死んだ場合は、靈魂は現世界に留まり続け、悪霊や怨霊などになる、という考え方も共通している。知的生命体とは、過去・現在・未来という「時間軸の想像力」を持つ存在である。その中において、検証不可能な事象である「死後」について、想像を巡らせることは、知的生命体の共通点と言えるのだろう…

チルス山脈北部にあるという「冥界への入り口」を目指して、オレたちはガンナシア王国を東へと進んだ。街を出てから四日後に、チルス山脈の麓に到着する。近くに獣人族の集落があったので、そこで情報を仕入れることにした。

『…あんたら、冥き途に行くつもりなのか?』

『冥き途?』

『死者の魂が通り、冥界へと導かれる場所だ。呪われた場所だから、誰も近づかない』  
『ほう、面白そうだな。それは何処にあるんだ?』

獣人は首を横に振りながら、山の中腹を指差した。どうやら地下に伸びる入口があるらしい。

『言っておくが、入れないよ?普通の人間は近寄るだけで気が狂っちゃまう…』

集落への滞在許可をもらい、オレたちは山の中腹にある「冥き途」の入り口を目指した。だが、グラティナとファミが途中で止まった。顔色が悪い。レイナも額に汗を浮かべている。

『ダメだ、ディアン…私たちはここまでが限界だ。これ以上は、進めない…』

『やはりそうか…』

中腹部はまだ先だが、凄まじい邪気が漂っている。呪われるというのも理解できる。魔力と闘気で身を固めている三人でさえ、耐えられないほどのものだ。普通の人間なら発狂しているだろう。オレはレイナに二人を連れて山を降りるように命じた。この先はレイナですら危険だと判断したためだ。レイナも素直に頷いた。三人が十分に離れ、安全になったところで、オレは魔神に変貌した。

・さて、鬼が出るか、蛇が出るか…・



オレは中腹部へと歩みを早めた。

「グルルルツ……」

三つ頭の巨大な犬が唸る。その犬に跨る幼女は表情を変えずに呟く。

・……誰か来る。ハイシエラじゃない……

幼女と犬は、現世へと続く唯一の道に向け、構えた。

オレは、何処までも続く長い階段を慎重に降りた。先程までの邪気は階段に入ると共に消えた。どうやら入り口に入れないようにするための種のある種の結界らしい。壁を手のひらで撫でる。人工的に掘られたものだが、階段も壁もおよそデイル||リフィーナの科学力を超えている。一体、誰が造ったのだろうか？

・……ようやくか……

階段を降り終え、オレは開けた空間に出た。石自体が発光しているようで、薄暗いが見えないほどではない。オレは周囲を観察しながら、奥へ歩みを進めた。すると右手に、巨大な門が出現した。まるで「神曲」に出てくる地獄の門である。オレは思わ

ず眩いた。

▪ Relinquite 此の門をく omne 者 spe は, : : vos 一切の望みを捨てよ qui intratis.

オレは驚いて振り返った。巨大な三つ頭の獣に跨った幼女が、オレを見下ろしていた。油断はしていなかった。にも関わらず、気配は一切感じなかった。

▪ 遙か昔、旧世界に存在した「地獄の門」に掲げられた言葉：それを知っているあなたは誰？ 古神には見えないけれど：▪

▪ 失礼をしました。オレの名はディアン・ケヒト。白と黒・正と邪・光と闇・人と魔物の狭間に生きし、黄昏の魔神です▪

オレは丁寧挨拶をした。目の前の幼女は間違はなく人外の存在である。それも最上級の：

▪ ふーん：私はナベリウス、この子はケルベロス。ここの番人をしているの。ここに何の用で来たの？▪

▪ ただの好奇心です。来てみたかったから：ですぬ▪  
▪ : : 帰って：▪

ナベリウスは興味を失ったように、プイと方向を変え、その場を去ろうとした。オレは慌てて止めた。

・待つてくれ。ここは冥き途なんだろう？この場所について教えてくれ・

・…知りたかつたら、この先に行けばいい。ただし、二度と戻つてこれないけど・

ナベリウスは門を指差してそう言うと、その場から立ち去つた。オレは門の入り口ギリギリに立つた。手を翳し、入り口を通過しようとする。膜のようなものが張られている。だが魔力は感じない。全く未知の結界であつた。

・…止めておくか・

オレは先に進むことを諦めた。ため息をついて、地上に戻ろうとした。階段の下に立つた瞬間、別の気配を感じた。強力な何かが、地上からここに向かつていた。オレは慌てて、奥に戻つた。いつの間にか、ナベリウスが姿を現していた。

・…今日はお客さんがいっぱい…・

特に関心が無さそうな表情で、そう呟いた。オレは恐怖と歓喜で震えた。強まるこの気配は記憶がある。かつて命懸けで戦い、辛うじて逃げ延びることが出来た、あの戦いを思い出した。一際、魔の気配が強まり、穏やかに漂い始める。少なくとも、荒れてはいないようだ。

・冥き途<sup>コ</sup>に来るのは五十年ぶりか…相変わらず、面白味のない場所だの…・

・…ハイシエラ、何しに来たの？・

・久々に此の地を訪れたら、面白い気配を感じての…・

地の魔神ハイシエラは、オレに顔を向けた。口元には笑みが浮かんでいる。オレは頬から汗を垂らしていた。まさかこんな場所で、コイツに遭遇するとは思わなかった。

・黄昏の魔神ディアン・ケヒト：我を抱くと言っておきながら、随分と御無沙汰ではないか：もうあの約束は、反故と思つて良いの？

・…この人と知り合いなの？

・その昔、互いに求め合い、熱く交じり合つた仲じゃ…

・ああ、一年前に初めて会つて、純粹魔術をぶつけ合つた仲だな

・そうとも言うだの

美しき魔神は笑うと、途端に魔気を増幅させた。

・さて：一年前、汝はアスタロトと一戦をしていた。故に見逃してやったのだが…

・戦<sup>ヤル</sup>うか？

オレは剣を抜き、魔力を全開にした。ハイシエラの笑みが大きくなる。互いの魔気で空気が歪む。互いが飛び掛かろうとした瞬間、ナベリウスがオレたちの間に入った。

・二人とも煩い。出て行って…

・ヤレヤレ：汝のせいで、ナベリウスを怒らせてしまったではないか。あの様子で

は、あと五十年は出入り禁止だの・

地上は既に夜になっていた。どうやら時間の流れが違うようである。ハイシエラは苦笑いをしながらオレに責任をなすりつけた。先ほどの魔気は消えている。

・オレのせいかな？

オレは肩を竦めた。ハイシエラと戦う気はもう失せていた。オレは人間に貌を戻した。

・ほう、やはり汝は、人間であつたか…興味深いのう・

『人間の魂を持つ魔神…これは幸福なのか？それとも不幸なのか？』

・さて…だが少なくとも、退屈はせぬであらうな。我と違って…・

オレはハイシエラを見た。貌に少し影が指している。どうやらこの魔神にも、過去に何かがあるようだ。オレはオンナを口説くように、ハイシエラの肩を抱き、誘った。

『退屈なら、今夜はオレと付き合わないか？』

一瞬、唾然としたハイシエラは大笑いをした。

・クハハハッ！魔神を口説く人間か…面白いだの。今宵は汝の口説きに乗ってやろうぞ・

靱やかな躰が揺れ、上下する。敵に挑むかの様な視線で、下の男を見下ろす。だが瞳

は欲情で霞んでいる。男は呻きながらも下から突き上げた。両手で女の胸を驚掴む。男の逆襲に、女が仰け反る。だがすぐに、責め返す。互いが互いを牽制し合いながら、闘いのような交合はいつまでも続いた…

## 第七十五話：トライスメール

エルフ族は、デイル||リファイーナの知的生命体の中では、二番目に数が多い。原初の種族と言われ、旧世界「ネイ||ステリナ」の神「緑の杜七柱」によって、生み出されたと言われている。緑の杜七柱とは

『ルリエン』・エルフの母なる女神

『パライア』・精霊の世界を司る男性神（第三級神）

『ヴァスタール』・史料の賢者だったが封じられし暗黒神として覚醒

『キルニア』・エルフの創造に携わった精霊王

『マリベラ』・エルフの創造に携わった精霊女王

『ルサーラ』・魔神精霊に相当する木精の守護神

『イシアヌン』・旧大陸の崇り神。未来を切り開く意志を授けた

その中で、女神ルリエンを信仰するエルフ族を「ルーン||エルフ」、暗黒神ヴァスタールを信仰するエルフ族を「ヴァリ||エルフ」と呼ぶ。ルーン||エルフ族は、森林地帯に住み、強力な結界によって自分たちの生息域を確保している。ルーン||エルフが住む森は「メール」と呼ばれ、他種族が踏み入ることは容易ではない。

自然豊かなラウルバーシユ大陸には、メイルは幾つも存在している。中原域だけでも、アヴァタール地方からケレース地方にまたがる「トライスメイル」、アヴァタール地方東域にある「エレン・ダ・メイル」、レスペレント地方の「ミースメイル」など、大規模なメイルが存在している…

・飛行魔法とな？

オレの問いかけに、魔神ハイシエラは首を傾げた。ハイシエラと交合という形の「仕合」で引き分けた後、尋ねたのだ。ハイシエラは暫く考えた後、肩を竦めて応えた。

・考えたことも無いだの。汝は「呼吸の仕方」を問われて、どのように答えるつもりだ？

オレはため息をついた。この機会に、ハイシエラに飛行魔法について聞こうと思ったのだが、オレが求める答えは得られそうにない。ハイシエラはオレの様子を見て笑い、宙に浮いた。

・魔神の中には、飛行できぬ魔神もいる。汝は恐らく、その類であろう。諦めたほうが良いだの。

『もう行くのか？』



・ 汝との交合は、中々に良かったぞ。また気が向いたら、相手をしてやろう。ではな  
…

魔神ハイシエラは東へと飛び去っていった。日が昇り始めていた。オレは気を切り替えて、獣人族の村へと歩き始めた…

『結局、良く解らなかつた…ということか?』

『だが、魔神が番人をしているというのは興味深いな。その奥には、何かあるのか…』  
『それよりも、あの青髪の魔神がまた出現したのね? 危ないところだったわ』

オレは三人に「冥き途」の探索結果を伝えた。魔神ハイシエラは、レイナも面識がある。さすがに「仕合」までは伝えなかつた。時間の流れが違う、ということとで誤魔化している。

『ディアンが冥き途に行っている間に、獣人たちにケレース地方について聞いておいたぞ』

グラティナが話題を変え、集落で集めた情報を教えてくれた。特に知りたいのは「トライスメール」についてである。

『ルーンⅡエルフの森は、ここから西に十日程行ったところにあるらしい。相当に広大

な森だそう。恐らくそこが、トライスメールだろう。そしてさらに西には、ドワーフ族たちの大規模な集落があるらしい』

『西か…まずはトライスメールを目指そう。そこでまた、情報が集まるだろう』  
三人が頷いた。

オレたちは、獣人族の集落を出発し、トライスメールを目指した。十日間の野営である。思えば最後に街らしい街に滞在したのはセントクスであった。旅好きのオレでさえ、さすがに野営には飽き始めていた。三人はもつと飽いているだろう。野営の夜、焚き火を囲みながら、今後の方針について話し合った。

『そうだな、私もどこかに落ち着きたいと思っていた。だが、半分はヴァリールエルフの私は、トライスメールに滞在することは出来ないだろう。人間族、あるいはドワーフ族の集落などがあれば、そこに落ち着きたいな』

『私は魔族だ。人間族の集落よりは、ドワーフ族の方が助かる』

『そうね。出来れば、湯に浸かりたいわ。しばらく入っていないから…』

オレはケレース地方の全体像を紙に描いて、今後の旅程について説明をした。

『まずトライスメールに行つてから、さらに西にあるというドワーフ族の集落を目指そ

う。そこならファミも安心して滞在できるだろう。そこで落ち着くことができたら、これからについて考えてもいいな』

『…ディアンは、これからもずっと、旅を続けるつもりなのか?』

ファミシルスの問いかけに、オレは腕を組んで考えた。このまま旅を続けるのも悪くないが、やはり何処かに「帰る家」が欲しいと思った。プレイアの街は眩し過ぎる。これまでの旅の中で、人間族だけでなく、亜人も、闇夜の眷属も受け入れられる場所というものは無かった。今後、どうすべきかも含め、落ち着いて考える必要があった。

『…そうだな。取り敢えずはどこかに落ち着こう。このドワーフ族の集落がそうなってくれたら良いのだが…』

『あるいは、ディアンなら自分で創っちゃうかもね?』

レイナが冗談交じりに笑った。実際、それは考えないわけでは無かった。だがまだ話すには早過ぎる。オレは苦笑いをして誤魔化した。

オメール山の北側を通って南西に進むと、巨大な森林地帯にぶつかる。獣人族の集落で教えてもらったルーンⅡエルフ領だ。森の中に入ると、直ぐにエルフたちから警告を受けた。矢が一本打ち込まれ、森の奥から声が聞こえてくる。

『……ここはあなた方が来る場所ではありません。お帰りなさい』

オレは馬を降り、挨拶をした。

『私の名はディアン・ケヒトと申します。ディージェネール地方出身の旅人です。チルス山脈のヴァリルエルフ族族長より、紹介状を頂き、この地を訪れました。あなた方の静かな暮らしを荒らすことは致しません。どうか、一宿一飯の施しを頂けないでしょうか？』

森の奥から、一人のエルフが現れた。アグラエル・ザラからの紹介状を手渡す。一読したそのエルフは、少し驚いたようだ。

『紹介状は確認しました。ただ、私の判断だけでは決められません。ここでしばらくお待ち下さい……』

エルフは森の奥へと消えていった。しばらく待たされることになるので、オレたちはこの場で野営をした。夕日が落ち、夜が深くなる。小さな焚き火を起こして、オレたちは簡単な食事をした。

『アグラエル殿が紹介をしてくれたエルフとは、どのような人物なのだ？』

グラティナと問いかけに、オレは肩を竦めた。紹介状の本身は確認していない。

『アグラエル殿は族長だ。それなりの立場の人を紹介してくれたとは思うが……』

周囲に微妙な気配を感じ、オレは剣を手にした。その時、森の奥から先ほどのエルフ

とともに、金髪の美しいエルフが現れた。穏やかな表情と知性を湛えた瞳をしている。

『お待たせをしました。あなた方が、アグラエル・ザラの紹介状を持っていらした方々です。私はエゼルミア・ルーフグレーン、皆からは「金色公」と呼ばれています』

『ディアン・ケヒトです。どうぞディアンとお呼びください。三人は私の仲間です』

三人が挨拶をした。金色公は一人ひとりに丁寧な挨拶をした。だがオレは警戒を解かなかつた。周囲の気配を感じていたためである。

『さて、金色公にお尋ねしますが、これはどういうことでしょうか？』

『と、仰いますと？』

あくまでも穏やかに友好的な態度を崩さないが、それが逆にオレのカンに触った。オレはいきなり、人間の貌を脱いだ。魔神の気配が立ち上った。

・：我々の周囲を武装したエルフたち数十名で取り囲んでいる。紹介状を持ってきた客人四名に対して、あまりに無礼ではないか？返答次第では、この森を丸ごと消滅させるぞ？

『ディアンッ！』

『なにっ！』

三人が一斉に剣を手にし、構えた。だが金色公は態度を変えない。微笑みながら、事情を話した。

『…やはり、紹介状の内容をご存じないようですね？アグラエル殿には困ったものです。魔神を紹介するので会ってやって欲しいとは…この地に魔神が来るなど、私の記憶ではありません。警戒をするのは当然というものでしょう？』

・紹介状に、オレのことが書かれていたのか…・

『ルーンⅡエルフは、他種族とは距離を置いています。まして魔神やヴァリⅡエルフ、魔族などがいては、たとえ紹介状があつたとしても、中に入れるわけにはいきません。本来ならお引取りを頂くのですが、他にも面白い方から、あなたの話しを聞きましたので、それで会ってみようと思つたのです』

オレはため息をついて人間に戻つた。警戒はしているようだが、殺気は感じない。三人も剣を収めた。オレは金色公に質問をした。

『失礼をしました…それで、面白い方とは誰のことなのでしょう？』

『あなたも良くご存知だと思いますよ？レウイニア神権国の統治者「水の巫女」殿です』  
オレは瞑目した…

## 第七十六話：華鏡の畔

トライスメイルはケレース地方からアヴァタール地方にかけて、南北に広がる巨大な森林地帯である。その大きさはレウイニア神権国の国土面積にも匹敵する。ルーンⅡエルフ領であることは古来より知られており、そのため人間族を含め他種族がこの森に入ることは殆ど無い。トライスメイルメイルの西側には、ブレニア内海からオウスト内海へと続く街道が走っており、行商人たちはその街道を利用する。だがケレース地方を縦断する街道であるため、決して安全とは言い難い。

『そうですか…巫女殿が』

『水の巫女殿は、あなたを心配していました。彼女からの伝言です。旅に疲れたら、いつでもプレリアに戻ってきて欲しいとのこと。好かれていきますね』

オレは首を横に振った。彼女個人の好意は嬉しいが、事はそう単純ではないのだ。

『レウイニア神権国は「人間族の国」です。オレの仲間が滞在できない国へなど、戻るつもりはありませんね。彼女の好意は有難いですが、オレは旅を続けますよ…』

金色公が頷いた。いつの間にか、周囲からエルフたちの気配が消えている。

『私たちの集落に案内することは出来ません。ですが、この森を抜けることは認めま

しよう。この森の北を回れば、南北に伸びる街道に出ます。そこからさらに西に行けば、ドワーフ族の集落があります』

金色公は羊皮紙の地図を渡してくれた。ケレース地方の地図である。ルーンⅡエルフの文字で書かれているが、オレには問題なく読める。その他にも、水や食料などを支援してくれた。オレは素直に、謝意を示した。

『一つ忠告をしておきます。この森を抜ければ街道ですが、その街道を北に行つてはいけません』

『何か、あるのですしょうか？』

金色公は少し躊躇したが、返答してくれた。

『黙つていれば、逆にあなたの好奇心を刺激してしまいそうですね。この森の北西には「華鏡の畔」という景勝地があつたのですが、数年前、そこに巨大な結界が出来たのです』  
『ほう、面白そうですね。結界が、南北に伸びる街道を封鎖してしまつたわけですね。一体、誰がそんなことを？』

『…魔神です』

オレの好奇心は膨れ上がった。オレの表情を見て、金色公は苦笑いをした…



オレたちは、トライスマイルの北部を西に進んだ。森の中は清流が流れ、レイナたちは久々の水浴びに喜んだ。馬が草を喰む牧草地もあつたので、オレたちは少し時間を掛けて森を抜けた。

『…本当に行くのか?』

『興味があるからな。戦うわけじゃない。ちよつと外から眺めて見るだけだ…』

街道に出たオレたちは、金色公から聞いた「魔神の結界」を見るために、北へと向かった。どうやら街道そのものを封鎖しているようで、行人人たちの姿は見えない。北を指して二日目に、どうやらそれらしい地帯に入ってきた。左右を山に囲まれた、穏やかな平野に、薄っすらと盆型の結界が張られている。オレが感じたことをフアーミシルスが先に呟いた。

『なんと迷惑な…あれでは誰も通れぬではないか』

オレたちは結界のそばまで近寄った。透明だが確かにそこに存在している。試しに小石を投げてみると、普通に通過をした。オレは手を伸ばして結界に触れようとすると

：

『…グツ!』

バリツという音がし、オレの手が焼けた。少し触れただけなので、大した火傷ではない。

『生命は通れない結界なのか？』

『でも、アレを見て…』

レイナは鳥を指差した。羽ばたく鳥は、普通に結界を通過した。オレは極小の純粹魔法を結界に放ってみた。パンツという音がする。どうやら魔術障壁も兼ねているようだ。

『…ルーンⅡエルフの結界に、魔術障壁結界を併せたようなものだな。かなり複雑な結界だ。どんな魔神が、こんな結界を張ったんだ？』

結界の向こう側には、城らしき建物が見える。オレはこんな迷惑な結界を張った魔神に会ってみたいなくなった。少々乱暴だが、結界を破壊することに決めた。来た道を一里ほど戻ると、オレは馬を降りた。

『ディアン、本当にやるのか？』

『ちよつと試すだけだ…』

グラティナが心配そうに聞いてきたが、オレは自分の好奇心が抑えられなかった。人間の貌を脱ぎ、魔神へと変わる。

・純粹魔術：アウエラの裁き・

圧縮した純粹魔法を一里先の結界に向かって放つ。結界にぶつかった瞬間、巨大な爆発が起きる。一里離れたオレたちの髪が、爆風で揺れる。小さな集落程度なら、この一

発で消し飛ぶ破壊力だ。だが…

・…強固だな・

結界は破れなかった。オレはさらに一段強い魔術で試そうと思った。

・純粹魔術：エル・アウエラツ！・

先程よりさらに巨大な魔力を圧縮させ、放つ。街一つを消し飛ばす力だ。だが同じように、結界は張られたままである。ここまで来ると、オレはもう中の城などどうでも良いと思つてしまった。魔神として極大の魔術を使って、この結界をブチ破つてやろうと考えた。両手に術式を描く。

・だつたらこれならどうだ：極大純粹魔術：ルン・アウエ…・

その時、結界が消えた。オレたちは顔を見合わせると、華鏡の畔を指して馬を進めた。すると向こうから、馬に乗った集団がこちらに向かつてくる。先頭の白馬には、頭から角らしきものを生やした女が乗っていた。集団はオレたちの前で止まった。後ろにも馬に乗った「見事な騎士団」が続いている。先頭の女の気配は、確かに魔神であった。だが禍々しきよりも気品が漂つて見える。女の目には、強い怒りが表れていた。

・貴様らかつ！我が城を破壊しようとした不屈き者はっ！・

『はて？何のことでございましょう？見ての通り、私たちは旅の一行でございませう。この先に美しき景勝地があると聴き、訪ねようとしていたのですが…』

オレはあくまでも「旅の一行」としてトボけた。レイナたちが笑いを堪える。だが目の前の魔神は怒りのためか気づかないようだ。

・城を守る結界を魔術によって破壊しようとした奴がいる。あれは純粋魔術だ。その飛天魔族に違いないっ！捕らえよっ！

オレは魔神へと変貌した。目の前の魔神を飲み込むほどの巨大な魔気が、全身から立ち上る。

・バレたのなら仕方がない…あんなハタ迷惑な結界など張りやがって、何を被害者ツラしていやがる。貴様らごと、城を粉碎してやろうか…

さすがに相手も魔神だ。オレの変化に一瞬驚きを浮かべたが、直ぐに冷静になる。

・…面白い。貴様も魔神のようだな。ならば我が騎士団では役不足であろう。私自らが相手をしてやろう…

オレたちは馬を降り、向かい合った。互いの魔気で空気が歪む。オレは背中の愛剣を抜いた。魔神剣クラウ・ソラスの白金が輝く。すると…

・おおっ！…

目の前の魔神がいきなり感嘆したような声を上げた。先程までの殺気も気配も、全く無くなっている。

・…？…

・なんと美しい剣だ…その剣は、その方の愛剣なのか？

・何だ？オレの剣がどうしたって？

・よく見せてくれっ！

魔神がいきなり歩み寄ってきて、オレの剣をしげしげと眺め始めた。

(なんだ？何なんだコイツは…)

・美しい…実に、美しい…

クラウ・ソラスが嫌がつているのを感じた。オレは魔神の腕を引き剥がすと、慌てて剣を収めた。気が削がれたので、オレは人間の貌に戻った。

『…結界を破壊しようとしたのは悪かったよ。あまりに強固な結界だったので、つい試したくなったんだ。スマン』

どうやら魔神は、本来の用件を思い出したようだ。だが同じく気を削がれたのだから。ため息をつけてオレの謝罪を受け入れた…

・我はソロモン七十二柱が一柱、二十九の軍団を率いし公爵アムドシアス、一角公と呼ばれている・

緊張の対立が消えた後、一角の魔神は自分の名を名乗った。オレも自らを名乗った。レイナたちも同じように名乗る。

『ところで、お前のあの白亜の城、美しい城だったな。良かったら見せてくれないか？』

・ほう、お主は芸術を理解できるのか。なるほど、その美しき剣の持ち主なれば、醜を理解できるのも領ける。良かろう、我が城に案内しよう……

『…見事な庭園だ。それに一つ一つの彫像も良い。相当に厳選されたものだな』

・ウムウム、お主にはモノの良さが解るらしい。この彫像を守るために、結界を張ったのだ……

(だつたら外に出すなよ……)

オレはそう思ったが、ここはこの「芸術バカ」に合わせておこう。オレたちは阿吽の呼吸で領きあった。それに、彫像が見事なのは確かである。芸術バカなのだろうが、美的感覚は大したものであった。城の中に入ると、楽隊が演奏を始めた。どうやら音楽にも相当なこだわりがあるらしい。中庭に案内をされる途中で、オレは足を止めた。風景画が飾られているが、なんとも言えない雰囲気のある絵である。それに絵の題材が問題であった。荒野の中にキノコが林のように立っている。気味の悪さの中に妙な迫力があつた。一角公が自慢気にオレの隣りに立った。

・追従かと思つておつたが、お主は本当に芸術が理解できるようだな。この絵の良さが解るか？

『…絵から奇妙な迫力を感じる。まるで絵自体が生きているかのようだ』

・そう…この絵は、西に住む芸術家が描いた傑作ぞ。書かれている風景は「神の墓場」と呼ばれる世界だ・

『神の墓場…』

・一度落ちたら、二度と戻ってくることは出来ぬ異界だ。我も見たことはないが、実際に存在するらしい…・

その後は、中庭で茶を飲みながら、オレは一角公と芸術談義に花を咲かせた。一角公アムドシアスは、たしかに魔神だが闘いや破壊を好む「一般的な魔神」とは異なり、芸術と音楽に情熱を傾けているらしい。つまり「文化人」なのだ。一角公の芸術論は、オレには楽しかったが、他の三人には退屈だったようだ。レイナは多少は理解できたようだが、グラティナとファームシルスは全く芸術が理解できないようで、終始沈黙をしていた。キリの良い所で、オレたちは暇を告げた。一角公は残念そうだったが、また来ると告げると、オレに水晶を渡してくれた。「魔神の呼び笛」に似たような機能を持っているらしい。

・次に訪れた時は、その水晶に魔力を通せ。結界を開けてやろう…・

『感謝する。次はオレも何か土産を持ってこよう…』

一角公に見送られ、オレたちは華鏡の畔を後にした。

『ぶはあつ…まったく何なんだ？あの魔神は…戦ったほうがよっぽど楽だったぞ』

結界を抜けた後、ファームシルスが息を吐き出した。退屈な話の中での緊張に、精神的に参っていたようである。レイナもグラティナも同意見のようだ。ドワーフ族の集落を目指すのは明日にして、オレたちは早めの野営を取った…



## 第七十七話：魔神の留まり木

華鏡の畔を西に数日進むと、ドワーフ族の集落がある。ドワーフ族は他種族に対して排他的ではあるが、エルフ族ほどではない。集落があるのなら、そこで落ち着けるのではないかと期待し、オレたちは西へと進んだ。金色公から貰った地図によると、山間を抜け、河を超えたあたりから、集落が見えてくるらしい。まもなく河に出るというところで、レイナが立ち止まった。

『アイアン、何か聞こえるわ』

確かに、近くで叫び声が聞こえる。オレとレイナは声の方に進んだ。するとドワーフの少年が魔獣と戦っている。レブルドルの群れである。それほど強力な魔獣ではないが、子供一人が相手をするのは危険だ。オレたちは群れを蹴散らした。レイナが少年の手当をする。

『危ないところを有難うございました』

銀色の髪をした、少女のように中性的な顔をした少年が、屈託のない笑顔を浮かべた。十歳程度だろうか。ただでさえドワーフ族は背が低い。その少年ともなれば、本当に子供に見える。レイナをはじめ、グラティナもファームシルスも、どうやら母性を刺激さ

れてしまったようだ。

『オレの名はディアン・ケヒトという。ここから遙か南のディージェネール地方から来た旅人だ。君の名は？』

『インドリトと申します。薬草を取りに来ていたのですが、どうやらレブルドルの縄張りに入り込んでしまったようで…』

オレは頷き、家まで送り届けようと決めた。それで集落に入ることも出来るだろう。ドワーフの少年インドリトは、笑顔でオレたちを案内してくれた。

ケレース地方西方のドワーフ族の集落は、古の宮の二倍以上はある巨大なものであった。鍛冶のほか、農耕や酪農も行われているようである。ケレース地方とセール地方を分ける「ルプートア山脈」を中心に、集落をつくっていた。集落に入ると、オレたちはジロジロと見られたが、インドリトが先頭に立って案内をするので、止められることは無かった。インドリトは、集落の奥にある大きな家に案内をしてくれた。

『こちらが、私の家です。父や母に來客を伝えますので、しばらくお待ち下さい』  
インドリトが中に入ると、レイナがオレに囁いてきた。

『…随分としっかりした子ね。ひよつとしたら、族長の息子さんかしら？』

『多分そうだな…とすると、オレの正体がバレる可能性もあるな』

顔を引き締め、レイナが頷いた。

インドリト少年の父親、エギールがオレの剣をしげしげと眺めている。古の宮でもそうだったが、ドワーフ族は武器に目がない。インドリトは予想通り、族長の息子であった。インドリトの父親は、息子と違って実に男性的な顔をしている。インドリトは母親似なのかもしれない。

『久々に逸品を見た。お返ししよう…』

エギールから愛剣を返してもらい、オレは背中に収めた。エギールは息子が世話になつたと礼を述べ、集落の近くならという条件で、オレたちが住むことを認めてくれた。だがさすがにドワーフ族族長である。オレの正体に薄々は感づいたようだ。

『…ここでは、人間のままでいることが条件だ』

オレは黙って頷いた。

『こちらが温泉地帯です。私たちはここから集落まで、湯を引いていますが、ここならお

好きな時に、湯に浸かることが出来ると思います』

インドリト少年に案内をされ、オレたちはプルートア山脈麓の森に入った。プルートア山脈は岩塩が取れる山脈だが、同時に温泉地帯でもある。オレにとつては正に理想の場所であった。集落から歩いて半刻程度の場所で、木々に囲まれた見晴らしの良い場所を見つけた。オレはここに、居を構えることに決めた。ドワーフたちの力を借りる必要がある。協力を得るために、リタからの餞別を全て使い切った。

『おおっ！』

ドワーフたちが驚きの声を上げる。地脈魔術を使つて、狙った樹木を根から掘り上げる。切り倒すよりも速く、しかも根の部分は良質な薪になる。オレはドワーフと一緒に、木を倒し木材を加工し、運んだ。レイナやグラティナは子供たちの世話をする。フアーミシルスは上空から、魔獣たちが来ないかを偵察する。それぞれに役割分担をして、効率的に素材を調達していった。

『風呂は石造りで広くして欲しい。居間と厨房、あと書斎も必要だな。書斎に隣接して、研究室を設けたい…』

オレの要望にドワーフたちが頷く。共に汗を流すことで、徐々に打ち解け始めていた。三人も、子供たちからすっかり気に入られたようである。この集落に完全に受け入れられるまで、まだ時間は掛かるだろうが、三人が明るい表情をしていることに、オレ

は満足した。

『…国、ですか？』

まもなく家が完成するという時に、族長のエギールから相談があると呼び出された。相談の内容は、国造りについてである。

『ここから南東にいったところに、古の宮というドワーフ族の集落がある。そこから鳥を使つて知らせが届いたのだ。なんでも「国」を造るらしい』  
『ヴェイグル・ドールラ殿ですね？』

オレの返答に、エギールは驚いたようだ。オレは古の宮で滞在をしていたことを簡単に説明した。エギールはオレの話しを聴き終えると、腕を組んで考えた。

『お主は、ここも同じように、国になるべきだと思うか？』

『まあ、正直申し上げて、その必要を感じませんね』

オレの返答は、エギールにとって意外だったようだ。オレは説明をした。

『国とは、其処に住む人々を幸福にするための社会統治手段の一つに過ぎないのです。古の宮は、山の中にあり穀物などはロクに取れません。そのためどうしても、外との交易が必要になります。しかし無制限に交易をすれば、ドワーフ族の文化が破壊される可

能性があります。ヴェイグル殿もその辺を心配していました。交易をしなければ衰退する。だが交易をしたら文化が壊れる。その二律背反を調整するために、国という選択をしたのです』

『我々は違う、というのか?』

『全く違いますね。まずここは豊かな森があります。南にはブレニア内海、北にはオウスト内海があり、東西も山で囲まれています。つまり天然の要害です。外敵から侵入されることはまずありません。さらにプルートア山脈からは岩塩が取れます。つまりこのままでも何の問題も無いわけです』

『フム…』

『まあ強いて言うなら、あまりに閉鎖的になり、外界の情報から遮断される危険があることですが、少なくとも国家になる必要は無いと思いますね。ただ…』

『ただ?』

『エギール殿の時代なら、それで良いでしょう。しかし、ご子息の時代になったら解りません。その頃にはアヴァータル地方やケレース地方にも、多くの国家が形成されているはずです。その中で取り残され、やがて何処から侵略を受ける可能性は否定できません。また、戦争などで土地を追われ、この地に逃げてくる者たちも出てくると思います』

エギールは瞑目をして頷いた。そしてオレを驚かせる言葉を口にした。

『ディアン殿、息子の「師」になつては貰えまいか?』

蒼い月に照らされ、水面が青く輝く。集落からほど近い小川にオレは立っていた。水面に手を入れると神気が集まった。目の前に美しき現神が現れた。

『…お久しぶりですね。ディアン殿』

『巫女殿…』

オレは水の巫女の傍に寄つた。互いに見つめ合う。現神と魔神という相反する二人で、一つの国を創つた日々を思い出す。

『ようやく、落ち着ける場所を見つけたのですか?』

『レウイニア神権国は眩しすぎる。オレの仲間には魔族もいる。人間族のための国では、暮らすことは出来ない』

『違うでしょう? 私が現神だから…レウイニアが「宗教国家」だからではありませんか?』

水の巫女は悲しそうな表情をした。オレは彼女には話しても良いと思つた。レイナですら知らない、オレの過去についてである。

『…この世界に来る前の話だ。オレのいた国「ジパング」は、信仰の自由を認めていた。

どんな宗教でも自由に信じるのが許されていたのだ。だが、その中から狂気の教えが生まれた。「死ぬことが救い」などという信じられない教えだ」

水の巫女は黙って聴いていた。オレは話しを続けた。

『その宗教を信じ込んだ狂信者たちが、ある日、事件を起こした。人々が集まっている場所に毒を撒き、大勢を殺した。オレと妹は、両親と共にその場にいた。助かったのは、オレひとりだけだった…』

『それが…あなたが宗教を嫌う理由ですか？』

『全ての宗教が狂気だとは思わない。だが、人間の心というものは、いつそうした傾斜を持つか解らない。誰しもが狂信者になる可能性があるんだ。それを食い止める方法はただ一つ、自分を「絶対の立場」に置かないことだ。自分が正しいと思うように、他人も正しいと思うこと。この世界には、人の数だけ正義があり、悪がある。そう思い、自分で自分を律し続けるしかない。レウイニア神権国でも、いつの日か起きるだろう。二つの正義の対立がな…』

水の巫女は瞑目した。聡明な彼女なら、オレの言うことが理解できるはずだ。水の巫女を絶対視する神殿と、王を立てる貴族が対立する。そしてそれは民衆をも巻き込み、やがて国を疲弊させていくだろう。たとえ現神が存在しようとも、宗教国家は皆、その歴史を辿るのだ。



『あなたは、これからどうするつもりですか？』

『ここに留まるよ。この集落は居心地が良い。少し時間の掛かる「頼み事」もされたしな。いずれこの地に国ができる。人間族も亜人族も闇夜の眷属も関係のない国、理想郷がここに誕生する。そして…』

水の巫女の頬に手を当てて。彼女の瞳が霞む。

『あなたの同盟者として、オレはプレイアに行くだろう。あなたを抱きにな…』

水の巫女を抱きしめ、唇を重ねた。美神はオレを受け入れ、背中に手を回してきた…

第四章：了